

加古川市

お　お　の
大　野　遺　跡

－（一）別府川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2010年3月（平成22年3月）

兵庫県教育委員会

卷首圖版



遺跡遠景（南上空から）



遺跡全景（北上空から）



遺跡全景（西上空から）



遺跡全景（南東上空から）



調査地俯瞰



丹波烧小壺

例 言

1. 本書は、加古川市加古川町大野に所在する大野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 大野遺跡の発掘調査は（一）別府川広域基幹河川改修事業に先立つもので、兵庫県加古川土木事務所からの依頼を受け、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。
本発掘調査は、平成12年度に実施した確認調査の結果に基づき、平成12年度から平成14年度にかけて実施した。発掘調査は、平成12年度は三宅建設株式会社が、平成13年度と平成14年度は富士土木工業が、それぞれ請け負い、実施した。
3. 本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現：兵庫県立考古博物館）山田清朝（平成12年度）、村上泰樹・中川渉・日置 智（平成13年度）、森内秀造（平成12年度）、渡辺 昇（平成14年度）、西口圭介（平成14年度）が、それぞれ担当した。
4. 調査後の空中写真の撮影および図化は、平成12年度と平成14年度が株式会社サンコム、平成13年度が富士測量株式会社、に委託して行った。
5. 整理作業は、平成20年度から兵庫県立考古博物館にて実施した。
6. 遺物写真の撮影は、兵庫県教育委員会が株式会社谷口フォトに委託し、平成20年度と21年度に行った。
7. 調査は、加古川市が設定した基準点をもとに3級基準点を設置しておこなった。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に位置する。平成14年度以前の調査成果については、TKY2JGDにより世界測地系に変換している。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書で使用した遺構番号は、以下のように呼称した。
竪穴住居跡→SH、掘立柱建物跡→SB、柱穴→P、土坑→SK、溝→SD
10. 第1図は、国土地理院発行1/200000地形図『姫路』を使用した。また、第3図は、国土地理院発行1/25000地形図『加古川』を使用した。
11. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
12. 本書の編集は栗山美奈の補助を得て村上・山田が行い、調査担当者が執筆した。各執筆分担当は、目次の通りである。
13. 本報告にかかわる遺物・写真・遺構図等は兵庫県立考古博物館に保管している。
14. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。
岡本一士・松岡千寿・高橋 学・西川英樹

目次

第1章 大野遺跡	
第1節 地理的環境	山田 1
第2節 歴史的環境	山田 4
第2章 調査の経緯	
第1節 調査の起因	山田 6
第2節 分布調査・確認調査	山田 7
第3節 本発掘調査	山田 9
第4節 整理作業	山田 12
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要	山田 13
第2節 北地区の調査	
1. 調査の概要	山田 15
2. 基本土層と遺構の検出	山田 15
3. 調査の成果	山田・中川 20
第3節 南地区の調査	
1. 調査の概要	山田 89
2. 基本土層と遺構の検出	山田 91
3. 調査の成果	渡辺・森内・西口・山田 92
第4章 自然科学分析	
1. 兵庫県大野遺跡における樹種同定	株式会社古環境研究所 138
2. 大野遺跡における花粉分析	株式会社古環境研究所 147
3. 大野遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)	(株) 加速器分析研究所 149
4. 大野遺跡出土須恵器・中世陶器の蛍光X線分析	三辻利一 154
第5章 まとめ	
第1節 遺物	山田 166
第2節 遺構	中川 189
第3節 総括	山田 193

挿 図 目 次

第1図	大野遺跡の位置	1	第35図	柱穴内土器出土状況	33
第2図	遺跡周辺の微地形	2	第36図	S D05	36
第3図	主要周辺遺跡	4	第37図	S D06・S D07	38
第4図	工事計画と大野遺跡	6	第38図	S D10	40
第5図	竣工後の北地区 南から	7	第39図	S D11	42
第6図	竣工後の南地区 東から	7	第40図	S D12	43
第7図	確認調査位置図	8	第41図	S D14	43
第8図	地元説明会	9	第42図	S D16・S D17	45
第9図	Q地区の調査	9	第43図	S D18	46
第10図	A地区の調査(1)	10	第44図	S D19～S D22	47
第11図	A地区の調査(2)	10	第45図	S D29	49
第12図	地区割り図	11	第46図	S D30	50
第13図	調査位置図	13	第47図	S E01	51
第14図	北地区調査位置図	14	第48図	S E02	52
第15図	北地区平面図	15	第49図	S E03	53
第16図	北地区 基本土層図	16	第50図	S E04 根太 (W1)	54
第17図	A地区平面図	17	第51図	S E04	55
第18図	B地区平面図	18	第52図	S E04 水溜 (W2)	56
第19図	C地区平面図	19	第53図	窯 平面図	58
第20図	S B01	20	第54図	窯 断面図	59
第21図	S B01 柱穴内土器出土状況	21	第55図	S K05	61
第22図	S B02	21	第56図	S K09	62
第23図	S B03	22	第57図	S K17	64
第24図	S B04	23	第58図	S K18	65
第25図	S B05	24	第59図	S K19	65
第26図	S B06	24	第60図	S K20	66
第27図	S B07	25	第61図	S K25	67
第28図	S B08	25	第62図	S K26	68
第29図	S B09	25	第63図	S K27	68
第30図	B地区中央部掘立柱建物跡・柱穴群	26	第64図	S K28	69
第31図	S B10	27	第65図	S X01	70
第32図	S B11	27	第66図	S X02	70
第33図	S B12	28	第67図	346 拓影	71
第34図	P03 土器出土状況	28	第68図	S X03	71

第69図	SX06	73	第107図	SD61	113
第70図	SX10	75	第108図	SD66	114
第71図	SX19	78	第109図	SD71	116
第72図	SX21	79	第110図	SD75(1)	118
第73図	SX22	80	第111図	SD75(2)	118
第74図	SX26	81	第112図	SD76	119
第75図	SX27	81	第113図	SD77	120
第76図	SX28	82	第114図	SE05	121
第77図	SX29	83	第115図	SE06	122
第78図	SX31	84	第116図	SK30	123
第79図	晶1	86	第117図	SK34	124
第80図	南地区基本土層図	89	第118図	SK37	125
第81図	南地区調査位置図	90	第119図	SK38	125
第82図	ポイントバー断面	91	第120図	SK39	125
第83図	南地区平面図	92	第121図	SK40	126
第84図	F~K・M~Q地区平面図	93	第122図	SK43	127
第85図	D・E・L地区平面図	94	第123図	SK47	127
第86図	SB13	94	第124図	SK55	129
第87図	SB14	95	第125図	SK56	129
第88図	SB15	95	第126図	SK57	130
第89図	SB16	96	第127図	SK58	131
第90図	SB17	96	第128図	SK62	132
第91図	SB18	97	第129図	SX37	133
第92図	SB19	97	第130図	SX40	134
第93図	SB20	98	第131図	晶2	136
第94図	柱穴断面	98	第132図	大野遺跡の木材及び炭化材Ⅰ	143
第95図	SB21	99	第133図	大野遺跡の木材及び炭化材Ⅱ	144
第96図	SB22	99	第134図	大野遺跡の木材及び炭化材Ⅲ	145
第97図	SB23	100	第135図	大野遺跡の木材及び炭化材Ⅳ	146
第98図	SB24	100	第136図	[参考]暦年較正年代グラフ	153
第99図	SB25	100	第137図	札馬窯群の須恵器の両分布図	156
第100図	W10	103	第138図	姫路窯群の須恵器の両分布図	157
第101図	W11	103	第139図	神出窯群(池下支群) の須恵器の両分布図	158
第102図	SD31	104	第140図	神野大林群と札馬群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr)	159
第103図	SD32	104	第141図	姫路支群と札馬群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr)	160
第104図	SD34	105			
第105図	M地区第2面平面図	109			
第106図	SD52~SD55	111			

第142図	大野遺跡出土須恵器の両分布図	161	第149図	須恵器 碗の分類	173
第143図	大野遺跡出土須恵器の産地推定(1) (K, Ca, Rb, Sr)	162	第150図	須恵器 捏鉢の分類	174
第144図	大野遺跡出土須恵器の産地推定(2) (K, Ca, Rb, Sr)	163	第151図	丹波焼の分類	176
第145図	大野遺跡出土丹波焼・備前焼 の両分布図	164	第152図	備前焼の分類	177
第146図	土師器 皿の分類	167	第153図	時間軸の設定	179
第147図	土師器 杯・碗の分類	170	第154図	中世土器の変遷(1)	182・183
第148図	土師器 埴塼の分類	171	第155図	中世土器の変遷(2)	184・185
			第156図	中世前期の遺構	190
			第157図	中世後期の遺構	191

表 目 次

第1表	樹種同定結果一覧	138	第3表	胎土分析資料一覧	165
第2表		150・151	第4表	土器から見た主要遺構の時期	186・187

図 版 目 次

図版1	北地区出土遺物	P23 出土土器 (52)	P21 出土土器 (53)
	S B01 出土土器 (1~8)	P19 出土土器 (54)	P22 出土土器 (55)
	S B03 出土土器 (9~23)	P27 出土土器 (56)	P25 出土土器 (57・58)
	P06 出土土器 (24・25)	P28 出土土器 (59・60)	
	S B09 出土土器 (26)	P29 出土土器 (61・62)	P24 出土土器 (63)
	P02 出土土器 (27・28)	P32 出土土器 (64)	P26 出土土器 (65)
	P01 出土土器 (29)	P30 出土土器 (66)	P31 出土土器 (67)
	S B11 出土土器 (30)	P33 出土瓦 (68)	S D03 出土土器 (69・70)
	P05 出土土器 (31)	S D04 出土土器 (71)	
	P04 出土土器 (32)	S D06 出土土器 (72~77)	
図版2	北地区出土遺物	図版3	北地区出土遺物
	P08 出土土器 (34)		S D05 上層出土土器 (78~97)
	P07 出土土器 (35)		S D05 下層出土土器 (101~114)
	P17 出土土器 (36)	図版4	北地区出土遺物
	P03 出土土器 (37)		S D05 下層出土土器 (115~123)
	P11 出土土器 (38)		
	P16 出土土器 (39)		
	P15 出土土器 (40)		
	P14 出土土器 (41)		
	P10 出土土器 (42)		
	P09 出土土器 (43)		
	P13 出土土器 (44)		
	P12 出土土器 (45)		
	P20 出土土器 (46~50)		
	P18 出土土器 (51)		

- SD08 出土土器 (127~130)
- SD09 出土土器 (131)
- SD10 出土土器 (132~159)
- 図版 5 北地区出土遺物
- SD10 出土土器 (160~185)
- 図版 6 北地区出土遺物
- SD10 出土土器 (186~192)
- SD10 出土石製品 (S1)
- SD11 出土土器 (195~197)
- SD12 出土土器 (198~200)
- 図版 7 北地区出土遺物
- SD12 出土土器 (201)
- SD14 出土土器 (202~227)
- 図版 8 北地区出土遺物
- SD14 出土土器 (228~240)
- 図版 9 北地区出土遺物
- SD17 出土土器 (241~244)
- SD20 出土土器 (245~260)
- SD22 出土土器 (263)
- SD21 出土土器 (264・265)
- 図版 10 北地区出土遺物
- SD21 出土土器 (266)
- SD29 出土土器 (267~279)
- SD30 出土土器 (280)
- SE02 出土土器 (281・282)
- SE03 出土土器 (284~286)
- 窯出土土器 (287~292)
- SK01 出土土器 (293)
- SK02 出土土器 (294・295)
- SK05 出土土器 (296) SK06 出土土器 (297)
- SK09 出土土器 (298) SK08 出土土器 (299)
- SK11 出土土器 (300) SK12 出土土器 (301)
- SK13 出土土器 (302~305)
- SK14 出土土器 (306)
- SK18 出土土器 (307~313)
- 図版 11 北地区出土遺物
- SK18 出土土器 (314・315)
- SK19 出土土器 (316~323)
- SK20 出土土器 (325) SK22 出土土器 (326)
- SK23 出土土器 (327~330)
- SK25 出土土器 (331) SK26 出土土器 (332)
- SK27 出土土器 (333~335)
- SK28 出土土器 (336~339)
- SX01 出土土器 (340~343)
- SX02 出土土器 (344~347)
- SX03 出土土器 (348~350)
- 図版 12 北地区出土遺物
- SX04 出土土器 (351~353)
- SX05 出土土器 (354~357)
- SX06 出土土器 (358~369)
- SX07 出土土器 (370) SX09 出土土器 (371)
- SX10 出土土器 (372~376)
- SX13 出土土器 (377・378)
- SX14 出土土器 (379~381)
- SX15 出土土器 (382) SX17 出土土器 (383)
- SX18 出土土器 (384)
- 図版 13 北地区出土遺物
- SX19 出土土器 (385~387)
- SX22 出土土器 (388)
- SX23 出土土器 (389~392)
- SX24 出土土器 (393~399)
- SX25 出土土器 (400~402)
- SX26 出土土器 (403)
- SX27 出土土器 (S3)
- SX27 出土土器 (404~419)
- 図版 14 北地区出土遺物
- SX27 出土土器 (420~423)
- SX28 出土土器 (424)
- SX29 出土土器 (425~428)
- SX30 出土土器 (429~431)
- SX31 出土土器 (432~441)
- SX32 出土土器 (443)
- 晶1 出土土器 (444・445)
- 包含層出土土器 (446・447)
- 図版 15 北地区出土遺物
- 包含層出土土器 (448~484)

図版 16 北地区出土遺物

包含層出土土器 (485~529)

図版 17 北地区出土遺物

包含層出土土器 (532~540)

包含層出土石製品 (S 5・S 6)

P 27 出土鉄製品 (F 1)

S B 02 出土鉄製品 (F 2)

S D 05 出土鉄製品 (F 3)

S D 14 出土鉄製品 (F 4)

S D 20 出土鉄製品 (F 5)

S K 18 出土鉄製品 (F 6)

S K 19 出土鉄製品 (F 7)

S X 06 出土鉄製品 (F 8)

S X 10 出土鉄製品 (F 9~F 11)

図版 18 北地区出土遺物

S X 21 出土鉄製品 (F 12)

S X 17 出土鉄製品 (F 13)

包含層出土鉄製品

(F 14~F 17・F 20・F 23・F 24・F 27)

S D 20 出土鉄製品 (F 18)

S K 24 出土鉄製品 (F 19)

S X 24 出土鉄製品 (F 21)

S X 21 出土鉄製品 (F 22・F 25)

S K 19 出土銅製品 (F 26)

図版 19 北地区出土遺物

S E 02 出土木製品 (W 3~W 6)

S D 10 出土木製品 (W 7)

S E 04 出土木製品 (W 8・W 9)

図版 20 南地区出土遺物

S B 17 出土土器 (542) P 35 出土土器 (552)

P 42 出土土器 (549) P 34 出土土器 (544)

P 39 出土土器 (554) P 44 出土土器 (551)

P 40 出土土器 (546) S B 24 出土土器 (543)

P 41 出土土器 (553) P 36 出土土器 (548)

P 37 出土土器 (545) P 46 出土土器 (555)

P 43 出土土器 (550) S B 23 出土土器 (547)

S D 31 出土土器 (556~568)

S D 34 出土土器 (569~574)

図版 21 南地区出土遺物

S D 34 出土土器 (575~580) S D 49 出土土器 (581)

S D 52 出土土器 (582~584)

S D 53 出土土器 (585~587)

S D 55 出土土器 (588~590)

S D 56 出土土器 (591~599)

図版 22 南地区出土遺物

S D 56 出土土器 (600~603)

S D 56 出土石製品 (S 10)

S D 62 出土土器 (606・607)

S D 60 出土土器 (604) S D 61 出土土器 (605)

S D 66 出土土器 (608~619)

S D 70 出土土器 (620)

図版 23 南地区出土遺物

S D 67 出土土器 (621・622)

S D 71 出土土器 (623~644)

S D 72 出土土器 (645~647)

図版 24 南地区出土遺物

S D 72 出土瓦 (648)

S D 75 出土土器 (649・650)

S D 76 出土土器 (651~653)

S D 77 出土土器 (654~656)

S E 05 出土土器 (657~659)

S E 06 出土土器 (660~662)

S K 29 出土土器 (663) S K 34 出土土器 (664)

S K 37 出土土器 (665)

S K 38 出土土器 (666~669)

S K 39 出土土器 (670・671)

S K 40 出土土器 (672~674)

S K 43 出土土器 (675) S K 47 出土土器 (676)

図版 25 南地区出土遺物

S K 41 出土土器 (677)

S K 49 出土土器 (678~682)

S K 52 出土土器 (683) S K 53 出土土器 (684)

S K 57 出土土器 (685~691)

S K 58 出土土器 (692・693)

S K 59 出土土器 (694)

S K 60 出土土器 (695~700)

S K61 出土土器(701・702)
図版 26 南地区出土遺物
S K62 出土土器(703~705)
S X34 出土土器(706)
S X39 出土土器(707~712)
S X40 出土土器(713~748)
図版 27 南地区出土遺物
S X40 出土土器(749~752)
包含層出土土器(753~779)

図版 28 南地区出土遺物
包含層出土土器(780~801)
基盤層出土土器(802・803)
図版 29 南地区出土遺物
S D67 出土銅製品(F28)
S K57 出土鉄製品(F29~F31)
晶2 出土鉄製品(F32)
包含層出土鉄製品(F33)
S X40 出土鉄製品(F34)
S D67 出土木製品(W12)
S X40 出土石製品(S11)

写真図版目次

写真図版1 北地区遺構

A地区全景 南西上空から
A地区全景 西上空から
A地区全景 南から

写真図版2 北地区遺構

B地区・C地区全景 北上空から
B地区・C地区全景 西上空から
B地区・C地区全景 南上空から

写真図版3 北地区遺構

B地区全景 北から C地区全景 南から

写真図版4 北地区遺構

A地区俯瞰

写真図版5 北地区遺構

B地区俯瞰

写真図版6 北地区遺構

C地区俯瞰

写真図版7 北地区遺構

S B01・02 北東から S B03 西から

写真図版8 北地区遺構

S B04 西から S B05 西から
S B06・07 南から

写真図版9 北地区遺構

S D05 断面 東から S D10 南から

写真図版10 北地区遺構

S D11 東から S D14 東から
S D14 断面 東から
S D19~S D22 南から

写真図版11 北地区遺構

S E01 西から S E02 西から
S E03 南から S E04 北から
窯 東から

写真図版12 北地区遺構

窯横断面 東から
窯横断面(断割り後) 東から
窯 床面横断面 東から

写真図版13 北地区遺構

S K05 北東から 南西部土坑群 南から
S K17 南から S K18 東から

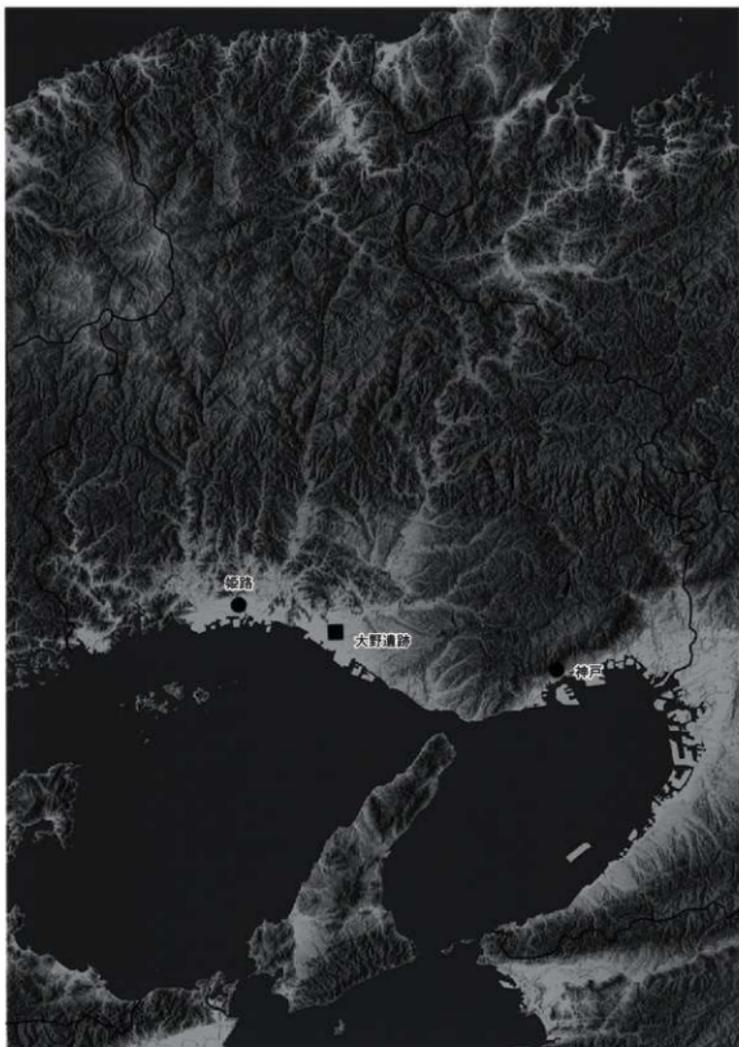
写真図版14 北地区遺構

S X27 上層 北から
S X27 下層遺物出土状況 北から
S X31 西から

- 写真図版 15 北地区遺物
S B01 出土土器 (1~4)
- 写真図版 16 北地区遺物
S B01 出土土器 (5・6・8)
S B03 出土土器 (9) S B09 出土土器 (26)
P01 出土土器 (29・33)
- 写真図版 17 北地区遺物
P08 出土土器 (34) P14 出土土器 (41)
P12 出土土器 (45) P23 出土土器 (52)
P28 出土土器 (60) P24 出土土器 (63)
- 写真図版 18 北地区遺物
P26 出土土器 (65) P31 出土土器 (67)
S D06 出土土器 (76)
S D05 出土土器 (78・79・81~85・88・105)
- 写真図版 19 北地区遺物
S D05 出土土器
(86・87・94・98~101・112・124~126)
- 写真図版 20 北地区遺物
S D05 出土土器 (113・114・116・117・121・122)
S D09 出土土器 (131)
S D10 出土土器 (132・133・181)
包含層出土土器 (522・523・530・531・541)
- 写真図版 21 北地区遺物
S D10 出土土器
(136・146・150・157・164・170・186・187)
- 写真図版 22 北地区遺物
S D10 出土土器 (189・190・193・194)
S D14 出土土器 (205~207・210)
- 写真図版 23 北地区遺物
S D14 出土土器
(212・213・215・219・220・222・224)
- 写真図版 24 北地区遺物
S D14 出土土器 (225・235・239)
S D17 出土土器 (242)
S D20 出土土器 (246・255)
- 写真図版 25 北地区遺物
S D14 出土土器 (240)
S D20 出土土器 (254・261・262)
- ①240 口縁部断面 ②240 底部 ③254 底部
- 写真図版 26 北地区遺物
S D20 出土瓦 (257・259・260)
- 写真図版 27 北地区遺物
S D21 出土土器 (264・266)
S D29 出土土器 (272・277)
S D30 出土土器 (280) S E02 出土土器 (283)
- 写真図版 28 北地区遺物
S D10 出土土器 (149・152)
S K02 出土土器 (294) S K05 出土土器 (296)
S K18 出土土器 (307)
- 写真図版 29 北地区遺物
S K11 出土土器 (279)
S K18 出土土器 (308・311・312・314)
S K19 出土土器 (316・319・320・324)
- 写真図版 30 北地区遺物
S K27 出土土器 (333) S K28 出土土器 (337)
S X01 出土土器 (343)
S X02 出土土器 (344・345)
- 写真図版 31 北地区遺物
S X02 出土土器 (346)
- 写真図版 32 北地区遺物
S X04 出土土器 (351・352)
S X05 出土土器 (356)
S X06 出土土器 (358・360・362・363)
- 写真図版 33 北地区遺物
S X06 出土土器 (364~366)
S X10 出土土器 (375・376)
S X14 出土土器 (379)
- 写真図版 34 北地区遺物
S X14 出土土器 (380) S X15 出土土器 (382)
S X22 出土土器 (388)
S X23 出土土器 (389・391・392・396・399)
S X25 出土土器 (401)
- 写真図版 35 北地区遺物
S X26 出土土器 (403)
S X27 出土土器 (407・409・412・422・423)
S X28 出土土器 (424) S X31 出土土器 (433)

- 写真図版 36 北地区遺物
 S X29 出土土器 (428)
 S X31 出土土器 (436~439・441)
 晶1出土土製品 (445) 包含層出土土製品 (535)
- 写真図版 37 北地区遺物
 包含層出土土器
 (447・449・451・463・473・478・479・495)
- 写真図版 38 北地区遺物
 包含層出土土器 (498・501・510・532・536)
 S D10 出土土製品 (S 1)
- 写真図版 39 北地区遺物
 S X21 出土土製品 (S 2)
 S X27 出土土製品 (S 3・S 4)
 包含層出土土製品 (S 5)
- 写真図版 40 北地区遺物
 S E04 出土木製品 (W 1・W 2・W 8・W 9)
 S E02 出土木製品 (W 3・W 4)
- 写真図版 41 北地区遺物
 P27 出土鉄製品 (F 1)
 S B02 出土鉄製品 (F 2)
 S D05 出土鉄製品 (F 3)
 S D14 出土鉄製品 (F 4)
 S D20 出土鉄製品 (F 5)
 S K18 出土鉄製品 (F 6)
 S K19 出土鉄製品 (F 7)
 S X06 出土鉄製品 (F 8)
 S X10 出土鉄製品 (F 9~F 11)
 S D20 出土鉄製品 (F 18)
 S K24 出土鉄製品 (F 19)
 包含層出土鉄製品 (F 20・F 23・F 24)
 S X24 出土鉄製品 (F 21)
 S X21 出土鉄製品 (F 22・F 25)
- 写真図版 42 南地区遺構
 南地区全景 北西上空から
 D地区・E地区全景 東上空から
 D地区・E地区全景 北東上空から
- 写真図版 43 南地区遺構
 D・E地区俯瞰 北東上空から
- D・E地区全景 北西から
- 写真図版 44 南地区遺構
 D地区全景 南東から E地区全景 南から
- 写真図版 45 南地区遺構
 M地区・L地区全景 東上空から
 M地区・L地区全景 南上空から
- 写真図版 46 南地区遺構
 M地区第1面全景 東から
 M地区第2面全景 東から
 M地区第2面全景 北から
- 写真図版 47 南地区遺構
 F~H地区全景 西上空から
 F~H地区全景 北上空から
 F地区第1面全景 西から
 F地区第2面全景 西から
- 写真図版 48 南地区遺構
 G地区全景 南東から
 H地区全景 北西から
 I地区全景 北西から
 Q地区全景 北西から
 J地区全景 北西から
- 写真図版 49 南地区遺構
 N・O地区全景 北東上空から
 N地区俯瞰 北東上空から
 O地区俯瞰 北東上空から
 P地区全景 北西から
- 写真図版 50 南地区遺構
 S B14・15・17 北西から
 S B18 北東から S B20 北東から
- 写真図版 51 南地区遺構
 S D31 断面 南東から
 S D32 断面 南東から
 S D32 全景 南東から
 S D66 断面 東から
- 写真図版 52 南地区遺構
 S D52・53 北から
 S D53 土器出土状況 西から
 S D53 断面 北から

- SD54 全景 北から
- SD54 断面 北から
- 写真図版 53 南地区遺構
- SD61 断面 西から
- SD62 断面 南から
- SD71 全景 西から
- SD71 断面 西から
- 写真図版 54 南地区遺構
- SD75 断面 南から
- SD76・77 断面 北から
- SD77 北西から
- 写真図版 55 南地区遺構
- SE05 全景 北西から
- SE06 全景 北西から
- SE06 石組 北西から
- 写真図版 56 南地区遺構
- SK57 北から SK60 北から
- SK62 南から
- 写真図版 57 南地区遺物
- P43 出土土器 (550) P41 出土土器 (553)
- P39 出土土器 (554)
- SD31 出土土器 (559・562)
- 写真図版 58 南地区遺物
- SD31 出土土器 (561・563)
- SD34 出土土器 (570~574・577・578)
- 写真図版 59 南地区遺物
- SD34 出土土器 (579・580)
- SD53 出土土器 (585)
- SD56 出土土器 (591・592・594・595・603)
- SD55 出土土器 (600)
- 写真図版 60 南地区遺物
- SD66 出土土器 (615・619)
- SD71 出土土器 (629・630・635・639・643・644)
- SD72 出土土器 (645)
- 写真図版 61 南地区遺物
- SD72 出土土器 (647) SD77 出土土器 (654)
- SE06 出土土器 (661) SK34 出土土器 (664)
- SK40 出土土器 (674) SK37 出土土器 (665)
- SK38 出土土器 (668) SK41 出土土器 (677)
- 写真図版 62 南地区遺物
- SK57 出土土器 (685・687・691)
- SK58 出土土器 (693) SK60 出土土器 (698)
- 写真図版 63 南地区遺物
- SK59 出土土器 (694)
- SX39 出土土器 (710・712)
- SX40 出土土器 (714・716~718)
- 写真図版 64 南地区遺物
- SX40 出土土器 (719・724・726~731・741)
- 写真図版 65 南地区遺物
- SX40 出土土器 (744~747・751)
- 写真図版 66 南地区遺物
- SX40 出土土器 (749・750)
- 包含層出土土器 (757・765・791)
- 写真図版 67 南地区遺物
- 包含層出土土器 (771・772・783・802・803)
- 写真図版 68 南地区遺物
- SX40 出土土器 (S11)
- SD67 出土木製品 (W12)
- 写真図版 69 南地区遺物
- SK57 出土鉄製品 (F30・F31)
- 晶2 出土鉄製品 (F32)
- 包含層出土金属製品 (F33)
- SX40 出土鉄製品 (F34)
- SD67 出土銅製品 (F28)



第1章 大野遺跡

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

大野遺跡は加古川市加古川町大野に所在する。大野遺跡の所在する加古川市は、兵庫県南部のほぼ中央に位置する。南側を瀬戸内海に臨み、東側を加古郡稲美町・同播磨町と、北東側を三木市と、北側を加西市・小野市と、西側を高砂市・姫路市と、それぞれ接している。市域の面積は138.51km²である。

加古川は、古代以来、交通の要衝であった。一つは、畿内中央部と西国を結ぶ山陽道のルート上に位置し、古代においては「加古駅家」が置かれていた。江戸時代以降においては、「加古川宿」として、その役割を担ってきた。現代においては、JR山陽本線にその役割が受け継がれている。

もう一つは、加古川市の中心部を加古川が南北に流れている。加古川の上流域、丹波市米上町で分水界となっており、より北側は竹田川・由良川を経て日本海に通じている。古代以前においては、「加古川・由良川の道」と称され、瀬戸内と日本海を結ぶ重要なルートであった。そして、江戸時代以降は、



第1図 大野遺跡の位置

第1章 大野遺跡

加古川を遡り丹波市氷上町本郷まで、高瀬船が往来していたようである。そして、現代においては、JR加古川線・福知山線がこれに替わっている。

このように、古代以来、加古川は東西結ぶ交通路と南北を結ぶ交通路の結節点であり、交通の要衝であった。これが、現在の加古川市発展の基礎となっている。そして、現在においては、臨海部を中心とした工業都市として、加えて阪神地域のベッドタウンとして発展しつつある。このように加古川市は、西播磨地域のなかで中心的な役割を担っている。平成21年12月現在の人口は268,000人である。

2. 地形的環境

加古川市は、その市域の大半が加古川平野に立地している。加古川平野を形成した加古川は、粟賀山南麓付近（丹波市青垣町）を源とする一級河川である。丹波市氷上町を経て、篠山川・美養川・万願寺川等と合流し、加古川市と高砂市の境で播磨灘に注いでいる。全長90kmを遡り、その流域面積は1,835



更新世段丘



完新世段丘Ⅰ面



完新世段丘Ⅱ面



氾濫原面



旧河道

第2図 遺跡周辺の微地形

halに及ぶ。

大野遺跡は、加古川平野の北端部に位置し、現在の加古川が当遺跡の西約800mを流れている。埋立地を除く海岸線からの距離は、直線で約5.5kmである。また、現地表面の標高は、Q地区東端部で7.20m、E地区北端し部で6.90m、C地区南端部で6.90m、A地区北端部で7.20mである。

大野遺跡の立地は、微地形的には、完新世段丘Ⅱ面上に立地している。この地形環境が形成されるにあたっては、これまでの美乃利遺跡の調査、および大野遺跡の調査の成果から、以下の5ステージに分類することができる。

第Ⅰステージ 当初更新段丘面下に形成された氾濫原面であった。

第Ⅱステージ 縄文海進後、氾濫原面の埋没が進行し、大野遺跡から東側の美乃利遺跡にかけて微高地が形成される。

第Ⅲステージ 弥生時代前期末に美乃利遺跡西側を境に段丘化がおこり、美乃利遺跡側が完新世段丘Ⅰ面に、大野遺跡側が完新世段丘Ⅰ面に伴う氾濫原面となった。

第Ⅳステージ その後、この氾濫原面が埋没していく過程で、当地に集落が形成されていった。

第Ⅴステージ 鎌倉時代初頭に、当遺跡の西側を境に段丘化が起こり、当遺跡が完新世段丘Ⅱ面となる。その一方、西側はそれに伴う氾濫原面となる。その後、この氾濫原面が徐々に埋没し、現在に至っている。

第1章 大野遺跡

第2節 歴史的環境

1. はじめに

大野遺跡は加古川平野北東部の完新世段丘面上に立地する。このため、完新世段丘面上に立地する遺跡と密接な関係が予想される。そこで、本節では加古川左岸の完新世段丘面上に立地する遺跡を対象とする。

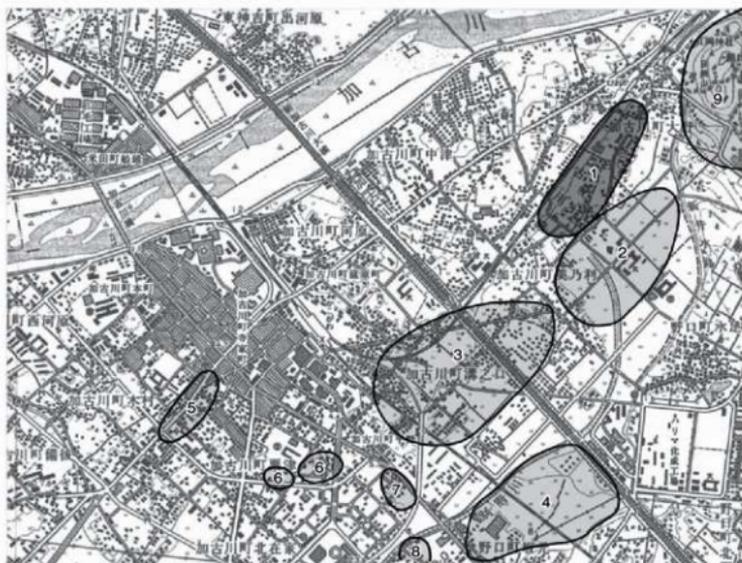
対象となるのは、美乃利遺跡(2)・溝之口遺跡(3)・坂元遺跡(4)・栗津大年遺跡(5)・栗津遺跡(6)・平野遺跡(7)・具平塚遺跡(8)である(第3図)。特に、本発掘調査が行なわれた遺跡を中心に、概観する。

2. 美乃利遺跡

大野遺跡の南東側に隣接する遺跡である。本遺跡と同様、(一)別府川広域基幹河川改修事業に伴い、平成2年・平成3年度・平成9年度に兵庫県教育委員会により調査が行なわれている。この結果、弥生時代前期～古墳時代初頭、奈良時代・平安時代・鎌倉時代の遺構・遺物が明らかとなっている¹⁾。

3. 溝之口遺跡

美乃利遺跡の南西側に位置する。宅地造成事業・個人住宅建設事業・J R山陽本線等連続立体交差事業に伴い、発掘調査が行われている¹⁷⁾。



1. 大野遺跡 (110636)
2. 美乃利遺跡 (110218)
3. 溝之口遺跡 (110010)

4. 坂元遺跡
5. 栗津大年遺跡
6. 栗津遺跡 (110294)

7. 平野遺跡 (110357)
8. 具平塚遺跡 (110617)
9. 日岡山古墳群 (110098～110117)

第3図 主要周辺遺跡

宅地造成事業に伴う調査は、昭和58年度・昭和61年度・昭和62年度に加古川教育委員会により行われている。この結果、弥生時代中期の土坑・方形周溝墓群、弥生時代後期の竪穴住居跡、古墳時代の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物跡・井戸などが明らかとなっている。

個人住宅建設事業に伴う調査は、平成4年度に加古川市教育委員会により行なわれ、弥生時代と古墳時代の水田跡、弥生時代中期の方形周溝墓、奈良～平安時代の掘立柱建物跡が明らかとなっている。

J R山陽本線等連続立体交差事業に伴う調査は、平成13年度と15年度に兵庫県教育委員会が調査を行っている。この結果、平安時代後期の掘立柱建物跡や溝などが明らかとなっている。

4. 坂元遺跡

溝之口遺跡の南側に周知されている。J R山陽本線等連続立体交差事業、東播都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業、東播磨南北道路に伴い、兵庫県教育委員会により発掘調査が行われている⁽³⁾。

J R山陽本線等連続立体交差事業に伴う調査は平成11年度に行なわれ、弥生時代中期の土坑、後期前半の溝、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡・溝・土坑などが明らかとなっている。

東播都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業に伴う調査は、平成15年から17年度にかけて調査が行なわれている。この結果、縄文時代の埋甕・土坑、弥生時代中期の竪穴住居・掘立柱建物跡・方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居跡・水田・埴輪窯・古墳、奈良時代の掘立柱建物跡・井戸・水田等、鎌倉時代の掘立柱建物跡・鍛冶遺構・水田・溝などが明らかとなっている。特に、古墳とそこに樹立された埴輪を焼成した窯跡がセットで見つかった点は、注目される。また、奈良時代の掘立柱建物群については、駅家郷の可能性も指摘されている。他に、旧石器時代のナイフ形石器・台形石器なども出土している。

東播磨南北道路に伴う調査では、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡群などが明らかとなっている。

5. 栗津大年遺跡

溝之口遺跡の西側に周知されている。加古川別府港緊急街路整備事業に伴い、平成16年度と平成17年度の2年にわたり兵庫県教育委員会により調査が行なわれている。この結果、平安時代から室町時代にかけての、掘立柱建物跡や屋敷墓などが明らかとなっている⁽⁴⁾。

〔註〕

(1) 山田清朝他『美乃利遺跡——級河川別府川河川改良事業に伴う発掘調査報告書——』兵庫県教育委員会 1997

山田清朝『美乃利遺跡Ⅱ——級河川別府川河川改修事業に伴う発掘調査——』兵庫県教育委員会 2006

(2) 篠宮 正『溝之口遺跡—東播都市計画都市高速鉄道J R山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—』兵庫県教育委員会 2006

岡本一士『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市教育委員会 1992

西川英樹『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅱ』加古川市教育委員会 2006

渡辺 昇『坂元遺跡Ⅱ—東播都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書——』兵庫県教育委員会 2009

(3) 岸本一宏他「坂元遺跡（南北道路）」『平成16年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2006

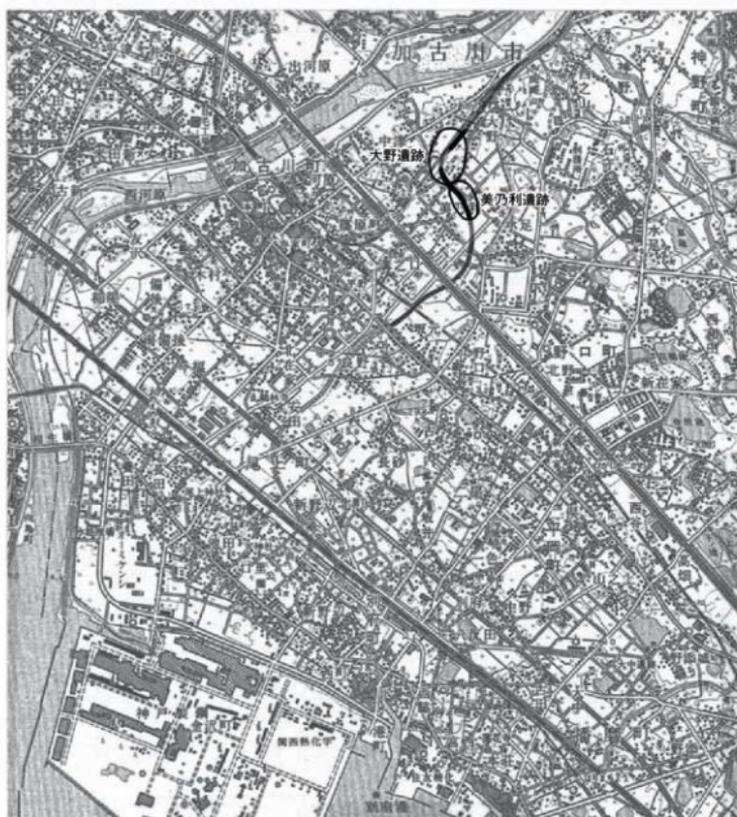
(4) 村上泰樹『栗津大年遺跡』兵庫県教育委員会 2009

第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

大野遺跡の所在する加古川市大野地区は、加古川によって形成された神積平野に立地する。当地区においては、小規模な用水路のみで、排水機能が不十分である。以上の要因から、数十年に一度の割合で、道路・家屋が浸水する被害に遭っている。

この状況を解決すべく計画されたのが、(一)別府川広域基幹河川改修事業である。この計画は、計画以前は美乃利地区から瀬戸内海に注いでいる別府川を、より北進させ、JR加古川線日岡駅の北側、加古川と曇川の合流地点まで伸ばそうとするものである(第4図)。上記の工事計画に伴い、分布調査・確認調査を実施し、平成2年・平成3年度・平成9年度に、美乃利遺跡の本発掘調査を実施している。



第4図 工事計画と大野遺跡

第2節 分布調査・確認掘調査

1. はじめに

工事計画地は、基本的には埋蔵文化財の包蔵は周知されていなかった。しかし、前章で紹介した溝之口遺跡など、完新世段丘面上に立地する遺跡が明らかとなってきている。このため、同様な地形環境にある当地においても、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が考えられた。そこで、工事計画地を対象に分布調査を実施した。分布調査の結果、埋蔵文化財の包蔵の可能性が明らかとなったため、確認調査を実施することとなった。

2. 分布調査（遺跡調査番号：880071）

分布調査は昭和63年度に行われている。その概要等は以下のとおりである。

調査期間 昭和63年5月27日

調査概要 調査地は、加古川町美乃利～大野にかけての約2.2kmに渡って実施した。この結果、広範囲にわたって、遺物の散布が認められた。

調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 井守徳男・渡辺 昇・村上泰樹

なお、平成15年度にも、当時業に伴う分布調査が行なわれている。その対象地は、今回報告する地区より上流側であるため、その詳細については割愛させていただく。

3. 確認調査

今回報告する調査地を対象とする確認調査は平成12年度に行なわれている（第7図）。その概要等は以下のとおりである。

調査期間 平成12年4月17日～4月19日

調査概要 調査地は、美乃利遺跡として本発掘調査を実施した地域の西端から、JR日同駅の南側までを対象とした。ただし、この調査時にすでに完成していた仮設の工事用道路部分と未買収地については、調査対象外とした。

調査は、2m×4mのトレンチを設定し、重機と人力により、埋蔵文化財の有無の確認に努めていった。この結果、大きく2地区（北地区・南地区）において、埋蔵文化財の包蔵を確認することができた。

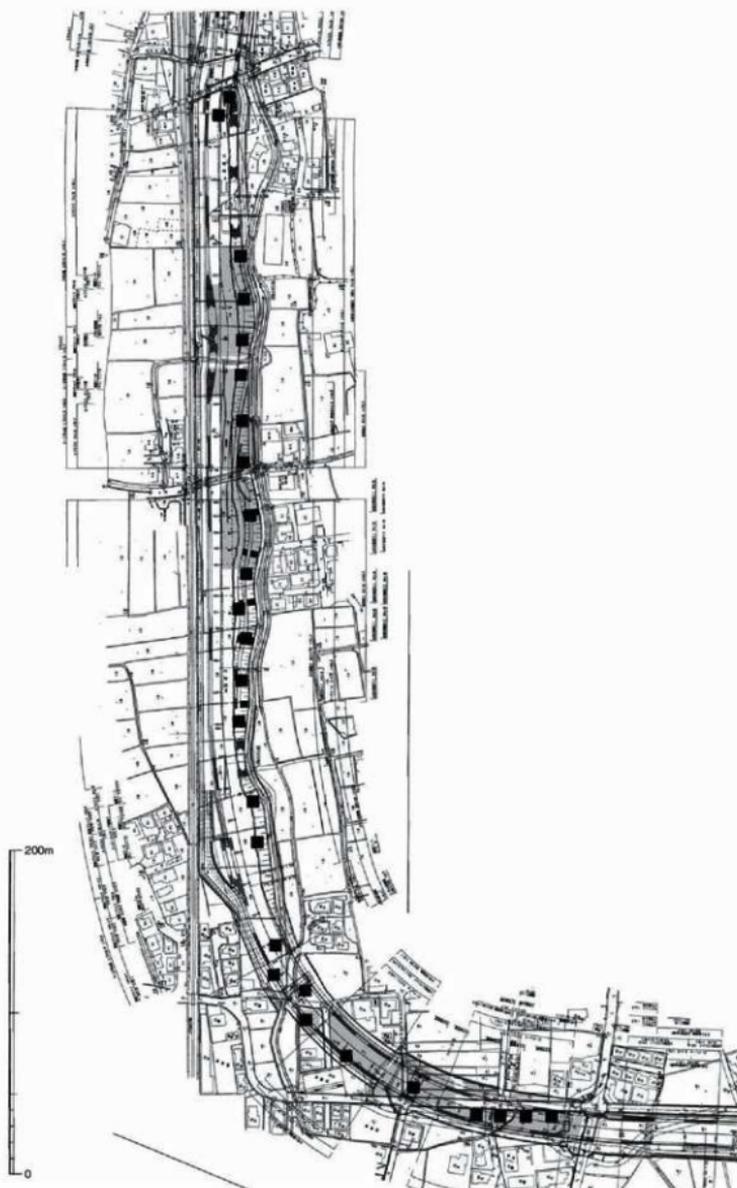
調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝



第5図 竣工後の北地区 南から



第6図 竣工後の南地区 東から



第7図 確認調査位置図

第3節 本発掘調査

1. はじめに

本発掘調査は、前節における確認調査の結果に基づき実施した。ただし、南地区の調査に関しては、現道・居住地が密集する地区にあたり、調査対象地を一機に調査することは困難であった。このため、調査対象地を細かく分割して調査する結果となった。各調査の概要は以下のとおりである。

2. 調査の概要

調査は6次（第1次調査～第6次調査）にわたって行われている（第12図）。各調査の概要・調査体制等は以下のとおりである。

(1) 第1次調査（遺跡調査番号：200021）

調査地 L地区・M地区

調査期間 平成12年9月18日～11月30日

調査面積 998㎡

調査概要 調査地は、南北に走る用水路により分断されているため、西側をL地区(212㎡)、東側をM地区(771㎡)の2地区に分割して実施した。調査は、表土・盛土・耕作土層を重機で掘削し、以下包含層の掘削から人力で調査を進めていった。

最後に、11月14日にヘリコプターによる空中写真測量を実施し、調査成果の記録に努めた。また、11月11日には大野地区住民を対象とした地元説明会を実施した（第8図）。



第8図 地元説明会

調査体制 調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 森内秀造

臨時職員 田中秀明

調査補助員 牛谷好伸・岡本陽子

室内作業員 五百蔵道代・西 朋美・菊島昌子

(2) 第2次調査（遺跡調査番号：2000337）

調査地 Q地区

調査期間 平成13年2月5日～2月23日

調査面積 96㎡

調査概要 美乃利遺跡に隣接した、最も東側の調査区である。遺物を包含する層まで重機により掘削し、以下を人力で調査を進めていった。調査成果の記録は、調査員がオフセット法により実測した。



第9図 Q地区の調査

第2章 調査の経緯

調査体制 調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝

(3) 第3次調査 (遺跡調査番号: 2001006)

調査地 A地区～I地区

調査期間 平成13年5月24日～10月18日

調査面積 5653㎡

調査概要 調査地は、大きく北地区と南地区の2地区からなる。各地区とも水路あるいは生活用道路により分断しているため、数地区に分割して実施した。北地区は、A地区～C地区の3地区からなる。それぞれの調査面積は1644㎡・1311㎡・1126㎡である。南地区は、D地区～I地区の6地区からなる。各地区の調査面積は、D地区が186㎡、E地区が868㎡、F地区が150㎡、G地区が126㎡、H地区が38㎡、I地区が204㎡である。

調査は、まずF地区・G地区・H地区・I地区から行い、次いでA地区・B地区・C地区・D地区・E地区を実施した。各地区の調査とも、遺物包含層までを重機により掘削し、以下を人力で調査を進めていった。

最後に、6月28日にF地区・G地区・H地区・I地区を、8月2日にA地区を、9月14日にB地区・C地区を、9月28日にD地区・E地区を、それぞれ対象としたヘリコプターによる空中写真測量を実施し、調査成果の記録に努めた。また、9月6日に加古川市民大学受講生を対象とした発掘体験学習を実施するとともに、9月22日に一般市民を対象とした現地説明会を実施した。

調査体制 調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 村上泰樹・中川 渉・日置 智
調査補助員 森崎由紀子・田中 勝・小谷義男・牛谷好伸
室内作業員 覚野係子



第10図 A地区の調査(1)



第11図 A地区の調査(2)

(4) 第4次調査 (遺跡調査番号: 2001225)

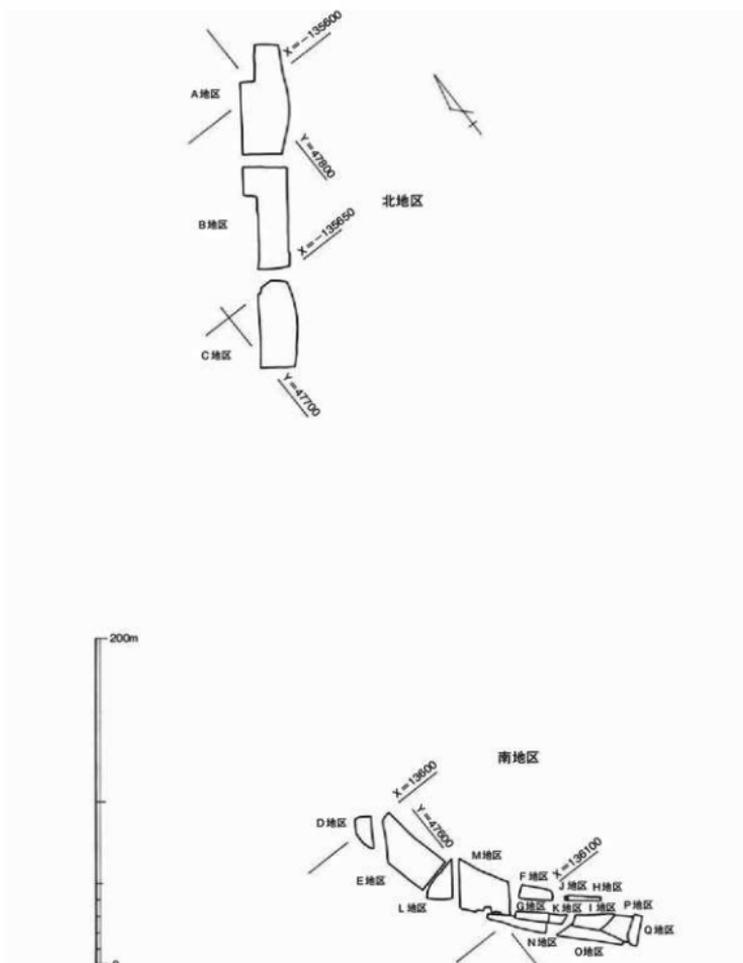
調査地 J地区・K地区

調査期間 平成14年2月19日～3月1日

調査面積 91㎡

調査概要 J地区(22㎡)とK地区(69㎡)の2地区からなる。2地区とも、盛土層と耕作土を重機で掘り下げ、以下を人力で調査を進めていった。K地区では2面にわたって遺構を検出した。調査成果の記録は、調査員によるオフセット測量により行った。

調査体制 調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 村上泰樹



第12図 地区割り図

(5) 第5次調査 (遺跡調査番号：2002082)

調査地 P地区

調査期間 平成14年5月13日～5月22日

調査面積 232m²

調査概要 包含層直上まで重機により掘削し、以下を人力により調査を進めていった。調査成果の記録は、調査員によるオフセット測量により行った。

調査体制 調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 西口和彦・西口圭介

第2章 調査の経緯

(6) 第6次調査（遺跡調査番号：2002114）

調査地 N地区・O地区

調査期間 平成14年9月2日～10月18日

調査面積 475㎡

調査概要 調査地は里道により分断されているため、N地区とO地区の2地区からなる。調査は、包含層直上までを重機で掘削し、以下の調査は人力で進めていった。最後に、9月26日にヘリコプターによる空中写真測量を実施し、調査成果の記録に努めた。

調査体制 調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 渡辺 昇・上田健太郎

調査補助員 森崎由紀子・前田陽子・大西襟里子

室内作業員 覚野郁子

第4節 整理作業

1. はじめに

整理作業は、平成20年度と21年度の2箇年にわたり、兵庫県立考古博物館にて行った。各年度の作業内容は以下の通りである。

2. 平成20年度

土器の接合・実測・復元・写真撮影を行なった。これと平行して、遺構図の整図を行なった。また、出土木炭を対象とした放射性炭素年代測定（AMS測定）を（株）加速器分析研究所に、出土木製品の樹種同定を株式会社古環境研究所に依頼し、報告を得た。結果の詳細については、第4章に掲載している。

整理体制は以下の通りである。

整理体制 整理保存班 篠宮 正

調査班 村上泰樹・森内秀造・渡辺 昇・西口圭介・山田清朝・中川 渉

嘱託員 栗山美奈・岡崎輝子・眞子ふさ恵・西口由紀・蔵 幾子

3. 平成21年度

金属製品・木製品の实測および写真撮影を実施した。遺物実測図・遺構図等のトレースを行なった。また、出土須恵器・丹波焼の胎土分析を大谷大学三辻利一先生に依頼した。これと平行して、原稿執筆・編集を行ない、最終的に報告書の刊行にいたった。整理体制は以下の通りである。

整理体制 整理保存班 菱田淳子

調査班 村上泰樹・森内秀造・渡辺 昇・西口圭介・山田清朝・中川 渉

嘱託員 栗山美奈・岡崎輝子・加藤裕美

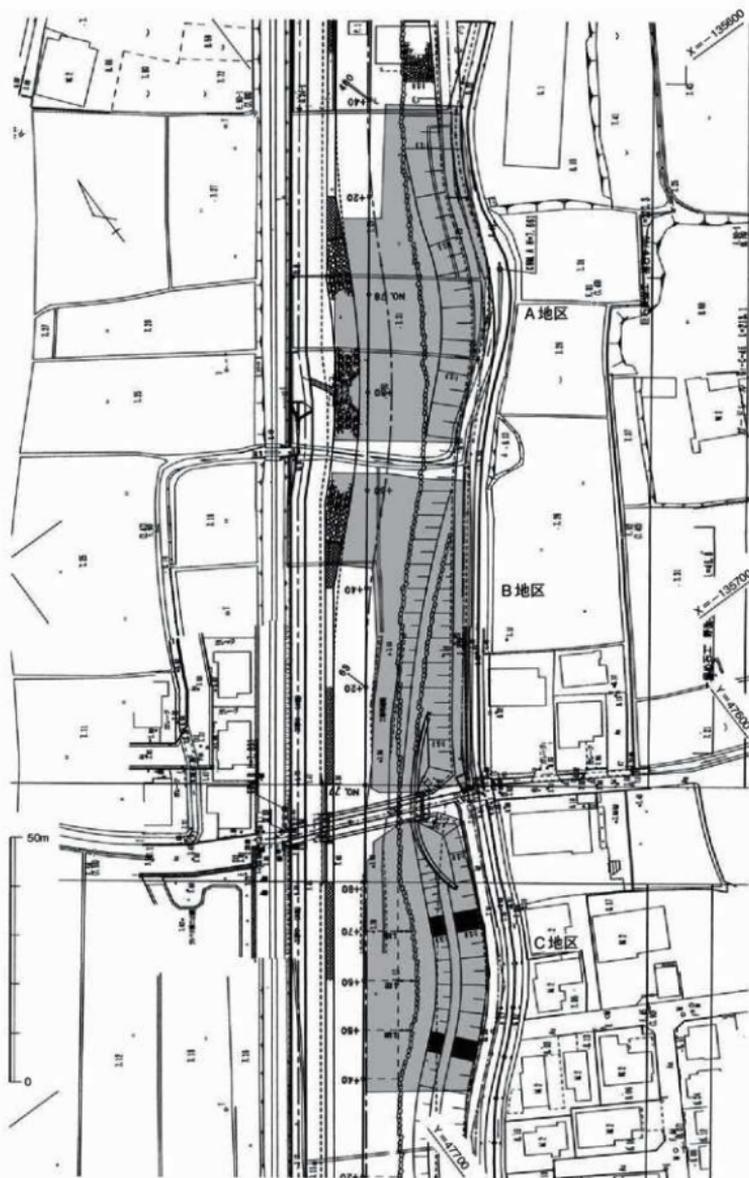
第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

先述（前章第3節）したとおり、調査は、平成12年度～平成14年度にかけて、多くの地区に分割した形で行なわれている。しかし、これらの調査地を総合すると、大きく「北地区」と「南地区」の2地区からなる（第13図）。そこで、以下の報告においては、「北地区」と「南地区」にわけて報告し、最後に両地区を総合して分析・検討することにする。なお、調査においては、数次にわたって行われているため、調査手順等に統一性を図ることはできなかった。遺構名等についても、各調査単位で付けられていた。そこで、調査区をまたいで同一の遺構と判断されるものについては、遺構名を一本化させている。



第13図 調査位置図



第14図 北地区調査位置図

第2節 北地区の調査

1. 調査の概要

北地区は、A地区・B地区・C地区の3地区からなる(第14図)。3地区とも検出面は1面である。なお、北地区の報告においては、煩雑さを避けるため、調査区の主軸方向を南北方向として報告する。但し、個々の遺構の説明に関してはこの限りではない。時期については、第5章の検討結果に基づくものである。

2. 基本層序と遺構の検出(第16図)

大きく、上から、盛土層・旧耕作土層・床土層・水田土壌層・洪水層・土壌層の層序からなり、基盤層に達する。遺構は、土壌層もしくは水田土壌層の下面にあたる基盤層上面で検出されている。層的には2面にわたる箇所も認められるが、調査としては基盤層上面の一面で遺構を検出している。

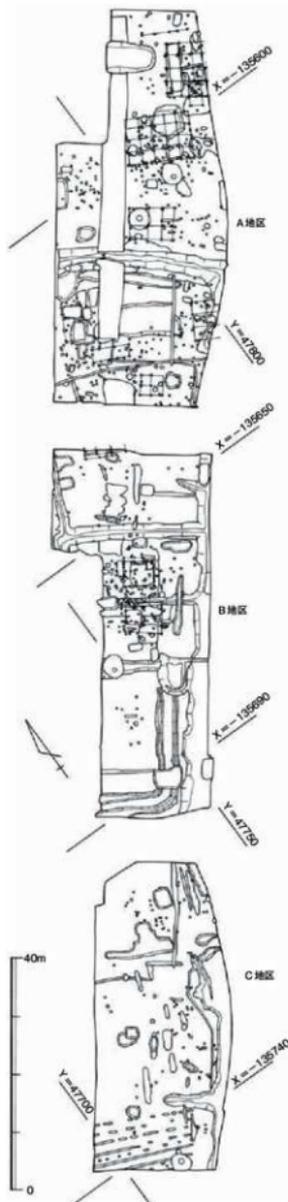
検出面の標高をみると、A地区の北東部が最も高く、その標高は6.70mを測る。一方、C地区の南東部が最も低く、その標高は6.30mを測る。その比高差は40cmである。特にこの差は、A地区とB地区の境で顕著に認められる。B地区とC地区の検出面の標高はほぼ同じである。以下、各層序について概観する。

盛土層は、B地区とC地区の西側で認められる。旧耕作土層は、A地区からC地区の全域で認められる層で、本発掘調査が行なわれる数年前まで水田として機能していた層である。工事の関係で、C地区の一部ではすでに削平されていた。

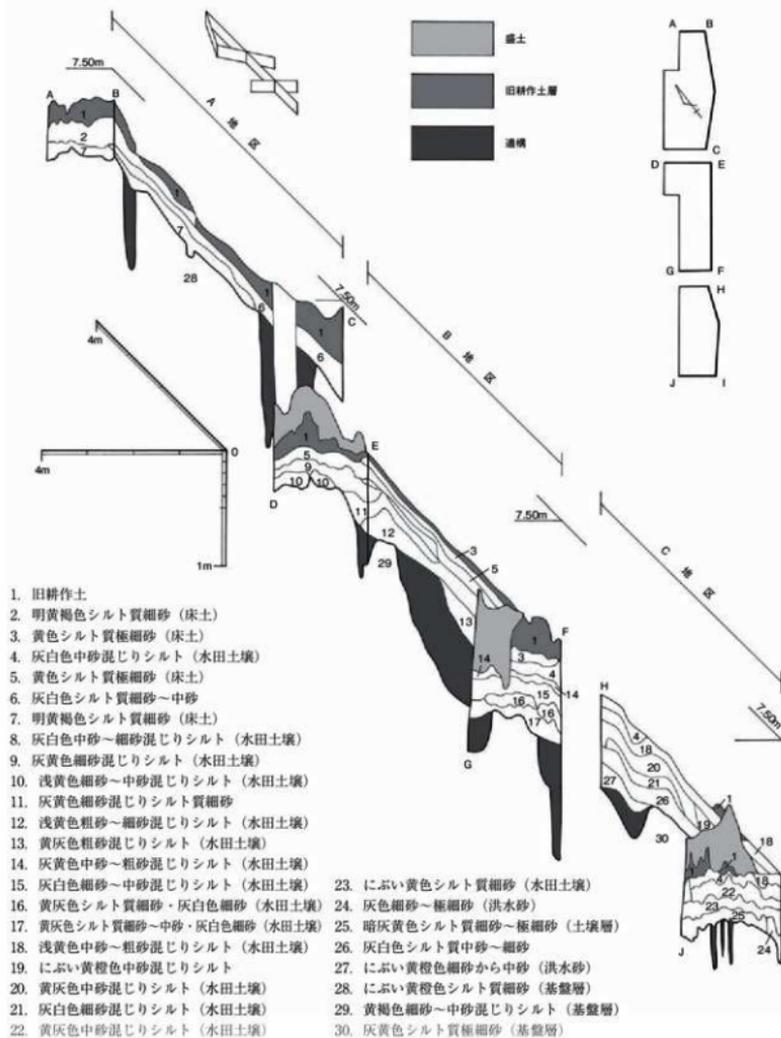
床土層は、旧耕作土層とセットとなる層で、2層・3層・5層・7層が該当する。A地区からC地区の全域で認められた。この層自体は、以前水田土壌層であったもので、上層が耕作土となった結果、床土層となったものである。

水田土壌層は、4層・8層・10層・12層~18層・20層~23層が該当する。A地区からC地区の全域で認められた。基本的に、洪水に起因する堆積層で、水田土壌→埋没→水田土壌のターンが繰返され結果と考えられる。水田土壌層を詳細に観察すると、上記の層の多くはさらに細分でき、上記の変化が多く繰り返されたものと考えられる。これらの層から出土した土器の時期、および検出遺構の時期から判断して、中世以降に形成されたものと判断される。

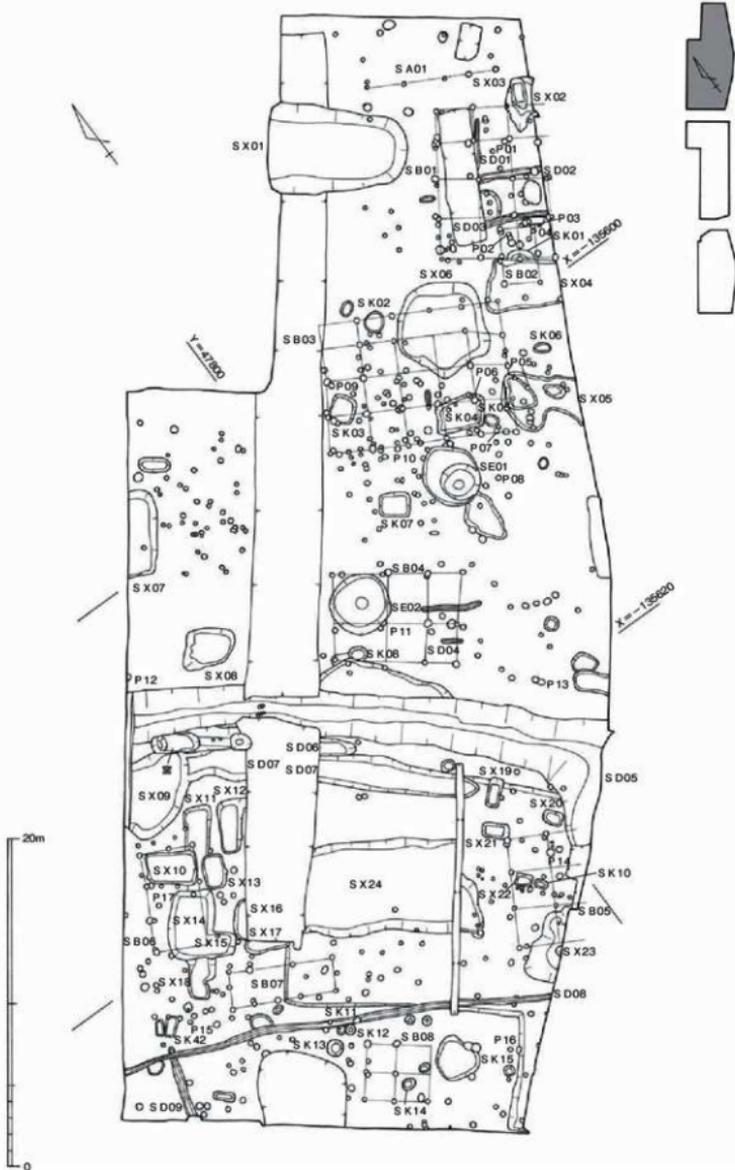
洪水層は、24層と27層の2層で、C地区に限られる。調査地の東側には旧河道が推定され、微凹地となっていたものと考



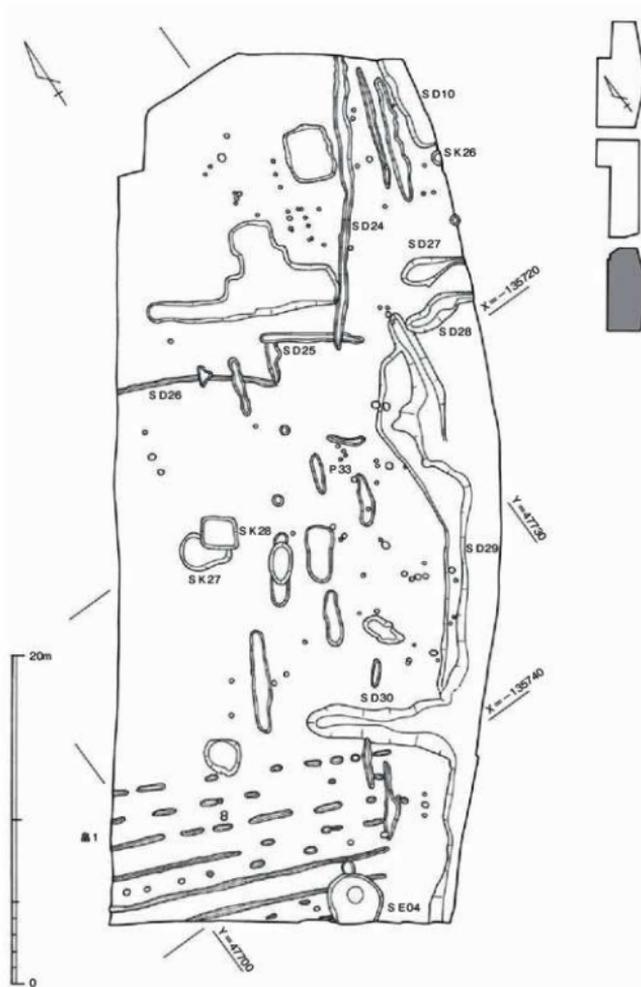
第15図 北地区平面図



第16図 北地区 基本土層図



第177図 A地区平面図



第19図 C地区平面図

えられる。この微凹地を中心に堆積した層で、水田土壌化されなかったものと考えられる。

土壌層は、25層の1層に限られる。洪水に起因する層である。

基盤層は、洪水堆積による層である。調査地は完新世段丘崖下の氾濫原面となっており、この氾濫原面に堆積した層で、微高地を形成していたものと考えられる。極細砂へ中砂を基本とする層である。検出遺構の時期から判断して、中世以前に形成された層と考えられる。

3. 調査の成果

(1) はじめに

当地区においては、掘立柱建物跡・柱穴・溝・井戸・窓・土坑・不明遺構・畚を検出している(第15図)。特に、A地区(第17図:写真図版4)・B地区(第18図:写真図版5)に掘立柱建物跡・柱穴等が集中する傾向にあり、C地区(第19図:写真図版6)は遺構の数が少ない傾向にある。

(2) 掘立柱建物跡

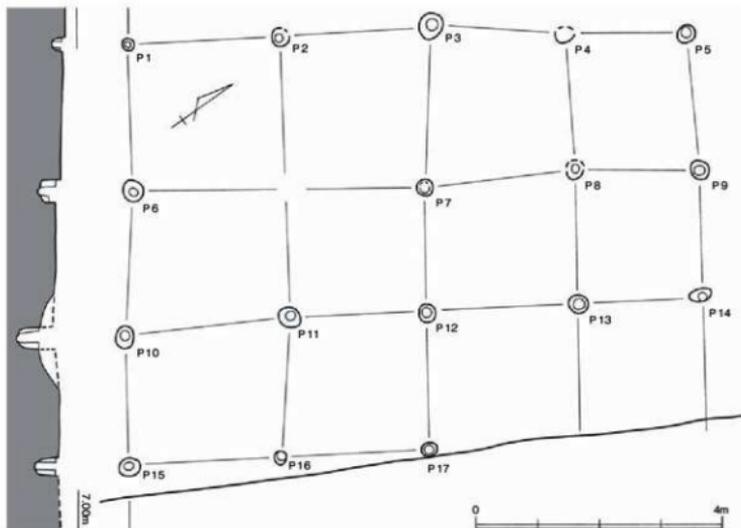
12棟(SB01～SB12)検出した。

SB01(写真図版7)

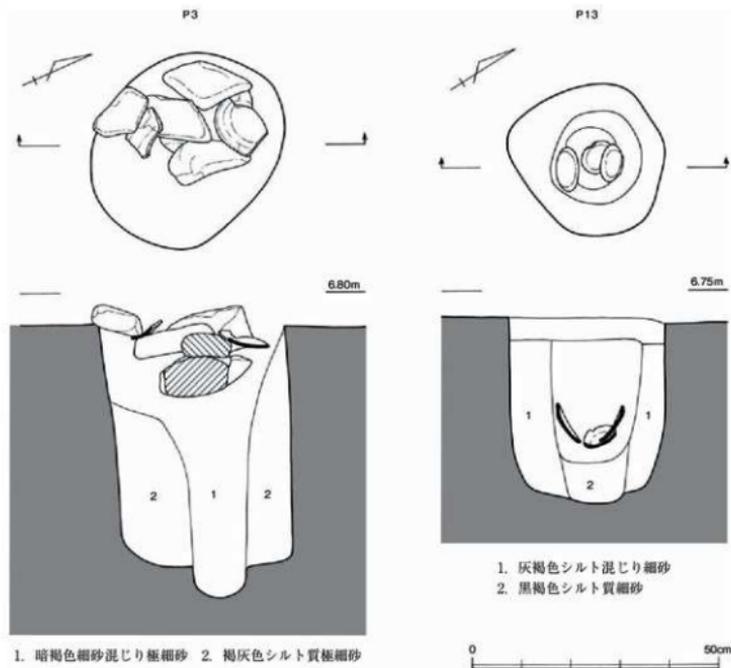
概要 A地区北部で検出された。SB03の北東側に位置する(第17図)。また、SB02とは一部平面的に重複するが、両者の前後関係は調査では明らかにできなかった。3間×4間の竪柱建物であるが、北東隅の2穴を欠く(第20図)。北東-南西方向に棟軸を取り、北西桁行(P1-P5)を基準とした棟軸方向はN34°Eを示す。建物の規模は、南西梁行(P1-P15)で6.35m、北西桁行(P1-P5)で9.05mを測り、両者から復元される面積は57.46㎡である。

柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は20cm～38cmを測る。検出面からの深さは18cm～65cmである。

なお、P3・P13内からは、柱を抜いた後で土器が入られた状況を確認することができた(第21図)。P3では、柱抜き取り後、大半を埋め戻した後、礎とともに杯が置かれていた。また、P13では、柱抜き取り後、その底部付近に土師器の皿3個体(2～4)が置かれていた。この他、P17においても、土師器の甕(5)と埴(6～8)が柱抜き取り後に置かれた様子を確認することができた。



第20図 SB01



第21図 S B01柱穴内土器出土状況

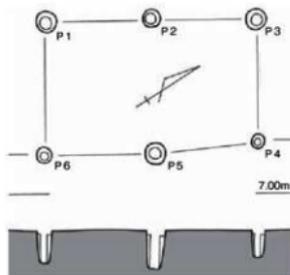
出土遺物 土師器の杯・皿・甕・埴が出土している(図版1)。杯は1の1個体である。轆轤成形によるが、全体的に粗い仕上げである。底部は回転系切りにより切り離されている。

皿は2～4の3個体出土している。いずれも轆轤成形によるもので、底部は2が回転系切り、3・4が回転ヘラ切りにより切り離されている。いずれも口縁部2段の回転ナデ調整により仕上げられている。

甕は5の1個体である。体部が叩き整形により仕上げられ、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。

埴は、6～8の3個体出土している。3個体ともP17から出土したもので、いずれも同タイプに分類される。口縁部はく字形に屈曲し、内外面ともハケ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。



第22図 S B02

S B02(写真図版7)

概要 A地区北東部で検出された(第17図)。S B01と一部平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはでき

第3章 調査の成果

なかった。1間×2間の側柱建物であるが、梁行の規模が南西側と北東側では異なる。北東—南西方向に棟軸をとり、その方向は、北西桁行（P1—P3）を基準とすると、N33°30′Eを示す。建物の規模は、北西桁行が3.45m、南西梁行（P1—P6）で2.15mを測り、両者から復元される面積は7.41m²と、大変小規模である。

柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は22cm～34cmを測る。検出面からの深さは44cm～63cmである。

出土遺物 P14から鉄釘（F2）が1点出土している（図版17）。頭部を欠き、4.8cm残存する。

時期 出土土器から、中世前半に位置付けられる。

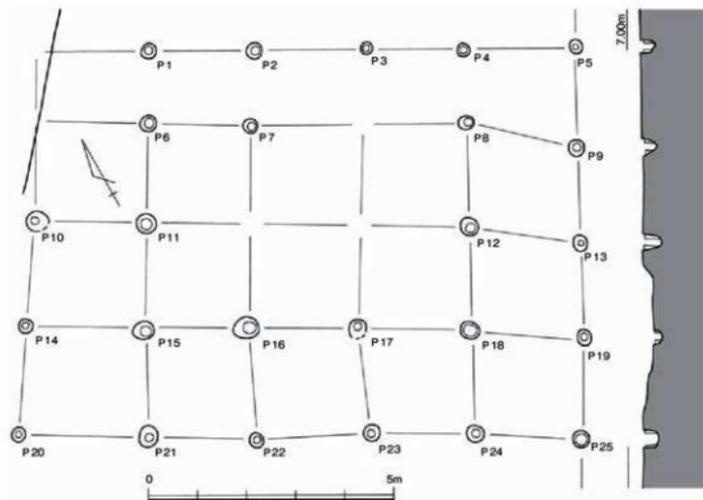
S B03(写真図版7)

概要 A地区北半部で検出された(第17図)。S B01・S B02の南西側に位置する。3間×5間の総柱建物で、北東側に1間幅の扉が付く。ただし、庇北西隅の1穴は、調査区外にあたるため、検出できなかった。また、建物中の数穴についても検出できなかった。

北東—南西方向に棟軸方向を取り、南東梁行（P5—P25）を基準とした棟軸方向はN28°Eを示す。建物の規模は、南西桁行（P20—P25）で16.10m、北東方向（P8—P24）で5.10mを測り、両者を基準とした建物の面積は82.11m²である。また、庇の幅は、建物の桁行と同じと推定される。奥行（P4—P8）は、1.15mである。

柱穴の平面形は、建物・庇ともに円形もしくは楕円形を呈し、その規模は20cm～32cmを測る。検出面からの深さは15cm～32cmである。ただし、相対的に庇の柱穴のほうが、小規模な傾向が認められる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。なお、P2から9と16が、P24から12・15・20が、P9から13・21・23が一括で出土している。



第23図 S B03

土師器は皿(9~11)と埴(12~14)が出土している(図版1)。皿は、軸轆成形によるもの(9・10)と手づくねによるもの(11)の2タイプが認められる。9は回転ヘラ切りにより、10は回転糸切りにより、それぞれ切り離されている。11は外面が指オサエにより、内面がナデ調整により仕上げられている。埴は、3個体とも同タイプに分類されるもので、口縁部はく字形をなすが、外面は指オサエ痕が顕著である。内外面ともハケ調整により仕上げられている。

須恵器は、東播系の碗が9個体(15~23)出土している。いずれも同タイプに分類されるもので、底部はわずかに平高台の痕跡が認められる。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

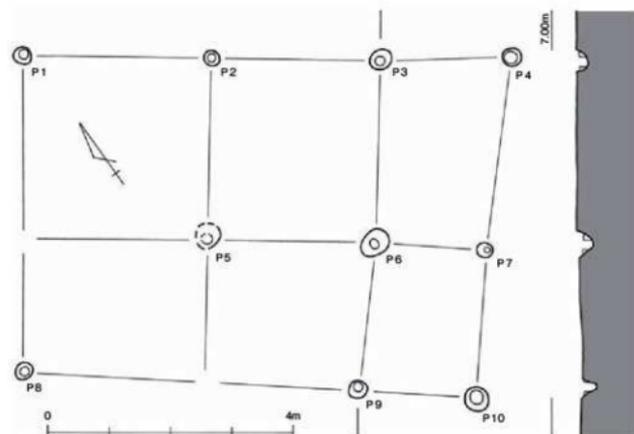
S B04(写真図版8)

概要 A地区中央部で検出された(第17図)。S B03の南側に位置する。2間×3間の総柱建物であるが、北西梁行の1穴を欠く(第24図)。北西—南東方向に棟軸方向を取り、北東桁行(P1—P4)の直角方向を基準とした棟軸方向はN34°Eを示す。建物の規模は、北西梁行(P1—P8)で5.15m、北東桁行で7.95mを測り、両者を基準とした建物の面積は40.94㎡である。

柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形を呈し、その規模は25cm~40cmを測る。検出面からの深さは20cm~25cmである。

出土遺物 出土していない。

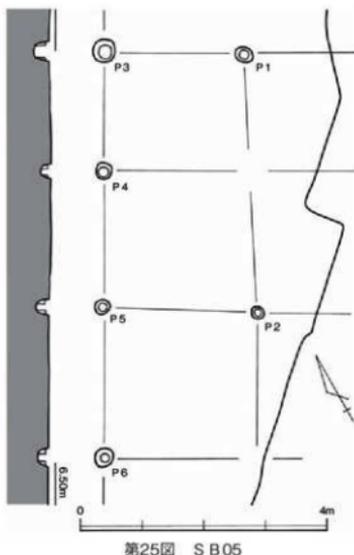
時期 建物棟軸方向から、中世後半に位置付けられる。



第24図 S B04

S B05(写真図版8)

概要 A地区南東部で検出された(第17図)。3間×2間以上の総柱建物と考えられるが、建物の東側大半は調査区外があった(第25図)。このため検出できたのは全体の1/2以下と考えられる。さらに、調査区内においてもいくつかの柱を検出することはできなかった。北東—南西方向に棟軸をとり、その方向は、北西



桁行 (P3-P6) を基準とすると、 $N29^{\circ} E$ を示す。建物全体の規模を明らかにすることはできないが、北西桁行で6.60mを測る。

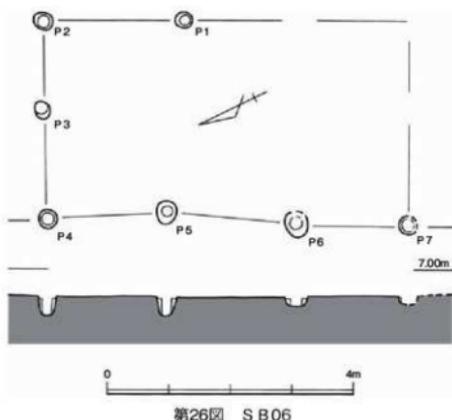
柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は20cm~36cmを測る。検出面からの深さは16cm~24cmである。

出土遺物 出土していない。

時期 建物棟軸方向から、中世前半に位置付けられる。

SB06(写真図版8)

概要 A地区南西部で検出された(第17図)。SB07の北西側に位置する。2間×3間の側柱建物であるが、SX14・SX15と切り合い関係にあり、南部の3穴を欠く(第26図)。北東-南西方向に棟軸方向をとり、北東桁行 (P2-P4) の直角方向を基準とした棟軸方向は $N27^{\circ} 30' E$ を示す。建物の規模は、北東梁行で3.30m、北西桁行 (P4-P7) で5.85mを測り、両者を基準とした建物の面積は19.30㎡である。



柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は25cm~37cmを測る。検出面からの深さは13cm~33cmである。

出土遺物 出土していない。

時期 建物の棟軸方向から、中世前半に位置付けられる。

SB07(写真図版8)

概要 A地区南部中央、SB08の北西側に位置する(第17図)。1間×4間の側柱建物であるが、北東桁行は1穴を欠く(第27図)。北東-南西方向に棟軸方向を取り、南東梁行 (P4-P5) を基準とした棟軸方向は $N27^{\circ} E$ を示す。建物の規模は、

南東梁行で2.00m、南西桁行 (P5-P9) で5.30mを測り、両者から復元される面積は10.60㎡である。

柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は25cm~40cmを測る。検出面からの深さは15cm~17cmである。

出土遺物 出土していない。

時期 建物の棟軸方向から、中世前半に位置付けられる。

SB08

概要 A地区南端部中央に位置する(第17図)。2間×2間の総柱建物であるが、南東桁行の2穴を欠く(第28図)。北東—南西方向に棟軸方向を取り、北西桁行(P1—P5)を基準とした棟軸方向は、 $N40^{\circ}E$ を示す。その規模は、北西桁行で3.45m、南西梁行(P5—P7)で3.85mを測り、両者から復元される面積は13.28 m^2 である。

柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は25cm~35cmを測る。検出面からの深さは15cm~30cmである。

出土遺物 出土していない。

時期 建物の棟軸方向から、中世後半に位置付けられる。

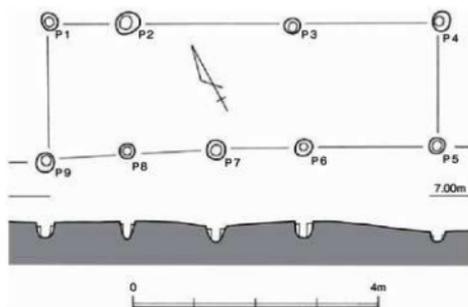
SB09

概要 B地区北端部中央に位置する(第18図)。SB10と平面的に重複するが、両者の前後関係は調査では明らかにできなかった。建物の大半は調査区外に拡がり、検出できたのは直列する4穴のみである(第29図)。その長さは6.85mを測る。また、この直角方向を基準とした棟軸方向は $N30^{\circ}E$ を示す。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は15cm~32cmを測る。検出面からの深さは10cm~53cmである。

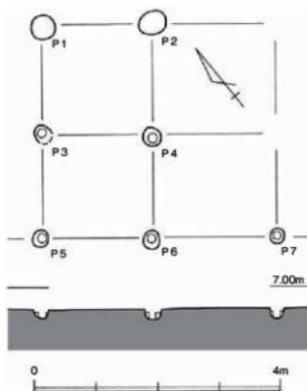
出土遺物 須恵器の椀(26)がP4から出土している(図版1)。

東播系の椀で、底部は平高台の痕跡が認められない。

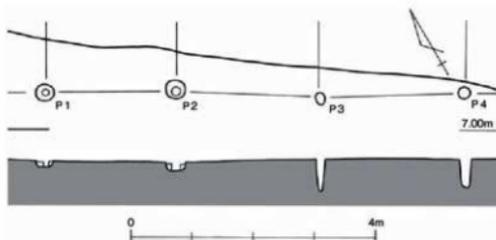
時期 出土土器から、中世前半に位置付けられる。



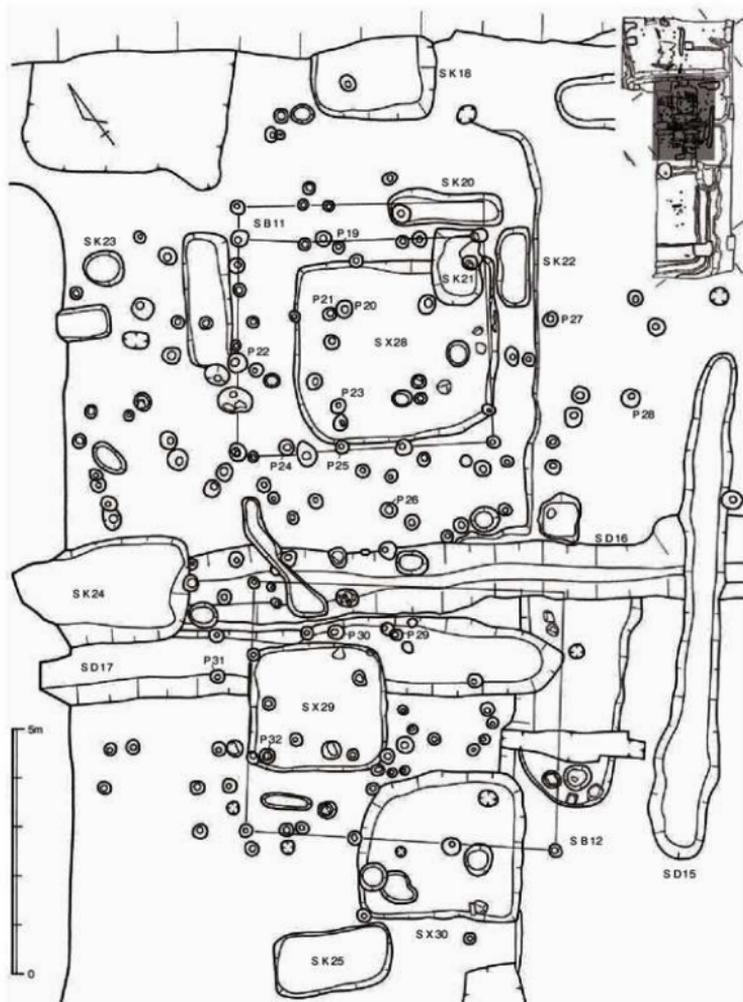
第27図 SB07



第28図 SB08



第29図 SB09



第30図 B地区中央部掘立柱建物跡・柱穴群

S B10

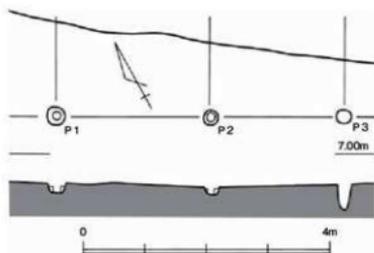
概要 B地区北端部中央に位置する(第30図)。S B09と平面的に重複するが、両者の前後関係は調査では明らかでできなかった。建物の大半は調査区外に拡がり、検出できたのは直列する3穴のみである(第31図)。その長さは4.70mを測り、この直角方向を基準とした棟軸方向はN29° Eを示す。その規模は23cm～

30cmを測る。

柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、検出面からの深さは10cm~40cmである。

出土遺物 出土していない。

時期 建物の棟軸方向から中世前半に位置付けられる。



第31図 SB10

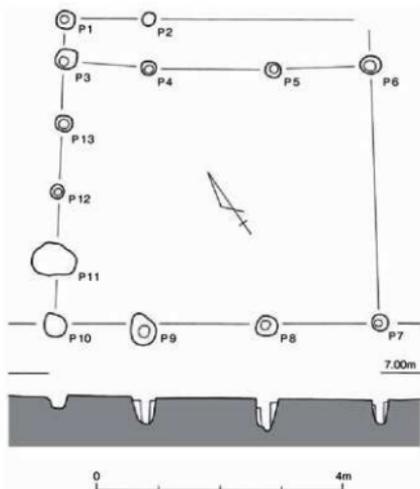
SB11

概要 B地区中央部に位置する(第30図)。3間×4

間の側柱建物で、北東側に1間幅の庇が付く。但し、北東北東側の3穴と庇北東側の2穴を欠く。建物の規模は、南西側(P7-P10)で5.25m、北西側(P3-P10)で4.30mを測り、両者を基準とした建物の面積は22.57㎡である。また、庇の幅(P1-P3)は、1.70mである。建物北西側(P1-P10)を基準とした棟軸方向はN36°Eを示す。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は22cm~42cmを測る。検出面からの深さは17cm~53cmである。

出土遺物 土師器の皿(30)がP3から出土している(図版1)。手づくね成形によるもので、口縁部は横ナゲ調整により仕上げられ、体部との境は段をなしている。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。



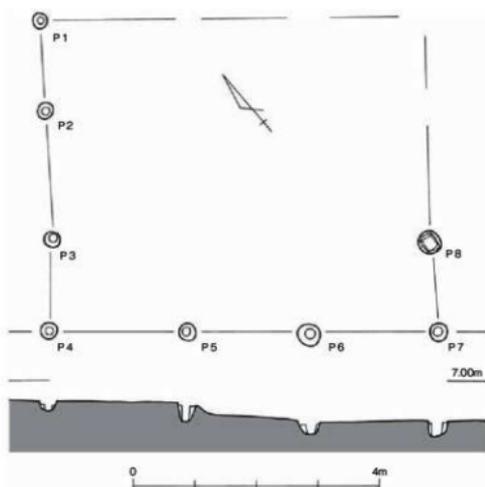
第32図 SB11

SB12

概要 B地区中央部、SB11の南側に位置する(第30図)。3間×3間の側柱建物であるが、北東桁行から南東梁行にかけての4穴を欠く(第33図)。建物の規模は、南西桁行(P4-P7)で6.30m、北西梁行(P1-P4)で5.10mを測り、両者を基準とした建物の面積は32.13㎡である。また、北西梁行を基準とした棟軸方向はN39°Eを示す。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その規模は24cm~37cmを測る。検出面からの深さは15cm~32cmである。また、P8においては、柱の基礎となる平板な石が置かれていた。

出土遺物 出土していない。

時期 建物の棟軸方向から、中世後半に位置付けられる。



第33図 S B 12

時期 出土土器から、中世前半に位置付けられる。

(2) 柱穴

建物にならなかった柱穴のなかで、良好な遺物を出土したものがある。これらの柱穴から出土した遺物を中心に報告する。

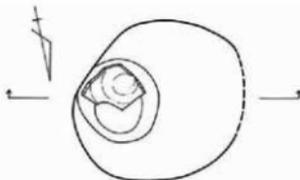
P 01

概要 A地区北部で検出された(第17図)。S B 01とは平面的に重複し、S D 01の東側、S D 02の北側に位置する。

出土遺物 土師器の杯(29:図版1)と把手(33)が出土しているが、33の把手については小片のため固化できなかった。杯は軸轆成形によるもので、底部は回転糸切りにより切り離され、体部～口縁部は回転ナゲ調整により仕上げられている。

P 02

概要 A地区北部で検出された(第17図)。S B 02とは平面的に重複し、S D 03の南側、S X 04の北側に位置する。



出土遺物 須恵器の椀2個体(27・28)が出土している(図版1)。2個体とも東播系に分類されるもので、体部から口縁部にかけて残存している。いずれも内湾傾向にある。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

P 03

概要 A地区北部に位置する(第17図)。S B 01と平面的に重複するが、調査では前後関係は明らかにできなかった。また、他の柱穴と切り合い関係にあり、これに切られている。柱穴内からは須恵器椀(37)が出土している(第34図)。出土状況から、柱抜き取り後、ある程度埋められた段階で入れられたものと判断される。

1. オリーブ褐色シルト混じり細砂
2. 黄褐色シルト混じり細砂



第34図 P 03 土器出土状況

出土遺物 須恵器の椀(37)が出土している(図版2)。東播系に分類されるもので、底部にわずかに平臺の痕跡が認められる。全体的に磨滅が著しく、調整を観察することはできない。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

P04

概要 A地区北部に位置する(第17図)。P03の南東側、S B02の北東隅(P4)の東側に位置する。

出土遺物 白磁碗1個体(32)が出土している(図版1)。口縁部のみの小片であるが、その形態からⅡ類に分類されるものである。

時期 出土土器から、中世前半に位置付けられる。

P05

概要 A地区中央部北側で検出された(第17図)。P06の東側、S K06の南側に位置する。

出土遺物 土師器の皿1個体(31)が出土している(図版1)。手づくね成形によるもので、最後に口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、中世前半に位置付けられる。

P06

概要 A地区中央部北側で検出された(第17図)。P05の西側に位置する。S K04と平面的に重複し、S K04を切っている。

出土遺物 須恵器の埴鉢(24)と土師器の羽釜(25)が出土している(図版1)。埴鉢は、口縁部のみの残存で、断面は方形に近い。羽釜は鈔のみ残存する。鈔の幅は3.0cmである。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。

P07

概要 A地区中央部で検出された(第17図)。S K05の南側に位置し、S B03の南側桁行ライン上にあたる。

出土遺物 須恵器の椀(35)が出土している(図版2)。東播系の椀で、底部のみ残存する。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

P08

概要 A地区中央部で検出された(第17図)。S E01の東側に位置する。

出土遺物 須恵器の椀(34)が出土している(図版2)。東播系の椀で、ほぼ完存する。内湾する体部に対して口縁部が顕著に外反している。底部は回転糸切りにより切り離されている。全体的に粗い仕上げである。

時期 出土土器から、中世前半に位置付けられる。

P09

概要 A地区中央部で検出された(第17図)。S K03の北側に位置する。また、S B03-P10と切り合い関係にあり、P10を切っている。

出土遺物 土師器の埴(43)が出土している(図版2)。口縁部片の小片で、く字形に屈曲している。口縁部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、中世前半に位置付けられる。

第3章 調査の成果

P10

概要 A地区中央部で検出された(第17図)。S E01の北西側に位置し、S B03の南側桁行ラインと一致する。

出土遺物 土師器の皿(42)が出土している(図版2)。全体的に磨減が著しいが、手づくねにより成形されている。

時期 出土土器から、中世に位置付けられる。

P11

概要 A地区中央部で検出された(第17図)。S B04と平面的に重複する。S E02の南東側に隣接し、S E02に切られている。

出土遺物 須恵器の椀(38)が出土している(図版2)。東播系の椀で、底部は平高台の痕跡をとどめ、見込み部分が一段落ち込んでいる。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

P12

概要 A地区中央部西端で検出された(第17図)。本遺構の半分は調査区外に拡がり、検出できたのは約1/2に限られる。S D05の北側、S X08の西側に位置する。

出土遺物 土師器の埴(45)が出土している(図版2)。完形に復元できるもので、球形の体部にく字形の口縁部が付く。体部外面は叩き整形、内面はハケ調整後、口縁部内外面が指オサエにより仕上げられている。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

P13

概要 A地区中央部東側で検出された(第17図)。S D05の北側に位置する。

出土遺物 白磁の碗(44)が出土している(図版2)。Ⅳ類に分類される碗である。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

P14

概要 A地区南東部で検出された(第17図)。S X20の南側に位置し、S B05と平面的に重複するが、S B05との前後関係は不明である。

出土遺物 土師器の皿(41)が出土している(図版2)。全体的に手づくねにより成形され、最後に口縁部外面に弱いナデ調整が施されている。

時期 出土土器から、中世に位置付けられる。

P15

概要 A地区南西部で検出された(第17図)。S B07の南西側、S D08の北側、S X16の南側に位置する。

出土遺物 須恵器の埴鉢(40)が出土している(図版2)。埴鉢は、口縁部のみの残存で、端部は上方に拡張されている。

時期 出土土器から、中世前半に位置付けられる。

P16

概要 A地区南東部で検出された(第17図)。SK15の北側に位置する。

出土遺物 須恵器の椀(39)が出土している(図版2)。口縁部の小片で、杯の可能性も考えられる。内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。

P17

概要 A地区南西部で検出された(第17図)。SX10の南西隅に近接する。また、SB06-P5の東側に接している。

出土遺物 須恵器の椀(36)が出土している(図版2)。東播系の椀で、底部を中心に残存する。底部はわずかに平高台の痕跡をとどめている。

時期 出土土器から、第III期に位置付けられる。

P18

概要 B地区北西隅で検出された(第18図)。SB10の南西、SX25の東側に位置する。

出土遺物 須恵器の杯B(51)が出土している(図版2)。底部から体部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、奈良時代に位置付けられる。

P19

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。SB11-P4の東側、SX28の北側に位置する。SB11と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。

出土遺物 土師器の皿(54)が出土している(図版2)。全体的に手づくにより成形され、口縁部は横ナゲ調整により仕上げられている。この結果、口縁部は外反傾向にある。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

P20

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。P19の南側に位置する。P21と切り合い関係にあり、P21を切っている。また、SB11・SX28と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版2)。

土師器は、4個体(46~49)の皿が出土している。いずれも手づくねにより成形され、口縁部は横ナゲ調整により仕上げられている。特に、47と48は同タイプに分類されるもので、内湾する体部に対して口縁部が受け口状をなす。49は、タイプを異にし、底部から口縁部にかけて内湾し、口縁部は弱い横ナゲ調整により仕上げられている。

須恵器は、50の捏鉢1個体が出土している。外面は回転ナゲ調整により、内面はナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

P21

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。P19の南側に位置する。また、P20と切り合い関係にあり、P20に切られている。

出土遺物 土師器の皿(53)が出土している(図版2)。全体的に手づくにより成形され、口縁部は内外面とも弱い横ナデ調整により仕上げられている。全体的に歪みが顕著である。

時期 出土土器から、中世に位置付けられる。

P22

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。SX28の西側に位置し、SB11の西側梁行ライン上に位置する。

出土遺物 土師器の皿(55)が出土している(図版2)。全体的に手づくにより成形され、最後に内面全面と口縁部外面が横ナデ調整により仕上げられている。口縁部の横ナデ調整は、一周させた後上方へ引きあげている様子を観察することができた。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

P23

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。P25の北側に位置する。

出土遺物 土師器の皿(52)が出土している(図版2)。全体的に手づくにより成形され、内面はナデ調整により仕上げられている。内面に化粧土が塗布されている。全体的に歪みが顕著である。

時期 出土土器から、中世に位置付けられる。

P24

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。P25の西側に位置する。

出土遺物 土製の土鍾(63)が出土している(図版2)。紡錘形の土鍾で、ほぼ完存する。全長3.4cmを測り、径4mmの紐穴が穿たれている。最大径は1.3cmである。

時期 時期の特定は困難である。

P25

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。P23の南側、P24の東側に位置する。

出土遺物 土師器の皿が2個体(57・58)出土している(図版2)。2個体とも手づくにより成形されているが、形態・仕上げ方法が異なる。57は、最後に口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられ、内湾する体部に対して口縁部が受け口状をなしている。58は、底部から口縁部にかけて内湾傾向にあるが、内面のミナデ調整により仕上げられている。歪みが顕著である。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

P26

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。SD16の北側、P25の南東側に位置する。

出土遺物 須恵器の壺(65)が出土している(図版2)。体部のみが残存であるが、完存しないため、はそう

の可能性も考えられる。底部外面は回転ヘラ削りにより、他は回転ナデ調整により仕上げられている。体肩部には2条の沈線が施されている。

時期 出土土器から、古墳時代に位置付けられる。

P27

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。SK22の南東側、SX28の東側に位置する。

出土遺物 土師器の皿(56)が出土している(図版2)。手づくにより成形され、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。口縁部は受け口状を呈する。他に、鉄釘(F1)が出土している(図版17)。

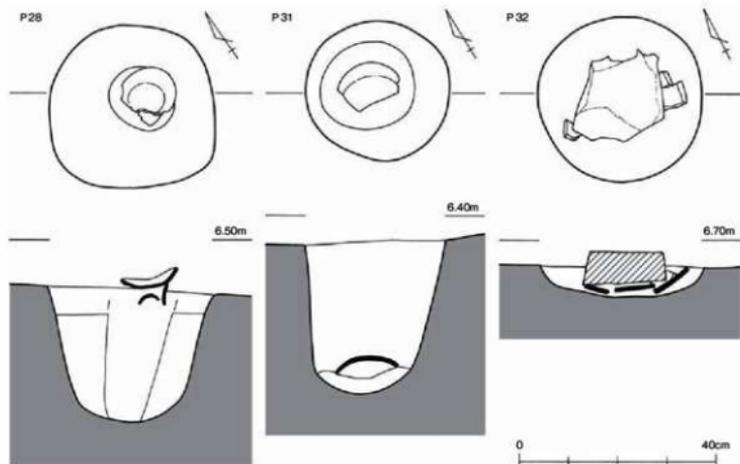
時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

P28

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。P27の南東側に位置する。

出土遺物 土師器の皿が2個体(59・60)出土している(図版2)。柱抜き取り後に置かれたものと考えられる(第35図)。59は、手づくねにより成形されているが、碗もしくは杯に近い形態をなす。最後に口縁部内外面が弱い横ナデ調整により仕上げられている。60も手づくね成形により仕上げられているが、横ナデ調整は施されず、内面のみナデ調整により仕上げられている。歪みが顕著である。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。



第35図 柱穴内土器出土状況

P29

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。P30の東側、SD16の南側に位置する。SD17と平面的に重複するが、前後関係を調査で明らかにすることはできなかった。

第3章 調査の成果

出土遺物 土師器の埴(61)と須恵器の埴鉢(62)が出土している(図版2)。61はいわゆる播丹型埴の口縁部の小片である。内外面とも横ナゲ調整により仕上げられている。62は、埴鉢の口縁部の小片で、端部を大きく上方に拡張させている。内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。

P30

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。P29の西側、SD16の南側に位置する。SD17と平面的に重複するが、前後関係を調査で明らかにすることはできなかった。

出土遺物 須恵器の椀(66)が出土している(図版2)。東播系の椀で口縁部を中心に残存する。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

P31

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。SX29の西側に位置する。SD17と平面的に重複するが、前後関係を調査で明らかにすることはできなかった。

出土遺物 土師器の皿(67)が出土している(図版2)。柱穴底部に置かれた状態で出土している(第35図)。手づくね成形によるもので、口縁部は内外とも横ナゲ調整により仕上げられ、内湾傾向にある。

時期 出土土器から、第Ⅴ期に位置付けられる。

P32

概要 B地区中央部で検出された(第30図)。SX29の南西隅に位置する。SX29とは平面的に重複するが、前後関係を調査で明らかにすることはできなかった。

出土遺物 土師器の皿(64)が出土している(図版2)。礎石の下に置かれた状態で出土している(第35図)。手づくね成形によるが、全体的に磨減が顕著である。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。

P33

概要 C地区中央部で検出された(第19図)。SD29の西側、SK26の北東側に位置する。

出土遺物 平瓦の小片(68)が出土している(図版2)。焼し焼成によるもので、凹面は板ナゲ、凸面はナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、中世に位置付けられる。

(3) 溝

30条 (SD01～SD30) 検出している。

SD01

概要 A地区北東部で検出した(第17図)。SB01と平面的に重複し、SB01を構成する柱穴P8と切り合い関係にあり、P8に切られている。北東-南西方向に直線的にのびる溝で、北東端は調査区内で収束し、南西端は後世の擾乱を受けている。検出した長さは3.0mで、検出面における幅は25cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmである。

出土遺物 時期を特定できるような遺物は出土していない。

時期 SD02と直交することから、第Ⅱ期に位置付けられる。

SD02

概要 A地区北東部で検出した(第17図)。SB01と平面的に重複し、SB01-P7と切り合い関係にあり、P7に切られている。北西-南東方向に直線的にのびる溝で、SD01とはほぼ直交し、SD03とはほぼ平行する。南東端は調査区外にのび、北西端は後世の擾乱を受けている。検出長は3.9mで、検出面における幅は40cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmである。

出土遺物 時期を特定できるような遺物は出土していない。

時期 SD03と平行することから、第Ⅱ期に位置付けられる。

SD03

概要 A地区北東部で検出した(第17図)。SB01と平面的に重複し、SB01を構成する柱穴P11と切り合い関係にあり、P11に切られている。北西-南東方向に直線的にのびる溝で、SD02とはほぼ平行する。南東端は調査区外にのび、北西端は後世の擾乱を受けている。検出した長さは3.9mで、検出面における幅は36cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。埋土は、灰黄褐色極細砂～細砂1層からなる。

出土遺物 須恵器の椀が2点(69・70)出土している(図版2)。いずれも底部片で、平高台の痕跡をとどめる。特に69は見込み部も顕著に落ち込む。いずれも回転糸切りにより切り離されている。

時期 出土土器から、第Ⅱ期に位置付けられる。

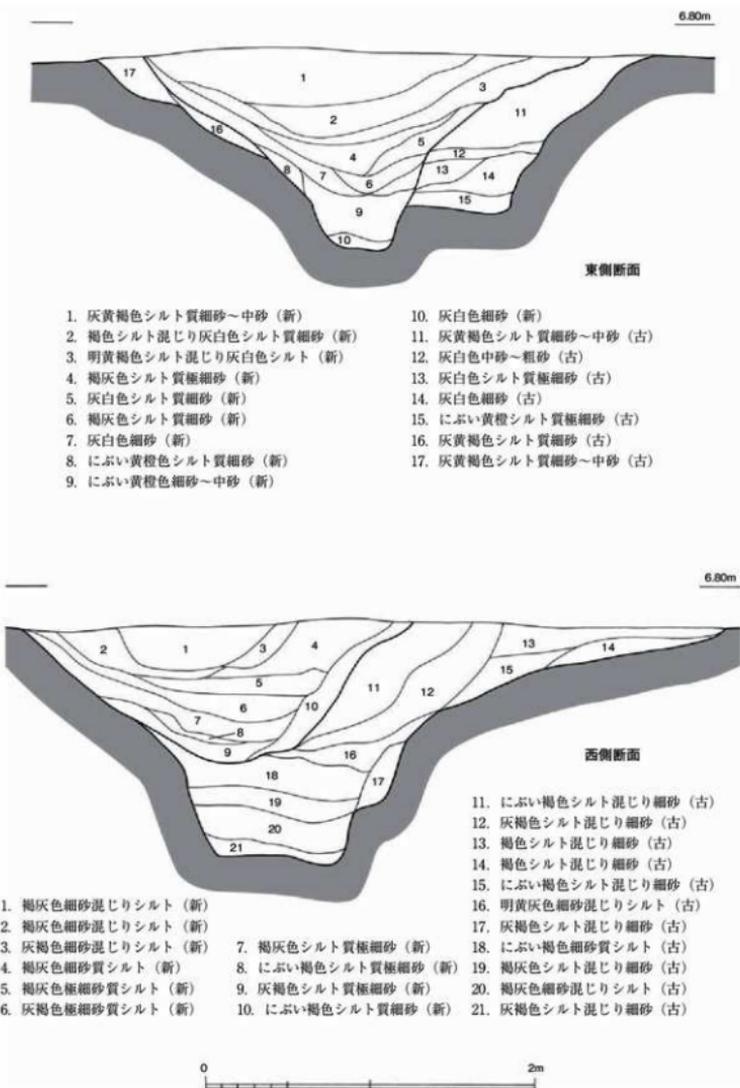
SD04

概要 A地区中央部で検出した(第17図)。SE02の南東側に位置する。東西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出した長さは1.24mで、検出面における幅は24cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは7cmである。埋土は、にぶい黄褐色細砂～シルト混じり極細砂1層からなる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。土師器は、壺の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面はハケ調整により仕上げられている。

須恵器は、椀の口縁部片と底部片(71)が出土している(図版2)。71は底部片で、底部は体部に粘土を貼り付け、わずかに平高台をなす。糸切りにより切り離されている。口縁部片は小片のため図化できなかった。

時期 出土土器から、第Ⅱ期に位置付けられる。



SD05

概要 A地区中央部やや南側で検出した(第17図)。東西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外に延びている。検出した長さは、29mである。なお、南東端では、南側肩部が直角に屈曲する傾向が認められる。当溝は、土層観察および出土土器から、大きく2時期の溝からなる。土層観察の結果(第36図)からは、一旦完全に埋没後、中心を南側にややずらして再掘削されている。当初の溝をSD05(古)、再掘削後をSD05(新)と呼称し、報告する。

SD05(古)は、検出面における幅は東側で3.42mを測り、西側では3.50m強を測る。横断面の形状は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、94cm～1.45mを測る。底部の標高は、東側で5.65m、西側で5.10mと、西側へ傾斜している。SD05(古)の埋土の特徴から、基本的に洪水砂により埋没したようである。特に下層(西側断面：19～21層)ではラミナが顕著に観察できる。

SD05(新)は、検出面における幅は東側で2.73mを測り、西側では2.36mを測る。横断面の形状は、V字形(東側)～U字形(西側)をなし、東側の底部はわずかに平坦となっている。最深部における検出面からの深さは、東側で1.21m、西側で85cmを測る。底部の標高は、東側で4.82m、西側で5.71mと、SD05(古)とは逆に、東側へ傾斜している。当溝は、下層から中層(東側断面：4～10層・西側断面：4～9層)にかけては、洪水砂により埋没し、上層(東側断面：1～3層・西側断面：1～3層)は人為的に埋め戻されている。

出土遺物 SD05(新)出土土器とSD05(古)出土土器に大きく分類できる。

SD05(新)からは、土師器・須恵器・丹波焼・備前焼・青磁・陶器が出土している(図版3)。

土師器は、皿(89)と埴(78～88)が出土している。89は、手づくね成形による。

埴は、播丹型埴(78～81)と羽釜形埴(82～88)の2タイプが出土している。播丹型埴は、口縁端部を外方につまみ出ナタイプと丸く肥厚させるタイプが認められる。また、79の体部内面は、基本的にはハケ調整により仕上げられるが、部分的に当具痕らしきものも観察できる。羽釜形埴は、突帯を貼り付けるタイプと、貼り付けないタイプ(82)に分類できる。このなかで、83と88は、形態等の特徴から、同一個体の可能性も考えられる。

須恵器は、鉢(90)と捏鉢(92)が出土している。90は、口縁端部を内側上方につまみあげるもので、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。捏鉢は、口縁部片(92)と底部片(91)が出土している。底部片は明確な平底をなし、回転糸切りにより切り離されている。

陶器は、天目碗の底部片(93)が出土している。底部は回転ヘラ削りにより仕上げられ、露胎している。

丹波焼は、底部片(95)と甕の体部片(98～100)が出土している。95は、底部外面がナデ調整、他は横ナデ調整により仕上げられている。

備前焼は、甕の口縁部片(94)が出土している。口縁部を大きく折り返し、玉縁状をなす。

青磁は、碗の底部片が2個体(96・97)出土している。143は同安窯産と考えられ、底部から高台にかけてはヘラ削りにより仕上げられている。96の底部、97の底部～高台を除いては軸がかかけられている。

SD05(古)からは、土師器・須恵器・丹波焼・備前焼・青磁・陶器が出土している(図版3・4)。

土師器は、皿(101)・高台付碗(102)・埴(103～105)が出土している。皿の101は、手づくね成形により、口縁部は内外面とも弱い横ナデ調整により仕上げられている。全体的に至みが顕著である。碗の102は、軸輪成形によるもので、高台も回転ナデにより貼付けられている。埴は3個体とも同じ羽釜型埴に分類されるものである。

第3章 調査の成果

須恵器は、椀(106・107)・捏鉢(108~110)・甕が出土しているが、甕は小片のため図化できなかった。椀は東播系に分類されるもので、107の底部片は平高台の底跡を残し、回転糸切りにより切り離されている。捏鉢は、いずれも口縁部を中心とした小片である。端部はいずれも肥厚しているが、形態を異にする。

丹波焼は、甕の底部片(111)と口縁部片(114)・体部片(124~126)が出土している。111は、底部外面がナゲ調整、他は横ナゲ調整により仕上げられている。114は、口縁部がN字状を呈するもので、内外面とも横ナゲ調整により仕上げられている。

備前焼は、甕の口縁部片が2個体(112・113)出土している。口縁部を大きく折り返し、玉縁状をなす。

陶器は、瀬戸・美濃産と考えられる天目碗(115)が出土している。軟質の胎土で、体部下半以外は軸がかいられている。

白磁は、碗(116~120)が出土している。いずれもIV類に分類されるものである。青磁は、碗(121~123)が出土している。123は、III類に分類されるものである。123は、底部内外面がヘラ削りにより仕上げられ、露胎している。

他に、鉄釘が1点(F3)出土している(図版17)。頭部・先端を欠き、5.9cm残存する。

時期 出土土器から、第VI期に位置付けられる。

S D06

概要 A地区中央部南側で検出した(第17図)。S D05の南側、S D07の北側に平行し、S D07に切られている。特に、S D07とは南西肩部を切られる形でほぼ平行する。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、南東端は調査区内で収束し、北西端は竪に切られている。検出した長さは10mで、検出面における幅は、S D07との関係から、その規模を明らかにすることは困難であるが、1.20m残存している。横断面は逆台形と推定され、最深部における検出面からの深さは34cmを測る。埋土は、洪水砂により埋没している(第37図)。

出土遺物 土師器・須恵器・白磁が出土している(図版2)。

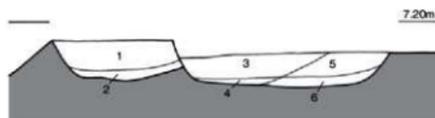
土師器は、皿(76・77)と埴(74・75)が出土している。皿は、形態的に杯に類似するもので、手づくね整形後、口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。他に、小片のため図化できなかったが、いわゆる京都系に分類される皿が出土している。

74と75はともに播丹型に分類されるもので、体部外面は平行叩きにより成形され、口縁部は内外面とも横ナゲ調整により仕上げられている。他に、外面が平行叩きにより仕上げられた体部片が出土している。

須恵器は、椀と捏鉢(73)が出土している。椀は、東播系の口縁片と底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。いずれも、13世紀代の特徴を示している。73は、口縁部を大きく肥厚させ、上方に拡張させている。

白磁は、碗のIV類碗の底部片(72)が出土している。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。



1. ぶい貴橙色シルト質極細砂 (S D06)
2. 褐灰色シルト質中砂 (S D06)
3. ぶい貴橙色極細砂 (S D07)
4. 灰黄褐色シルト質極細砂 (S D07)
5. ぶい貴橙色極細砂 (S D07)
6. 褐灰色シルト質極細砂 (S D07)



第37図 S D06・S D07

SD07

概要 A地区中央部南側で検出した(第17図)。SD06の南側に平行し、SD06を切っている。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、南東端は調査区内で収束し、北西端はSX09に繋がっている。検出した長さは17.70mで、検出面における幅は1.76mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは23cmである。埋土は、洪水砂により一端埋没後(5層・6層)、再び洪水砂(3層・4層)により埋没している(第37図)。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD06との切り合い関係から、第IV期に位置付けられる。

SD08

概要 A地区南端部で検出した(第17図)。SB08の北側に位置する。ほぼ北西-南東方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外へ延びている。また、SD09と切り合い関係にあり、SD09を切っている。検出した長さは26.20mで、検出面における幅は40cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。埋土は、黄褐色細砂混じりシルト1層からなる。

出土遺物 須恵器・土師器・白磁が出土している(図版4)。

須恵器は、椀(127~129)と埴鉢が出土している。椀は東播系に分類されるものであるが、それぞれタイプを異にする。127は高台が貼り付けられ、回転ナデ調整により仕上げられている。128は、平高台の痕跡をわずかにとどめるのに対して、129は明確な平高台を有し、見込みが明確に落ち込んでいる。埴鉢は図化できなかったが、平底の底部片が出土している。

土師器は、皿(130)と甕が出土している。130は手づくねにより成形され、横ナデ調整により仕上げられている。外面の一部にヘラナデが施されている。甕は図化できなかったが、体部片が出土しており、外面はハケ調整により仕上げられている。

白磁は、碗の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。

SD09

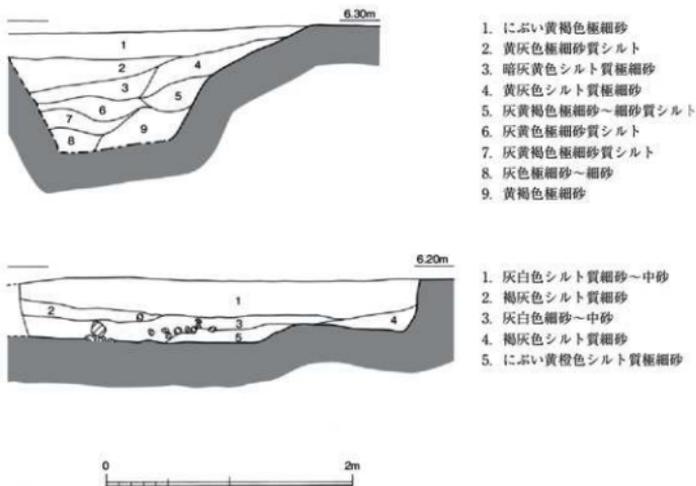
概要 A地区南西端で検出した(第17図)。南北方向にのびる溝で、北端は調査区内で収束し、南端は調査区外へ伸びている。ただし、その延長はB地区では検出されていない。SD08と切り合い関係にあり、SD08に切られている。検出した長さは4.30mで、検出面における幅は40cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmである。埋土は、褐灰色シルト質細砂1層からなる。

出土遺物 須恵器の椀(131)が出土している(図版4)。底部は平高台をなし、ヘラ切りにより切り離されている。体部は回転ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。

SD10

概要 B地区北部で検出した(第18図)。B地区の東壁全体に沿って、南北に延びる落ち込みを検出し、その延長はC地区の北東隅に続いて、東壁外へ逸れていく。C地区南半で再び現れる東壁沿いのSD10は、本来一連の水路であった可能性が高いが、SD10の部分は中世後半に再掘削されたようである。その痕跡



第38図 SD10

は現地表面にも残されており、旧河道状の大きな落ち込みになるものと考えられる。A地区側の北方向の延長は、東側へ逸れることが、現地表面の痕跡にも表れている。

B地区内で検出した長さは約62m、C地区は約6mで、調査区間の空白部分を含めると、75m前後の延長となる。ただし調査区内に現われているのは西側の肩部のみで、東肩は検出できていない。検出範囲内での最大幅は3.20mだが、本来の幅は不明である。

形状は、南北方向に沿って直線的に掘削されており、旧河道を利用していても、計画的な水路としての施工がうかがえる。B地区のSD16より北側では、肩部から1m以上の深さまで一気に掘り込まれ、下層にはラミナを伴う堆積が認められる（7層・8層）。一方、SD16以南では、深さ約50cmのところまでテラス状の平坦面が設けられ、さらに調査区外へ向かって一段深くなるようだが、詳細は不明である。テラス面には、傘大の直角礫～円礫を帯状に密集させ、石敷きとしているところがあり、洪水砂（3層）に覆われた部分が残ったものとみられる（第38図）。

この水路に対して、A地区のSD05も含めて、直角方向の溝が何本も取り付けしており、方形区画の屋敷地の東に面する水路という様相を呈している。

出土遺物 土器と木製品が出土している。

土器は、土師器・瓦質土器・須恵器・陶器・丹波焼・青磁・白磁・備前焼・瓦質土器・瓦が出土している（図版4～6）。

土師器は、杯（132）・皿（133～146）・碗（147）・甕（148）・壺（149～154・156・157）が出土している。杯は、軸轆成形によるもので、底部は回転系切りに切り離されている。また、体部～口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

皿はいずれも手づくね成形によるものである。調整手法の違いから、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられるもの（133～143）と横ナデ調整が施されないもの（144～146）に分類できる。前者の横ナデ

調整は、しっかりしたものではなく、わずかに施す程度のもので大半である。このなかで、134と136は強い横ナデ調整が加えられ、136は体部との境に段が形成されている。このほか、146は、口径に対して浅いタイプで、形態的に他と大きく特徴を異にする。

椀は、147の1個体で、軸輪成形により成形されている。横ナデにより高台が貼付けられている。

甕は148の1個体である。外面はハケ、内面は体部がナデ、口縁部が横ナデにより仕上げられている。

埴は、播丹型（149～151）と羽釜型（152～154・156・157）に分類できる。播丹型の151の体部内面は当具痕がナデによって消されている。152は、口縁部下に断面方形の突帯が貼付けられている。突帯の上下をつまむようにした強い横ナデにより仕上げられ、この結果、突帯外面が上下からの圧により沈線状をなす。156は、いわゆる羽釜型の変形と考えられる。体部外面は平行叩きにより成形され、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。157は、口縁部が受け口状をなすもので、当遺跡でも他に出土は認められない。体部外面は、叩き成形後上半部がハケ調整により仕上げられている。また、底部は叩き成形後ヘラナデ調整が施されている。内面に煮炊き痕が認められる。

瓦質土器は、155の埴1個体である。口縁部下に幅1.4cmの鐙が横ナデにより貼付けられ、体部はナデ調整により仕上げられている。

須恵器は、椀（158～162）・円面硯（163）・鉢（164）・捏鉢（165～177）・甕（193）が出土している。ただし、甕については小片のため図化できなかつたが、外面に鶴丸文が認められる（写真図版22）。

椀は平高台系の椀（158～161）と高台付椀（162）に分類できる。前者は、同じ平高台でも特徴を異にする。ただし、いずれも糸切りにより切り離されている。後者の162は、軸輪により体部を成形後、高台が横ナデにより貼り付けられている。

円面硯の163は、脚部と口縁部の境のみが残存する。外面は2条の断面三角形の突帯をなす。脚部は長方形透の一部が認められる。

鉢は164の1個体が出土している。口縁部を大きく内側に折り返し、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部内面がナデにより仕上げられている。底部は回転糸切りにより切り離されている。

捏鉢は、13個体出土している。①端部を上方につまみあげ外面が弧状をなすタイプ、②端部を肥厚させ内側を内湾させるタイプ、③端部を拡張させ外端面をもつタイプと、口縁部に形態差が認められる。体部まで残存する個体の多くは内面の使用痕が顕著である。

陶器は、瀬戸・美濃系（178～180・194）が出土している。178は、鉢の底部片と考えられる。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転ヘラ削りが施されている。内面に軸が部分的に認められる。179は、皿の底部片である。回転ヘラ切りにより切り離された後、高台が貼り付けられ、ヘラ削りにより成形されている。底部外面を除いて軸がかかけられている。180は小壺で、体部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、軸がかかけられている。底部は露胎し、板ナデにより仕上げられている。194は小片のため図化できなかつたが、卸皿の底部片で、内面は格子状にヘラにより卸し目が刻まれている（写真図版22）。

丹波焼は、捏鉢（187・185）と甕（188・186）が出土している。186の口縁部断面はN字形をなし、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部は内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。187は、体部が内外面ともナデ調整により仕上げられ、口縁部が内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。185も捏鉢であるが、一般的な丹波焼とは質感が異なり、色調等は須恵器に近い。甕の188は底部の小片であるが、底部は板ナデにより仕上げられ、窯壁の軸着が認められる。

第3章 調査の成果

青磁は、181と182の2個体が出土している。181は、口縁部を中心とした個体で、外面に錆のない蓮弁が施されている。182も底部片であるが、体部外面に蓮弁がわずかに認められる。

白磁は、碗の底部片が2点(183・184)出土している。183はIV類碗の底部片である。

備前焼は、鉢鉢が1点(189)出土している。口縁端部は、口縁部に対して直交する端面を有し、わずかに外方につまみ出されている。内面には使用痕が認められる。

瓦質土器は、190の1点が出土している。風炉の口縁部と考えられ、口縁部外面には雷文が刻まれ、頭部には断面薄錐形の突帯が認められる。また、肩部には、焼成前にヘラにより施された透かしの一部が認められる。

瓦は、平瓦(191・192)と丸瓦が出土している。いずれも須恵質で、凹面には布目が認められる。凸面は、ヘラナゲにより仕上げられている。丸瓦は図化できなかったが、凹面には糸切り痕が認められる。

木製品は、W7の椀が1点出土している(図版19)。ほぼ完形に近い状態で出土している。内面に赤漆が、外面に黒漆が塗られているが、その遺存状況はよくない。外面には黒漆の上に赤漆で文様が上塗りされている。ただし、文様の遺存状況は良好ではない。口径16.2cm、器高8.0cm、底径8.7cm、高台高1.3cm。

時期 出土土器から、第VI期に位置付けられる。

SD11

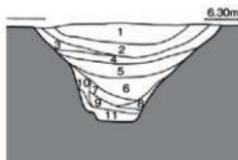
概要 B地区の北東隅に近く、SD10の西側から内側へ、直角から約20°北に傾いた方向に、短く突き出したような掘り込みである(第18図)。形状は長さ4.00m、底辺2.20mの長三角形で、SD10の溝底から三角形の頂点に向かって、深く掘り込まれている。中央付近での検出面からの深さは80cmで、横断面は逆台形を呈している。断面の下半には掘り直しの痕跡が認められるが、最終的には緩やかに埋積している(第39図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版6)。

土師器は、杯と埴が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯は底部片が出土し、糸切りにより切り離されている。埴は体部片が出土し、外面は叩き整形により仕上げられている。

須恵器は、東播系の椀(195～197)が出土している。195と197は平高台の椀で、糸切りにより切り離されている。197は、明確な平高台を有するのに対して、195はわずかに平高台の痕跡をとどめる程度である。196は高台付の椀で、高台を中心に残存する。

時期 出土土器から、第III期に位置付けられる。



1. 灰黄褐色シルト質極細砂
2. にぶい黄褐色極細砂
3. 灰黄褐色極細砂質シルト
4. 灰黄褐色極細砂質シルト
5. 暗灰黄色極細砂混じりシルト
6. にぶい黄褐色シルト質極細砂
7. 灰黄褐色シルト質極細砂～粗砂
8. 灰黄褐色シルト質極細砂
9. 暗灰褐色極細砂～粗砂
10. 灰黄褐色シルト質極細砂
11. 灰黄褐色極細砂

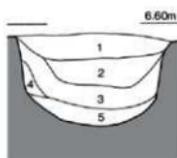


第39図 SD11

SD12

概要 B地区の北西隅から南に向かって直線的に延び、SD14と約100°の角度で接続する(第18図)。検出した長さは13.00mで、検出面における幅は1.20mである。横断面はU字形をなし、検出面からの深さは75cmである。埋土は緩やかに堆積しているが、上半部(1層・2層)は埋め戻されたようである(第40図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版6・7)。



1. 灰黄褐色シルト質細砂
2. 灰黄褐色シルト質細砂
3. 灰黄褐色シルト質中砂
4. 灰黄褐色シルト質中砂
5. 灰白色シルト質極細砂



第40図 SD12

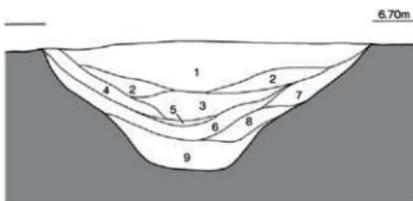
SD13

概要 B地区北部、SB09の南東側、SK17の西側、SD14の北側に位置する(第18図)。

他の遺構との切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。ほぼ南北方向にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出した長さは7mで、検出面における幅は1.02mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmである。埋土は、上から、灰白色シルト質中砂・灰白色シルト質細砂の2層からなる。

出土遺物 時期を特定できる土器は出土していない。

時期 溝の方向性から、中世後半に位置付けられる。



1. 灰黄褐色シルト質中砂
2. にぶい黄褐色シルト質細砂
3. 灰黄色シルト質中砂～細砂
4. 褐灰色シルト質細砂～極細砂
5. 灰黄褐色シルト質細砂
6. 褐灰色中砂～細砂
7. にぶい黄褐色シルト質細砂～中砂
8. 褐灰色シルト混じり細砂
9. 灰白色シルト質極細砂



第41図 SD14

SD14

概要 B地区の北端から14～15m南のあたりを東西方向に、直線的に延びており、東端はSD10と直角に接続する(第18図)。西端は、調査区の西壁付近で直角に南へ折れ、調査区外に続く。そのコーナーのやや東寄りSD12が接続するため、交差点は食い違いを見せている。

東西方向の長さは、西端から東端の上端までが24.80m、下端まで含めると26.20mとなる。検出面における幅は2.66mである。横断面は当初、大きく開いた逆台形で、検出面からの深さが1.05mであったが、約80cmの深さまで埋まった(9層)後、長期間安定していたようである。洪水砂(6層・8層)で徐々に埋まった後も、南側から流れ込んだ炭層(4層)が、生活の痕跡を物語っている。溝底のレベルはほぼ一定で、標高5.5m前後である(第41図)。

土器は、皿(198・199)と底部片が出土している。底部片は小片のため図化できなかったが、比較的大型の底部で、碗もしくは杯の底部の可能性が考えられる。糸切りにより切り離されている。198と199は、手づくね成形によるものである。ただし、198は磨滅が顕著で、調整は観察できない。199は、歪みが顕著である。

須恵器は、碗(200)・鉢(201)・握鉢・甕が出土しているが、握鉢と甕は小片のため図化できなかった。握鉢は、その形態は12世紀代の特徴を示している。甕は体部片が出土している。碗は、東播系の碗で、底部がわずかに平高台の痕跡をとどめる。鉢は、口縁端部を内側つまみあげている。

時期 出土土器から、第VI期に位置付けられる。

第3章 調査の成果

西端で南に折れたあとの南北方向の長さは、内側のコーナーから測ると1m余りを検出したに過ぎず、またその内側の肩部が崩れているためか、形状が不明瞭である。SD14によって区画された敷地の東西方向の延長は、溝の両側とも約22mである。

出土遺物 土師器・須恵器・瓦質土器・備前焼・瓦と鉄釘が出土している(図版7・8)。

土師器は、皿(203~215)・塀(216~225)・不明品(226)が出土している。

皿は、大きく数タイプに分類できるが、轆轤成形による202を除いては、手づくにね成形によっている。203は、深い杯もしくは椀形をなし、口縁部は横ナゲ調整により仕上げられている。202は内外面とも横ナゲ調整により仕上げられている。204~210・212~214は、口縁部を横ナゲ調整により仕上げた結果、内湾する体部に対して口縁部との境が明確である。212は、口縁部を横ナゲ調整により仕上げるが、体部と口縁部との境が不明瞭である。215は、手づくね成形のみにより、横ナゲ調整は加えられていない。全体的に歪みが顕著である。

塀は、播丹型塀(216~224)と羽釜形塀(225)の2タイプに分類できる。播丹型塀は、口縁端部の特徴から、端部を外方へ引き延ばすタイプ(216~220)と端部が玉縁状をなすタイプ(221~224)に分類できる。いずれも体部外面は叩き成形によるが、219と223の体部内面には当具痕が認められる。また、222と224の内面はハケ調整により仕上げられている。

羽釜形塀は225の1個体で、口縁部直下に突帯が貼り付けられている。体部外面はナゲ調整、体部内面は板ナゲ調整による整形後、口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。また、体部内面に、数条のヘラ描きが認められる。

226は、底部から体部にかけて残存する個体である。底部は糸切りで切り離され、体部は内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。また、体部下端には、径1.5cmの穿孔が焼成前に施されている。

須恵器は、椀(228~230)・埴鉢(231~235)・甕(236・237)が出土している。椀は3個体とも東播系の椀である。229と230は平高台をなし、糸切りにより切り離されている。埴鉢は、234を除く口縁部片はいずれも端部を上方向に拡張させ、外端面を有する。また、底部の残存する234と235は回転糸切りにより切り離されている。甕は、いずれも口縁部の小片が出土している。2個体とも外端面を有するが、形態の特徴を異にする。

瓦質土器は、227の1個体である。羽釜形塀の口縁部の小片で、口縁部下に幅1.4cmの鏝が貼付けられている。

備前焼は、播鉢(239)と甕(240)が出土している。239は、完形に復元できる個体で、口縁端部は、口縁部に対して直交する端面を有する。底部外面はナゲ調整、体部外面は横ナゲ調整により仕上げられている。内面は、6条を1単位とする節目が施されている。

甕は、ほぼ1個体分出土しているが、図化できたのは口縁部を中心とした箇所と底部を中心とした箇所であり、後に両者を図上で復元している。口径52.7cm、復元高85.0cmと、大型の製品である。全体的に須恵質であるが、後述する口縁部の形状・体部の調整から備前焼と判断したものである。口縁部は玉縁状をなし、横ナゲ調整により仕上げられている。底部は平底をなし、内外面ともハケ調整により仕上げられている。また、体部下半は、外面がハケ調整、内面がナゲ調整により仕上げられている。

瓦は、238の丸瓦1点が出土している。須恵質で、凹面・凸面ともヘラナゲにより仕上げられている。

鉄釘はF4の1点が出土している(図版17)。先端を欠き、5.6cm残存する。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

SD15

概要 B地区中央部に位置する(第18図)。掘立柱建物・柱穴群の東側に位置し、SD16と切り合い関係にあり、SD16を切っている。ほぼ南北方向にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。検出した長さは10.40mで、検出面における幅は85cmである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは、12cmである。

埋土は、上から、褐灰色シルト質中砂・褐灰色シルト質極細砂の2層からなる。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 中世後半のSD16との切り合い関係から、より新しい時期に位置付けられる。

SD16

概要 B地区の北端から26~27m南のあたりを東西方向に、直線的に延びており、東端はSD10と直角に接続する(第18図)。西の延長は調査区外へ続くが、埋没後に、SK24に切られている。検出した長さは約15mである。検出面における幅は、東端近くで1.68m、中央付近で1.40mあり、検出面からの深さは同様に、54cm・1mである。ただし溝底のレベルは標高5.6mでほぼ一定している。横断面は緩いV字形で、下層が洪水砂(6層・8層)で埋まった後、中層付近に炭を含む層(3層)が堆積している(第42図)。

SD16の南側に接して、ほぼ同規模の溝SD17が平行に開削されている。あまりにも近接しているため、同時併存はしていないと思われるが、切り合いの前後関係は不明である。

出土遺物 須恵器の椀と握鉢が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期 出土土器から第三期のなかでも新しい時期に位置付けられる。

SD17

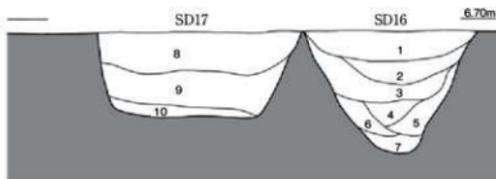
概要 SD16の南側に接して、東西方向に直線的に延びている。西端は調査区外に続くが、東端はSD10の手前5.4mのところまで途切れ、貫通していない。検出した長さは10.70m、検出面における幅は1.65m、検出面からの深さは70cmである。溝底のレベルは標高5.9mでほぼ一定している。横断面は箱形で、平坦な溝底には有機分を含むシルト層(10層)が堆積している。溝の埋没後に埋土を切って、掘立柱建物SB12、

土杭SX29が構築されている(第42図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版9)。

土師器は、皿(241~243)が出土している。皿は、3個体出土しているが、それぞれタイプを異にする。242と243は手づくね成形により、口縁部は横ナゲ調整により仕上げられている。241については、軸輪成形の可能性も考えられるが、残存する範囲では判断できない。

口縁部は内外面とも横ナゲ調整に



- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. ぶい黄橙色シルト質中砂 | 6. 灰白色極細砂~細砂 |
| 2. 灰黄褐色シルト質中砂~粗砂 | 7. 灰白色シルト質極細砂 |
| 3. ぶい黄橙色シルト混じり細砂 | 8. 暗灰黄色シルト質極細砂 |
| 4. ぶい黄橙色シルト質極細砂 | 9. 灰黄褐色シルト質極細砂~細砂 |
| 5. 灰白色シルト質極細砂 | 10. ぶい黄褐色シルト質極細砂 |

0 2m

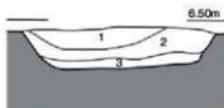
第42図 SD16・SD17

第3章 調査の成果

より仕上げられている。

須恵器は、捏鉢1個体(244)が出土している。口縁部の小片で、端部を拡張させ、弧状の端面を有する。

時期 出土土器から、第IV期に位置付けられる。



1. 褐灰色シルト質細砂
2. 灰黄褐色シルト混じり極細砂
3. 灰黄褐色シルト質細砂



第43図 SD18

SD18

概要 B地区中央のやや南寄りを、東西方向に直線的に延びている(第18図)。西端は調査区外に続き、東端はSX31に接続しており、調査区内で検出した長さは9.80mである。SX31に近い東側では、検出面における幅は1.53m、検出面からの深さは33cmである。西端では3.4mまで幅が広がるが、西半部はSE03に切られているため、詳細は不明である。横断面は浅い逆台形で、平坦な溝底となっている(第43図)。

出土遺物 須恵器の捏鉢が出土している。

時期 出土土器から第III期を中心とした時期に位置付けられる。

SD19

概要 B地区南西隅から、2本の溝が並んで東西方向に延び、SD10の手前で北へ直角に折れて、北端はSX31に接続している(第18図)。このL字形に平行する2本の溝の内側がSD19・SD21で、コーナー付近を切るSX32を境に、南北方向の溝をSD19、東西方向の溝をSD21とする。検出した長さは、約18mで、検出面における幅は1.30mである。横断面は皿状を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmである。溝底のレベルは6.18mである(第44図)。埋土は4層からなる。

出土遺物 平瓦が出土している。凹面には布目が認められる。

時期 出土瓦から時期の特定は困難であるが、SD20と平行し、同時期と考えられることから第V期と考えられる。

SD20

概要 L字形に平行する2本の溝の外側がSD20・SD22で、コーナー付近を切るSX32を境に、南北方向の溝をSD20、東西方向の溝をSD22とする(第18図)。検出した長さは18.5mで、検出面における幅は82cmを測る。横断面は皿状をなし、最深部における検出面からの深さは29cmである。溝底のレベルは5.92mである(第44図)。埋土は2層からなる。

出土遺物 土師器・須恵器・青磁・瓦・石埴と鉄製品が出土している(図版9)。

土師器は、皿(245~249)と羽釜(250)・杯が出土している。皿は、いずれも手づくね成形によるもので、口縁部は横ナゲ調整により仕上げられている。ただし、245の横ナゲは弱いものでわずかに施した程度である。杯は小片のため図化できなかったが、糸切りにより切り離されている。

羽釜は250の1個体で、内湾する口縁部の直下に幅1.7cmの鏝は貼付けられている。体部内面は板ナゲ調整、口縁部外面はハケ調整、内面は横ナゲ調整により仕上げられている。

須恵器は、椀・捏鉢(251~253)・壺(254)・甕が出土している。捏鉢は、3個体出土しているが、251と253は同タイプで、口縁部が上方につまみあげられている。252は、端部を上下に拡張させている。壺は、底部から体部にかけて残存し、底部は回転糸切りにより切り離されている。このほか、小片のため図化で

きなかったが、椀は口縁部片が、甕は体部片が出土している。

青磁は碗(256)が出土している。内面見込みに草花文が陰刻されている。

瓦は、平瓦が5点(256～260)出土している。いずれも小片で、凸面はヘラナゲもしくはヘラ削りにより仕上げられている。凹面には布目が認められる。

石埜は262の1個体出土している。口縁部を中心に残存する。

鉄製品はF5の鉄釘とF18の不明品が出土している。F5は、約1/2残存し、その長さは3.4cmを測る。F18については、断面皿状を呈する円盤形の製品である(図版17・18)。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。



1. にぶい黄褐色極細砂
2. 灰黄褐色シルト質極細砂
3. 黄灰色シルト混じり細砂
4. 灰黄褐色シルト質中砂混じり細砂

1. 灰黄褐色シルト質極細砂
2. にぶい黄褐色シルト質細砂



1. にぶい黄褐色極細砂質シルト
2. にぶい黄褐色シルト質細砂
3. 褐灰色シルト質細砂混じり極細砂

1. にぶい黄褐色シルト質極細砂
2. 灰黄褐色極細砂質シルト
3. にぶい黄褐色シルト質極細砂
4. 灰黄褐色シルト混じり極細砂



第44図 SD19～SD22

SD21

概要 SD19の南に続く溝である(第18図)。検出した長さは約10.5mで、検出面における幅は1.12mを測る。横断面は皿状をなし、最深部における深さは30cmである。溝底のレベルは6.10mとなっており、SD19より低くなっている(第44図)。埋土は3層からなる(第44図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版9・10)。

土師器は、皿(264)と埴(266)が出土している。皿は、手づくね成形によるもので、口縁部は内外面とも横ナゲ調整により仕上げられ、体部との境外面にわずかに段が認められる。埴は、羽釜形埴に分類されるもので、ほぼ完形に復元される。体部外面は叩き成形、内面はハケ調整、口縁部内外面は横ナゲ調整により仕上げられている。口縁端部に煤の付着が認められる。

須恵器は、埴鉢(265)が出土している。口縁端部を拡張させ、端面は弧状をなす。

時期 出土土器から、第IV期に位置付けられる。

SD22

概要 SD20の南に続く溝である(第18図)。検出した長さは、約12.5mで、検出面における幅は1.72mを測る。横断面は皿状を呈し、最深部における深さは46cmである。溝底のレベルは5.94mと、SD20とほぼ同レベルである(第44図)。埋土は、4層からなる(第44図)。

出土遺物 青磁碗(263)が出土している(図版9)。口縁端部の小片である。

第3章 調査の成果

時期 出土土器および、SD21と平行し同時期と考えられることから、第IV期に位置付けられる。

SD23

概要 B地区の南端から8～9m北のあたりを東西方向に、直線的に延びている。東端はSX32に切られているが、SD19と直角に接続するものとみられる(第18図)。西端は、調査区外に続く。検出した長さは9.00mで、検出面における幅は48cm、検出面からの深さは7cmである。横断面は皿形をなす。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 溝の示す方位から、中世後半と考えられる。

SD24

概要 C地区の北端から直線的に延びる南北方向の溝で、北端は調査区外に続く(第19図)。検出した長さは17.95mで、検出面における幅は80cm～40cm、検出面からの深さは7cmである。横断面は皿状である。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期を特定することは困難であるが、周囲の状況から中世以降と考えられる。

SD25

概要 C地区の北端から約17m南に位置する東西方向の溝で、SD24に切られている(第19図)。検出した長さは6.40mで、検出面における幅は52cm、検出面からの深さは7cmである。横断面は皿状である。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期を特定することは困難であるが、周囲の状況から中世以降と考えられる。

SD26

概要 C地区の北端から約20m南に位置する東西方向の溝で、西端は調査区外に続く(第19図)。検出した長さは9.70mで、検出面における幅は25cm、検出面からの深さは10cmである。横断面はU字形である。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期を特定することは困難であるが、周囲の状況から中世以降と考えられる。

SD27

概要 C地区の北端から約13m南で、調査区の東壁近くに位置する(第19図)。遺構の西端は土坑状に落ち込み、そこから延びる細い溝が調査区外の東に続く。検出した長さは4.00mで、検出面における幅は、土坑状の部分が1.65m、溝状の部分が39cm。検出面からの深さは、同様に40cm、35cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期を特定することは困難であるが、周囲の状況から中世以降と考えられる。

SD28

概要 C地区の北東部に位置する(第19図)。遺構の西端が土坑状に落ち込み、そこから延びる細い溝が調査区外の東に続く状況は、SD27に相似する。検出した長さは4.50mで、検出面における幅は、土坑状の部分が1.23m、溝状の部分が69cm。検出面からの深さは、同様に44cm、48cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期を特定することは困難であるが、周囲の状況から中世以降と考えられる。

SD29

概要 C地区東壁の南側2/3に沿って、南北に延びる落ち込みを検出した(第19図)。その北端は溝状の掘り込みを形成しながら不分明となり、東壁外へ逸れていく。ただしその延長はB地区のSD10とつながっている可能性が高く、旧河道状の大きな落ち込みになるものと考えられる。南端はC地区南東隅から南へ続いている。

検出した長さは約37mだが、調査区内に現われているのは西側の肩部のみで、東肩は検出できていない。本来の幅は確かめられておらず、検出範囲内の最大幅は7.20mである。

形状は、調査区の南北方向にほぼ沿っているが、北端近くは丸く広がりをみせている。C地区南側で取り付くSD30より北側では、肩部から20cmほどの段差をもって、0.5~2m幅のテラス状の平坦面が設けられ、そこからさらに調査区外へ向かって一段深くなる。下層には洪水砂(4層:第45図)が堆積しているが、壁面保護のため、底面は確認できなかった。北端には長さ約8m、幅1m余り、深さ60cm程度の溝状の掘り込みがあり、その東肩は東壁近くで再度落ち込んでいくが、遺構のラインは不明瞭となっている。一方、SD30以南では、深さ約30cmのところではテラス状となるが、1.5mほどの幅しかないので、詳細は不明である(第45図)。

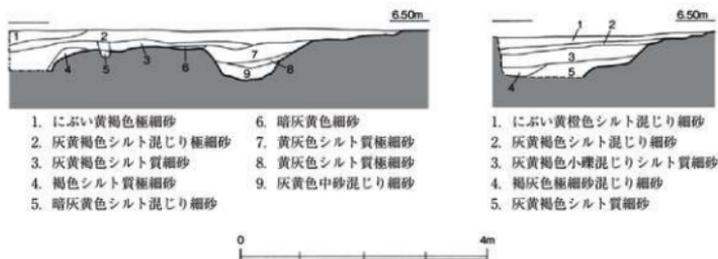
この水路に対して、直角方向に取り付く溝SD30は、SD10に対するSD11と共通する状況を呈している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版10)。

土師器は、267と268の2個体が出土しているが、268は手ずくね成形により、269は輪轉成形により仕上げられている。268は、全体的に指オサエにより仕上げられているが、口縁端部にわずかに横方向の弱いナゲ調整が加えられている。269は口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられ、底部はヘラ切りにより切り離されている。

須恵器は椀11個体(269~279)が出土している。これらは、法量的な差は認められるが、基本的に同タイプの椀である。底部が残存する個体は平臺を有し、回転系切りにより切り離されている。また、277の体部外面には浅い沈線が1条認められる。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。



第45図 SD29

第3章 調査の成果

SD30

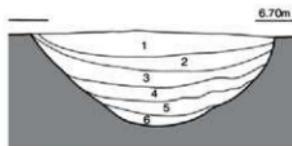
概要 C地区の南端から約12m北で、SD29に直角に取り付く溝状の掘り込みである(第19図)。長さは8.70m、検出面における幅は1.98mである。

横断面はボウル状を呈し、検出面からの深さは溝の奥側で76cmである。その溝底の延長はSD29の底を抉り込んで東壁外へ続いており、東壁際の深さは約1.5mである(第46図)。

出土遺物 須恵器の椀が1個体(280)出土している(図版10)。

底部は平高台をなし、回転系切りにより切り離されている。

時期 出土土器から、第1期に位置付けられる。



1. 灰黄褐色シルト
2. にぶい黄褐色シルト混じり細砂
3. にぶい黄褐色シルト～極細砂混じり細砂
4. にぶい黄褐色極細砂混じり細砂
5. 灰白色細砂混じり極細砂
6. 黄灰色極細砂～シルト混じり細砂



第46図 SD30

(4) 井戸

SE01

概要 A地区中央部北側で検出した、石組の井戸である(第17図)。SB03の南側、SB04の北側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、全体を検出することができた(第47図)。

掘り方は、2段に掘りこまれている。上段は、平面形がやや歪んだ円形をなし、その規模は3.55m×3.55mを測る。下段の掘り方は、上段の掘り形を約50cm掘り下げたレベルで検出されもので、上段の掘り方の南東側に偏った位置にあたる。平面形は円形を呈し、その規模は、2.25m×2.25mを測る。また、横断面はU字形をなし、下段検出面からの深さは2.20mで、底部の標高は4.00mである。

下段掘り方検出面から80cm掘り下げたレベルで石組みを検出し、石組み検出レベルから底部までの深さは1.50mである。石組みは20cm～40cm大の亜角礫を中心に円形に組まれ、断面は播鉢状をなす。石組み検出面上における内径は60cm、底部における内径は30cmを測る。

底部中央部には水溜として、曲物が置かれていた。その径は26cm、深さは8cmを測る。ただし、この曲物については、遺存状況が良好ではなかったため、完形の状態では取上げることができなかった。このため、図化することもできなかった。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

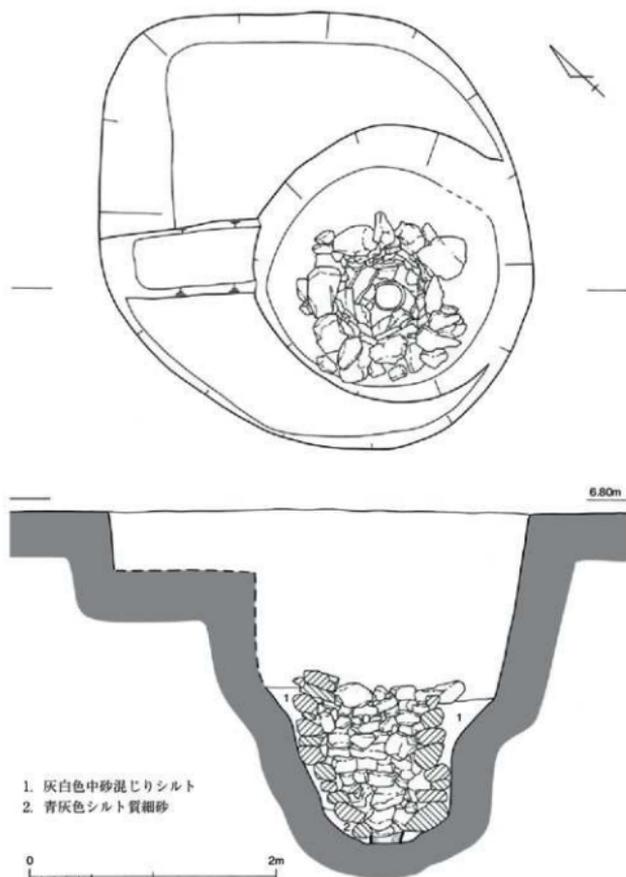
時期 上記の理由から、時期を特定することは困難であるが、周囲の状況から中世以降と考えられる。

SE02

概要 A地区中央部で検出した、石組みの井戸である(第48図)。他の遺構との切り合い関係は認められないが、SB04と平面的に重複する。ただし、SB04との前後関係については、調査では明らかにできなかった。

掘り方の平面形は円形に近く、その規模は3.70m×3.60mを測る。横断面は逆台形に近いU字形をなし、最深部における検出面からの深さは2.70mである。底部の標高は3.90mである。

石組みは、井戸検出面から1.5mの深さで検出し、底部までの深さは1.10mである。石組みの基底部と掘り方の底部は一致する。石組みは30cm～50cm大の亜角礫を中心に円形に組まれ、断面は播鉢状をなす。ただし、基底部の石は全て50cm大と大型で、内面が方形になるように据えられている。石組み検出面上にお



第47図 SE01

る内径は1.20m、底部における規模50cm×50cmである。

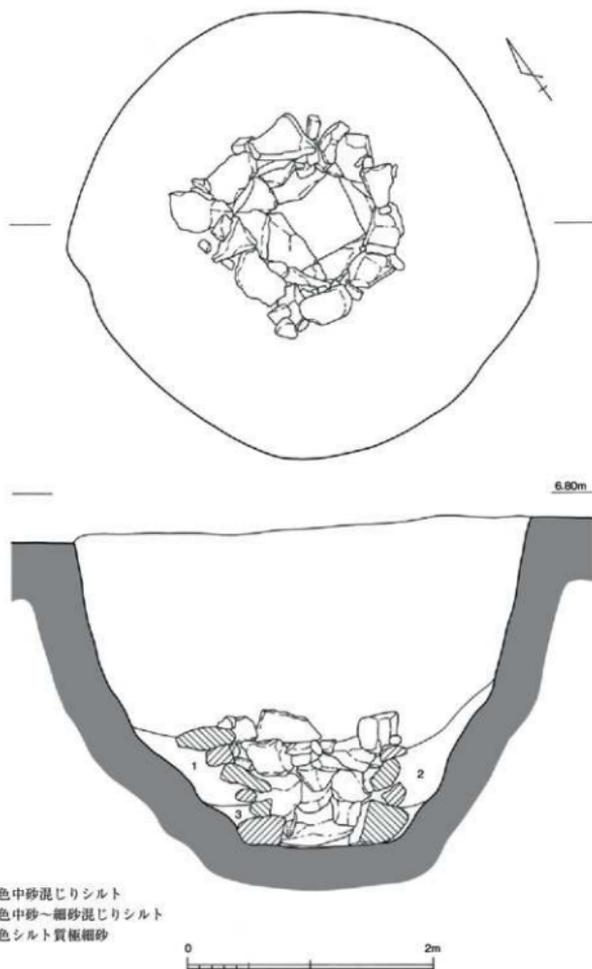
なお、石組み内底部において、水溜めを確認することはできなかった。

出土遺物 土器と木製品が出土している。

土器は、須恵器の椀（281・282）と丹波焼が出土している（図版10）。須恵器は東播系の椀で、282は平高台をなし、回転系切りにより切り離されている。丹波焼は甕もしくは壺の体部片が出土している。

木製品は、井戸枠内から、曲物底板（W4）・椀（W5・W6）不明品（W3）が出土している（図版19）。

W4は、4枚の板材を組み合わせているが、1枚分を欠く。各板は木釘により2箇所で接合されている（図版19）。木釘の幅は6mm～8mmである。復元される平面形は正円ではなく、わずかに楕円傾向にある。最大径は19.5cmを測り、厚さは8mmである。

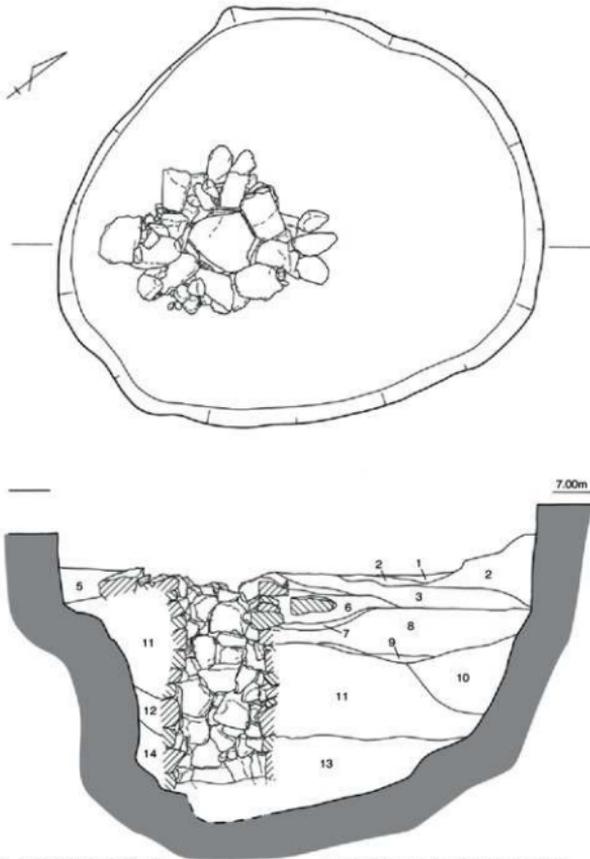


1. 灰白色中砂混じりシルト
2. 灰白色中砂～細砂混じりシルト
3. 青灰色シルト質極細砂

第48図 SE02

碗はW5とW6の2点出土している。W5は、ほぼ完形に復元できる碗である。当初は全面に漆が塗られていたものと考えられるが、内には赤漆が、外面には黒漆がわずかに遺存している。文様は判断できない。口径15.3cm、器高8.5cm、底径8.2cm、高台高1.9cmを測る。W6も、W5同様、ほぼ完形に復元することができる。W5同様、内外面に漆が塗られていたようであるが、両面とも極一部で残存する程度である。口径16.7cm、器高8.8cm、底径8.4cm、高台高1.9cmを測る。

W3は、へら状を呈するもので狭部の一端を欠く。広端部についても、ていねいに成形されていない。



- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1. 明黄褐色シルト質細砂 | 8. 黄灰色礫・中砂～粗砂混じりシルト |
| 2. 灰白色シルト質細砂～中砂 | 9. 砂礫 |
| 3. にぶい黄橙色シルト質極細砂～細砂 | 10. 黄灰色中砂混じりシルト |
| 4. 砂礫 | 11. 灰白礫～中砂混じりシルト・黄褐色シルト |
| 5. 褐灰色礫混じりシルト質中砂 | 12. 灰色中砂混じりシルト |
| 6. 灰白色細砂 | 13. 暗灰色中砂～粗砂混じりシルト |
| 7. 砂礫 | 14. 灰色細砂～中砂混じりシルト |



第49図 SE03

広部幅7.2cm、狭部幅3.3cmを測り、厚さは6.5～8mmである。全長は31.7cm、広部長は20.8cmである。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。

SE03

概要 B地区中央部西側に位置し、溝SD18の埋土上面から掘り込まれている(第18図)。掘り方の平面形は東西に扁平な不整形円で、すり鉢状に掘り込まれ、底面は井戸側のある南側が深くなる。掘り方の規模は検出面で東西3.38m、南北3.89m、底面の径は約2m、検出面からの深さは2.53m、底面の標高は4.37mである。掘り方の南寄りに、径10~40cmの礎を積み上げ、石積みの井戸側を構築している(第49図)。

井戸側内面は、石材の小口を揃えて垂直に積み上げようとしているが、石材の大きさ・形にばらつきがあるため、多少の出入りが生じている。開口部は不整形円で、内側の直径は最小52cm、最大72cm、全体的には58cm~68cmあたりが平均である。井戸底の状況は不明だが、水溜めの痕跡は認められなかった。

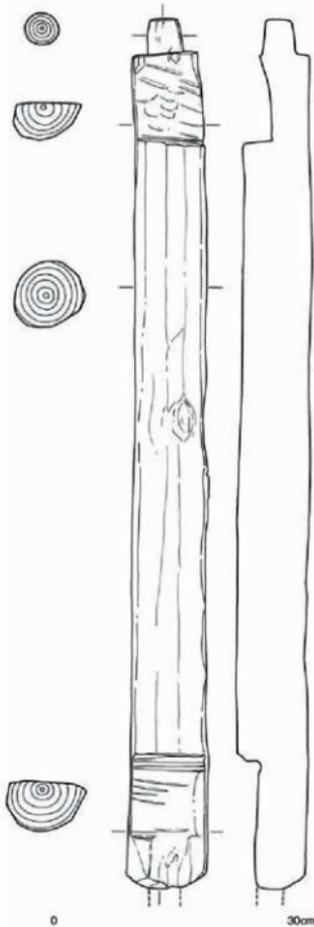
出土遺物 土師器・須恵器・丹波焼が出土している(図版10)。土師器は皿(284)が出土している。手づくね成形により、歪みが顕著である。須恵器は椀の底部片(285)が出土している。底部は平高台の痕跡が認められず、糸切りにより切り離されている。丹波焼(286)は、口縁部を中心に残存する。焼成は不良で、端部はN字形をなす。

時期 出土土器から、第VI期に位置付けられる。

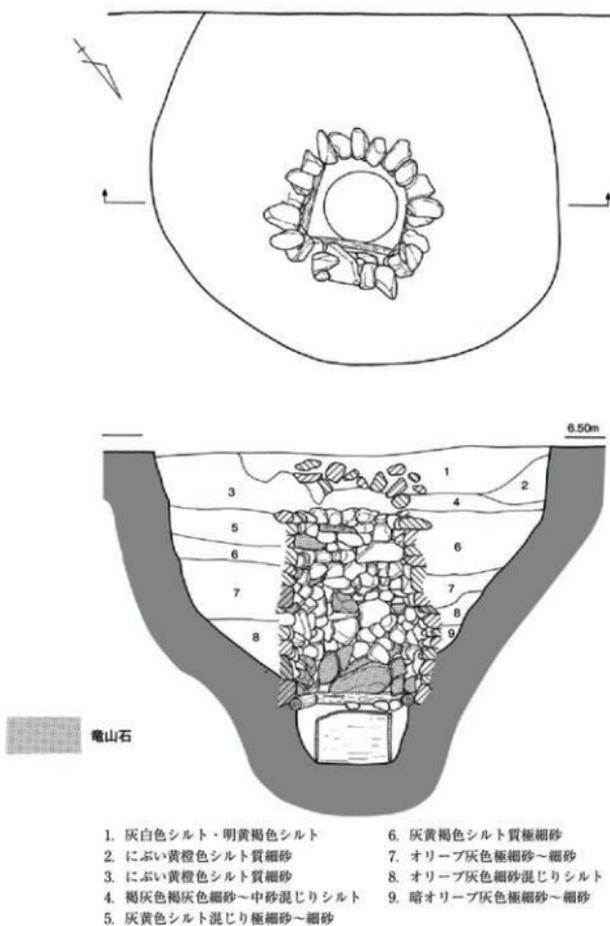
SE04

概要 C地区南端に位置し、SD29の西側に接した場所に立地する(第19図)。井戸の掘り方は、高1にともなう動溝を切っており、その一部は南壁の外側に続いている。掘り方の平面形は不整形円で、すり鉢状に掘り込まれ、掘り方の北寄りに据えた井戸側の部分を、一段深く掘り込んでいる。掘り方の規模は検出面で東西3.23m、検出範囲内の南北2.85m、底面の径は0.60m、検出面からの深さは2.60m、底面の標高は3.83mである(第51図)。

井戸側はまず、検出面から2.10~2.15m下で掘り方にステップを設けて、そこに面取りした根太(W1)4本を組み合わせて、正方形の桐木枠を作る。木枠の一边の長さは約90cmである。この桐木枠の外側にかけるようにして、石を積み上げていく。井戸側は、長さ20~30cm、小口幅15cmほどの石材を使い、小口面を内側に向けて放射状に積み上げる。比較的均質な石材で構築するが、幅25~50cmの石材(竜山石)を横に用いる箇所も混じる。石積みの断面を見ると、東壁はほぼ垂直に面を揃えるが、西壁は上半部が土圧でふくらみ、オーバーハングしている。上面近くでは廃棄段階に井戸側が破壊され、石材が中に落ち込んでいる。開口部は円形とも方形ともつかぬ形状で、内側の直径は底



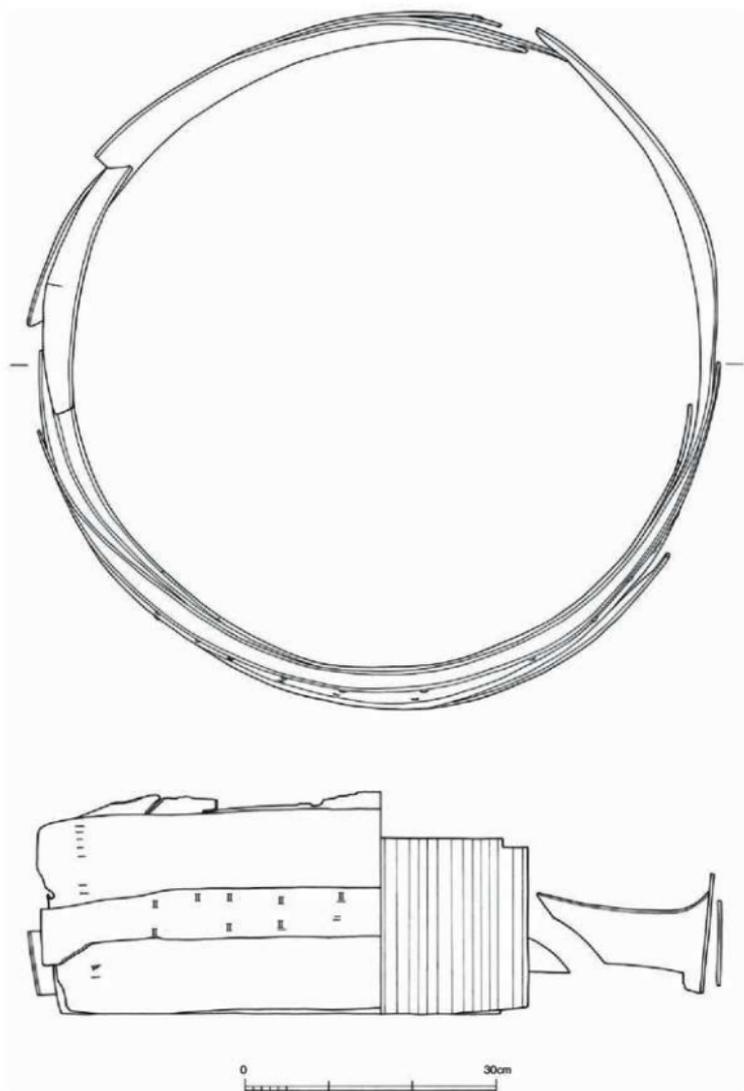
第50図 SE04根太(W1)



第51図 SE04

面近くで約1mである。桐木枠の下はさらに50cm近く掘り下げ、大型の曲物（W2）を据えて水溜めとしている。

根太（W1）は4本がセットをなすものである。W1（第50図）はその1本である。径8.5～8.9cmの丸太材を加工している。両端を2.5～3.5cmカットし、平坦面を造り出し、根太の組み合わせ部となっている。その長さは10.5cm・16.0cmである。また、一方にはこの平坦部の先が径3.8～4.2cm・長さ4.3cmの円柱状を



第52図 SE04水溜 (W2)

呈している。他端はこの部分が欠損している。この部分の用途については明らかにしえないが、他に使用されていたものの転用の可能性も考えられる。残存長は117cmである。材はサカキである。

水溜に転用された曲物は(W2:第52図)は、底部を欠くもので、側板のみ転用されている。側板は6枚からなり、3枚を3段に組み、これを半周させ2箇所で接合させている。径82cmと復元される大型の曲物である。高さは、28cm残存する。

出土遺物 井戸枠内から木製品が出土している(図版19)。数点出土しているが、固化できたのは、板状木製品(W9)と不明品(W8)である。W9は、形態的には曲物底板の一部と考えられるが、径2mm~5mmの穴が4箇所にあけられており、その用途を明らかにすることはできない。一部、刃物痕らしきものも認められる。全長16.2cm、幅4.1cm、厚さ7.5mmを測る。

W8は、板状の製品の一部であるが、もとの形状を復元することは困難である。刃物痕が顕著であることから、折敷の可能性も考えられる。ただし、斜方向に穿たれた径2.5mmの穴が2箇所に認められるが、この用途は不明である。残存長22.4cm、厚さ7mm。

時期 時期を特定できる遺物は出土していない。このため時期の特定は困難であるが、中世の範囲で捉えられるものである。

(5) 窯

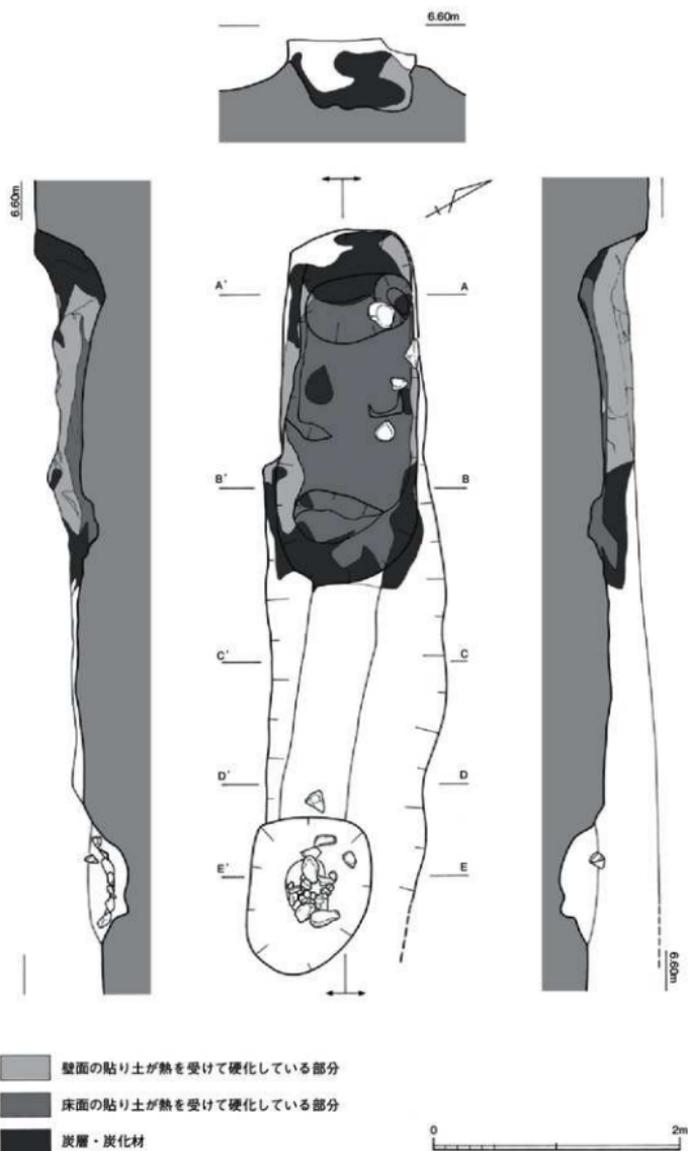
概要 1基検出した。A地区の中央を東西に横断する大溝SD05とそれに平行する溝SD07、SX09にはさまれた、幅1m~1.5mの細長い範囲に、軸線を同じくして位置する(第17図)。窯体の焼土の輪郭線は、SD05・SD07・SX09を掘削した壁面で検出されており、遺構の南北両側縁を周囲の遺構に切られた状況であることがわかる。さらに埋土の上層は、重複する溝SD06にも切られている。

窯の構造は、熱を受けて赤く焼けている焼成部と、その東に続く溝状の部分、さらにその東端の土坑部の3つからなっている(第53図・第54図)。東西に細長く連なっており、全長は6.08mを測る。

焼成部は上半部が削平されており、底面から壁面への立ち上がりのみが残存する。形状は舟底形で、横断面は北縁が垂直に近いのに対し、南縁は45~65°の傾きをもち、南へ傾くようである。縦断面は底面の中央が水平で、東西両端が落ち込む。この両端の落ち込みは、焼成部の掘り方下面および床面形成時(13~15層)にもすでにあり、当初から意図されたものであった。底面・壁面に施された貼り土(11層)が熱を受けて硬化しており、窯壁と認識される。この窯壁の範囲は中央を中心にしており、両端は稀薄である。窯壁の下層には炭を多く含む黒い層(12層)があり、その下の層も被熱で赤変した部分が認められるところから、窯体構築以前に空焚きの工程があったとみられる。規模は東西長が2.89m、南北幅が西側で1.00m、中央で1.10m、東側で1.13mである。検出面からの深さは、西屑から西側落ち込みの床面までが53cm、掘り方の底面までが64cmとなっており、東に続く溝状部底面との比高差をみると、東側落ち込みの床面までが15cm、掘り方の底面までが29cmを測る。

溝状部も両屑が削平されているが、横断面は深い皿状である。焼成部と土坑部をつないでおり、その間の長さは1.92m、残存する幅は1.4m前後である。溝状部も掘り方下面に土を入れて床面を形成(16層)しており、焼成部の炭層(12層)はこの上に乗ってくる。検出面からの深さは、北屑から床面までが40cmで、さらに掘り方底面までに3~15cmの調整土がある。

溝状部の東端底面には、平面不整形円形の土坑が掘り込まれている。横断面は当初、逆台形であったが、中程まではすみやかに埋もれたようで、窯が機能していた段階では、皿状の断面形を呈する。その段階の底面には、5~20cm大の礫や土器片が詰まっている(8層)。規模は東西1.27m×南北98cmで、東屑からの深さは、8層下面までが24cm、掘り方の底面までが56cmである。



第53図 竪 平面図

第3章 調査の成果

焼成部床面の標高は、西側落ち込みが6.32m、中央が6.51m、東側落ち込みが6.38mの高低差をもつが、種別としては平窯といえる。焼成部の埋土下層（10層）や溝状部にかけての埋土上層（7～9層）には窯壁片や炭が含まれているものの、明らかな焚き口などは認められず、窯全体の構造ははっきりしない。また製品や製品につながる残滓といった手掛かりもなく、窯の用途は不明である。

出土遺物 須恵器・土師器・白磁が出土している（図版10）。

須恵器は、捏鉢（287・288）と椀（289・290）が出土している。捏鉢は、2個体とも口縁端部を拡張させ、端面は弧状をなす。椀は平高台の底部片が2個体出土しているが、その形態に差が認められる。289が下層から出土しているのに対して、290の方が新しい傾向にあり、上層から出土している。

土師器は、皿1個体（291）が出土している。手づくね成形によるもので、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

白磁は、292の碗1点が出土している。IV類碗の口縁部片である。

時期 出土土器から、第IV期に位置付けられる。

(6) 土坑

28基（SK01～SK28）検出している。

SK01

概要 A地区北東部に位置する（第17図）。SB02と平面的に重複し、SB02の中央部に位置する。SX04と切り合い関係にあり、SX04に切られている。また、SB01を構成するP10にも切られている。SX04に切られているため、南西側の約1/2の上部は約10cm削平されている。平面形は楕円形をなし、その規模は主軸方向で1.86m、その直交方向で1.60mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、26cmである。埋土は、灰黄褐色シルト質細砂・黄褐色シルト、褐灰色シルト質細砂・黄褐色シルトの2層からなるが、いずれも人為的に埋められた層である。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器は、図化できなかったが、埴の体部片が出土している。外面は平行明きにより整形されている。

須恵器は、椀（293）が出土している（図版10）。平高台の椀で、回転系切りにより切り離されている。

時期 出土土器から、第III期に位置付けられる。

SK02

概要 A地区北東部に位置する（第17図）。SX06の西側に隣接する。SB03と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係はなく、全体が検出されている。平面形は円形に近い楕円形をなし、その規模は主軸方向で1.30m、その直交方向で1.20mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、7cmである。

出土遺物 土師器・須恵器・丹波焼が出土している（図版10）。

土師器は、皿（294）と甕の小片が出土している。皿は、軸輪成形によるもので、底部は回転系切りにより切り離されている。体部から口縁部は、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

須恵器は、椀（295）と甕が出土している。椀は東播系の椀である。甕は体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。丹波焼は、体部の小片が出土している。小片のため図化できなかった。

時期 出土土器から、第III期に位置付けられる。

SK03

概要 A地区中央部で検出した(第17図)。SK02の南西側、SK04の西側に位置する。SB03と平面的に重複し、SB03を構成するP14に切られている。他の遺構との明確な切り合い関係はなく、全体が検出されている。平面形は隅丸方形をなし、その規模は主軸方向で1.70m、その直交方向で1.50mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、10cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期を特定することは困難であるが、周囲の状況から中世以降と考えられる。

SK04

概要 A地区中央部で検出した(第17図)。SE01の北東側、SK05の西側に隣接する。SB03と平面的に重複し、SB03を構成するP18に切られている。他の遺構との明確な切り合い関係はなく、全体が検出されている。平面形はやや不整形な隅丸長方形をなし、その規模は主軸方向で2.90m、その直交方向で2.05mを測る。横断面は皿形に近い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、10cmである。埋土は、灰白色シルト質細砂1層からなる。

出土遺物 白磁碗が出土している。

時期 出土土器から、第IV期に位置付けられる。

SK05

概要 A地区中央部東側で検出した(第17図)。SK04の東側、SK05の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体が検出されている。また、SB03とその南隅で平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。

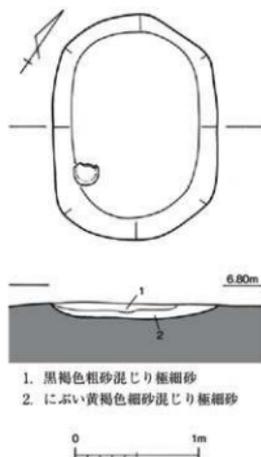
平面形は楕円形に近い隅丸長方形をなす。その規模は、主軸方向で1.84m、その直交方向で1.43mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmである。埋土は、2層からなり、底部で土師器の皿が完形に近い状態で出土している(第55図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器は、皿(296)が出土している(図版10)。轆轤成形によるもので、体部～口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。底部の切り離しは、磨滅のため観察できない。

須恵器は、碗が出土している。底部片が出土しており、その形態は12世紀前半の特徴を示している。底部は糸切りにより切り離されている。

時期 出土土器から、第III期に位置付けられる。



第55図 SK05

第3章 調査の成果

SK06

概要 A地区北東部で検出した(第17図)。SB03の東側、SX04の南側、SX05の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で1.02m、その直交方向で65cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは6cmである。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器は、器種の特定できない小片が出土している。須恵器は、小皿(297)が出土している(図版10)。底部は糸切りにより切り離されている。

時期 出土土器から、第Ⅱ期～第Ⅲ期に位置付けられる。

SK07

概要 A地区中央部で検出した(第17図)。SB04の北側、SE01の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長方形をなす。その規模は、長軸方向で1.85m、その直交方向で1.50mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmである。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。須恵器は碗が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

SK08

概要 A地区中央部で検出した(第17図)。SE01の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長方形をなす。その規模は、長軸方向で1.82m、その直交方向で1.50mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmである。埋土は、4層からなるが、いずれも細砂混じり極細砂層である。

出土遺物 須恵器の碗(299)が出土している(図版10)。東播系の碗である。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

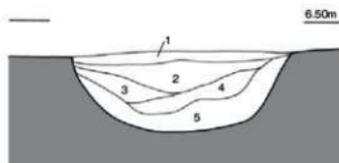
SK09

概要 A地区中央南側で検出した(第17図)。SX19の北西側に位置し、SD05とSD07に挟まれている。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、その規模は、主軸方向で87cm、その直交方向で65cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは33cmである(第56図)。

埋土は5層からなり、最下層から298の埋鉢が出土している。

出土遺物 須恵器の埋鉢(298)が出土している(図版10)。口縁端部は拡張され、外端面を有する。

時期 出土土器から、第Ⅳ期に位置付けられる。



1. にぶい黄橙色中砂混じりシルト
2. 褐灰色中砂混じりシルト
3. 灰黄褐色シルト質中砂
4. 灰白色シルト質細砂
5. 褐灰色シルト質細砂



第56図 SK09

SK10

概要 A地区南東部で検出した(第17図)。SX22の東側に隣接する。また、SB05とは平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。平面形は、やや歪んだ隅丸長方形をなし、主軸方向で3.05m、その直交方向で1.94mを測る。横断面は箱形をなし、底部はほぼ平坦面をなす。最深部における検出面からの深さは47cmである。埋土は3層からなり、1層と3層から土器が出土している。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期を特定することは困難であるが、周囲の状況から中世以降と考えられる。

SK11

概要 A地区南部で検出した(第17図)。SK12の北東側に隣接する。SD08と切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で45cm、その直交方向で32cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmである。

出土遺物 須恵器の椀(300)が出土している(図版10)。東播系の椀である。平高台の痕跡を残し、回転糸切りにより切り離されている。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

SK12

概要 A地区南部で検出した(第17図)。SD08の南側に位置し、SK11の南側に隣接する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は円形に近い楕円形をなし、その規模は66cm×58cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmである。埋土は、上から、褐灰色中砂混じりシルト、灰黄褐色シルト質細砂の2層からなる。下層から須恵器の椀が出土している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器は、皿および塀が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。皿は底部片が出土しており、糸切りもしくはヘラ切りにより切り離されている。塀は体部片が出土しており、外面は指オサエにより仕上げられている。

須恵器は、椀(301)が出土している(図版10)。東播系の椀である。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

SK13

概要 A地区南部に位置する(第17図)。SK12の南西側、SD08の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は円形に近く、その規模は、主軸方向で1.05m、その直交方向で1.0mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは30cmである。埋土は3層からなり、いずれもその層相から判断して人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物 須恵器の椀(302~305)が出土している(図版10)。全て東播系の椀である。明確な平高台をなす305と、わずかに平高台をとどめる302・304と、個体差が認められる。305は、ヘラにより切り離されている。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

SK14

概要 A地区南隅で検出した(第17図)。SK13の南東側、SK15の西側に位置する。SB08と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなす。その規模は、主軸方向で82cm、その直交方向で65cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmである。埋土は、にぶい黄褐色シルト質細砂1層からなる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。土師器は、埴の体部片が出土しており、外面は平行引きにより仕上げられている。小片のため図化できなかった。須恵器は、椀の口縁部(306)と底部片が出土している(図版10)。底部片については小片のため図化できなかったが、その形態は12世紀前半の特徴を示している。

時期 出土土器をみると時期幅が認められる。いずれにしても、中世の範囲に位置付けられる。

SK15

概要 A地区南東隅で検出した(第17図)。SK14の東側、P16の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は65cm×65cmの円形をなす。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは21cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期を特定することは困難であるが、周囲の状況から中世以降と考えられる。

SK16

概要 B地区北端近くの、SD10・SD12・SD14で区画された敷地内で、調査区の北壁際に位置する(第18図)。長径2.28m×短径1.55mの隅丸長方形を呈し、斜めに掘り込んだあと、水平な底面をもつ。検出面からの深さは13cmである。遺構の主軸は、溝に囲まれた敷地に対して、斜めの方向を向いている。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

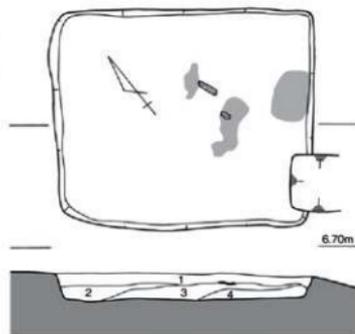
時期 周囲の状況から中世以降と考えられる。

SK17

概要 B地区の北端近くの、SD10・12・14で区画された敷地の中央に位置する(第18図)。東西2.08m、南北1.78mの方形土坑で、垂直に近く掘り込んだあと、水平な底面をもつ。検出面からの深さは21cmである。3層上面に炭化材や炭層が広がっており、埋まってゆく過程で、火を焚いたことがわかる(第57図)。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 周囲の状況から中世以降と考えられる。



1. にぶい黄褐色シルト質細砂
2. 明黄褐色細砂
3. 明黄褐色細砂混じりシルト
4. 灰黄褐色シルト質細砂



第57図 SK17

SK 18

概要 B地区のSD10・14・16で区画された敷地の北端に位置し、北半部をSD14に切られている(第18図)。東西2.58m、南北の現存長1.68mの方形土坑で、浅く斜めに掘り込んだあと、下層(4層)の上面に河原石を敷き詰めて、東側2/3を礎床としている。検出面からの深さは、最深度で42cm、礎床の上面で20cm前後である。また礎に混じって、須恵器・土師器片が出土している(第58図)。

出土遺物 土師器と須恵器と鉄釘が出土している。

土師器は、皿(307~310)と埴(311)が出土している(図版10)。皿は、4個体とも手づくね成形により造られている。307~309は同タイプに分類され、底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、口縁部内外面が弱い横ナデ調整により仕上げられている。310は、口縁部内外面が強い横ナデ調整により仕上げられ、体部との境外面に明瞭な段が認められる。

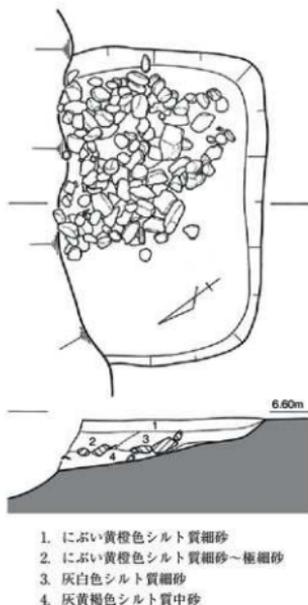
埴は、播丹型に分類されるもので、体部外面は吹き成形、内面はヘラもしくは指ナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

須恵器は、壺(312)・椀(313)・甕(314)・捏鉢(315)が出土している(図版11)。壺は口縁部を中心に残存し、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。椀は、東播系の底部片が出土している。平高台の痕跡がほとんど認められず、

回転糸切りにより切り離されている。甕は口縁部から肩部にかけて残存し、体部外面は羽状吹きにより成形されている。内面はハケ調整により仕上げられている。捏鉢は、口縁部を中心に残存し、端部は上方にわずかに拡張され、明確な外端面を有する。

鉄釘(F6)は完存し、8.7cmを測る(図版17)。

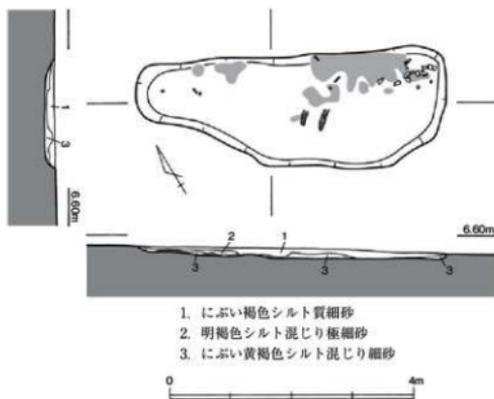
時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。



1. にぶい黄橙色シルト質細砂
2. にぶい黄橙色シルト質細砂~極細砂
3. 灰白色シルト質細砂
4. 灰黄褐色シルト質中砂



第58図 SK 18



1. にぶい褐色シルト質細砂
2. 明褐色シルト混じり極細砂
3. にぶい黄褐色シルト混じり細砂



第59図 SK 19

第3章 調査の成果

SK19

概要 B地区のSD14の南側に位置する東西に細長い土坑で、軸線はSD14に平行する(第18図)。東西5.08m、南北1.78mの不整形な輪郭をもち、横断面は浅い皿状で、底面は水平である。検出面からの深さは16cmである。埋土(1層)上面に炭化材・炭層が広がり、鉄器片も混じって出土している(第59図)。

出土遺物 土師器と須恵器と鉄製品が出土している(図版11・17・18)。

須恵器は握鉢(316)が出土している。握鉢は完形に復元されるもので、口縁端部を上方へ拡張させ、端面は弧状をなす。底部は回転系切りにより切り離されている。

土師器は、埴(317・318)と皿(319~323)が出土している。埴は、体部外面は叩き成形により、内面は317がナゲ調整、318がハケ調整により仕上げられている。皿は、5個体とも同タイプに分類されるもので、手づくね成形によっている。口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。

鉄製品は、F7の鉄釘とF26の銅銭が出土している。F7は、先端を欠き、6.2cm残存する。銅銭は、熙寧元寶で、初鋳年は1068年である。

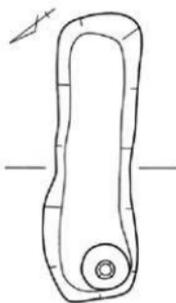
時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

SK20

概要 B地区のSB11の北縁に位置する東西に細長い土坑で、軸線はSB11に平行する(第18図)。東西2.32m、南北60cmの溝状の輪郭をもち、横断面は浅い皿状で、検出面からの深さは11cmである(第60図)。SB11の周囲にあるSK21・SK22などとも直角の方向となっており、いずれも掘立柱建物に関係ある遺構の可能性がある(第60図)。

出土遺物 土師器の皿(325)が出土している(図版11)。手づくね成形によるもので、口縁部内外面は弱い横ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。

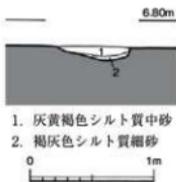


SK21

概要 B地区のSB11の北東隅に位置する南北軸の土坑で、軸線はSB11に平行する(第18図)。北端をSK20に切られており、南北の現存長1.55m、東西1.00mの隅丸長方形で、横断面はボウル状、検出面からの深さは25cmである。SB11の周囲にあるSK20とは直角、SK22とは平行の関係にある。他の切り合い関係は、SX28を切って、SB11に切られている。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から時期を特定できないが、中世以降と考えられる。



第60図 SK20

SK22

概要 B地区のSB11の北東隅に位置する南北軸の土坑で、軸線はSB11に平行する(第18図)。東半部は、敷地東半の削平段で失われている。南北1.60m、東西の現存長約80cmの不整形長方形で、浅く掘り込んで、底面は水平をなす。検出面からの深さは14cmである。SB11の周囲にあるSK20とは直角、SK21とは平行の関係にある。

出土遺物 土師器の皿(326)が出土している(図版11)。手づくね成形によるもので、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。歪みが顕著で、胎土の特徴が他の皿とは異なる。

時期 出土土器から、第V期以降に位置付けられる。

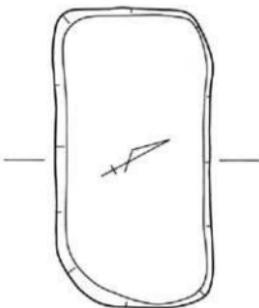
SK23

概要 B地区のSD10・14・16で区画された敷地の西側で、西壁際に位置する(第18図)。81cm×73cmの楕円形の土坑で、横断面は逆台形、検出面からの深さは19cmである。埋土には炭・土器片・河原石が混じる。

出土遺物 土師器の皿(327~330)が出土している(図版11)。いずれも手づくね成形により、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。外面体部との境には段が認められる。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

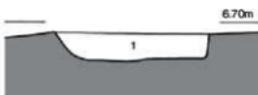
SK24



概要 B地区中央の西壁際に位置し(第18図)、遺構の西端は調査区外に続く。SD16が埋没した上から、同じ軸線上に掘り込んでおり、SD17をも切っている。東西の現存長約3.6m、南北2.15mの隅丸長方形で、垂直に近く掘り込んだあと、水平な底面をもつ。検出面からの深さは35cmである。埋土下層は洪水砂が堆積しており、上層には平石が混じる。

出土遺物 鉄製品(F19)が出土している(図版18)。紡錘車の円盤で、径4.80cmを測る。中央部に径4.50mmの穴が認められる。断面は中心部をが最も高くなる弧状をなし、中心部における厚さは2.50mmである。

時期 出土土器から、第III期に位置付けられる。



1. 褐灰色シルト混じり極細砂



第61図 SK25

SK25

概要 B地区のSD10・16・18で区画された敷地の南寄りに位置する。東西2.43m、南北1.24mの長方形の土坑で、垂直に近く掘り込んだあと、水平な底面をもつ。検出面からの深さは23cmである。埋土(1層)には炭・焼土が混じる(第61図)。

出土遺物 土師器の皿(331)が出土している(図版11)。手づくね

成形により、歪みが顕著である。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。

SK26

概要 C地区の北東隅近くの東壁際で検出しており、東半部は調査区外である(第19図)。検出範囲内での形状は半円形で、径は90cm、検出面からの深さは37cmである。横断面はボウル状を呈する(第62図)。

出土遺物 瓦器椀(332)と須恵器椀が出土している(図版11)。瓦器椀は、暗文の有無等は観察できない。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。

第3章 調査の成果

SK27

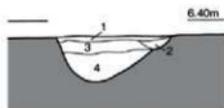
概要 C地区のほぼ中央に位置し、北東側がSK28に切られている(第19図)。東西2.96m、南北の最大径2.30mの瓢箪形の土坑で、垂直に近く掘り込んだあと、水平な底面をもつ。検出面からの深さは70cmである。

土坑埋土(6層)の下にはシルト層が帯状にはさまっており、1層～6層は人為的に埋め戻されている(第63図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版11)。土師器は杯(333)と皿(334)が出土している。杯は333の1個体であるが、皿と同じく手づくね成形によっている。このため、皿に分類される可能性も否定できない。口縁部内外面は弱い横ナゲ調整により仕上げられている。歪みが顕著である。皿の334も手づくね成形により、歪みが著しい。

須恵器は、埴(335)が出土している。この土器は、成形手法・形態とも、土師器の播丹型埴と全く同じである。しかし、還元焼成されているため、須恵器として報告する。土師器としてつくられたものが還元焼成されたものと考えられる。

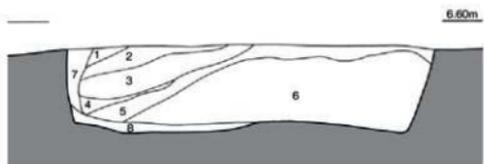
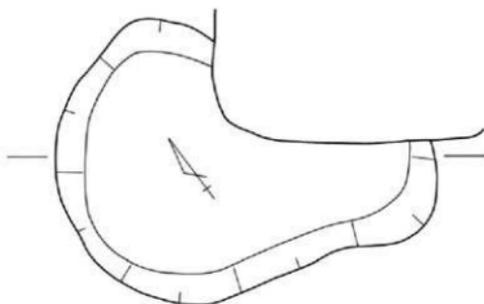
時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。



1. 灰褐色シルト混じり粗砂
2. 灰褐色シルト混じり極細砂
3. 灰褐色シルト混じり粗砂
4. 褐色シルト



第62図 SK26



1. 灰黄褐色シルト混じり細砂
2. 灰黄褐色シルト混じり細砂
3. にぶい黄褐色シルト混じり細砂
4. 灰黄褐色細砂混じりシルト
5. 灰黄褐色細砂混じりシルト
6. にぶい黄褐色シルト混じり細砂
7. にぶい黄褐色細砂
8. にぶい黄褐色細砂混じりシルト



第63図 SK27

SK28

概要 C地区のほぼ中央に位置し、SK27を切っている(第19図)。東西2.16m、南北1.96mの方形土坑で、斜めに掘り込んだあと、水平な底面をもつ。検出面からの深さは20cmである。埋土の上層(1層)は、人為的に埋め戻されている(第64図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版11)。土師器は皿が3点(336～338)出土している。3点と

も手づくね成形によるが、タイプを異にする。336は杯形態に近く、体部へ口縁部は弱い横ナゲ調整により仕上げられている。337と338はすべて手づくねで、横ナゲ調整は加えられていない。

須恵器は、碗が1点(339)出土している。底部は平高台をなし、回転系切りにより切り離されている。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。

(7) 不明遺構

埋葬遺構の可能性が高い遺構、および性格・機能を明らかにできない遺構をここで扱う。北地区で32基(S X 01～S X 32)検出している。

S X 01

概要 A地区北部で検出した(第17図)。全体を検出することはできず、西側は調査区外へ広がっている。舌状を呈する遺構で(第65図)、溝状遺構の可能性も考えられる。長軸方向で8.50m検出し、その直交方向の規模は最大で

5.50mである。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、67cmを測る。埋土は、7層からなるが、最上層の1層は攪乱を受け埋められた層である。他の層は自然堆積による層である。

出土遺物 土師器・須恵器・瓦が出土している(図版11)。

土師器は、埴(340～343)が出土している。340と341は羽釜型埴の亜流と考えられ、突帯を欠く。体部外面は叩き成形により、内面はナゲ調整、口縁部内外面は横ナゲ調整により仕上げられている。342は、羽釜に近い形態で、幅1.2cmの鐙が付く。体部外面は叩き整形、内面はハケ調整、口縁部内外面は横ナゲ調整により仕上げられている。343は、典型的な羽釜型埴である。体部外面は叩き整形、内面はナゲ調整、口縁部内外面は横ナゲ調整により仕上げられている。

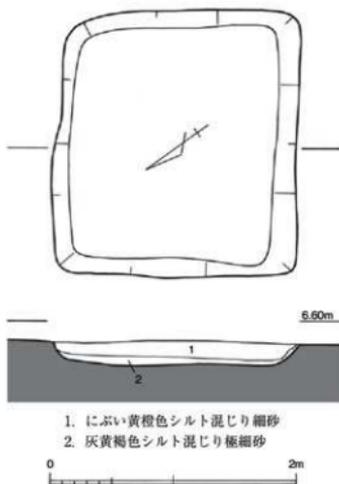
須恵器は、碗・捏鉢・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。碗は11世紀後半～12世紀前半、捏鉢は13世紀～14世紀の特徴を示している。また、甕は体部片が出土しているが、外面には綾形叩きが使用されている。

瓦は、須恵質の平瓦の小片が出土している。凹面には布目が認められる。

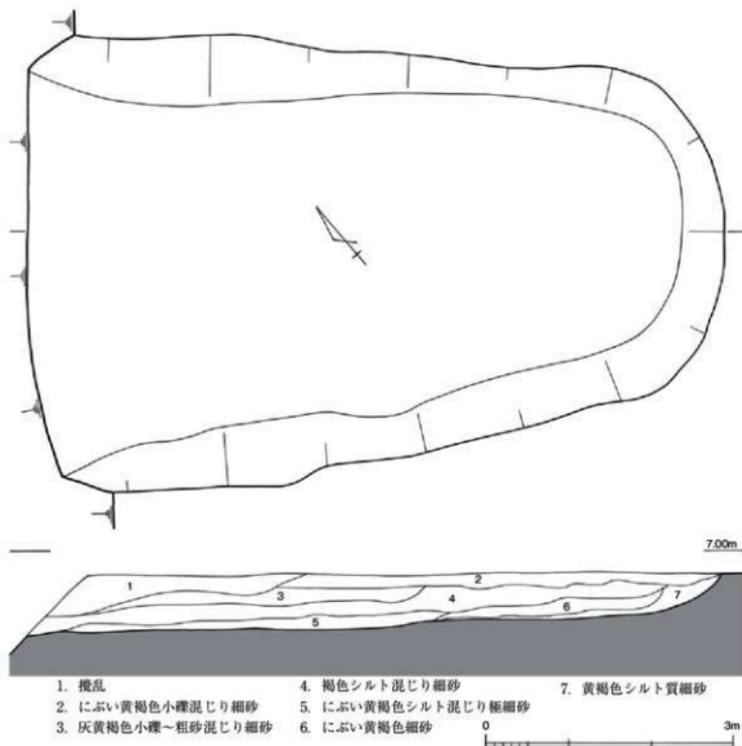
時期 出土土器から、第VIII期に位置付けられる。

S X 02

概要 A地区北東部で検出した(第17図)。S X 03と切り合い関係にあり、S X 03に切られている。さらに、当遺構の東部は調査区外に広がっている。このため、全体を検出することはできなかった。平面形は不整形な楕円形状をなし、主軸方向の規模は3.40mを測り、その直交方向で1.60mを検出した。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは70cmである(第66図)。埋土は、7層からなり、大半は自然堆積により埋没している。特に5層に関しては灰白色細砂へ中砂と明黄褐色シルトでラミナを形成してお



第64図 SK 28

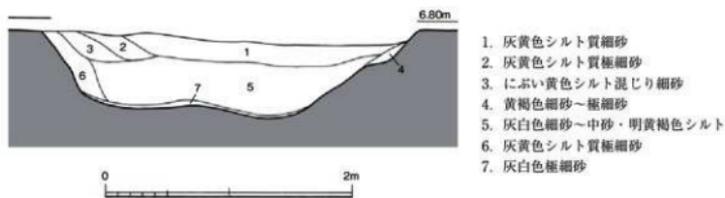


第65図 SX01

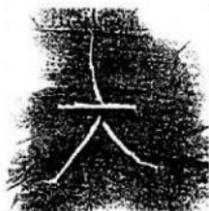
り、顕著な洪水に埋没している。土器は、この層を中心に出土している。

出土遺物 土師器・須恵器・丹波焼・備前焼が出土している(図版11)。

土師器は、埴(344)と皿(347)が出土している。344は羽釜型埴に分類されるもので、体部外面は叩き整形、内面はヘラナデ、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。皿は、手づくね整形によるもので、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。



第66図 SX02



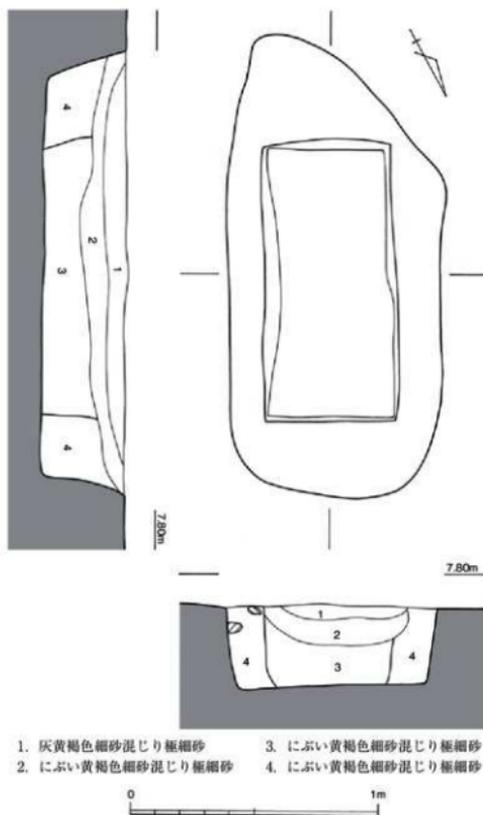
第67図 346拓影

須恵器は、椀と甕が出土している。甕は体部の小片が出土している。

丹波焼は、小壺(346)と体部小片が出土している。346は、完存する小壺である。口縁部には片口がつく。体部から口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。また、体部下半には「大」字状のヘラガキ(第67図)が認められる。体部片については、器種の特定は困難である。

備前焼は、播鉢(345)が出土している。底部はナデ調整、体部外面は横ナデ調整、体部内面はナデ調整により仕上げられている。ただし、内面には使用痕は認められない。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。



S X 03

概要 A地区北東部で検出した木棺墓である(第17図)。S X 02と切り合い関係にあり、S X 02を切っている。このため、当遺構の南西部は、S X 02検出後にその掘り方を確認している。このため、平面的にやや歪んだ形状となっている(第68図)。また、S B 01と平面的に重複するが、調査ではその前後関係を明らかにすることはできなかった。

掘り方の平面形は隅丸長方形をなすが、南西隅に関しては、前述したようにやや歪んでいる。その規模は、主軸方向で1.81m、その直交方向で85cmを測る。掘り方の横断面は、箱型に近い逆台形をなし、検出面からの深さは33cmである。底部は平坦である。

掘り方の中央部で木棺の痕跡を検出することができた。平面形は長方形をなし、棺材がやや外側に傾いた状態で検出されている。底部は掘り方とほぼ同じで、棺を埋置するにあたって、整地等はなされていない。底部における規模は、主軸方向で1.09m、その直交方向で43cmを測る。

1. 灰黄褐色細砂混じり極細砂
2. にぶい黄褐色細砂混じり極細砂
3. にぶい黄褐色細砂混じり極細砂
4. にぶい黄褐色細砂混じり極細砂



第68図 S X 03

第3章 調査の成果

また、棺内に土砂（3層）が落ち込み、この箇所新たな土砂（1層・2層）が落ち込んでいる。このため、検出できた棺の深さは、23cmである。棺の主軸方向は、N29°Eを示す。なお、棺内に人骨は遺存せず、副葬品等も認められなかった。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版11)。

土師器は、皿(348)と埴(349)が出土している。皿は、手づくね整形によるもので、口縁部外面にわずかに弱い横ナデ調整が加えられている。埴は、羽釜型埴の口縁部片が出土している。

須恵器は、椀(350)が出土している。

時期 出土土器から、第VI期に位置付けられる。

S X 04

概要 A地区北東部で検出した(第17図)。S X 06の東側に隣接する。また、本遺構の北東辺はS B 01の南東西稜行とほぼ一致する。この他、S B 02と平面的に重複する。S K 01と切り合い関係にあり、S K 01を切っている。ただし、遺構の南東部は調査区外に広がっているため、全体を検出することはできなかった。平面形は、長方形を呈するものと考えられる。主軸方向で4.45m検出し、その直交方向で3.0mを測る。断面は皿形に近い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmである。埋土は、灰黄褐色シルト質細砂1層からなる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版12)。

土師器は、埴(351・352)と椀が出土している。351は、半球形の体部にく字形の口縁部が付くタイプである。体部外面および口縁部内外面がハケ調整、体部内面がナデ調整により、それぞれ仕上げられている。最後に、口縁部外面が横方向のナデ調整により仕上げられている。352は、口縁部がく字形をなす。体部外面から口縁部外面・口縁部内面はハケ調整、体部内面はナデ調整により仕上げられている。椀は底部を中心に残存し、糸切りにより切り離されている。11世紀後半の特徴を示すものである。

須恵器は、椀(353)が出土している。底部は平高台をなし、糸切りにより切り離されている。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。

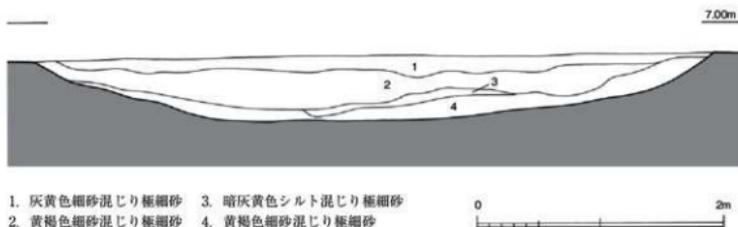
S X 05

概要 A地区東部中央で検出した。S X 06の南東側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められないが、遺構の南東部は調査区外に広がっているため、全体を検出することはできなかった。また、S B 03の一部と平面的に重複しているが、その前後関係については、調査では明らかでできなかった。平面形はかなり不定形で、落ち込みに近い。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmである。埋土は、上から、灰色シルト質極細砂・にぶい黄褐色シルト質細砂・灰黄褐色中砂～細砂の3層からなり、2層から鍛冶滓が出土している。

出土遺物 土師器・須恵器・瓦質土器・他が出土している(図版12)。

土師器は、埴・皿・椀・羽釜が出土している。椀は底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。底部は糸切りにより切り離されている。埴は、播丹形埴の口縁部と体部片が出土している。体部片の外面には叩き整形痕が認められる。いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器は、椀(354・355)・捏鉢(357)・壺・甕が出土している。椀は、東播系の椀で、354は平高台の痕跡が認められない。捏鉢は、口縁端部をわずかに拡張させている。壺は、突帯が貼り付けられたもので、



第69図 S X 06

その肩部が出土している。甕は体部片が出土している。

瓦質土器は、羽釜（356）が出土している。外面は罫を貼付け後、口縁部から罫にかけて横ナデ調整により、内面は板ナデ調整により仕上げられている。

他に、緑釉の小片が出土している。胎土は須恵質で、濃緑色の釉がかけられている。

時期 出土土器から、第Ⅳ期に位置付けられる。

S X 06

概要 A地区北東部で検出した(第17図)。S X 01の南東側、S X 04の西側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。ただし、S B 03と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。平面形は方形傾向にあるが、全体的に不整形である。その規模は、5.50m×5.80mである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは、50cmである。埋土は4層からなり(第69図)、2層から土器が多量に出土している。

出土遺物 土師器・青磁・白磁・陶器と鉄釘が出土している(図版12・17)。

土師器は、皿(358～361)と埴(362～366)が出土している。358と他は成形技法を異にし、359は軸轆成形に、358は手づくねによっている。358は、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられ、体部との境外面に段が認められる。359も、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。360と361は、底部から口縁部にかけて一帯となり、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

埴は、いずれも羽釜型埴に分類されるものであるが、362は罫が付かない。いずれも体部外面は叩き成形により、内面は362・363・365がナデ調整、364・366がハケ調整により仕上げられている。罫の幅は、いずれも8mmである。

青磁は、盤(367)が出土している。底部を中心に残存し、削り出しにより高台が造られている。内外面とも施軸されている。白磁は、碗の体部片(368)が出土している。

陶器は、369の天目碗の底部片が出土している。高台は削り出しにより造られ、内面のみ施軸されている。高台畳付には4箇所、目跡が認められる。

鉄釘はF 8の1点が出土している。先端を欠き、6.1cm残存する。

時期 出土土器から、第Ⅷ期に位置付けられる。

S X 07

概要 A地区中央部西端で検出した(第17図)。S X 08の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、大半は調査区外へ広がっている。平面形は長方形もしくは方形と考えられ、北東-南西方向で5.20mを測り、その直交方向で1.75m検出している。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、40cmである。埋土は、上から、褐灰色シルト・にぶい黄褐色シルト混じり細砂・にぶい黄褐色極細砂・にぶい黄褐色シルト混じり極細砂の4層からなる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版12)。

土師器は、羽釜形埴(370)と播丹型埴の口縁部片が出土している。370は口縁部の小片で、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。また、体部におおむね平行叩きの痕跡が認められる。

須恵器は、椀・捏鉢・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。椀は口縁部片が出土しており、12世紀～13世紀代の特徴を示している。甕は綾杉状叩きにより仕上げられている。

時期 出土土器から、第Ⅷ期に位置付けられる。

S X 08

概要 A地区中央部西側で検出した。S D 05の北側、S X 07の南東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形はやや歪んだ長方形を呈する。その規模は、主軸方向で2.90m、その直交方向で2.30mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは28cmである。底部は平坦ではなく、凹凸が顕著である。埋土は、上から、にぶい黄褐色シルト質中砂・にぶい黄褐色細砂～中砂・にぶい黄褐色極細砂・灰黄褐色中砂～細砂、の4層からなる。

出土遺物 時期を特定できる遺物が出土していない。

時期 上記の理由から時期の特定は困難であるが、周囲の状況から、中世と考えられる。

S X 09

概要 A地区南西部で検出した(第17図)。S X 10の北側に位置する。本遺構の東側でS D 07と接続しているが、S D 07との関係は、不明である。竪と切り合い関係にあり、竪に切られている。さらに本遺構の一部は調査区外へ広がっているため、全体を検出することはできなかった。平面形は、やや歪んだ楕円形をなすものと考えられる。その規模は、短軸方向で4.32mを測り、その直交方向で4.45m検出している。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは50cmである。埋土は、上から、明黄褐色シルト質極細砂・褐灰色シルト質細砂・灰白色細砂混じりシルト、の3層からなる。

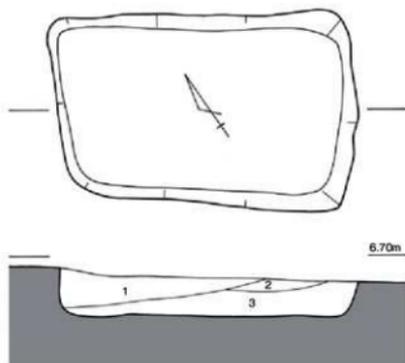
出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器は、埴と羽釜が出土している。埴は、羽釜形埴の口縁部片と播丹形埴(371)が出土している(図版12)。羽釜形埴については、口縁部片と底部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。371は、体部外面を叩き成形後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

羽釜は鈔部分を中心に残存し、体部には平行叩き痕が認められる。小片のため図化できなかった。

須恵器は、椀・捏鉢・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。椀は体部片が、捏鉢は口縁部片と底部片が、甕は体部片が出土している。捏鉢の口縁部は、14世紀以降の特徴を示すものである。また、体部外面は綾杉叩きにより整形されている。

時期 出土土器から、第Ⅶ期に位置付けられる。



1. ぶい黄橙色小礫混じり極細砂
2. ぶい黄橙色極細砂
3. ぶい黄褐色シルト混じり極細砂



第70図 SX10

最後に口縁部内外面が弱い横ナゲ調整により仕上げられるのに対して、後者は、内面がヘラナゲにより仕上げられ、横ナゲ調整は施されていない。また、375は歪みが顕著で、口縁部の形状が一定していない。柄は底部片が出土しており、11世紀後半と考えられる。

塀は、播丹型塀(376)が出土している。376は、体部外面が叩き成形、内面がハケ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。

須恵器は、捏鉢(372)が出土している。372は、口縁部の小片で、端部が上方に拡張され、端面は弧状をなす。

鉄釘は、F9～F11の3点出土している(図版17)。いずれも頭部を欠く。F9は2.1cm、F10は6.0cm、F11は4.8cm残存する。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

SX11

概要 A地区南西部で検出した(第17図)。SX12の西側、SX09の南東側に位置する。SX10・SX13・SX14と切り合い関係にあり、いずれの遺構にも切られている。このため、南西部の大半は検出できなかった。平面形は長方形をなすものと推定され、長軸方向で5.15m検出し、その直交方向は1.50mである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは9cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 出土遺物から時期を特定することは困難であるが、遺構の主軸方向から中世後半と考えられる。

SX10

概要 A地区南西部で検出した(第17図)。SX09の南側、SX13の西側に位置する。SX11と切り合い関係にあり、SX11を切っている。また、SB06と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。平面形は、隅丸長方形をなし、その規模は、主軸方向で3.10m、その直交方向で1.90mを測る。横断面は箱形をなし、底部は平坦面をなす。最深部における検出面からの深さは50cmである。埋土は3層からなり(第70図)、いずれも人為的に埋められた層である。

出土遺物 土師器と須恵器と鉄釘が出土している(図版12・17)。

土師器は、皿(373～375)と椀・塀が出土している。皿は、いずれも手づくね成形によるが、373・374と375で特徴を異にする。前者は、最

S X 12

概要 A地区南西部で検出した(第17図)。S X 11の東側、S X 13の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長方形をなし、その規模は、主軸方向で3.25m、その直交方向で1.38mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは63cmである。底部は平坦面をなす。埋土は、上から、にぶい黄褐色シルト質極細砂・褐色極細砂・にぶい黄褐色シルト混じり極細砂の3層からなる。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 出土遺物から時期を特定することは困難であるが、遺構の主軸方向から中世後半と考えられる。

S X 13

概要 A地区南西部で検出した(第17図)。S X 10の東側、S X 12の南側に位置する。S X 11と切り合い関係にあり、S X 11を切っている。このため、本遺構は完存する。平面形は長方形をなし、その規模は、主軸方向で2.05m、その直交方向で1.30mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは47cmである。底部は平坦面をなす。

埋土は、上から、にぶい黄褐色極細砂・にぶい黄褐色シルト混じり極細砂・灰黄褐色極細砂の3層からなる。特に最下層の下面には炭が層状に堆積していた。また、上の2層については、その層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物 土師器の埴(377・378)が出土している(図版12)。377は、口縁部を中心に残存し、く字形をなす。端部は内側につまみ出されている。体部外面は吹き成形、内面はナゲ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。378は、兜形に分類されるもので、口縁部内端部が肥厚させられている。体部外面は吹き成形、内面はナゲ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、第Ⅷ期に位置付けられる。

S X 14

概要 A地区南西部で検出した(第17図)。S X 10・S X 13の南側に位置する。またS X 15と切り合い関係にあるが、前後関係を明確にすることはできなかった。平面形は長方形をなし、その規模は、主軸方向で4.20m、その直交方向で2.73mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは23cmである。埋土は、上から、灰黄褐色極細砂・にぶい黄褐色極細砂・灰黄褐色シルト質極細砂の3層からなる。2層から土器が出土しており、その上層は人為的に埋められた層と判断される。

出土遺物 土師器の皿(379～381)が出土している(図版12)。いずれも手づくね成形によるが、379・380は手づくねのみにより仕上げられ、歪みが顕著である。381は、口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられ、体部との境界面に段が認められる。

時期 出土土器から、第Ⅴ期に位置付けられる。

S X 15

概要 A地区南西部で検出した(第17図)。S X 13の南側、S X 16の南西側に位置する。先述したように、S X 14と切り合い関係にあるが、前後関係を明らかにすることはできなかった。S X 14とは主軸方向を直

交させている。平面形は長方形をなすものと考えられ、短軸方向で1.49mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは32cmである。

出土遺物 土師器の皿(382)が出土している(図版12)。手づくねのみにより仕上げられ、歪みが顕著である。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。

S X 16

概要 A地区南西部で検出した(第17図)。S X 14の東側、S X 17の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、後世の擾乱を受け、検出できたのは全体の1/2以下である。平面形は長方形をなすものと考えられ、主軸方向で2.43mを測り、その直交方向で80cm検出した。横断面は逆台形をなすものと考えられ、最深部における検出面からの深さは46cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 出土遺物から時期を特定することは困難であるが、遺構の主軸方向から中世後半と考えられる。

S X 17

概要 A地区南西部で検出した。S X 15の東側、S X 16の南側に位置する。S X 16同様、後世の擾乱を受け、検出できたのは全体の1/2以下である。平面形は長楕円形もしくは長方形をなすものと考えられ、長軸方向で2.70m検出した。横断面は、検出した範囲では逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは32cmを測る。埋土は、上から灰黄褐色シルト混じり極細砂・にぶい黄褐色シルト混じり細砂の2層で、いずれもその層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土器と鉄器が出土している。鉄器は、鉄釘(F13)が出土している(図版18)。先端を欠き、7cm残存する。土器は、土師器の皿(383)が出土している(図版12)。手づくね成形により、口縁部内外面が弱い横ナゲ調整により仕上げられている。全体的に粗い仕上げである。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。

S X 18

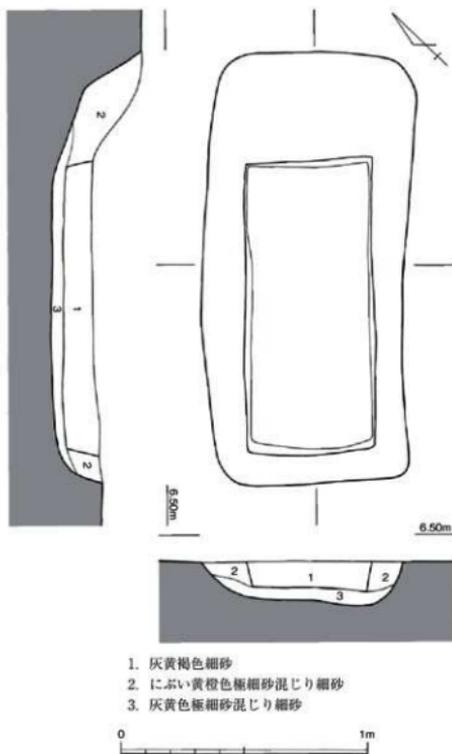
概要 A地区南西部で検出した(第17図)。S B 06の南側、S B 07の西側に位置する。S X 15と切り合い関係にあり、北側の一部をS X 15に切られている。このため、北側の一部を検出することはできなかった。平面形は、隅丸長方形をなすものと考えられ、主軸方向で2.50m検出し、その直交方向で1.54mを測る。横断面は、残存する範囲では逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは40cmである。埋土は、褐色シルト混じり細砂4層からなるが、その層相から判断して、いずれも人為的に埋められたものである。

出土遺物 土師器の皿(384)が出土している(図版12)。手づくね成形により、口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。

S X 19

概要 A地区南東部に位置する木棺墓である(第17図)。S D 05の南側、S X 21の北側に位置し、S X 21とは主軸方向をほぼ90° 逸している。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する(第17図)。



第71図 S X 19

掘り方の平面形は隅丸長方形をなし、その規模は、主軸方向で1.75m、その直交方向で81cmを測る。また、横断面は箱形をなし、最深部における南西側検出面からの深さは19cmである。

棺材そのものは遺存していなかったが、土質の違いから、棺の痕跡を掘り方のやや南西寄りで確認することができた。その棺底部での規模は、主軸方向で1.15m、その直交方向で48cmである。また、主軸方向は、 $N46^{\circ}30'E$ を示す。棺底は、掘り方底部に約5cmの整地層（3層：第71図）の上に置かれている。棺検出面から棺底部までの深さは、12cmである。棺内からは、副葬品等は認められなかった。

出土遺物 須恵器の椀（385～387）が出土している（図版13）。東播系の椀で、底部が残存する387は、わずかに平高台の痕跡をとどめる。底部は回転系切りに切り離されている。

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

S X 20

概要 A地区南東部に位置する。S B05の北側、S D05の西側、S X19の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は、隅丸長方形をなす。その規模は、主軸方向で1.17m、その直交方向で80cmを測る。横断面は皿形に近い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、20cmである。埋土は、上から、暗灰黄色極細砂～細砂・黄褐色極細砂～細砂の2層からなり、下層から石塊の小片が出土している。

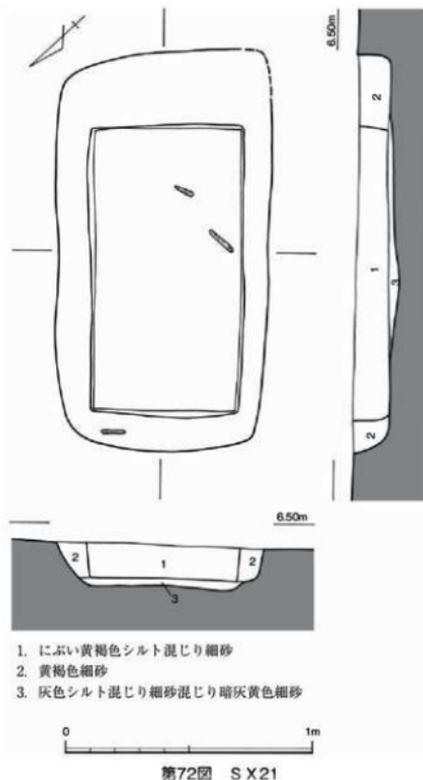
出土遺物 須恵器の握鉢と石塊の小片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期 出土土器から、中世後半に位置付けられる。

S X 21

概要 A地区南東部に位置する木棺墓である（第17図・第72図）。S B05の北西隅、S X19の南側に位置し、S X19とは主軸方向をほぼ 90° 違えている。一部柱穴に切られている以外、ほぼ完存する。

掘り方の平面形は隅丸長方形をなし、その規模は、主軸方向で1.63m、その直交方向で85cmを測る。ま



1. にぶい黄褐色シルト混じり細砂
2. 黄褐色細砂
3. 灰色シルト混じり細砂混じり暗灰黄色細砂

第72図 S X 21

時期 出土土器から、第Ⅲ期に位置付けられる。

S X 22

概要 A地区南部で検出した(第17図)。S K 10の西側に隣接して位置する。また、S B 05と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。

平面形は、部分的に不整形形であるが、長方形を呈する(第73図)。その規模は、長軸方向で95cm、その直交方向で65cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmである。埋土は2層からなり(第73図)、2層から土器が出土している。

出土遺物 瀬戸・美濃系の折縁小皿(388)が出土している(図版13)。口縁部を折り、端部を上方に摘み上げている。体部から口縁部にかけて回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転系切りにより切り離されている。内面全面と口縁端部が施釉されている。

時期 出土土器から、第Ⅴ期に位置付けられる。

た、横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmである。

棺材そのものは遺存していなかったが、土質の違いから、棺の痕跡を掘り方のやや北西寄り確認することができた。その棺の規模は底部で、主軸方向が1.15m、その直交方向が59cmである。また、主軸方向は、N46° Wを示す。棺底は、掘り方底部に若干の盛土(3層:第72図)で整地された上に置かれている。棺検出面から棺底部までの深さは、13cmである。棺内底部付近から、鉄製品が2点出土している。

出土遺物 土器と鉄製品が出土している。

土器は白磁碗が出土している。

鉄製品は、釘(F 12)・にぎり鉄(F 22)・不明品(F 25)が出土している(図版18)。釘は3点出土しているが、図化できたのはF 12の1点に限られる。棺底もしくはその周囲から出土していることから、棺材の接合に使用されたものと考えられる。F 12は頭部を欠き、8.3cm残存する。にぎり鉄のF 22は、完存し、全長10.70cmを測る。刃長は4.30cm、刃幅は6mmである。F 25は、鎌の刃の可能性が考えられる製品で、片刃をなす。残存長は8.10cm、幅は4.10cmである。厚さは2mmである。

S X 23

概要 A地区南東部で検出した(第17図)。S X 22の南東側に位置する。S B 05と平面的に一致するが、調査ではその前後関係を明らかにすることはできなかった。また、本遺構の多くは調査区外に拡がっており、検出できたのは、全体の1/2ほどである。平面形は不整形で、主軸方向で4.80mを測り、その直交方向で2.00m検出している。横断面は、検出した範囲では逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは64cmである。

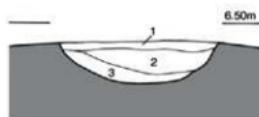
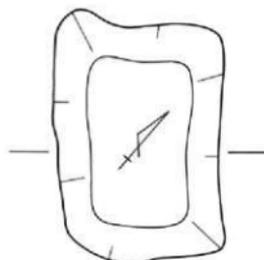
埋土は、上から、褐灰色シルト混じり細砂・灰白色シルト混じり極細砂・黄褐色細砂混じり極細砂・褐灰色シルト質細砂の4層からなり、下の2層は自然堆積によるものと考えられる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している(図版13)。

土師器は、皿・甕・羽釜(391・392)が出土している。皿は手づくね整形により仕上げられている。甕は口縁部片が出土している。羽釜は2個体とも同タイプに分類できるものである。口縁部下に幅2.5cmの鈎が貼付けられ、口縁部にかけて横ナゲ調整により仕上げられている。内面は横方向のナゲ調整により仕上げられている。体部外面は、ハケ調整により仕上げられている。

須恵器は、椀(389)と捏鉢(390)が出土している。椀は東播系の椀で、底部は平高台をなし、糸切りにより切り離されている。捏鉢は明確な平底をなし、回転糸切りにより切り離されている。

時期 出土土器から、第Ⅱ期に位置付けられる。



1. 褐灰色粗砂混じり極細砂
2. 灰褐色細砂混じり極細砂
3. 褐色粗砂混じり極細砂



第73図 S X 22

S X 24

概要 A地区南部で検出した(第17図)。S B 05の西側、S D 07の南側に位置する。溝状を呈する遺構で、西端は後世の擾乱を受け、東端は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。検出した長さは9.05m、幅は5.70mである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは38cmである。埋土は、上から、灰黄褐色シルト質細砂・灰黄褐色シルト質細砂～中砂・褐灰色シルト質中砂～細砂・灰白色シルト混じり細砂の4層からなり、いずれも自然堆積によるものと考えられる。

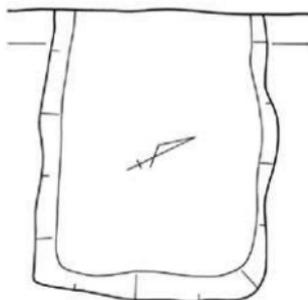
出土遺物 土器と鉄製品が出土している。

土器は、土師器・緑釉陶器・須恵器が出土している(図版13)。

土師器は、皿(393)・羽釜(394)・羽釜形場が出土している。皿は、手づくね成形によるもので、口縁部内外面は横ナゲ調整により仕上げられている。羽釜は、幅2.5cmの鈎が貼付けられ、口縁部にかけて回転ナゲ調整により仕上げられている。場の体部外面は叩き整形により仕上げられている。

緑釉陶器は、295の1点が出土している。口縁部の小片で、胎土は須恵質である。

須恵器は、椀(396・398)・捏鉢(397)・壺(399)が出土している。椀は、2個体とも同タイプの東播系椀である。396の体部外面には2条の沈線が施されている。398は平高台で、糸切りにより切り離されている。捏鉢の397は、口縁部を拡張させ、外端面を有する。壺は、肩部の小片である。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナゲ調整により仕上げられ、ナゲ調整により突帯が貼り付けられている。



鉄製品は、F21の刀子が1点出土している(図版18)。ほぼ完存するが把部の一部を欠く。全長9.70cmを測り、刃部の長さは7.40cm、刃幅は1.60cmである。

時期 出土土器から、第II期に位置付けられる。

S X 25

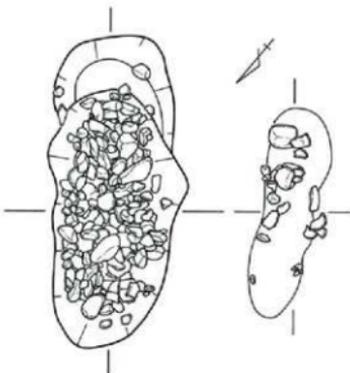
概要 B地区のSD10・12・14で区画された敷地の西端に位置し、遺構の西端をSD12に切られている(第18図)。東西の現存長3.00m、南北が最大3.30mの不定形な落ち込みである。底面は東端が深く、西側は浅く輪郭も不明瞭となる。

出土遺物 土師器と備前焼が出土している(図版13)。土師器は、埴の口縁部片(400)が出土している。羽釜型埴の一部で、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。備前焼は口縁部片が2点(401・402)出土している。401は端部を上方につまみあげるタイプで、402は玉縁状をなすタイプである。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。



第74図 S X 26

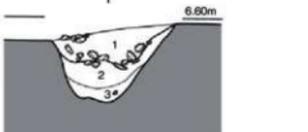


S X 26

概要 B地区のSD10・SD12・SD14で区画された敷地の西端に位置し、遺構の西端をSD12に切られている(第18図)。東西の残存長2.37m、南北1.78mの長方形の土坑である。底面は水平で、壁面は緩く立ち上がる。検出面からの深さは、24cmである(第74図)。

出土遺物 土師器の皿(403)が出土している(図版13)。手づくね成形によるもので、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。内外面とも化粧土が塗布されている。

時期 出土土器から、第IV期に位置付けられる。

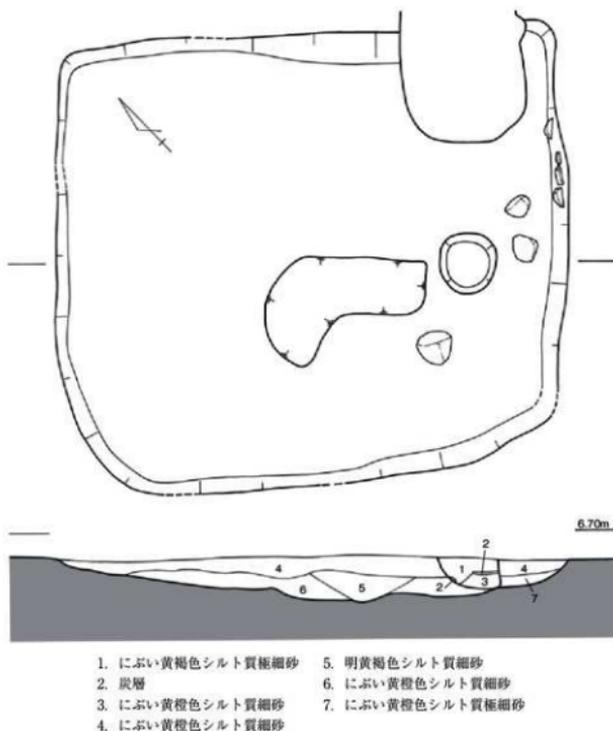


1. 褐灰色シルト質中砂～粗砂
2. 黄褐色シルト質中砂
3. 褐灰色シルト質極細砂～中砂

第75図 S X 27

S X 27

概要 B地区北端の、SD10・SD12・SD14で区画された敷地内に位置し、SD14の北界に沿った場所を占める。全長2.54m、幅1.00mの細長い遺構で、南端の二段の掘り込みを切り合いとみれば、全長は2.11mとなる。横断面は逆台形を呈するが、埋土上層には5～30cm大の礫(いわゆる河原石)がぎっしりと詰まっている(1層)。検出面から1層下面までの深さは33cm、



第76図 SX28

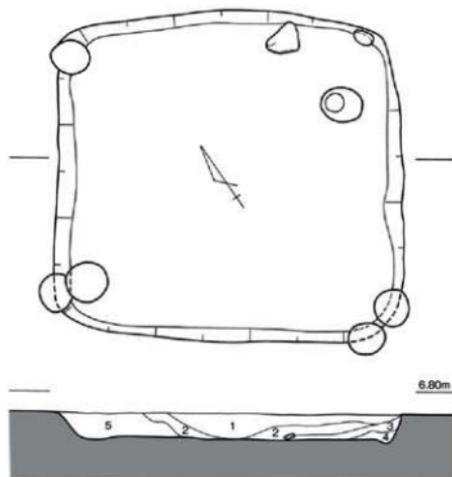
底面までの深さは64cmである。礫層中には須恵器甕の破片が混じっており、上層の礫を取り去った下層にも須恵器片や土師器小皿・杯などが含まれていた。本来、遺物を覆っていた礫層が内部へ陥没して、中の遺物を埋めたような状況が想定できる（第75図）。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している（図版13・14）。

土師器は、皿（404～411）と埴（412・413）が出土している。皿は、411を除いては手づくね成形によるもので、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。手づくね成形によるものは、法量的に深く杯に近いタイプ（404・405）と浅いタイプ（406～410）に分類できる。

埴は2個体とも播丹型に分類されるものである。ただし、端部の特徴を異にし、412は玉縁状をなすのに対し、413は外方につまみ出されている。また、412の体部内面には当具痕が認められる。

須恵器は、碗（414）・捏鉢（415～421）・甕（422・423）が出土している。碗は414の1個体で、東播系の碗の底部片である。平高台の痕跡は認められず、回転系切りにより切り離されている。捏鉢は、419と420を除いては、口縁端部を上方に拡張させ、外端面が弧状をなす。一方420は、わずかに上方に拡張させ、明



1. 灰黄褐色シルト質極細砂
2. 灰黄褐色シルト質細砂
3. 灰黄褐色シルト質中砂
4. 灰黄褐色シルト質粗砂
5. 褐灰色シルト質中砂



第77図 S X 29

ている。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

S X 29

概要 B地区のSD10・SD16・SD18で区画された敷地の北端に位置する(第18図)。SD17を切り、掘立柱建物SB12に切られている。東西2.78m、南北2.70mの方形土坑で、浅く斜めに掘り込んで、底面を水平につくる。検出面からの深さは、20cmである。第1層下面で火を焚いたらしく炭層が広がっており、埋土にも炭が多く含まれる(第77図)。

出土遺物 土師器の皿(425~428)が出土している(図版14)。いずれも手づくね成形によるものであるが、形態上の特徴から、428とそれ以外の2タイプに分類できる。428は、磨滅のため調整を観察することはできない。歪みが顕著である。一方前者は、口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

S X 30

概要 B地区のSD10・SD16・SD18で区画された敷地の中央に位置する(第18図)。掘立柱建物SB12に切られている。東西3.13m、南北2.99mの方形土坑だが、北西隅は角が丸くなっている。底面は北側がやや深くなるが、全体的には平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。検出面からの深さは、23cmである。

確な外端面を有する。421は、明確な平底をなす底部片で、胎土・色調等の特徴から、420と同一個体の可能性が高い。甕の423の外面には綾杉叩きが施されている。

時期 出土土器から、第IV期に位置付けられる。

S X 28

概要 B地区中央北寄りの、SD10・SD14・SD16で区画された敷地内の中央に位置する(第18図)。東西4.1m×南北3.7m前後のややいびつな方形土坑である。底面は東側がやや深くなるが、全体的には平坦で、壁面は緩く立ち上がる。検出面からの深さは、中央で35cmである。東壁付近の底面に、10cm~30cm大の礫が散在する。

出土遺物 須恵器の甕(424)と埴鉢が出土している(図版14)。口縁端部はわずかにつまみ上げられ、直立する外端面を有する。体部は平行叩きにより成形され

出土遺物 須恵器椀と土師器の皿(429～431)が出土している(図版14)。429は手づくね成形により、内面はナデ調整により仕上げられている。430は、底部内外面がナデ調整、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられているが、轆轤成形によるものかについては判断できない。431は手づくね成形により、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、第V期に位置付けられる。

S X 31

概要 B地区中央南寄り東西に延びる溝SD18がSD10に接続する手前に設けられた、大きな水溜め状の遺構である。

平面形は東西北辺が直線的で、南辺が円錐形を呈し、東西5.7m×南北6.2m前後を測る。東辺とSD10の間は稜線状の壁が隔てるだけで、東辺の南北2箇所が、10～15cm低い鞍部となっている。断面形は緩い逆台形で、東側と南側斜面は、浅いステップを設けている。検出面からの深さは、最大で1.10

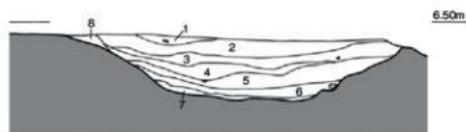
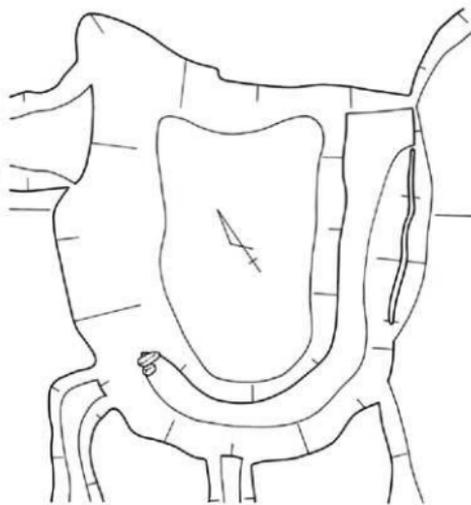
mである。埋土の最下層(7層)には有機質成分が多く含まれており、滞水状況であったとみられる。その後は順次堆積しており、洪水砂(3・4層)で埋もれても、浸透されることはなかった(第78図)。

周囲の遺構との関係を標高で比較すると、西側のSD18の底面が約5.9m、北東隅の最も低いところが約5.8mで、オーバーフローした水はSD10に溢れることになるが、そこまで常に湛水していたとは限らない。南側に接続するSD19とSD20の底面の標高は5.95～6.15mで、こちらから水が排出することはない。

立地の上からは、屋敷地の境界でSD10の際に設けられた水溜めということになる。これが実用的なものか、観賞用かなどを含めて、現段階ではその用途・性格は不明である。

出土遺物 土師器・丹波焼・備前焼・須恵器・瓦質土器が出土している(図版14)。

土師器は皿(432)と埴(433～438)が出土している。皿は、手づくね成形によるもので、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。埴は、羽釜型埴(433～437)と鉄かぶと型埴(438)に分類できる。前者は、口縁部下に突帯がつくものと付かないものが認められる。体部内面は、ナデ調整により仕上げられるもの(433・436)とハケ調整により仕上げられるもの(434・435・437)が認められる。後者は、内面



1. 灰白色シルト質細砂
2. 褐灰色シルト質中砂～細砂
3. 灰白色極細砂～細砂
4. 灰白色極細砂～中砂
5. 褐灰色シルト質極細砂
6. 灰色シルト質極細砂
7. 青灰色シルト質極細砂
8. にぶい黄橙色シルト質中砂

第78図 S X 31

が帯状に肥厚し、横ナデ調整により仕上げられている。体部内面はナデ調整により仕上げられている。いずれも体部外面は平行叩きにより成形されている。

備前焼は、擂鉢1個体(439)が出土している。口縁端部を上下方向に拡張させ、横ナデ調整により仕上げられている。底部は未調整である。また、内面の使用痕が顕著である。

丹波焼は、440の鉢1個体である。残存する範囲で卸し目が認められないことから、捏鉢と判断される。内面には使用痕が認められる。内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。

須恵器は、甕の体部片(441)が出土している。

瓦質土器は浅鉢の底部片(343)と442の浅鉢1点が出土している。442は、底部を中心に残存し、その剥離痕から3箇所が脚が付くものと考えられる。体部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、第Ⅶ期に位置付けられる。

S X 32

概要 B地区のSD21・22が直角に曲がったコーナーの北側に位置し、両方の溝を切っている(第18図)。この溝はSD19・20にもそれぞれつながっており、底面にその痕跡が残る。東西4.90m、南北3.25～3.95mの方形土坑で、北東隅が一部突出している。底面は東側がやや深くなるが、全体的には平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。検出面からの深さは、19cmである。

出土遺物 土師器の皿(443)が出土している(図版14)。轆轤成形によるもので、底部は糸切りにより切り離されている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から、第Ⅵ期に位置付けられる。

(8) 畠

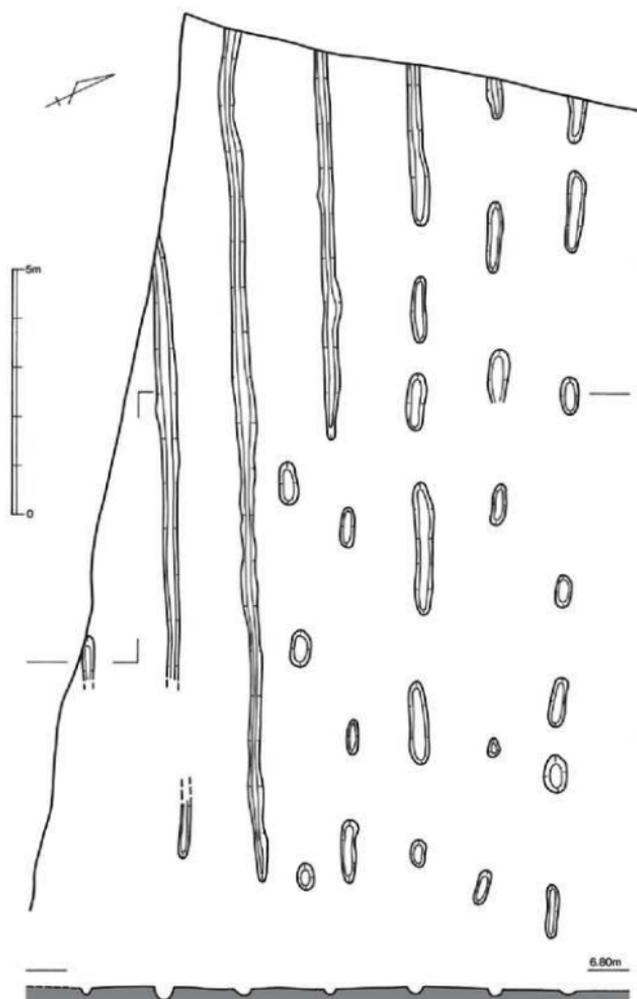
C地区南端部で1区画(畠1)検出している(第19図)。

畠 1

概要 7条の鋤溝からなる(第79図)。全体を検出できたのではなく、調査区南西側に広がっている(第19図)。北西-南東方向に主軸をとり、その方位はN67°Wを示す。北側ほど鋤溝の遺存状況は良好ではなく、深い箇所のみ点的に検出されている。鋤溝の長さは、最大で17.5m検出されている。鋤溝相互の間隔は、溝の肩間で1.20m～1.50mを測る。鋤溝の横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは、10cm～15cmである。また、検出面における幅は25cm～35cmである。

出土遺物 須恵器と土製品が出土している(図版14)。須恵器は椀(444)が出土している。底部は平高台をなし、糸切りにより切り離されている。土製品は土鍾が1点(445)出土している。ほぼ完存し、全長3.8cm、径7mm～9mm、2.3gを測る。

時期 出土土器から、第Ⅱ期に位置付けられる。



第79図 畠1

(9)その他

包含層から、本遺跡を検討する上で良好な資料が得られている。そこで、出土土器を中心に報告する。包含層からは、土器・鉄製品・石製品が出土している。

土器は、土師器・須恵器・陶器・瓦質土器・丹波焼・備前焼・青磁・白磁・黒色土器・土鍾・瓦が出土している(図版14～17)。

土師器は、皿(446～452)・埴(453～466)・羽釜(532)が出土している。皿は、451を除いては、手づくね成形によるものである。これらは、最後に口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。449は、口縁部をつまむような指オサエの後、横ナゲ調整により仕上げられている。また、452は、口縁部内外面が弱い横ナゲ調整により仕上げられている。なお、449など、杯形に近いものもあるが、成形技法から皿として報告する。最後に、451は軸輪成形によるもので、底部はヘラ切りにより切り離されている。口縁部内外面は回転ナゲ調整により仕上げられている。また、化粧土が塗布されている。

埴は、播丹型埴(453～458)・鉢型埴(459・460)・羽釜型埴(461～466)の3タイプが認められる。播丹型埴は、口縁端部の形状にバリエーションが認められる。また、体部内面の仕上げもナゲ調整によるものと、ハケ調整によるもの、が認められる。鉢型埴は、外傾する口縁部下に突帯が貼付けられるもので、体部内外面はナゲ調整、口縁部内外面は横ナゲ調整により、仕上げられている。羽釜型埴は、口縁部から突帯の形状に個体差が認められる。特に466は、口縁部が直線的で、体部内面に当具痕が認められる。

羽釜は532の1個体である。内傾する口縁部下に鈔が貼り付けられ、口縁部内外面にかけて横ナゲにより仕上げられている。体部内面は横方向のハケ調整により仕上げられている。

須恵器は、椀・皿・杯B・鉢・捏鉢・甕が出土している。

椀は、全て東播系の椀であるが、底部の形態において、平臺を有するものから、その痕跡が認められないものまで、バリエーションが認められる。また、476の底部は、ヘラにより切り離されている。

皿は、高台付皿(478・479)と他(480)に分類できる。前者は、底部を糸切りにより切り離し後、高台がナゲ調整により貼り付けられている。体部から口縁部は内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。後者は、平底の小皿で、底部は糸切りにより切り離されている。

杯Bは481の1個体である。内面は回転ナゲ調整により、外面はナゲ調整により仕上げられている。

鉢は、482の1個体である。内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。

捏鉢は、口縁端部を拡張させ、上方につまみ上げるタイプが大半である。外端面は弧状をなす。このなかで494はタイプを異にし、口縁部を屈曲させ、端部は口縁部に直交する端面を有する。

陶器は、瀬戸・美濃焼が2点(497・498)出土している。497は椀で、内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられ、施釉されている。498も瀬戸焼と考えられる椀で、内外面とも施釉されている。

瓦質土器は、鉢(499)と羽釜(500・533)が出土している。499は、底部を中心とした個体で、体部下端外面に断面菌鉢形の突帯が貼り付けられている。底部から突帯までの外面はヘラ削り、他はナゲ調整により仕上げられている。500は鈔を中心に残存する。幅2.35cmの鈔が横ナゲ調整により貼り付けられ、鈔より上側の外面は暗文状のヘラマガキが施されている。533は、口縁部を中心に残存するが、幅3.1cmの鈔が貼付けられている。この土器は、胎土の特徴は土師器であるが、焼き上がりは瓦質となっている。

丹波焼は、捏鉢(502)と甕(503・504・509)が出土している。捏鉢は、口縁部の片口部分を中心に出土している。片口は指オサエにより、他は横ナゲ調整により仕上げられている。甕は、口縁部を中心に出土し、玉縁状を呈するもの(503)と、N字形を呈するもの(504)が出土している。

第3章 調査の成果

備前焼は、播鉢(505~508)が出土している。Ⅲ期の特徴を示すもの(507)とⅤ期の特徴を示すもの(505・506)が認められる。

青磁は、碗が13個体(511~523)出土している。514と519には連弁が認められる。514は縁が認められるが、519は認められない。白磁は、碗が8個体(524~531)出土している。524と527はⅡ類、526はⅣ類に分類されるものである。

黒色土器は、534の1点が出土している。底部を中心に残存し、断面逆台形の高台が横ナデにより貼り付けられている。内面のみ黒化させたA類の椀である。内面の暗文は、磨滅のため観察できない。

土鍾は3点(535~537)出土している。いずれもほぼ完存する。537は須恵質、他は土師質である。535は、全長3.1cm、最大径9.5mm、536は全長4.5cm、最大径1.3cm、537は全長5.1cm、最大径1.5cmを測る。

瓦は、軒丸瓦(538)と平瓦(539・540)が出土している。538は、巴文瓦の一部で、表面には離れ砂が認められる。中央部の厚さは2.05cmで、復元される内区径は8.5cmである。平瓦は、全て小片で、540は須恵質に焼成されている。凹面には布目が認められ、540の凸面はヘラナデにより仕上げられている。

鉄製品は、釘・刀子・留め具・小札・不明品が出土している(図版18)。釘は、F14~F17の4点が出土している。F14とF16はほぼ完存し、その長さはF14が4.5cm、F16が6.3cmを測る。F15とF17の残存長は、それぞれ5.8cm・4.5cmである。小札の巾は、1.95cmである。

刀子は、F20の1点である。刃部のみ残存し、全長は12.95cmである。また、刃幅は1.20cm、棟幅は4.50mmである。留め具は、F23の1点である。2.20cm×2.60cmのリング状をなし、断面は3mm×6mmの長方形をなす。小札は、F24の1点である。完存はしないが、孔が2列で計10穴認められる。孔の径は2mmである。厚さは2.50mmである。

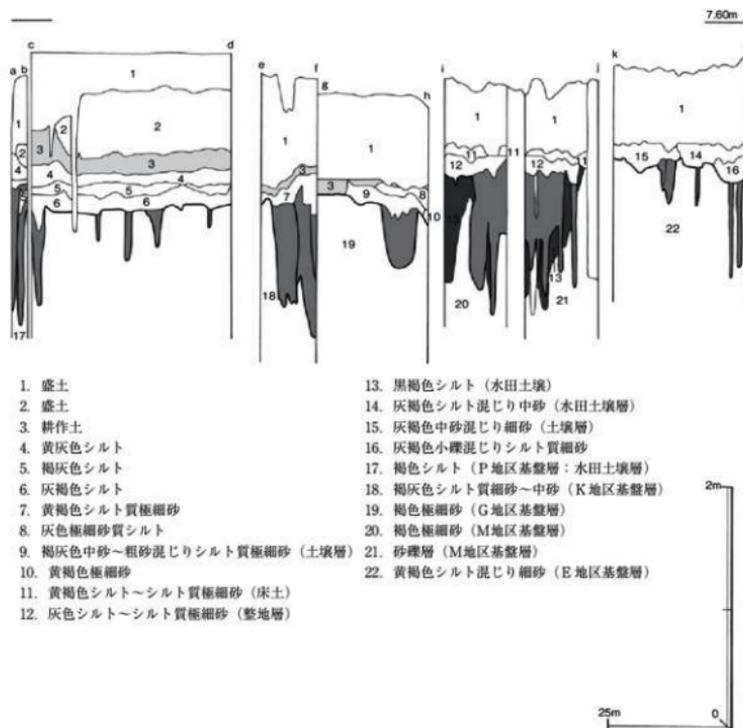
この他、F27は不明品である。厚さ2~3mmの鉄片に断面三角形の突帯状の隆起が認められる。

石製品は、S5とS6の2点出土している(図版17)。S5は、砥石と考えられ、4面が使用されている。一部を欠き、10.20cm残存する。幅は2.70cm、厚さは9mmである。S6は砥石の一部と考えられる。5.60cm×3.50cmと小型の製品である。厚さは1.10cmである。

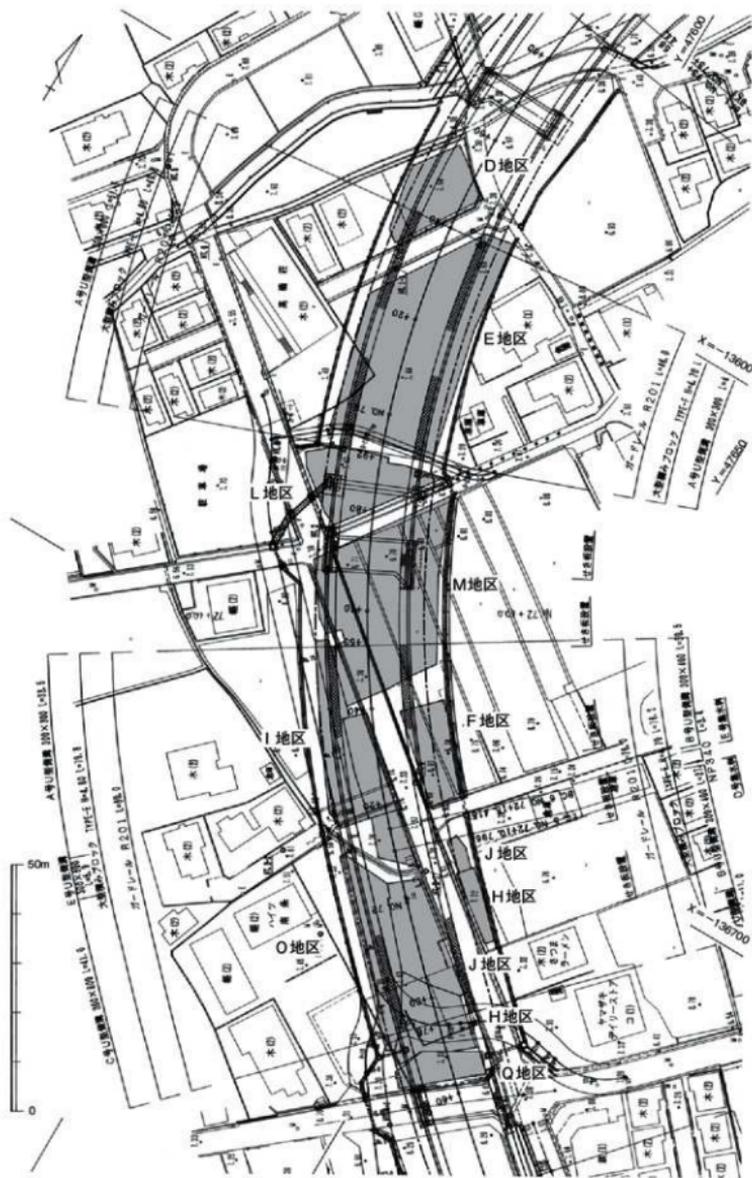
第3節 南地区の調査

1. 調査の概要

南地区は、D地区～Q地区の14地区からなる(第81図)。14地区のなかで、L地区・M地区・F地区の3地区においては、2面にわたって遺構を検出している(第84図)。上層を第1面、下層を第2面と呼称する。なお、南地区の報告にあたっては、調査地が大きく弧状をなしていることから、方位については北地区とは異なり、実際の方位に合わせて記述する。時期については、北地区同様、第5章の検討結果に基づくものである。



第80図 南地区基本土層図



第81図 南地区調査位置図

2. 基本層序と遺構の検出(第81図)

南地区については、調査が分割して行われたため、調査地全体を見通す断面観察がでなかった。また、調査担当者も異なるため、統一した視点での観察もできていない。このため、本項では、基本的な土層について、主な調査区の断面をもとに概略する。

南地区に共通して認められる基本的な土層は、上から、盛土層・耕作土層・床土層・基盤層である。そして、基盤層上面で遺構を検出している。ただし、2面にわたって遺構を検出した地区では、基盤層上面と、床土層上面で遺構を検出している。

盛土層については、各調査区で認められ、60cm～80cm盛られていた。この厚さのなかには、アスファルト等も含むものである。

耕作土については、東側ほど良好に認められた。これは、後述するように、基盤層が西側ほど高いことに起因するものと考えられる。つまり、当初、西側が全体的に微高地となっており、西側を削平し、東側に盛っていったことによるものと考えられる。

床土層は、4層～16層が該当する。出土土器から判断して、中世以降に形成されたものと考えられる。この中で、12層中には黄褐色シルトがブロック状に含まれており、整地層と考えられる。水田造成に伴う中世の整地と考えられる。整地→耕土化が繰返された結果と考えられる。

基盤層は、調査区によって大きく異なる。M地区(13層)とP地区(17層)では、基盤層が水田土壌層となっていた。このほか、18層中には弥生土器が包含されていた。

また、M地区では、基盤層が西側では砂礫層、東側では極細砂となっていた。砂礫層を詳細に観察すると、大きく3層に分層できるが、これらの堆積状況から、当地は西側から東側へ堆積したポイントバーの東側先端部と考えられる。礫層間の砂層からは弥生時代中期前半の土器が出土している(802・803; 図版28)。また、極細砂層(13層)の上面が水田土壌層となっている。他との層序関係から、弥生時代中期以降と考えられる。

最後に、基盤層のレベルを観察すると、西側ほど高くなっていることが観察できる。最高所のE地区では6.50mであるのに対して、東側のO地区では6.00mと、1.50mの差が認められる。これは、第1節でも述べたように、当地の微地形の形成過程と関連するものである。当地が、完新世段丘I面にとりまう氾濫原化後、徐々に埋没していく。その過程で最も埋没が進行したのが西側の地区である。逆に、東側の地区は微凹地もしくは河道であったものと考えられる。

つまり、E地区からM地区にかけて堆積した礫層を中心に新たな微高地が形成されていたものと考えられる。その一端が、M地区で観察されたポイントバーである(第82図)。また、M地区は上記微高地の縁辺部にあたり、ここが水田化されたのが13層と考えられる。その後、中世以降より東側が埋没していくにしがたい、水田化されていたものと考えられる。



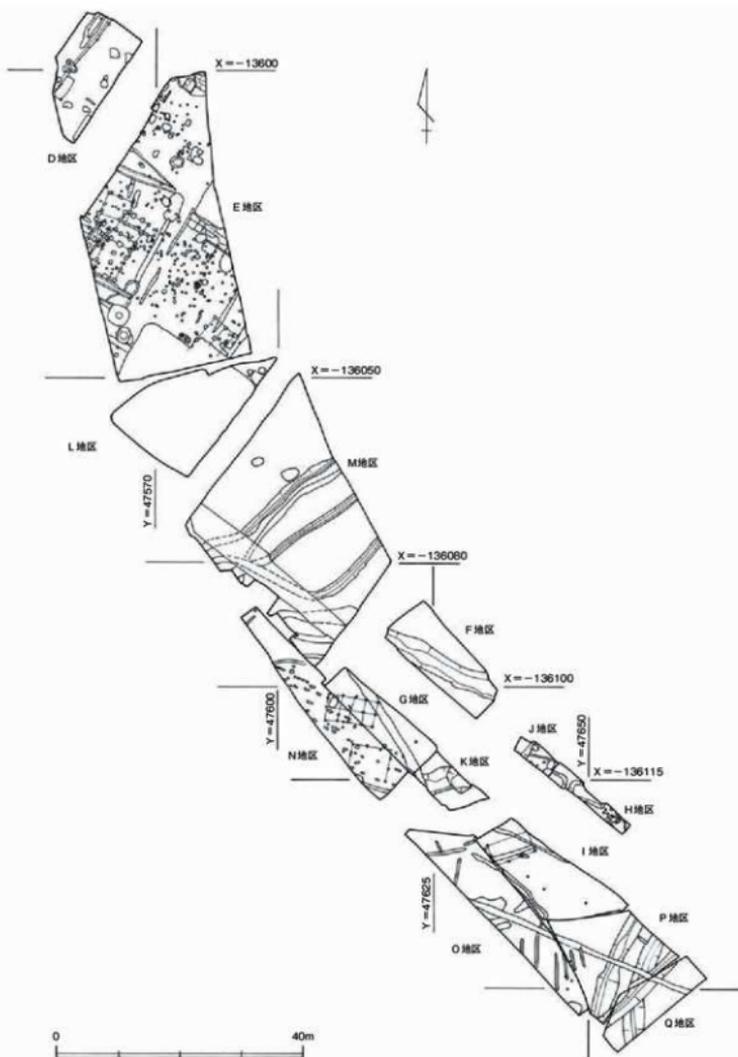
第82図 ポイントバー断面

第3章 調査の成果

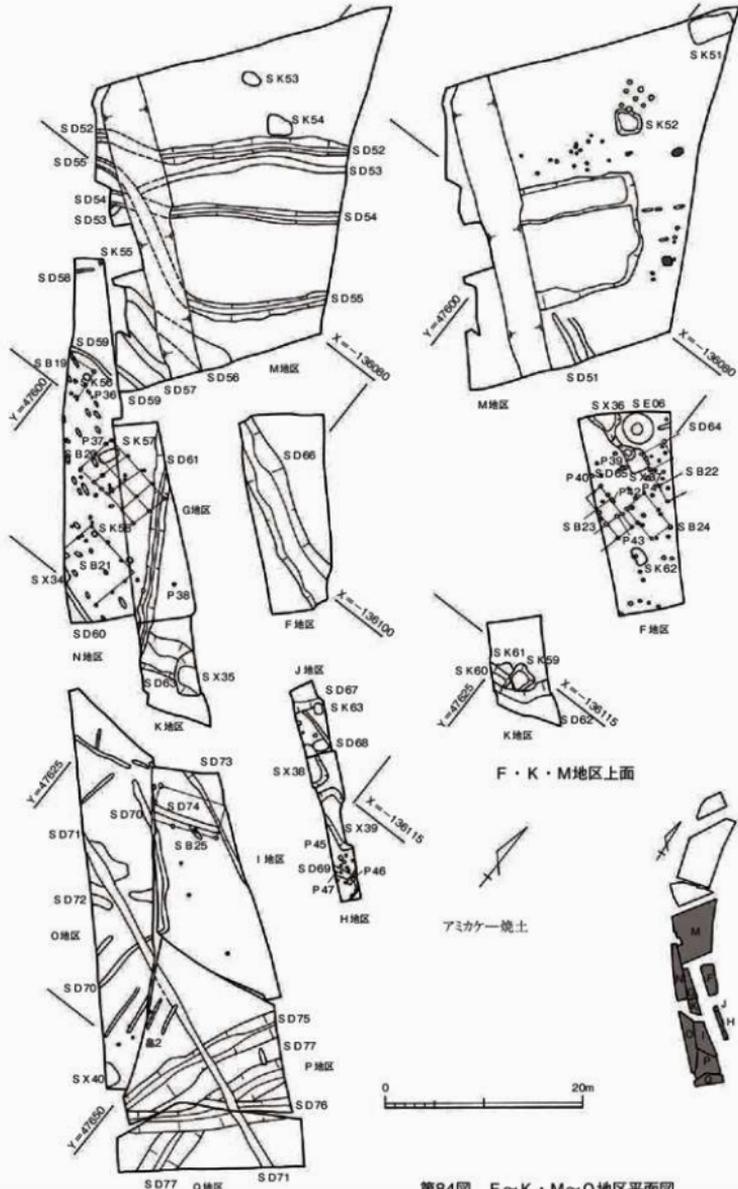
3. 調査の成果

(1)はじめに

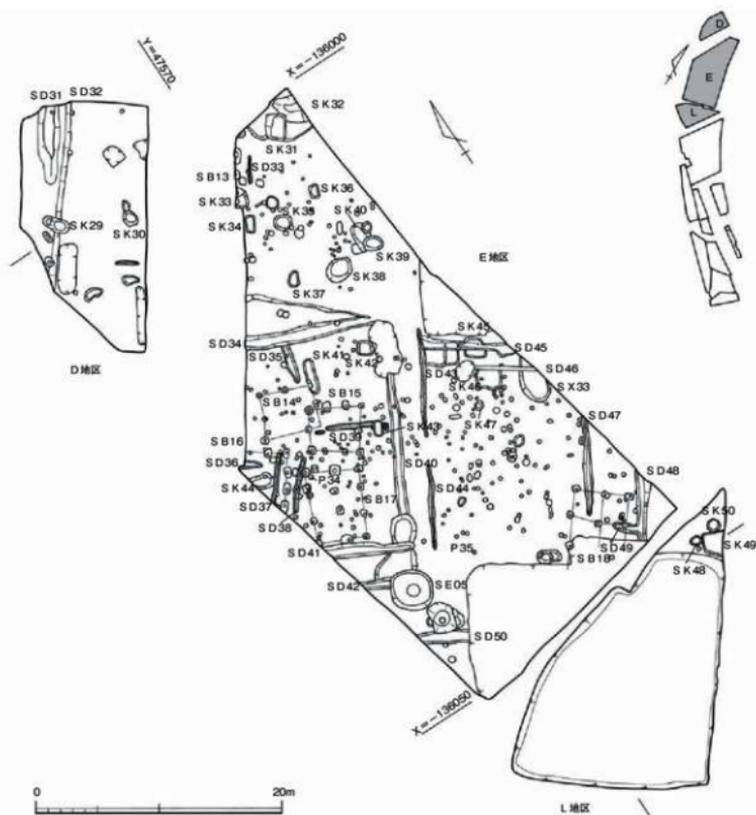
当該地区においては、掘立柱建物跡・柱穴・溝・井戸・土坑・畚を検出している(第84図)。



第83図 南地区平面図



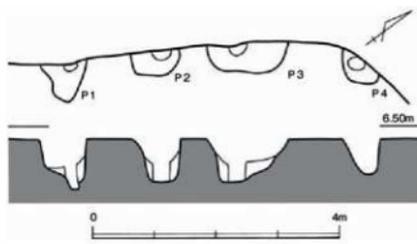
第84図 F・K・M地区上面



第85図 D・E・L地区平面図

(2) 掘立柱建物跡

13棟 (S B 13～S B 25) 検出した。



第86図 S B 13

S B 13

概要 E地区北端部付近に位置する(第85図)。調査区境で直列する4穴の柱穴を検出したもので、ほぼ等間隔であることから、建物の一部と判断したものである。加えて、いずれの柱穴も半分は調査区外に拡がっている(第86図)。このため、全体の規模等を明らかにすることはできないが、P1-P4間の距離は4.65mであ

る。また、P1-P4を基準とした棟軸方向は $N36^{\circ}30'E$ を示す。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 方向性から、中世前半と考えられる。

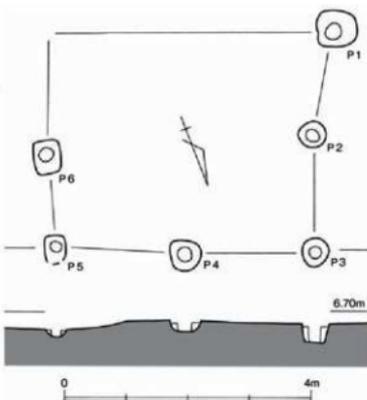
SB14(写真図版50)

概要 E地区中央部北部、SB16の北東側に位置する(第85図)。また、SB15とは一部平面的に重複するが、調査においては前後関係を明らかにすることはできなかった。2間×2間の側柱建物であるが、南桁行の2穴を欠く(第87図)。建物の規模は、北桁行(P3-P5)で4.25m、西梁行(P1-P3)で3.60mを測り、両者を基準とした建物の面積は15.30㎡である。また、西梁行を基準とした棟軸方向

は $N24^{\circ}E$ を示す。柱穴の平面形は基本的に方形であるが、P1のように不定形に近い柱穴も認められる。柱穴の規模は一定しておらず、P3の長軸方向で1.30mを測る。また、柱穴の検出面からの深さは、70cm~82cmを測る。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD34と方向性が一致することから、第II期に位置付けられる。

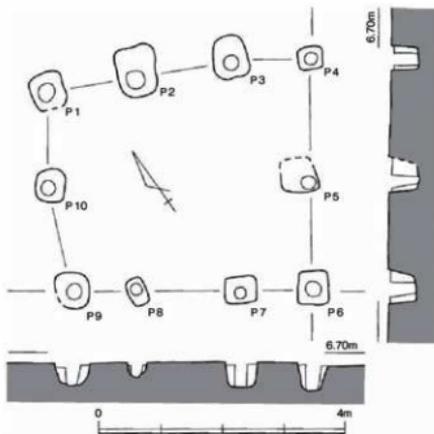


第87図 SB14

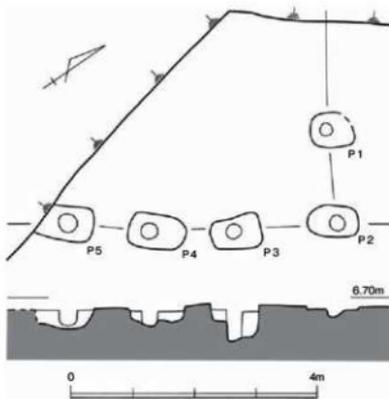
SB15(写真図版50)

概要 E地区中央部西端、SB17の北側、SB16の北東側に位置する(第85図)。また、SB14とは一部平面的に重複する。ただし、SB14との前後関係は調査では明らかにできなかった。2間×3間の側柱建物であるが、北東桁行(P1-P4)と北西梁行(P1-P9)の柱並びは直線的ではない(第88図)。また南西桁行の柱穴間距離は一定ではなく、P7-P8間が他より間隔が広がっている。建物の規模は、南西桁行(P6-P9)で4.85m、北東梁行(P4-P6)で3.75mを測り、両者を基準とした建物の面積は18.18㎡である。また、北東梁行を基準とした棟軸方向は $N36^{\circ}E$ を示す。

柱穴の平面形は方形または長方形を基本とし、各柱穴の主軸と建物の棟軸はほぼ一致する。柱穴の規模は一定しておらず、P2の60cm×80cmが最大で、37cm×40cmのP4が最小である。また、柱穴



第88図 SB15



第89図 SB16

の検出面からの深さは、23cm～46cmを測る。

出土遺物 全く出土していない。

時期 方向性から、中世前半と考えられる。

SB16

概要 E地区中央部西端、SB17の北西側、SB15の西側に位置する(第85図)。側柱建物であるが、建物の西側部分は調査区外にあたり、検出できたのは南東側3間(P2-P5)と北東側1間(P1-P2)+αである(第89図)。検出した規模は、北東側1間で4.40mである。また、P2-P5間を基準とした棟軸方向はN34°30'Eを示す。

柱穴の平面形は長方形をなすが、その形状は

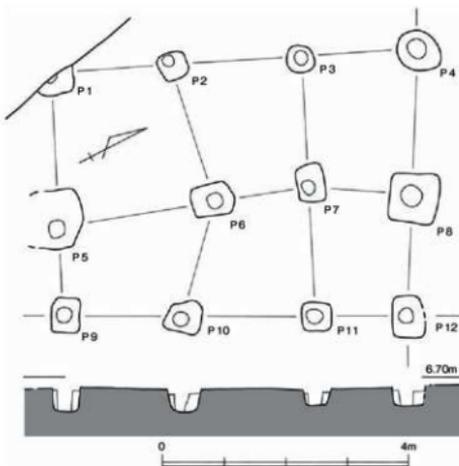
整然としたものではない。各柱穴の主軸は、建物の棟軸はほぼ一致する。柱穴の規模はほぼ一定で、50cm×85cmが平均的な規模である。また、柱穴の検出面からの深さは、12cm～62cmを測る。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD34との関係から、中世前半に位置付けられるものと考えられる。

SB17(写真図版17)

概要 E地区中央部西端、SB15の南西側、SB16の南東側に位置する(第85図)。ただし、P1の西側は調査区外にあたり、P5の南西側はSD41に切られ、全体を検出することはできなかった。2間×4



第90図 SB17

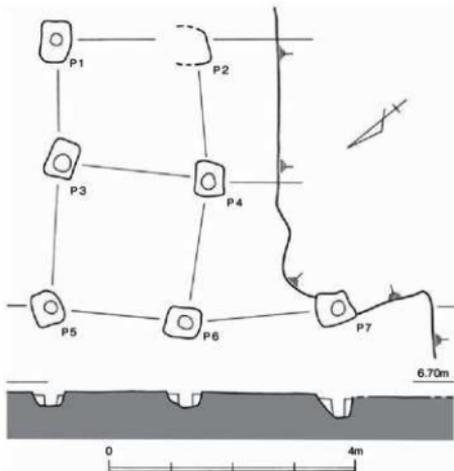
間の総柱建物であるが、中央桁行(P5-P8)の柱並びが不ぞろいである(第90図)。建物の規模は、南東桁行(P9-P12)で5.55m、北東梁行(P4-P12)で4.35mを測り、両者を基準とした建物の面積は24.14㎡である。また、P9-P12を基準とした棟軸方向はN28°30'Eを示す。

柱穴の平面形は方形を基本とするが、P3・P4のように円形のものも認められる。また、方形をなす柱穴の主軸と建物の棟軸方向

は、一致するものと一致しないものが認められる。柱穴の規模は、方形を呈するもので、P 8が80cm×80cmと最大で、45cm×45cmのP 2が最小である。また、柱穴の検出面からの深さは、25cm～65cmである。

出土遺物 須恵器の椀(542)が出土している(図版20)。焼成が不良で、磨滅が著しい。このため、詳細な調整は観察できない。

時期 中世前半と考えられる。



第91図 SB18

SB18(写真図版50)

概要 E地区南東隅に位置する(第85図)。建物の一部は調査区外に拡がり、全体を検出することはできなかった。

総柱建物で、桁行・梁行とも2間を検出している(第91図)。建物の規模は、北東辺(P1-P5)で4.40m、北西辺(P5-P7)で4.65mを測る。また、北東辺を基準とした棟軸方向はN49°Wを示す。

柱穴の平面形は長方形を基本とするが、柱穴の主軸と建物の棟軸方向は、一致するものと一致しないものが認められる。柱穴の規模は、一辺が50cmから60cmを測る。また、柱穴の検出面からの深さは、21cm～38cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

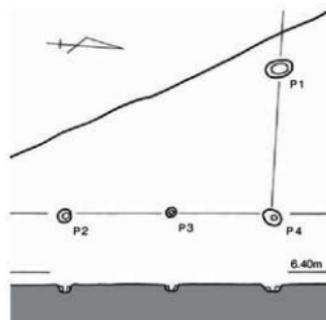
時期 SD34との関係から、中世前半に位置付けられるものと考えられる。

SB19

概要 N地区に位置する(第84図)。東西1間、南北2間の側柱建物である。P2-P4を基準とした棟軸方向はN4°Wを示す。東西は2.40m、南北は3.40mを測る。南北の2間の心々間の距離は1.70m・1.70mである。東西方向の柱穴は35～40cmと大きめであるが、南北のコーナー以外は20cm余りと小さい。ただ、柱痕跡は確認されている。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

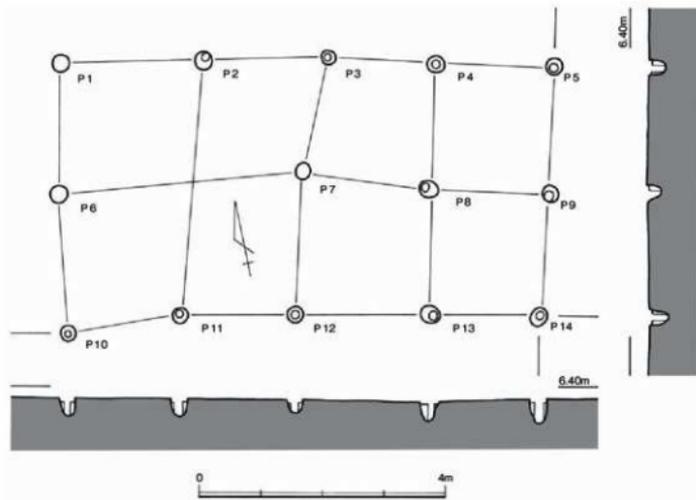
時期 時期を特定することは困難である。



第92図 SB19

SB20(写真図版50)

概要 G地区からN地区にかけて検出した。調査は別々に行われたが、図上で一つの建物になると判明したもの



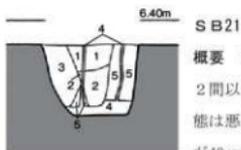
第93図 SB20

である。建物は2間×4間の総柱建物であるが、1穴を欠く(第93図)。なお、当建物は異なる調査の成果を図上で復元したため、柱穴相互の位置関係に若干の誤差がある可能性がある。建物の規模は、南桁行(P10-P14)で9.60m、東梁行(P5-P14)で4.05mを測り、両者の規模から復元される建物の面積は38.88㎡である。また、P5-P14を基準とした棟軸方向は $N14^{\circ}30'E$ を示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その規模は、23cm~31cmを測る。P1・P8・P9を除いては柱痕を確認することができ、その径は15cm~20cmを測る。また、柱穴の検出面からの深さは、21cm~38cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SK57との方向性の一致から、中世前半に位置付けられるものと考えられる。



1. 暗褐色シルト
2. におい黄褐色シルト
3. 暗褐色シルト
4. 灰黄褐色中砂(噴砂)
5. 黒褐色シルト



第94図 柱穴断面

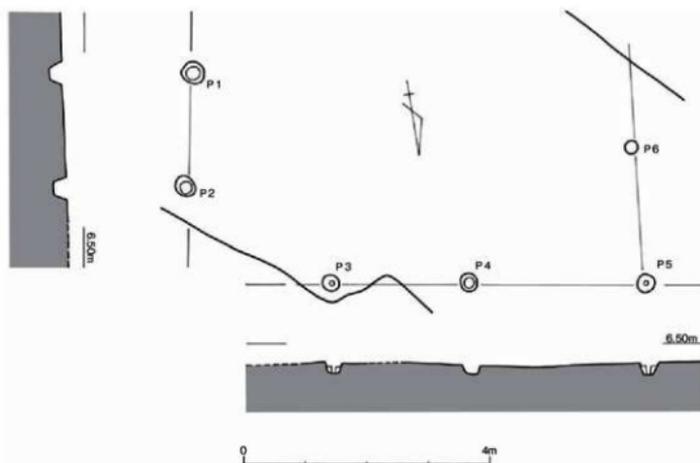
SB21

概要 N地区南西部に位置する(第84図)。SB20の南東側にあたる。3間×2間以上の側柱建物である(第95図)。鋤溝で大きく削平されており、残存状態は悪い。柱痕跡はP6を除いては確認することができた。東側の柱穴規模が40cm前後とやや大きく、他は20~30cmと小規模である。北東隅はG地区にあたるが、G地区の調査では、該当する柱穴を検出することができなかった。東西辺から復元すると3間で、北辺の規模は7.4mになる。P1-P2を基準とした棟軸方向は $N11^{\circ}E$ を示す。

なお、P1の断面観察において噴砂痕を確認することができた(第94図)。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SK57との方向性の一致から、中世前半と考えられる。



第95図 S B21

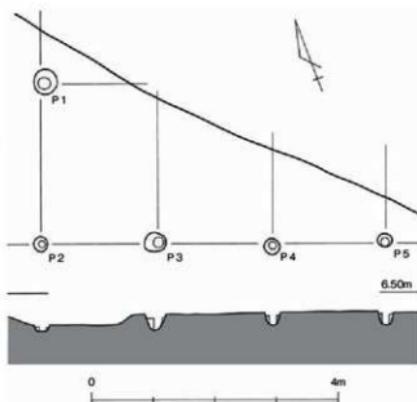
S B22

概要 F地区北東部に位置する(第84図)。ただし、建物の大半は調査区外に拡がり、全体を検出することはできなかった。総柱建物と考えられるが、検出できたのは南西側に限られ、しかも調査区外へのびる可能性も考えられる(第96図)。南西辺(P2-P5)の規模は、5.55mを測る。また、北西辺(P1-P2)を基準とした棟軸方向は $N21^{\circ} E$ を示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その規模は、23cm~38cmを測る。また、柱穴の検出面からの深さは、20cm~26cmである。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 時期の特定は困難である。

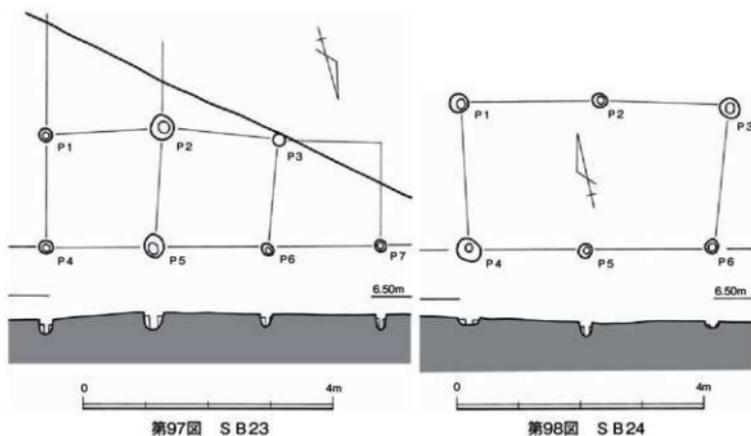


第96図 S B22

S B23

概要 F地区中央部西側に位置する。ただし、建物の大半は調査区外に拡がり、全体を検出することはできなかった。総柱建物と考えられ、北辺(P4-P7)で3間分、東辺(P1-P4)で1間分検出している。その規模は、北側で5.35mを測る。また、東辺を基準とした棟軸方向は $N16^{\circ} 30' E$ を示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その規模は、18cm~38cmを測る。また、柱穴の検出面からの深さは、



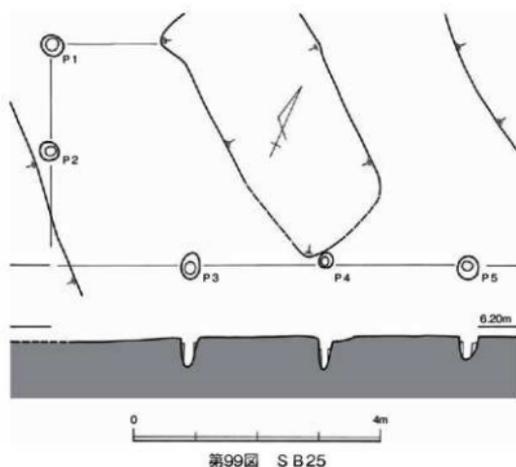
19cm～29cmである。P 3を除いては柱痕を検出し、その径は10cm～17cmである。

出土遺物 須恵器の椀（547）が出土している（図版20）。いわゆる東播系の椀である。

時期 第Ⅱ期に位置付けられる。

SB24

概要 F地区中央部に位置する（第84図）。ただし、1間×2間の側柱建物で、全体を検出している（第98図）。ただし、西梁行と東梁行が平行せず、平面的に歪んだ形状をなしている。建物の規模は、南桁行（P 6-P 4）で3.95m、西梁行（P 1-P 4）で2.35mを測り、両者を基準とした建物の平面積は9.28㎡である。また、南桁行の直交方向を基準とした棟軸方向はN13° Eを示す。



柱穴の平面形は円形を基本とし、その規模は、21cm～36cmを測る。また、柱穴の検出面からの深さは、11cm～25cmである。すべての柱穴において柱痕を確認することができ、その径は12cm～15cmである。

出土遺物 須恵器の椀（543）が出土している（図版20）。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から第Ⅱ期と考えられる。

S B25

概要 I地区北部に位置する(第84図)。ただし、1間×2間の側柱建物と考えられるが、桁行が北東側調査区外へさらに広がる可能性も考えられる(第99図)。また、建物南隅は調査区外に当たり、柱穴を検出することはできなかった。さらに、北西桁行については、後世の攪乱およびSD73との切り合いにより、検出できなかった。

建物の規模は、南隅の柱推定位置を考慮に入れると、南西梁行で3.30m、南東桁行で6.80mと推定される。両者を基準とした建物の平面積は22.44㎡である。また、南桁行の直交方向を基準とした棟軸方向はN23°Eを示す。

柱穴の平面形は円形を基本とし、その規模は、23cm～35cmを測る。また、柱穴の検出面からの深さは、38cm～55cmである。すべての柱穴において柱痕を確認することができ、その径は14cm～22cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

(3)柱穴

ここでは、建物に復元できなかった柱穴のなかで、良好な資料が出土した柱穴について、その出土遺物を中心に報告する。

P 34

概要 E地区に位置する(第85図)。

出土遺物 須恵器の杯(544)が出土している(図版20)。内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられ、体部に1条の沈線が施されている。底部はヘラにより切り離され、内面にはヘラ描きが認められる。

時期 出土土器から古代～中世前半と考えられる。

P 35

概要 E地区に位置する(第85図)。

出土遺物 土師器の埴(552)が出土している(図版20)。羽釜型の埴で、口縁部を中心に残存する。体部内面はナゲ調整、他は横ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から第Ⅶ期と考えられる。

P 36

概要 N地区に位置する(第84図)。

出土遺物 須恵器の杯蓋(548)が出土している(図版20)。杯Bの蓋と考えられ、内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から奈良時代と考えられる。

P 37

概要 N地区に位置する(第84図)。

出土遺物 須恵器の椀(545)が出土している(図版20)。東播系の椀で、11世紀代と考えられる。

時期 出土土器から第Ⅱ期と考えられる。

第3章 調査の成果

P 38

概要 G地区に位置する(第84図)。

出土遺物 須恵器の椀が出土している。

時期 出土土器から第Ⅲ期と考えられる。

P 39

概要 F地区に位置する(第84図)。

出土遺物 土師器の甕(554)が出土している(図版20)。長胴甕で、口縁部はく字形に屈曲する。体部外面と口縁部内面はハケ調整により、体部内面は指オサエにより、口縁部外面は横ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から中世前半と考えられる。

P 40

概要 F地区に位置する(第84図)。

出土遺物 土師器の甕(546)が出土している(図版20)。口縁部を中心とした小片で、く字形を呈する。体部内面がナゲ調整、他はハケ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から第Ⅲ期と考えられる。

P 41

概要 F地区に位置する(第84図)。

出土遺物 弥生時代前期の壺(553)が出土している(図版20)。体部外面はヘラミガキ、口頭部内外面は横ナゲ調整、体部内面がナゲ調整により仕上げられ、頭部に3条のヘラ描沈線が施されている。

時期 出土土器から第Ⅲ期と考えられる。

P 42

概要 F地区に位置する(第84図)。

出土遺物 土師器の杯(549)が出土している(図版20)。内外面とも横ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から中世前半と考えられる。

P 43

概要 F地区に位置する(第84図)。

出土遺物 白磁の碗(550)が出土している(図版20)。Ⅱ類碗で、体部から回転ヘラ削りにより仕上げられている。

時期 出土土器から第Ⅲ期と考えられる。

P44

概要 F地区に位置する(第84図)。

出土遺物 須恵器の杯(551)が出土している(図版20)。

時期 出土土器から奈良時代もしくはより古い時期と考えられる。

P45

概要 H地区に位置する(第84図)。

出土遺物 柱(W10)が遺存していた(第100図)。最大径8.7cm、長さ15.8cm遺存する。

時期 時期の特定は困難である。

P46

概要 H地区に位置する(第84図)。

出土遺物 土師器の埴(555)が出土している(図版20)。

羽釜型埴に分類されるもので、体部外面は叩き成形、内面はハケ調整、口縁部外面は横ナゲ調整により仕上げられている。比較的小型の埴である。

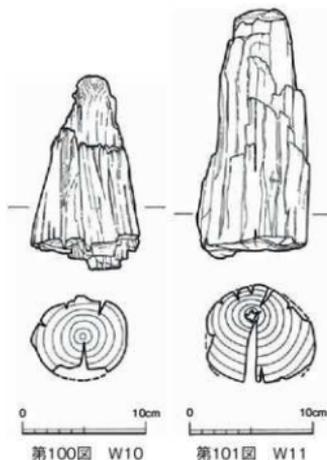
時期 出土土器から中世後半と考えられる。

P47

概要 H地区に位置する(第84図)。

出土遺物 柱(W11)が遺存していた(第101図)。最大径8.7cm、長さ20.25cm遺存する。

時期 時期の特定は困難である。



(4)溝

S D31～S D77の47条検出している。

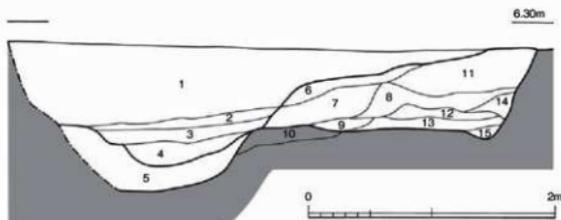
S D31

概要 D地区の西壁全体に沿って、南北に延びる落ち込みを検出し、その延長は調査区の南北に続いていく(第85図)。調査区内に現われているのは東側の肩部のみで、約15m分の長さを調査した。

検出範囲内での最大幅は4.28mだが、本来の幅は不明である。溝は北東—南西方向に沿った方向に掘削されており、B・C地区のS D10との共通性が窺える。東肩部から約1.2mの深さまで一気に掘り込まれ、下層にはシルト層(5層)が堆積する。しかし途中から、東側に平行するS D32を合流するように、東肩が浅く広がって、S D32の埋土を切っている。その上層の埋土は、下面に砂礫を伴う洪水砂(1～4層)である(第102図)。

出土遺物 須恵器・瓦質土器・土師器・瓦・白磁が出土している(図版20)。

須恵器は、蓋(556)・椀(557・558・560・561)・皿(559)が出土している。蓋は、杯Bの蓋と考えられ、天井部は回転ヘラ削り、他は回転ナゲ調整により仕上げられている。椀は、4個体とも東播系の椀で、557と651の底部は平高台をなし、回転糸切りにより切り離されている。皿は、体部から口縁部に



- | | | |
|----------------|-----------------|--------------------|
| 1. 灰褐色細砂混じりシルト | 6. 褐灰色シルト混じり細砂 | 11. にぶい褐色シルト混じり極細砂 |
| 2. 褐灰色シルト混じり細砂 | 7. 灰褐色シルト混じり粗砂 | 12. 褐灰色粗砂混じりシルト |
| 3. 褐灰色シルト質細砂 | 8. 褐灰色細砂混じり粗砂 | 13. 褐灰色細砂混じりシルト |
| 4. 褐灰色シルト質細砂 | 9. 褐灰色シルト混じり粗砂 | 14. 褐灰色細砂混じりシルト |
| 5. 褐灰色細砂混じりシルト | 10. 褐灰色シルト混じり粗砂 | 15. 褐灰色細砂混じりシルト |

第102図 SD31

かけて直線的に立ち上がり、底部は回転系切りにより切り離されている。

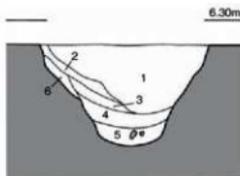
瓦質土器は碗(562)が出土している。底部を中心に残存する。底部を回転系切りに切り離した後、ナゲ調整により高台が貼付けられている。体部内外面は回転ナゲ調整により仕上げられている。

土師器は、皿(563)と羽釜(565・566)が出土している。皿は轆轤成形によるもので、底部は糸切りにより切り離され、平高台をなす。体部から口縁部は指オサエと弱い横ナゲ調整により仕上げられている。羽釜は、2点とも同タイプに分類できるもので、体部は砲弾形をなすものと考えられる。口縁部下には、鈔が指オサエと横ナゲ調整により貼り付けられている。最後に口縁部が横ナゲ調整により仕上げられている。胎土中に砂粒が多く含まれる点の一つの特徴である。

瓦は須恵質の平瓦が1点(564)出土している。広端部の一部が残存し、凹面は布目、凸面は平行引きが認められる。端面はヘラ削りにより仕上げられている。また、凸面には離れ砂が認められる。

白磁は2点(567・568)出土している。いずれもIV類に分類される碗である。

時期 出土土器から第三期と考えられる。



1. 暗灰黄色粗砂混じり細砂
2. にぶい黄褐色粗砂混じり細砂
3. オリーブ褐色粗砂混じり極細砂
4. 黄褐色中砂混じり細砂
5. 黄灰色中砂
6. 灰黄色細砂混じり極細砂

第103図 SD32

SD32

概要 D地区で検出した(第85図)。SD31の東側に平行する直線的な溝で、調査区内で約5mを検出した。南端をSD31に切られているが、本来は南北に続いていたもので、SD31南半の東層のラインは、SD32の名残りとみられる。ただしSD31上層に切られた時には、すでに埋没した状態ではあった。

検出面での幅は1.37mで、検出面からの深さは83cmである。横断面は当初逆台形に掘り込まれ、下層には礫を含んだシルト層(5層)が堆積していた。一方、中層以上はボウル状に掘り直され、最終的には洪水砂(1層)で埋もれている(第103図)。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD31との切り合い関係から、第三期以前と考えられる。

SD33

概要 E地区北端で検出した(第85図)。北東-南西方向に延びる直線的な溝で、SB13の南東側に沿っている。検出した長さは2.35mで、検出面での幅は25cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD31と方向性が一致することから、中世前半と考えられる。



第104図 SD34

SD34

概要 E地区中央部西側で検出した(第85図)。北西-南東方向に延びる直線的な溝で、東端は調査区内で途切れ、西端は調査区外に続く。検出した長さは10.60mで、検出面での幅は1.09m、横断面は隅の丸い箱形を呈し、検出面からの深さは32cmである(第104図)。

出土遺物 須恵器と土師器が出土している(図版20・21)。

須恵器は、杯(569~571)・杯B(572)・はそう(573)・高杯(574)が出土している。杯は、569と570は同タイプに分類できるもので、底部はヘラ切り後未調整である。570の体部下端はわずかにヘラ削りが施されている。また、569の口縁端部には重ね焼痕が認められる。571は、返りをもつタイプで、底部はヘラ切り未調整である。

杯Bは完形に復元することができ、高台は底部をヘラ切り後、底部内側に貼り付けられている。はそうは、体部のみ残存し、小型で底部は平底をなす。体部下外面はヘラ削りが施されている。体部最大径部に1条の沈線が施され、径1.2cmの孔が穿孔されている。高杯は、脚部が出土している。焼成が不良で、全体的に磨減が著しい。

土師器は、片口鉢(575)・甕(576・578)・甕(577)・高坪(579)・皿(580)が出土している。

片口鉢は、全体的に磨減が著しく、調整は観察できない。甕は2点とも同タイプに分類されるもので、体部は球形をなす。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。甕は、山陰型に分類されるもので、底部を中心に残存する。外面は、ハケ調整により仕上げられ、その後突帯が横ナデ調整により貼付けられている。内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。高坪は、杯部が浅い碗形をなす。内外面にわずかに縦方向のヘラミガキが認められる。脚部はナデ調整により仕上げられている。皿については、小型の碗に分類される可能性も考えられる。外面をヘラ削り後、内外面をナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から第Ⅱ期と考えられる。

SD35

概要 E地区中央部西側で検出した南北方向の溝で、北端をSD34に切られている(第85図)。周囲の溝とはやや方向がずれている。検出した長さは3.15mで、幅は一定しないが、検出面での最大幅は65cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD34との切り合い関係から、第Ⅱ期以前と考えられる。

第3章 調査の成果

SD36

概要 E地区中央部西端で検出した北西-南東方向の溝で、東端は調査区内で途切れ、西端は調査区外に続く(第85図)。SD37に対して直角方向である。検出した長さは1.85mで、検出面での幅は60cm、横断面は皿状を呈し、検出面からの深さは15cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD34と方向性がほぼ一致することから、第Ⅱ期以前と考えられる。

SD37

概要 E地区中央部西端で検出した北東-南西方向の溝で、北端は調査区内で途切れ、南端は調査区外に続く(第85図)。SD38と平行している。検出した長さは4.35mで、検出面での幅は32cm、横断面は皿状を呈し、検出面からの深さは13cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD38とほぼ平行することから、第Ⅱ期以前と考えられる。

SD38

概要 E地区中央部西側で検出した北東-南西方向の溝で、調査区内で完結する(第85図)。SD37と平行しており、2つの溝の中心間の距離は約1.8mである。検出した長さは4.60mで、検出面での幅は40cm、横断面は皿状を呈し、検出面からの深さは9cmである。

出土遺物 丹波焼の甕の小片が出土している。

時期 出土土器から、第Ⅴ期以降と考えられる。

SD39

概要 E地区中央部西側で検出した(第85図)。北西-南東方向に延びる直線的な溝で、調査区内で完結する。切り合い関係は、SB15を切って、SK43に切られている。検出した長さは3.90mで、検出面での幅は35cm、横断面は皿状を呈し、検出面からの深さは10cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD34と方向性がほぼ一致することから、第Ⅱ期以前と考えられる。

SD40

概要 E地区中央部で検出した(第85図)。北東-南西方向に延びる直線的な溝で、南端は土坑に切られ、北端も擾乱で失われている。検出した長さは11.50mで、検出面での幅は77cm、横断面は皿状を呈し、検出面からの深さは8cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD34と方向性がほぼ一致することから、第Ⅱ期以前と考えられる。

SD41

概要 E地区中央部西側で検出した(第85図)。北西-南東方向に延びる直線的な溝で、東端は調査区内で途切れ、西端は調査区外に続く。その他、SB17を切っている。検出した長さは7.45mで、検出面で

の幅は1.07m、横断面は皿状を呈し、検出面からの深さは24cmである。

出土遺物 肥前焼の染付磁器が出土している。

時期 出土土器から、18世紀後半と考えられる。

S D42

概要 E地区中央部西側で検出した（第85図）。北西—南東方向に延びる直線的な溝で、東端はS E05に切られ、西端は調査区外に続く。S D41と平行しており、2つの溝の中心間の距離は約3.0mである。検出した長さは2.60mで、検出面での幅は85cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 S D34と方向性がほぼ一致することから、第Ⅱ期以前と考えられる。

S D43

概要 E地区中央部で検出した（第85図）。北東—南西方向に延びる直線的な溝で、調査区内で完結している。途中で途切れているため北側をS D43、南側をS D44とした。S D40と平行し、2つの溝の中心間の距離は約2.4mである。検出した長さは8.75mである。検出面での幅は20cm～40cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 S D34と方向性がほぼ一致することから、第Ⅱ期以前と考えられる。

S D44

概要 E地区中央部で検出した（第85図）。北東—南西方向に延びる直線的な溝で、調査区内で完結している。S D43の南側延長上に位置する。S D40と平行しており、2つの溝の中心間の距離は約2.4mである。検出した長さは6.85mである。検出面での幅は20cm～40cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 S D43と同一の溝と考えられることから、第Ⅱ期以前と考えられる。

S D45

概要 E地区中央部東側で検出した（第85図）。北西—南東方向に延びる直線的な溝で、西端はS D43に切られ、東端は調査区外に続く。その他、S K45を切っている。検出した長さは7.65mで、検出面での幅は40cm～1.1mである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 S D43との切り合い関係から、第Ⅱ期以前と考えられる。

S D46

概要 E地区中央部東側で検出した（第85図）。北西—南東方向に延びる直線的な溝で、西端は攪乱に切られ、東端は調査区外に続く。その他、S K46・S X33を切っている。検出した長さは5.15mで、検出面での幅は23cm、横断面は皿状を呈し、検出面からの深さは13cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 S D45と平行することから、第Ⅱ期以前と考えられる。

第3章 調査の成果

S D47

概要 E地区南東側で検出した(第85図)。北東-南西方向に延びる直線的な溝で、南端は調査区内で途切れ、北端は調査区外に続く。その他、S B18と重複している。検出した長さは8.10mで、検出面での幅は43cm、横断面は皿状を呈し、検出面からの深さは6cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 S D48とほぼ平行することから、奈良時代を中心とした時期と考えられる。

S D48

概要 E地区南東隅で検出した(第85図)。北東-南西方向に延びる直線的な溝で、南端は攪乱に切られ、北端は調査区外に続く。S D47と平行しており、2つの溝の中心間の距離は約4.2mである。検出した長さは5.80mで、検出面での幅は60cm、横断面はボウル状を呈し、検出面からの深さは35cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 S D48と直交関係にあることから、奈良時代を中心とした時期と考えられる。

S D49

概要 E地区南東隅で検出した(第85図)。北西-南東方向に延びる直線的な溝で、西端は調査区内で途切れ、東端はS D48に直角に接続する。検出した長さは2.00mで、検出面での幅は74cm、横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは27cmである。

出土遺物 須恵器の杯(581)が出土している(図版21)。底部はヘラ切りにより切り離され、体部から口縁部にかけて内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から奈良時代を中心とした時期と考えられる。

S D50

概要 E地区南西隅で検出した(第85図)。北西-南東方向に延びる直線的な溝で、東端は攪乱に切られ、西端は調査区外に続く。検出した長さは4.30mで、検出面での幅は81cm、横断面は皿状を呈し、検出面からの深さは18cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

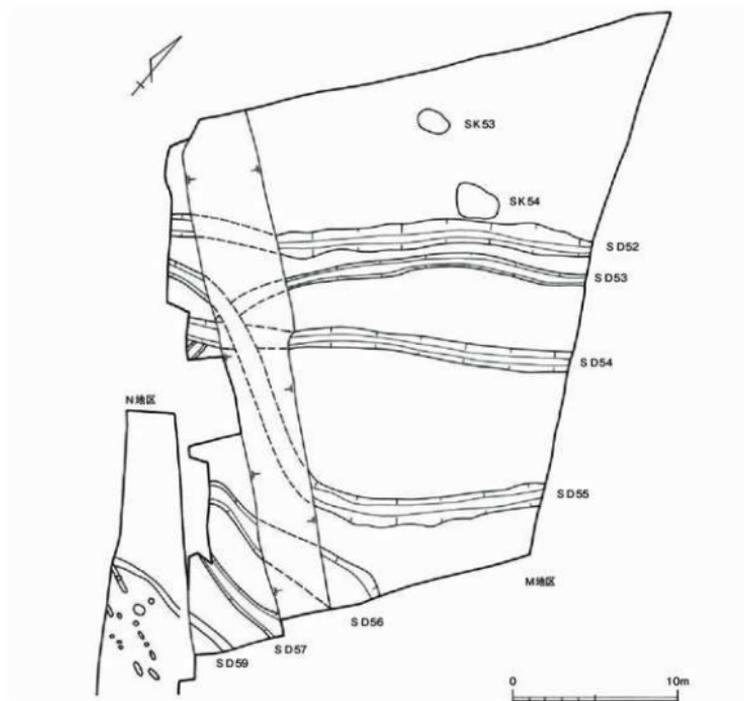
時期 S D42と平行関係にあることから、第Ⅱ期以前と考えられる。

S D51

概要 M地区第1面東端部で検出した(第84図)。東西方向に延びる直線的な溝で、東端は調査区外に続き、西端は調査区内で収束している。検出した長さは5.50mで、検出面での幅は46cm、横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは10cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 M地区の上面で検出していることから、中世と考えられる。



第105図 M地区第2面平面図

S D 52

概要 M地区第2面で検出した(第105図)。溝幅は上面で1.20m、底面で50cm、深さは90cmである(第106図)。

出土遺物 須恵器の甕(582・583)と瓦(584)が出土している(図版21)。甕は口縁部片(582)と体部片(583)が出土している。体部片は内面に車輪文のある当具痕が認められる。平瓦は、凸面に縄目の叩きが施されている。

時期 出土土器から奈良時代と考えられる。

S D 53

概要 M地区第2面で検出した(第105図)。S D 52と添うように北から南に流れるが、南端付近で東に大きくそれる。溝幅は上面で1.20m、底面で50cm、深さは90cmである(第106図)。

出土遺物 須恵器の杯A(585・586)と杯B(587)が出土している(図版21)。杯Aは底部がヘラ切りにより切り離されている。

時期 出土土器から奈良時代と考えられる。

第3章 調査の成果

S D54

概要 M地区第2面で検出した(第105図)。溝幅は検出面で1.10m、底部で40cm、検出面からの深さは35cmである。埋土は灰黄褐色粘土質シルトの1層である(第106図)。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 奈良時代と考えられる。

S D55

概要 M地区第2面で検出した(第105図)。北からわずかにカーブを描きながら延びてきた後に、調査区南端で大きく西に方向を変える。溝幅は上面で1.60m、底面で60cm、深さは約80cmである。埋土は、上層から暗黄褐色粘土質シルト、黄灰色粘土、灰黄褐色シルトの3層である(第106図)。

出土遺物 須恵器の杯A(588・589)と杯B(590)が出土している(図版21)。杯Aの588の底部は回転ヘラ削りにより、589の底部はヘラ切りにより切り離されている。

時期 出土土器から奈良時代と考えられる。

S D56

概要 M地区第2面で検出した(第105図)。F地区から続く溝で、北東から南西方向に延びている。

出土遺物 須恵器と土師器が出土している(図版21・22)。

須恵器は、杯B(591)・杯A(592~595)・壺(596・597)・椀(599)・甕(600)・鉢(598)が出土している。杯Aは法量的に差が認められるが、いずれも底部と体部の境が明確に屈曲している。壺は、いずれも底部を中心に残存し、596は平瓶、597は壺Kである。598の底部外面はナデと指オサエ、体部下端が回転ヘラ削り、体部中位は回転ナデ調整により仕上げられている。椀は平高台からなる底部片が出土しており、糸切りにより切り離されている。甕は、口縁部片が出土している。外面に断面三角形の突帯が貼り付けられている。

土師器は、皿(601)・椀(602)・甕(603)が出土している。601は、内面に1段の斜状の暗文が認められる。底部はヘラナデ調整により仕上げられ、口縁部内外面に化粧土が使用されている。602は、椀として報告するが、皿の可能性も考えられる。底部は手づくねにより、体部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。603は、長胴タイプの甕で、体部外面はハケ、内面は板ナデ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

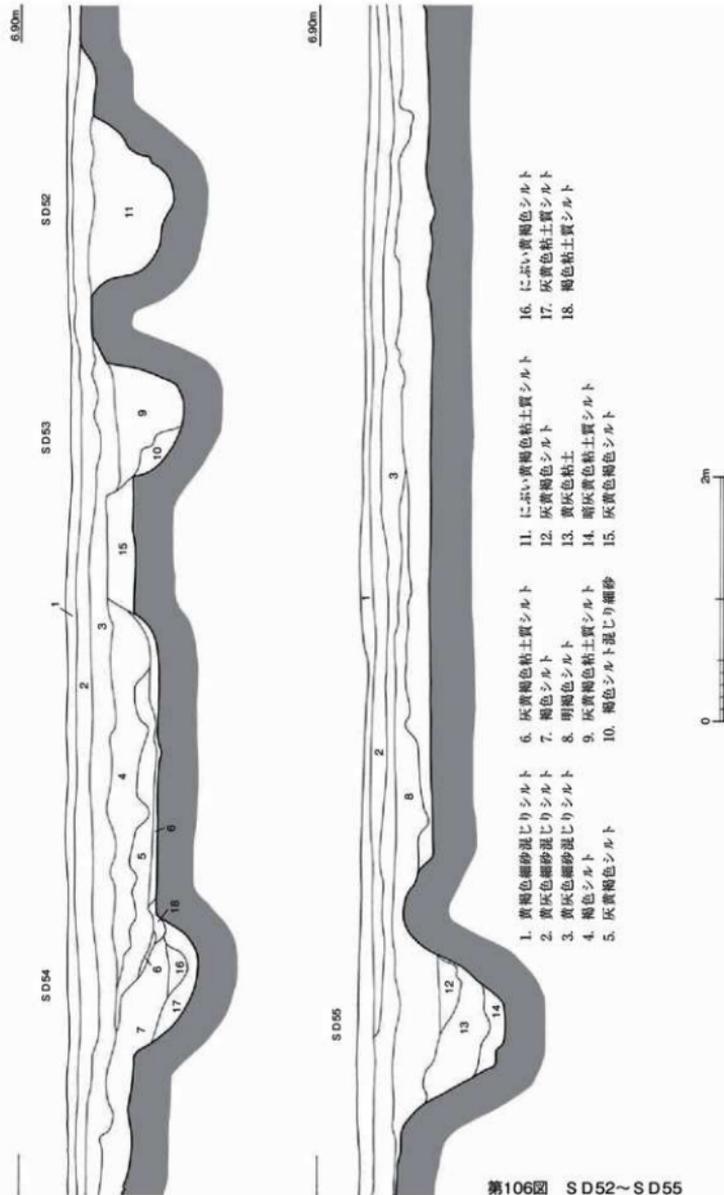
時期 出土土器から8世紀と考えられる。

S D57

概要 M地区第2面で検出した(第105図)。弧状をなす溝で、ほぼ東西方向に延びている。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 奈良時代と考えられる。



第106図 SD52～SD55

第3章 調査の成果

S D58

概要 N地区北西隅で検出した溝である(第84図)。SK55の南側に位置する。直線的な溝で、北東-南西方向に延びている。南西端は調査区外までのび、北東端は調査区内で収束している。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 時期の特定は困難である。

S D59

概要 M地区からN地区にかけて検出された溝である(第105図)。直線的な溝ではないが、ほぼ東西方向に延びている。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 奈良時代と考えられる。

S D60

概要 N地区南東隅に位置する(第84図)。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外に延びている。SB21の南側に位置し、その棟軸方向とほぼ一致する。

出土遺物 丹波焼の挿鉢(604)が出土している(図版22)。体部内外面はナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。卸し目は7条1単位とし、江戸時代以降に位置付けられる。

時期 出土土器から江戸時代と考えられる。

S D61

概要 G地区の北隅からK地区にかけて対角線に縦断する直線的な溝で、検出した長さは21.40mである。検出面における幅は1.20m~1.40mで、検出面からの深さは80cm前後である。溝底の標高は、北端が5.40m、南端が5.15mで、北から南に向かう勾配をもつ。横断面はV字形で、底が四角く掘り込まれているのは、溝さらえの痕跡とみられる。

埋土は、土壌層(セクション1の1・3・5層とセクション2の1・3・5・7・9層)と洪水砂(セクション1の2・4層とセクション2の2・4・6・8層)が交互に堆積しており、機能しなくなった後は放置されて、徐々に埋まったようである(第107図)。

出土遺物 弥生土器の壺(605)が出土している(図版22)。直口壺に分類されるもので、頸部には指頭瓦痕文突帯が貼付けられている。内外面ともハケ調整により仕上げられ、体部外面の一部はヘラミガキが施されている。

時期 出土土器から弥生時代中期と考えられる。

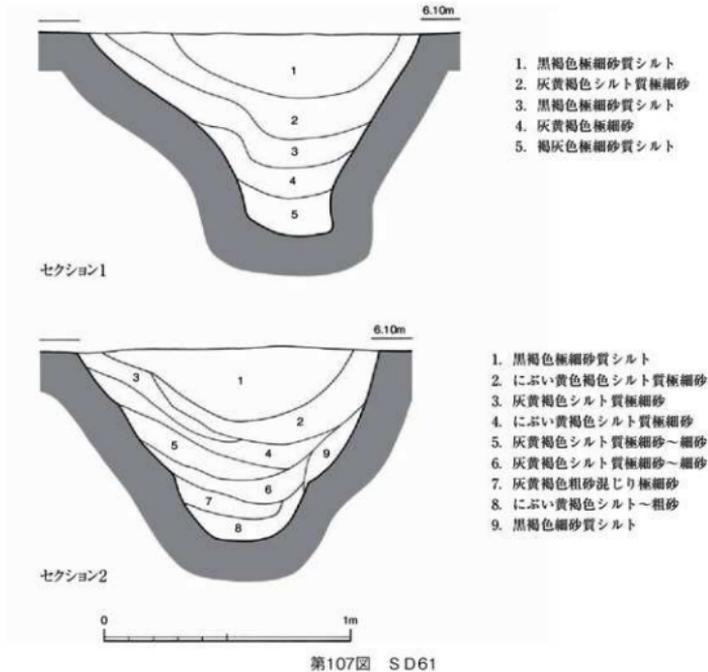
S D62

概要 K地区第1面南東隅で検出した(第84図)。北東-南西方向にのびる溝で、検出できたのは北西側肩部のみである。検出した長さは6mで、最深部における検出面からの深さは40cmである。

出土遺物 陶器の碗(606)と丹波焼の挿鉢(607)が出土している(図版22)。606は、京焼風の碗である。

607は、口縁部を中心とした小片で、17世紀代に位置付けられる。

時期 出土土器から18世紀後半と考えられる。



SD63

概要 K地区第2面中央部で検出した(第84図)。北東-南西方向にのびる溝で、SD61とSX35に切られている。このため、検出した長さは4.50mで、検出面における幅は3.60mである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは80cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 SD61との切り合い関係から、弥生時代中期以前と考えられる。

SD64

概要 F地区第1面北隅で検出した遺構である(第84図)。SE06の北側に位置する。北東-南西方向にほぼ直線的に延びる溝で、南西端は調査区内で収束し、北東側は調査区外へ延びている。検出した長さは1.30mで、幅は40cmである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは7cmである。

出土遺物 土師器の小片が出土している。

時期 時期の特定は困難であるが、出土土器から中世と考えられる。

第3章 調査の成果

S D65

概要 F地区第1面中央部で検出した遺構である(第84図)。SX37の南側に位置し、SX37に切られている。このため、検出した長さは1.20mである。ほぼ南北方向にのびる溝で、南側は調査区内で収束している。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は20cmである。また、最深部における検出面からの深さは6cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

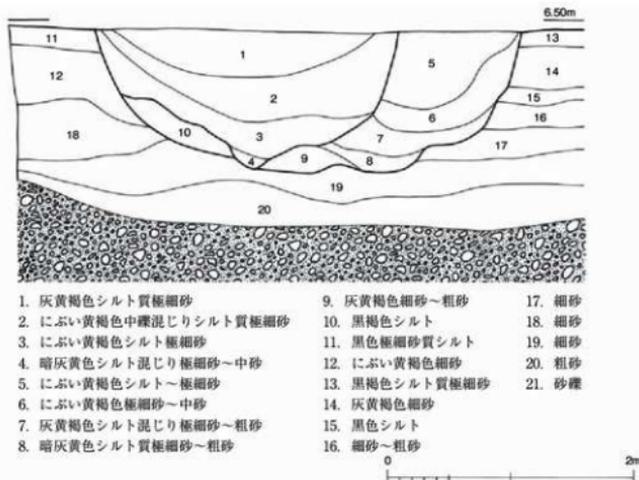
時期 第V期のSX36に切られていることから、第V期以前と考えられる。

S D66

概要 F地区第2面で検出したが、遺構面が高い中央付近では、第1面ですでに検出できていた(第84図)。西隅から東隅にかけて対角線に縦断する直線的な溝で、検出した長さは20.45mである。検出面における幅は3.0m~4.0mで、横断面はボウル状を呈し、検出面からの深さは80cm前後である。溝底の標高は、西端が5.10m、東端が5.12mと、底部のレベルはほぼ一定している。埋土下層に堆積した有機質の層を切って、洪水砂が厚く堆積している(第108図)。

出土遺物 須恵器と土製品が出土している(図版22)。須恵器は、杯A(608~610)・椀(611)・蓋(612)・杯B(613~616)・壺(617)が出土している。611は、口径に対して器高が高く、外面に3条の沈線が施されている。612は、つまみは残存しないが、杯Bの蓋と考えられる。杯Bは、いずれも口径に対して器高が低く、法量的に類似する。壺の617は、壺Kの体部である。底部はヘラ切りにより切り離され、体部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。

土製品は、土師製の土錘(618)と土馬(619)が各1点出土している。618は、ほぼ完存し、全長6.05cm、最大径2.60cm、孔径8mm、重量32.60gを測る。619は、胴部を中心に残存する。背の尾側に飾りの一



第108図 S D66

部が残存している。残存長12.6cm、胴部幅4.8cm、胴部高4.9cmを測る。

時期 出土土器から奈良時代と考えられる。

S D 67

概要 J地区北西隅で検出した(第84図)。北東—南西方向にのびる溝で、2.20m検出した。両端とも調査区外へ延びている。また、検出できたのは南東側の肩部で、北西側は調査区外にあたる。SK63と切り合い関係にあり、SK63に切られている。横断面は逆台形をなすものと考えられ、最深部における検出面からの深さは62cmである。埋土は、黒褐色シルト質細砂〜中砂1層からなる。

出土遺物 土器と木製品が出土している。

土器は、土師器の埴(621)と焙烙(622)が出土している(図版23)。621は、口縁部が一部残存するが、平面三日月形の把手が貼付けられている。622は、体部外面はナゲ調整により、他は横ナゲ調整により仕上げられている。

木製品は下駄が1点(W12)出土している(図版29)。台部のみ遺存し、歯部を欠く。歯は2本からなる。それぞれの歯は、台部裏側に、幅1.1〜1.2cmの溝を切り、さらにその上側に5mm幅の柵を開け、歯を組み込んでいたようである。鼻緒用の穴は3箇所に穿たれ、その径は1.1cmを測る。台部の平面形は長方形をなし、その規模は18.8cm×5.9cmである。断面は逆蒲鉾形をなし、最厚部の厚さは2.3cmを測る。

時期 出土土器から江戸時代と考えられる。

S D 68

概要 J地区中央部で検出した(第84図)。北西—南東方向に直線的にのびる溝で、4.50m検出した。南東端は調査区外へ延び、北西側はSD67に切られている。検出面における幅は25cmで、横断面は逆台形をなす。最深部における検出面からの深さは8cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 江戸時代のSD67に切られていることから、江戸時代以前と考えられる。

S D 69

概要 H地区南東部で検出した(第84図)。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、2.30m検出した。両端とも調査区外へ延びている。また、多くの柱穴と切り合い関係にあり、これらの柱穴に切られている。検出面における幅は70cmで、横断面は逆台形をなす。最深部における検出面からの深さは35cmである。埋土は、灰黄褐色極細砂1層からなる。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

S D 70

概要 O地区からI地区にかけて検出した(第84図)。南北方向から北西—南東方向に屈曲する溝で、北西端は調査区内で収束し、他端は調査区外へ延びている。検出した長さは、南北方向で9.50m、北西—

第3章 調査の成果

南東方向で15.70mである。検出面における幅は33cmで、横断面はU字形をなす。最深部における検出面からの深さは、18cmである。

出土遺物 土師器の杯が1点(620)出土している(図版22)。底部を中心に残存し、底部はヘラ切り後ナゲ調整が加えられている。体部外面は横ナゲ調整、内面は指オサエとナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から18世紀後半と考えられる。

SD71

概要 O地区・P地区・Q地区の3地区にまたがって検出された(第84図)。SD70・SD75～SD77と切り合い関係にあり、いずれの溝をも切っている。北西-南東方向にほぼ直線的にのびる溝で、検出した長さは、38.50mである。検出面における幅は76cmを測り、横断面はU字形をなす。最深部における検出面からの深さは35cmである。溝底の標高から推して緩やかに東南東へと流れていると考えられる。埋土は上下2層に暗灰シルトが堆積しており、間には部分的に炭層を挟む所がある。

出土遺物 須恵器・瓦・土師器が出土している(図版23)。

須恵器は、壺(623・624)・杯B(625)・碗(626～637)・甕(638・639)が出土している。壺の624は、底部外面がヘラナゲ、体部外面が弱いヘラ削りにより仕上げられている。

碗は、12個体出土しているが、637とそれ以外の2タイプに分類できる。637は、底部が輪高台をなすもので、回転ナゲ調整により仕上げられている。637以外は、基本的に同タイプに分類できるものである。ただし、635は、底部が平高台をなすが、内面の落ち込みは認められない。626～634・636は神出産と考えられ、底部は回転系切りにより切り離されている。626～628・631の外面には1条の沈線が施されている。

甕の639は、頸部まで平行叩きが施されているが、叩き目の特徴が、他の甕とは異なる。

瓦は、平瓦が2点(640・641)出土している。いずれも須恵質で、反面には布目が認められ、凸面はナゲもしくはヘラナゲ調整、端面はヘラ削りにより仕上げられている。

土師器は、皿が3個体(642～644)出土している。いずれも輪轆成形によるもので、底部は642が回転系切り、他はヘラ切りにより仕上げられている。体部から口縁部は、内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。ただし、643の内面見込みはナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から第II期と考えられる。



第109図 SD71

SD72

概要 O地区中央部に位置する(第84図)。東西方向にほぼ直線的のびる溝で、東端は調査区内で収束し、西端は調査区外へ延びている。他の遺構との切り合い関係は認められない。検出した長さは3.20mで、検出面における幅は90cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは33cmである。

出土遺物 土師器・須恵器・瓦が出土している(図版23・24)。土師器は皿(645)と椀(646)が各1個体出土している。645は、轆轤成形によるもので、底部は回転糸切りにより切り離され、体部から口縁部は回転ナゲ調整により仕上げられている。646は、底部を中心とした個体で、底部は糸切りにより切り離され、体部内外面は回転ナゲ調整により仕上げられている。

須恵器は、椀が1個体(647)出土している。底部は平高台をなし、回転糸切りにより切り離されている。土器断面の観察から、まず底部の円盤を据え、その上に体部が輪積みにより成形されている。

瓦は、平瓦の小片が1点(648)出土している。須恵質の瓦で、凸面には縄目叩きが認められる。凹面は、ヘラナゲ調整により仕上げられているが、部分的に布目が認められる。

時期 出土土器から第1期と考えられる。

SD73

概要 I地区の北隅を斜めにかかる北西-南東方向の溝で、北東側の肩部は調査区外である(第84図)。調査区内で検出した長さは13.30mで、調査区内で検出した幅は2.80mである。横断面はU字形で、検出面から93cmの深さまで検出している。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

SD74

概要 I地区を横断する北東-南西方向の直線的な溝で、北東端はSD73に切られている(第84図)。北東方向の延長はH地区のSD69に続く。調査区内で検出した長さは7.30mで、検出面における幅は、90cmである。横断面はU字形で、検出面からの深さは33cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

SD75

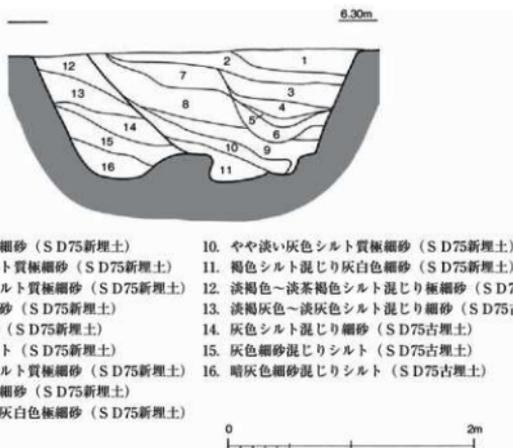
概要 P地区で検出した、北北東から南南西へ貫通する溝である(第84図)。N22°Eに走向を持つ。溝全体では、幅約2.20m~3.30m・深さ約1.10mを測り、検出全長は約17mである。

この溝は大きく1度掘り直されており、溝底に掘り残しが盛り上がり、W字状になる部分もある。このため、場所によって幅・深さにバラツキが生じている。

溝は最終的には幅約2.20m~3.30m・深さ約30cmの浅い窪みとなり、若干土壌化した極細砂によって最終的に埋没する。

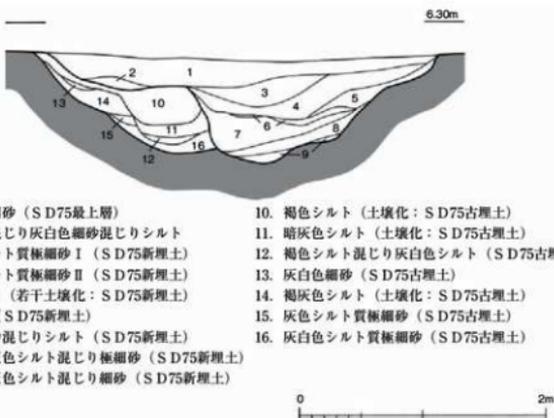
以下、先行する溝をSD75(古)とし、新しい溝をSD75(新)として記述してゆく。

SD75(古)は、東肩をSD75(新)によって掘削されているため、形状・規模について不明な点が多い。



第110図 SD75 (1)

- | | |
|--------------------------|---------------------------------|
| 1. 淡茶灰色極細砂 (SD75新埋土) | 10. やや淡い灰色シルト質極細砂 (SD75新埋土) |
| 2. 茶灰色シルト質極細砂 (SD75新埋土) | 11. 褐色シルト混じり灰白色細砂 (SD75新埋土) |
| 3. 淡茶灰色シルト質極細砂 (SD75新埋土) | 12. 淡褐色～淡茶褐色シルト混じり極細砂 (SD75古埋土) |
| 4. 淡灰色極細砂 (SD75新埋土) | 13. 淡褐色～淡灰色シルト混じり細砂 (SD75古埋土) |
| 5. 淡灰色細砂 (SD75新埋土) | 14. 灰色シルト混じり細砂 (SD75古埋土) |
| 6. 淡灰色シルト (SD75新埋土) | 15. 灰色細砂混じりシルト (SD75古埋土) |
| 7. 淡茶灰色シルト質極細砂 (SD75新埋土) | 16. 暗灰色細砂混じりシルト (SD75古埋土) |
| 8. 淡茶灰色極細砂 (SD75新埋土) | |
| 9. 灰色中砂～灰白色極細砂 (SD75新埋土) | |



第111図 SD75 (2)

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1. 薄灰白色極細砂 (SD75最上層) | 10. 褐色シルト (土壌化: SD75古埋土) |
| 2. 褐色シルト混じり灰白色細砂混じりシルト | 11. 暗灰色シルト (土壌化: SD75古埋土) |
| 3. 薄淡灰色シルト質極細砂 I (SD75新埋土) | 12. 褐色シルト混じり灰白色シルト (SD75古埋土) |
| 4. 薄淡灰色シルト質極細砂 II (SD75新埋土) | 13. 灰白色細砂 (SD75古埋土) |
| 5. 褐色灰色シルト (若干土壌化: SD75新埋土) | 14. 褐色シルト (土壌化: SD75古埋土) |
| 6. 黄色シルト (SD75新埋土) | 15. 灰色シルト質極細砂 (SD75古埋土) |
| 7. 灰白色極細砂混じりシルト (SD75新埋土) | 16. 灰白色シルト質極細砂 (SD75古埋土) |
| 8. 褐色～暗灰色シルト混じり極細砂 (SD75新埋土) | |
| 9. 褐色～暗灰色シルト混じり細砂 (SD75新埋土) | |

規模は幅約1.2m以上・深さ約1.0mを測るが、幅は溝底の中央を折り返し復元すれば、約1.6m前後であったと考えられる。断面形状は、溝底が丸くラップ状に開くU字形である。埋土は概ね半ばまで灰色細砂混じりシルトが堆積し(14～16層:第110図)、層上半は褐色灰色調シルト混じり極細砂(12・13層)によって埋没している。比較的緩やかな流れによって埋没してゆき、最終的に湿地化して埋没する。

SD75(新)は、SD75(古)の西肩部を掘削し直して造られている。規模は幅約2.2m・深さ約1.1mを測る。断面形状は、溝底が平坦でラップ状に開く逆台形状である。

埋土は概ね下半に灰色細砂あるいは極細砂が堆積し(9・10・11層:第110図)、上半は淡茶灰色極細

砂によって埋没してゆく（3～8層：第110図）。溝の下半は比較の流れがあり、上半部は緩やかに堆積したものと考えられる。

溝は埋没前にU字形の断面形状を示す部分があるが、局所的な溝渡えがあったか、自然堆積によるものかは判然としない。U字形部分の堆積土（1～6層：第110図）は、同7・8層と同じく若干土壌化しており、緩やかに堆積している。この部分の規模は幅約1m・深さ約60cmを測る。

出土遺物 土師器の皿（649・650）が出土している（図版24）。649は、皿Aに分類されるもので、口縁部内外面は回転ナゲ調整により仕上げられている。他は、磨滅のため調整は観察できない。650は、手づくね成形によるもので、口縁部は横ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から奈良時代には掘削され、中世の段階で埋没したものと考えられる。

SD76

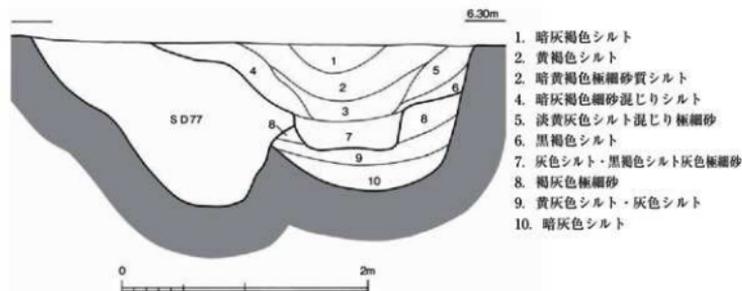
概要 P地区からQ地区にかけて検出した（第84図）。南西―北東方向にほぼ直線的に伸びる溝で、両端とも調査区外に延びている。また、SD71と切り合い関係にあり、これに切られている。また、SD77とも切り合い関係にあるが、その関係は複雑なため、埋没状況の項で説明する。検出した長さは、17.30mである。横断面は逆台形を呈し、検出面における幅1.50cmを測り、最深部における検出面からの深さは、1.20mである。

当溝は、SD77とSD76が合流する地点の断面の観察によると、SD77と複雑な切り合い関係をなしている（第112図）。その埋没過程・関係は以下のとおりである。①当溝が掘削された後、8層まで埋没する。10層が自然堆積により土壌化した層で、その上の9層は人為的に埋められた層である。また8層は洪水砂である。②SD77の掘削に伴い、8層以下が切られる。③SD77が完全に埋没後、7層下面まで再掘削される。7層は人為的に埋められ、4層・5層が埋没後、3層まで再掘削されている。④最終的に1層から3層が堆積し、当溝は完全に埋没している。なお、1層と2層は湿地性の堆積層で、洪水により3層が堆積後しばらく凹地であったものと考えられる。

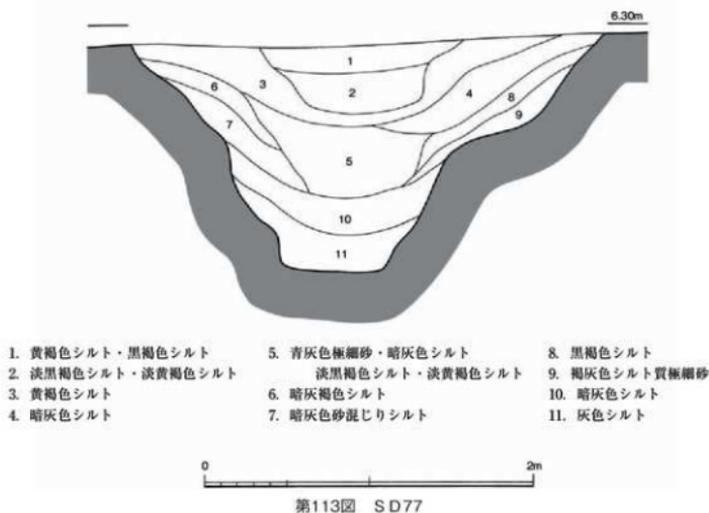
以上のように、SD76→SD77→SD76と、機能していたことが理解できる。

出土遺物 須恵器の壺（651・652）と杯A（653）が出土している（図版24）。651は、壺Aに分類されるものである。653は、底部を中心に残存し、底部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

時期 出土土器から奈良時代と考えられる。



第112図 SD76



SD77

概要 Q地区南西部に位置する(第84図)。前述したように、SD76と切り合い関係にあり、北側はここで途切れている。また、南側は調査区外へ伸びている。ほぼ南北方向に直線的のびる溝で、検出した長さは5mである。検出面における幅は3.50mを測り、横断面はV字形に近い逆台形をなす。最深部における検出面からの深さは、1.36mを測る。

当溝の土層を観察すると、掘削→埋没が数度にわたり繰り返されている(第113図)。まず、11層下面まで掘削され、6層・8層上面まで洪水等により埋没する。その後、5層下面まで掘削され、5層が人的に埋められる。その後、4層・3層が自然堆積した後、2層下面まで掘削される。最後に、1層と2層が人為的に埋められている。

出土遺物 須恵器と弥生土器が出土している(図版24)。須恵器は、甕(654)と杯A(655)が出土している。654は甕の口縁部片で、外面に3条の櫛描波状文と5条の沈線が施されている。655は、底部を中心に残存し、底部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

弥生土器は656の1個体で、下層から出土している。甕の底部片で、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器およびSD77との関係から、奈良時代と考えられる。

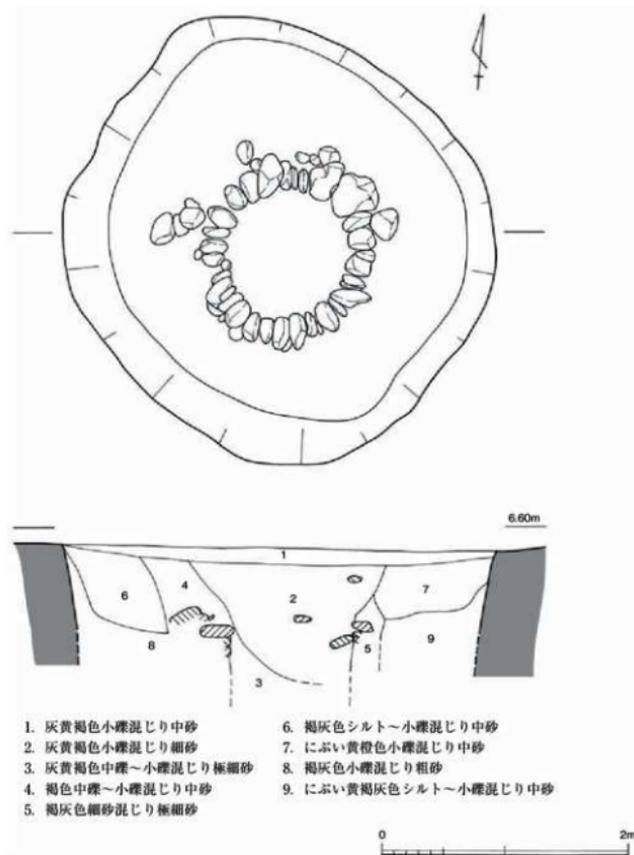
(5) 井戸

2基(S E 05・S E 06)検出している。

S E 05

概要 E地区で検出した石組の井戸である(第85図)。掘り方は、SD42と切り合い関係にあり、SD42を切っている。掘り方の平面形は、3.52m×3.28mの方形気味の円形をなす。ただし、検出面から1.05mまで検出したにとどまり、以下を検出することはできなかった(第114図)。

掘り方内のほぼ中央部に、石組の井戸が組まれていたが、検出できたのは最上部の石組のみである。基本的には20cm～40cm大の円礫が円形をなすように組まれている。石組の内径は、1.00mである。

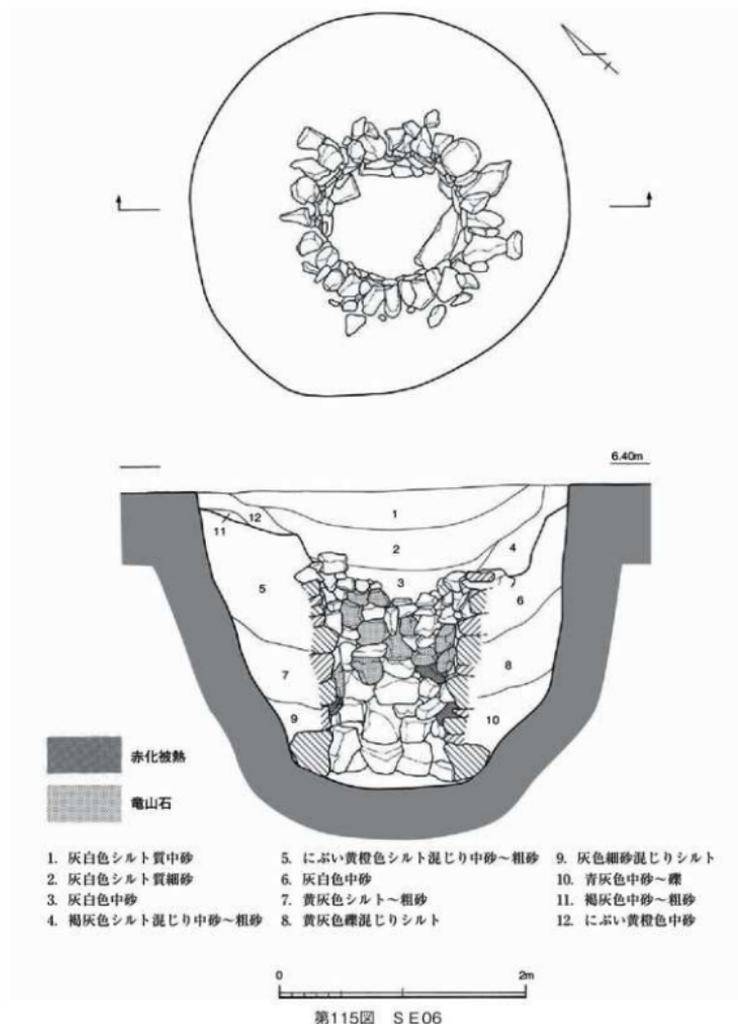


第114図 S E 05

第3章 調査の成果

出土遺物 土師器 (657)・唐津焼 (658)・瀬戸焼 (659) が出土している (図版24)。土師器は焙烙で、口縁部外面から体部内面にかけて横ナゲ調整により仕上げられている。唐津焼は刷毛目茶碗が出土している。高台端部は露胎し、砂が付着している。瀬戸焼も底部を中心に残存し、高台端部を除いて施軸されている。

時期 出土土器から江戸時代 (18～19世紀) と考えられる。



SE06

概要 F地区第1面北端部に検出した石組の井戸である(第84図)。他の遺構との切り合い関係は認められない。掘り方は、径3.10mの円形をなす。横断面は逆台形をなし、検出面からの深さは2.26mを測る。底部の標高は3.74mである。

掘り方内のほぼ中央部に、石組みの井戸が組まれていた。基本的には20cm～30cm大の角礫を使用し、内側が円形をなすよう組まれている。ただし、石組みは、底部から1.80mの高さまで遺存していたが、内側の石の面は整ってはおらず、凹凸が顕著である。基底部付近の石は上側より大きく、40cm大の石が使用されている。内側の径は、基底部で約1mを測る。なお、基底部には根太は使用されていなかった。

出土遺物 土師器(660・661)と須恵器(662)が出土している(図版24)。土師器は、いずれも羽釜型場である。体部外面は叩き成形により、内面はハケ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。662は、底部を中心に残存し、底部はヘラ切りにより切り離されている。体部外面には1条の沈線状のものが認められる。

時期 出土土器から第VI期と考えられる。

(6)土坑

35基(S K 29～S K 63)検出している。

S K 29

概要 D地区中央の西寄りに位置する。形状は不整長円形で、長径2.20m×短径1.10m、検出面からの深さは33cmである。縦断面は西から東に向かって二段に落ち込み、底面は平坦である。

出土遺物 須恵器の杯B(663)が出土している(図版24)。底部はヘラ切りにより切り離され、ナゲ調整により仕上げられている。

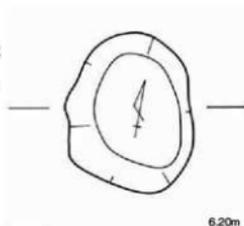
時期 出土土器から第III期と考えられる。

S K 30

概要 D地区中央の東壁寄りに位置する。形状は不整楕円形で、径は91cm×1.31m、検出面からの深さは42cmである。横断面は箱形を呈し、桶状のものが据えてあったのかもしれない(第116図)。

出土遺物 須恵器の甕と椀、瓦が出土している。

時期 出土土器から第III期と考えられる。



S K 31

概要 E地区の北隅に位置する(第85図)。もともと周囲が落ち込みであった所に掘り込まれており、S K 32を切っている。形状は長方形で、長径2.02m×短径1.60m、横断面は皿状で、検出面からの深さは15cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。



1. 褐灰色粗砂混じり細砂
2. におい貴褐色細砂混じりシルト

0 1m

第116図 S K 30

第3章 調査の成果

S K32

概要 E地区の北隅に位置する(第85図)。東端は調査区外で、西端はS K31に切られている。形状は不整形で、検出範囲内の規模は長径3.20m×短径2.35mで、横断面は皿状で、検出面からの深さは35cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

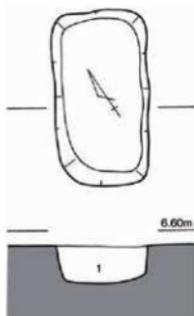
時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

S K33

概要 E地区の北西側で、西壁際に位置する(第85図)。西端は調査区外で、北端はS B13の柱穴に切られている。形状は方形で、検出範囲内の径は99cm、横断面は皿状で、検出面からの深さは34cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。



S K34

概要 E地区の北西側で、西壁際に位置する(第85図)。形状は隅円長方形で、径は72cm×1.44m、検出面からの深さは30cmである。遺構の長軸は、北西-南東方向に向いている。横断面は立ち上りの緩い箱形で、墓壇状の掘り込みを呈するが、木棺の痕跡は認められなかった(第117図)。

出土遺物 土製の土鐘が1点(664)出土している(図版24)。端部を欠き、残存長2.8cmを測る。最大径は8mmで、孔径は3mmである。重量は1.69gである。

時期 時期の特定は困難であるが、中世と考えられる。

S K35

概要 E地区の北西側で、S K34の2m南東に位置する(第85図)。形状は不整形な隅円長方形で、径は1.05m×1.40m、検出面からの深さは36cmである。遺構の長軸は、水田条里の東西方向に向いている。横断面は立ち上

がりの緩い箱形である。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

S K36

概要 E地区の北西側で、S K34の5m東に位置する(第85図)。形状は隅円長方形で、径は69cm×1.05m、検出面からの深さは11cmである。横断面は皿状である。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

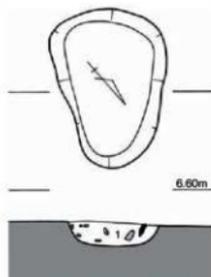
第117図 S K34

S K37

概要 E地区の北西側で、S K34の5m南に位置する(第85図)。形状は不整形円形で、径は83cm×1.30m、検出面からの深さは21cmである。横断面は立ち上がりの緩い箱形を呈する(第118図)。

出土遺物 土師器の埴が1個体(665)出土している(図版24)。羽釜型の埴であるが、口縁部下の突帯がわずかである。体部外面を叩き成形、内面をハケ調整後、口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から第Ⅶ期と考えられる。



1. 暗灰色細砂～極細砂

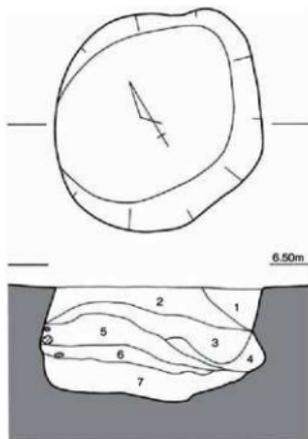
0 1m

第118図 S K37

S K38

概要 E地区の北側で、S K37の4m東に位置する(第85図)。形状は不整形円形で、垂直近くに掘り込まれており、内壁が崩れて、一部はオーバーハングしている。径は1.67m×2.26m、検出面からの深さは94cmである。埋土の上半部(1層～3層)は、人為的に埋め戻されている(第119図)。

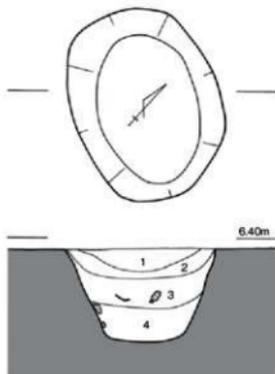
出土遺物 土師器と白磁が出土している(図版24)。土師器は、埴(666・667)と筒香炉(668)が出土している。埴は、2個体とも羽釜型の埴である。体部外面を叩き成形、内面をナゲ調整後、口縁部内外面は横ナゲ調整により仕上げられている。668は、筒状の体部に脚が付くものである。脚の高さは1.8cmを測り、ナゲと指オサエによる。



1. にぶい黄褐色シルト質中砂～極細砂
2. 灰黄褐色シルト質極細砂
3. にぶい黄褐色中砂～小礫
4. 暗褐色極細砂～細砂混じりシルト
5. 灰黄褐色シルト混じり中砂～粗砂
6. 褐色シルト質細砂
7. にぶい黄褐色極細砂質シルト

0 2m

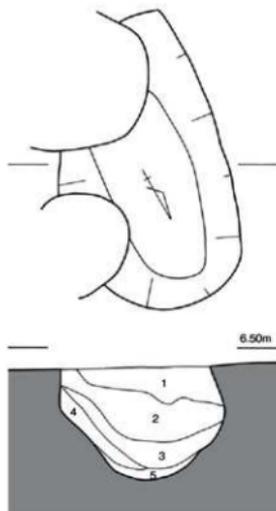
第119図 S K38



1. 灰黄褐色極細砂混じりシルト質極細砂
2. にぶい黄褐色シルト質極細砂
3. 灰黄褐色細砂～中砂
4. にぶい黄褐色シルト混じり細砂～中砂

0 1m

第120図 S K39



1. 褐灰色シルト混じり粗砂
2. 灰黄褐色シルト混じり粗砂～極細砂
3. 褐色シルト
4. 明黄褐色シルト質粗砂
5. 黄褐色シルト質粗砂～極細砂



第121図 SK40

り仕上げられている。体部外面はヘラ削り、内面はナゲ調整により仕上げられている。底部外面は未調整である。

白磁は、669の1点で、碗の底部と考えられる。回転ヘラ削りにより仕上げられている。

時期 出土土器から第Ⅷ期と考えられる。

SK39

概要 E地区の北側で、SK38の東に位置し、SK40を切っている(第85図)。形状は楕円形で、径は1.20m×1.58m、検出面からの深さは76cmである。横断面は逆台形を呈する(第120図)。

出土遺物 土師器(670)と備前焼(671)が出土している(図版24)。土師器は、鉄兜型の埴の口縁部片が1点出土している。体部外面は叩き成形、内面はハケ調整により、口縁部外面は横ナゲ調整により仕上げられている。備前焼は、播鉢が出土している。Ⅴ期に位置付けられるものである。

時期 出土土器から第Ⅷ期と考えられる。

SK40

概要 E地区の北側に位置し、遺構の南端をSK39に切られている(第85図)。形状は長円形で、その径は1.22m×2.40m、検出面からの深さは92cmである。垂直近く掘り込まれており、内壁の一部はオーバーハングしている。埋土の大半(1層～3層)は、人為的に埋め戻されている(第121図)。

出土遺物 備前焼(672)・須恵器(673)・陶器(674)が出土している(図版24)。備前焼は、Ⅳ期の播鉢が出土している。須恵器は甕の口縁部の小片が出土している。魚住産と考えられる。陶器は京焼系の碗で、底部を中心に残存する。

時期 出土土器から第Ⅷ期と考えられる。

SK41

概要 E地区中央の西寄りに位置し、掘立柱建物SB14の柱穴に切られている(第85図)。形状は溝状を呈し、検出面での長さは2.90m、幅は75cmである。横断面は皿状を呈する。

出土遺物 弥生時代中期の壺(677)が出土している(図版25)。口縁部内面には2条の突帯が貼り付けられ、それに直交するように2本をセットとした棒状浮文が貼り付けられている。また、この棒状浮文の両側には径3mmの穿孔が認められる。また、2条の突帯の外側には9条からなる櫛波状文が描かれている。この他、口縁端面にも5条からなる櫛波状文が描かれている。突帯より下側内面はヘラミガキ、外面下半はハケ調整、他は横ナゲ調整により仕上げられている。

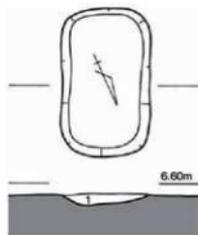
時期 出土土器は基盤層に伴う遺物と考えられ、当遺構の時期の特定は困難である。

S K 43

概要 E地区のほぼ中央で、SB15とSD40の間に位置し、SD39を切っている(第85図)。形状は隅円長形で、径は70cm×1.21m、検出面からの深さは10cmである。遺構の長軸は、ほぼ南北方向に向いている。横断面は皿状で、木棺等の痕跡は認められなかった(第122図)。

出土遺物 染付磁器の碗(675)が出土している(図版24)。産地は不明である。軸の特徴・器形等から19世紀前半と考えられる。

時期 出土土器から江戸時代と考えられる。



1. 黄灰色シルト混じり極細砂

0 1m
第122図 S K 43

S K 44

概要 E地区中央の西端部に位置する(第85図)。形状は不整長円形で、西端は調査区外である。検出範囲内の長径1.90m×短径98cm、検出面からの深さは26cmである。横断面は皿状を呈する。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

S K 45

概要 E地区中央の東端に位置する(第85図)。形状は不整形で、中央をSD45に切られる。径は1.60m×1.73m、検出面からの深さは21cmである。横断面は箱形で、底面は平らである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

S K 46

概要 E地区中央の東端に位置する(第85図)。形状は不整形で、北端をSD46に切られる。径は1.43m×2.10m、検出面からの深さは14cmである。横断面は箱形で、底面は平坦である。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

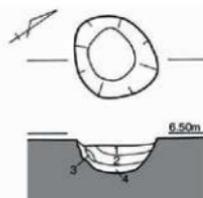
時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

S K 47

概要 E地区中央の東寄りに位置する(第85図)。形状は不整円形で、径は64cm、検出面からの深さは28cmである。横断面はボウル状を呈する(第123図)。

出土遺物 土師器の皿(676)が出土している(図版24)。軸輪成形によるもので、底部は回転糸切りにより切り離されている。口縁部は内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から第Ⅱ期と考えられる。



1. 灰黄褐色粗砂～シルト混じり細砂
2. 黒褐色シルト質極細砂
3. にぶい黄褐色シルト混じり中砂
4. にぶい黄褐色シルト～細砂混じり中砂

0 1m
第123図 S K 47

第3章 調査の成果

SK48

概要 L地区北東隅で検出した(第85図)。SK49の西側、SK50の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、その規模は35cm×35cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

SK49

概要 L地区北東隅で検出した(第85図)。SK48の東側、SK50の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、遺構の一部は調査区外へ広がっている。平面形は、長方形を指向し、主軸方向で1.80m検出した。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは9cmである。

出土遺物 土師器・須恵器・備前焼が出土している(図版25)。土師器は、羽釜(678)と埴(680)が出土している。羽釜は、口縁部外端部に鈎が横ナデにより貼り付けられている。体部内外面はナデ調整により仕上げられている。680は、羽釜型場の口縁部片である。須恵器は、鉢(679)と捏鉢(681)が出土している。679は、口縁部だけの小片で、一部がわずかに片口状をなしている。備前焼は、摺鉢(682)の口縁部片が出土している。端部は、Ⅲ期の特徴を示している。

時期 出土土器から第Ⅵ期と考えられる。

SK50

概要 L地区北東隅で検出した(第85図)。SK48の東側、SK49の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、その規模は50cm×60cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは38cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

SK51

概要 M地区第1面北隅で検出した(第84図)。SK52の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長方形をなし、その規模は4.65m×2.25mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmである。埋土は、褐色細砂1層である。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

SK52

概要 M地区第1面北部で検出した(第84図)。SK51の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長方形をなし、その規模は2.20m×2.30mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは45cmである。

出土遺物 弥生土器の壺が1個体(683)出土している(図版25)。壺の体部から底部にかけて残存し、底

部中央部には、焼成後に径1cmの穿孔がされている。体部外面は、下半が縦方向、中位が横方向のヘラミガキ、内面は指オサエとナゲ調整により仕上げられている。また、底部外面もヘラナゲが施されている。

時期 出土土器から弥生時代中期と考えられる。

S K53

概要 M地区第2面北部で検出した(第84図)。S K54の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、その規模は1.30m×2.05mを測る。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは35cmである。埋土は、黒褐色細砂1層である。

出土遺物 弥生土器の壺が1個体(684)出土している(図版25)。壺の体部上半の小片で、上から7条1単位の縞波状文・縞直線文、6条1単位の縞波状文・縞直線文、7条1単位の縞直線文、刺突文が施されている。

時期 出土土器から弥生時代中期と考えられる。

S K54

概要 M地区第2面北部で検出した(第84図)。S K53の東側、S D52の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形はやや歪んだ楕円形をなし、その規模は2.10m×2.60mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは43cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

S K55

概要 N地区北西隅で検出している(第84図)。東西68cm、南北52cmの楕円形をしている。深さは32cmと浅く、断面の形状は逆台形で、底面は平坦である(第125図)。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

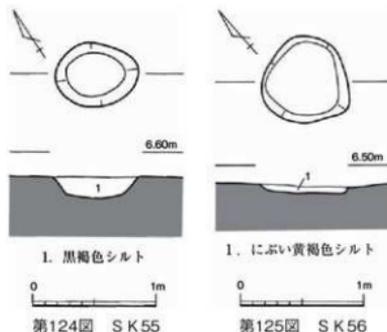
時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

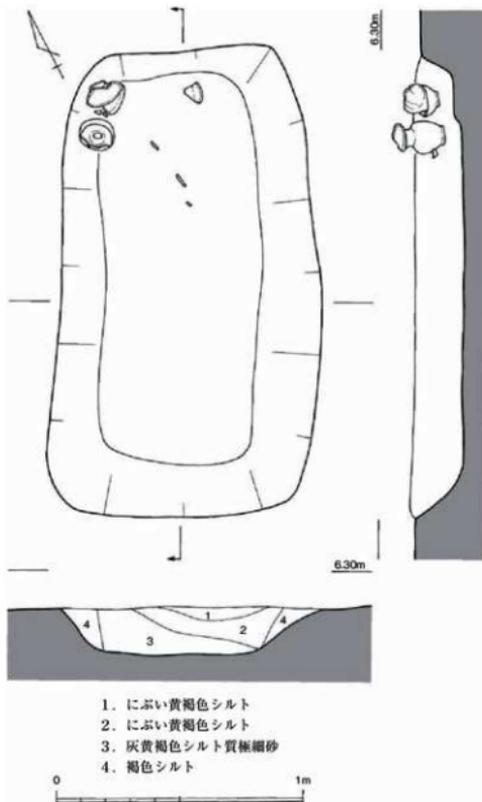
S K56

概要 N地区中央部で検出している(第84図)。S B19の北東隅の南側に位置している。空間を共有しているが、時期差があるかどうか不明である。不定円形で最大長74cmを測る。深さ5cmと浅く、かろうじて検出された土坑である(第125図)。

出土遺物 出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。





第126図 SK57

SK57

概要 G地区からN地区にかけて検出された(第84図)。SB20と平面的に重複するが、SB20との前後関係は調査では明らかにできなかった。平面的には明瞭な棺の痕跡を検出できなかったが、断面の検討から木棺墓と考えられる遺構である。平面形は隅丸長方形をなし、その規模は、主軸方向で1.90m、その直交方向で1.16mを測る。横断面は逆台形をなし、底部はほぼ平坦な面をなす。最深部における検出面からの深さは、20cmである。主軸方向はN26°30′Eとやや東に振っており、SB20の主軸方向とは異なる(第126図)。

土坑の北隅において、須恵器の椀と壺が副葬された状態で検出されている。その出土位置から判断して、棺外に置かれたものと考えられる。また、木棺に使用されたと考えられる鉄釘が、土坑北東部の底部から出土している。

出土遺物 黒色土器・土師器・須恵器が出土している(図版25)。黒色土器は、椀が1個体(685)出土

している。内面が黒化されたA類に分類されるものである。内外面とも磨滅が著しく、暗文は観察できない。高台は断面三角形をなし、その高さは5mmである。胎土は、生駒西麓産に近い特徴を示している。

土師器は、椀(686・687)が出土している。2個体とも同タイプの椀で、轆轤成形により造られている。687の底部は平高台をなし、回転糸切りにより切り離されている。体部から口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。

須恵器は、椀(688～690)と壺(691)が出土している。688と690は平高台をなすが、平高台の形態を若干異にする。さらに、688は糸切りにより、690はヘラ切りにより切り離されている。壺は691の1個体で、ほぼ完存する。ただし、口縁部は歪みが顕著である。底部はヘラ切り木調整で、体部肩部外面は回転ヘラ削りにより、他の外面は回転ナデ調整により仕上げられている。

この他、鉄釘(F30・F31)と刀子(F29)が出土している(図版29)。

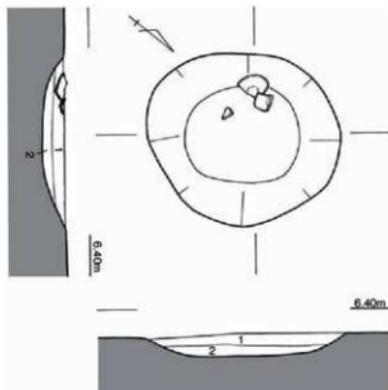
時期 出土土器から第II期と考えられる。

S K 58

概要 N地区で検出した(第84図)。S B 21の北西隅にある土坑で、南北78cm、東西72cmとほぼ円形を示し、緩やかな肩で底面は平坦である(第127図)。底に黒褐色シルトが堆積した上に土師器碗が出土している。深さが10cmと浅い遺構であるが、遺物の入った層は炭と地山が混ざった埋め土である。

出土遺物 須恵器の壺(692)と碗(693)が各1個体出土している(図版25)。碗は平高台をなし、回転系切りにより切り離されている。全体的に粗雑な造りである。

時期 出土土器から第I期と考えられる。



1. にぶい黄褐色シルト 2. 黒褐色シルト

0 1m

第127図 S K 58

S K 59

概要 K地区第1面中央部で検出した(第84

図)。S K 60の北東側に位置する。S D 62およびS K 61と切り合い関係にあり、両遺構を切っている。平面形はやや不定形で、その規模は2.30m×2.85mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは42cmである。

出土遺物 弥生時代中期の甕(694)が出土している(図版25)。如意形口縁を有する小型の甕で、外面全体的に被熱痕が認められる。全体的に磨滅が著しく、調整の観察は困難であるが、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から弥生時代中期と考えられる。

S K 60

概要 K地区第1面中央部北西側で検出した(第84図)。S K 59の南西側に位置する。S K 61と切り合い関係にあり、S K 61を切っている。ただし、本遺構の北西側は調査区外へ広がっており、全体を検出することはできなかった。平面形は長方形をなすものと考えられ、主軸方向で2.20mを検出し、その直交方向で1.45mを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは22cmである。

出土遺物 須恵器と土師器が出土している(図版25)。須恵器は甕(695・696)と碗(700)が出土している。2個体とも体部から頭部にかけて残存し、外面は平行叩きにより整形されている。700は、東播系の碗で、口縁端部は12世紀代の特徴を示している。

土師器は、皿が3個体(697~699)出土している。皿は、3個体とも特徴を異にする。697は、手づくね成形により、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。698は、轆轤成形によるもので、底部は回転系切りにより切り離され、ナデ調整が加えられている。口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。699は、いわゆる大皿と称されるもので、口縁部は2段の横ナデ調整により仕上げられている。体部外面はヘラ削りの後ナデ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から第III期と考えられる。

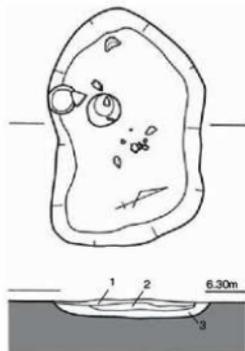
第3章 調査の成果

S K61

概要 K地区第1面中央部で検出した(第84図)。S K59とS K60に切られており、検出できたのは一部に限られる。このため、平面形・規模等を明らかにすることはできない。

出土遺物 須恵器と白磁が出土している(図版25)。須恵器は椀が1個体(701)出土している。底部はわずかに平高台の痕跡を残し、回転糸切りにより切り離されている。体部外面は回転ヘラ削りの後ナゲ調整、他は回転ナゲ調整により仕上げられている。口径に対して器高が低い傾向にある。白磁は、皿が1個体(702)出土している。底部を中心に残存し、底部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。底部外面を除いて施釉が認められる。

時期 出土土器から第III期～第IV期と考えられる。



1. 褐灰色粗砂混じり極細砂
2. 褐色粗砂混じり極細砂
3. 灰褐色粗砂混じり極細砂

第128図 S K62

S K62

概要 F地区第1面中央部で検出した(第84図)。S B23の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長楕円形をなし、その規模は1.10m×1.95mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmである。埋土は、3層からなる(第128図)。

出土遺物 須恵器の椀と椀が出土している(図版26)。椀鉢は、703の1個体で、口縁部が外方へつまみ出されている。内面に使用痕が認められる。椀は704と705の2個体で、同タイプに分類できるものである。

時期 出土土器から第III期と考えられる。

S K63

概要 J地区北東部で検出した(第84図)。S D67と切り合い関係にあり、S D67を切っている。このため、本遺構は完存する。平面形は長方形をなし、その規模は1.06m×92cmを測る。横断面は逆台形

をなし、最深部における検出面からの深さは40cmである。埋土は、上から、褐灰色中細砂混じりシルト、暗褐色中粗砂混じりシルトの2層からなる。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

(7)不明遺構

S X33

概要 E地区中央の東壁際に位置し、北東隅は調査区外である(第85図)。検出範囲内の長径3.90m×短径2.05m、検出面からの深さは36cmである。横断面は箱形で、底面は平らである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

S X34

概要 N地区南西部に位置する(第84図)。SB21の南側に位置する。SD60と切り合い関係にあり、SD60に切られている。また、本遺構の大半は調査区外へ広がっており、検出できたのはわずかである。

出土遺物 土師器の甕(706)が出土している(図版26)。く字形をなす口縁部の小片で、外面は指オサエと横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から中世前半と考えられる。

S X35

概要 K地区第2面東部に位置する(第84図)。SD63と切り合い関係にあり、SD63を切っている。遺構の多くが調査区外へ広がっている。このため、全体の形状・規模等を明らかにすることはできない。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

S X36

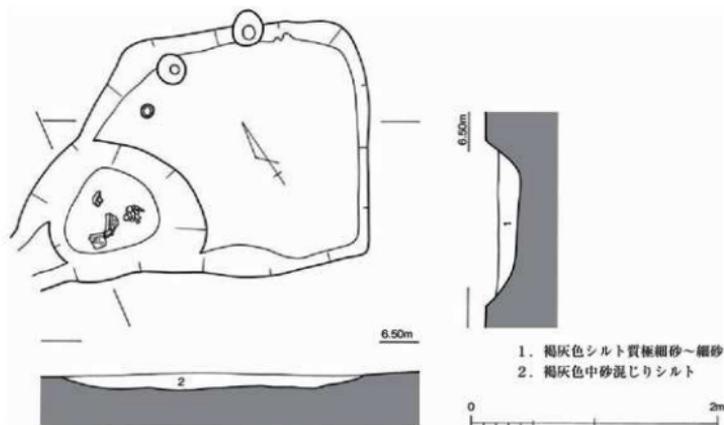
概要 F地区北側に位置し、西端は調査区外である(第84図)。検出範囲内で2.15m×2.20mの方形土坑で、東隅から延ばした溝でS X37と連結している。横断面は逆台形で、検出面からの深さは27cmである。

出土遺物 土師器の埴が出土している。

時期 出土土器から第V期に位置付けられる。

S X37

概要 F地区北側に位置し、掘立柱建物SB22の柱穴が一部で重複する(第84図)。2.0m×2.3m前後の方形土坑だが、西隅を土坑状に掘り込んで拡張しており、そこから延ばした溝でS X36と連結している。検出面からの深さは、方形部が14cm、土坑状の落ち込みの部分が27cmである(第129図)。



第129図 S X37

第3章 調査の成果

出土遺物 土師器の埴が出土している。

時期 出土土器から第V期に位置付けられる。

S X 38

概要 H地区に大型の長方形土坑2基が、北西-南東方向に長軸ラインを揃えて縦に並んでいる(第84図)。S X 38は北西側に位置し、南西半部は調査区外である。形状は隅丸長方形で、長径は4.20m、検出範囲内の短径は1.85mである。横断面は逆台形で、検出面からの深さは40cmである。

出土遺物 時期を特定できる遺物は出土していない。

時期 出土土器から第III期と考えられる。

S X 39

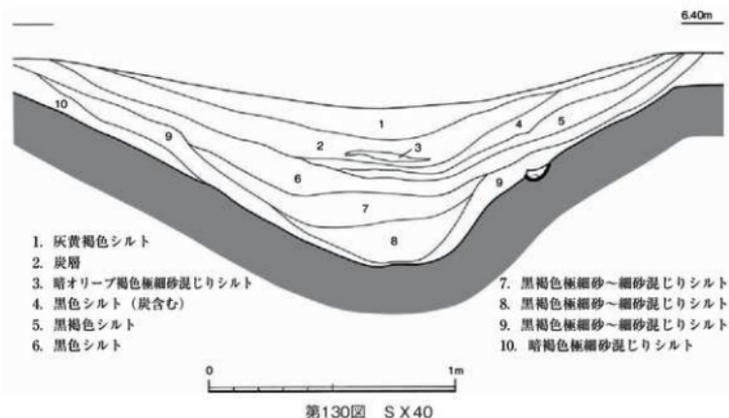
概要 H地区に大型の長方形土坑2基が、北西-南東方向に長軸ラインを揃えて縦に並んでいる(第84図)。S X 39は南東側に位置し、南西隅と北東部は調査区外である。形状は隅丸長方形で、長径は6.40m、短径は2.80mである。横断面は逆台形で、検出面からの深さは50cmである。

出土遺物 弥生土器・須恵器が出土している(図版26)。

弥生土器は、707と710の2個体で、707は弥生時代前期～中期初頃の、710は弥生時代前期の甕が出土している。710の外面には、4条のヘラ描沈線が認められる。

須恵器は、椀2個体(708・709)と杯B2個体(711・712)が出土している。椀は、2個体とも同タイプに分類されるもので、底部はわずかに平高台の痕跡をとどめる。杯Bは、法量を異にし、712の高台内側の底部には爪先痕が認められる。

時期 出土土器から奈良時代には掘削され、第II期には埋没したものと考えられる。



S x 40

概要 O地区南隅で検出している(第84図)。南半が調査区外に続いており、ほぼ半分を調査したと思われる。調査区内で最大2.65m確認している。最大の深さは68cmである。全体的に中央が深いレンズ状堆積を示している。底の方が顕著で、上に行くほど緩やかになっている。底部分は黒褐色シルト質極細砂が堆積しており、底から40cmほどのレベルから遺物が出土している。炭や地山ブロックなどが入り、人工的に埋められた土層であることが判断される(第130図)。

出土遺物 須恵器と土師器が出土している(図版26・27)。当遺構出土土器は、その出土状況から、良好な一括資料と位置付けられるものである。

須恵器は、椀(713~721)と杯(722)が出土している。椀は、9個体とも同タイプに分類できるもので、底部は平高台をなし、回転系切りにより切り離されている。713・714・717・718の体部外面には1条の沈線が施されている。杯は722の1個体で、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。体部外面下半部が回転ヘラナゲによる以外は、回転ナゲ調整により仕上げられている。

土師器は、皿(723~725)・椀(726~740・745)・杯(741・742)・托(743・744)・甕(746・747・749~752)・羽釜(748)が出土している。

皿は、3個体とも同タイプに分類されるもので、底部は回転系切りにより切り離され、全体的に回転ナゲ調整により仕上げられている。また、723の外面が全面に熱を受け、口縁部外面に煤が付着している。

椀は、平高台を有するタイプ(726~737・745)と高台付椀(738~740)に分類できる。前者は、全て同タイプからなり、底部は回転系切りにより切り離され、内外面とも回転ナゲ調整により仕上げられている。また、730・731は熱を受け、外面が赤変している。後者は、1.4cm~1.5cmの高台が貼り付けられ、ナゲ調整により仕上げられている。体部は回転ナゲ調整により仕上げられている。また、745の内面には煤の付着が認められる。

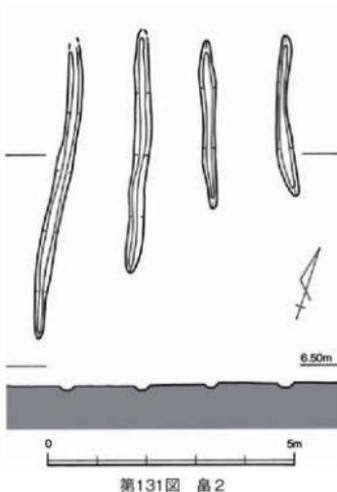
杯は2個体で、741の底部は回転系切りにより切り離されている。体部下端外面がヘラ削りにより仕上げられている以外は、回転ナゲ調整により仕上げられている。742は底部のみのため、椀の可能性も否定できない。

托は、743と744の2個体である。743は底部のみの残存で、回転系切りにより切り離されている。底部側面・底部内面は回転ナゲ調整により仕上げられている。744は、完形に復元できる個体で、底部は回転系切りにより切り離されている。体部~口縁部の内外面は回転ナゲ調整により仕上げられ、最後に底部内面に強いナゲ調整が加えられている。

甕は、746・747と749~752の2タイプに分類できる。前者は、口縁部の形状を異にするが、いずれも体部外面は吹き成形、内面はナゲ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。後者は、長胴タイプの甕で、前者同様、体部外面は吹き成形、内面はナゲ調整により仕上げられ、最後に体部上半から口縁部内外面が横ナゲ調整により仕上げられている。ただし、751と752の外面には吹き目は認められない。

羽釜は748の1個体である。口縁部外面に断面台形を呈する鏝を横ナゲ調整により貼り付けている。体部外面はハケ調整、体部内面はヘラ削りの後ナゲ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から第Ⅱ期に位置付けられる。



(8) 畠

O地区からP地区にかけて1区画(畠2)検出している。

畠2

概要 4条の鋤溝からなる。O地区からP地区にかけて検出されたもので、一部他の遺構と切り合う以外、ほぼ全体が明らかとなっている(第84図)。ただし、検出した鋤溝の長さは一様ではなく、東側ほど短くなっている。北西-南東方向に主軸をとり、その方位はN18°Wを示す。鋤溝の長さは、最も西側の鋤溝で6.00m、東側の鋤溝で3.30mを測る。鋤溝相互の間隔は、溝の肩間で、西側から1.05m・1.05m・1.25mである。鋤溝の横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは、8cm~15cmである。また、検出面における幅は30cmである。

出土遺物 土器が出土している。

時期 上記の理由から、時期の特定は困難である。

(9) その他

包含層から、本遺跡を検討する上で良好な資料が得られている。そこで、出土土器を中心に報告する。包含層からは、弥生時代・奈良時代~平安時代・平安時代中期以降の時代の土器が出土している(図版27・28)。

弥生時代は、753の1個体である。広口壺の口縁部で、中期に位置付けられる。

奈良時代~平安時代は、土師器・製塩土器・須恵器が出土している。土師器は、皿(755)が出土している。径18.5cmと大型の皿で、内外面とも化粧土が塗布されている。口縁部は肥厚し内側に折り返されている。体部には1段の斜方向の暗文が施されている。底部はヘラ削りの後ナゲ調整により仕上げられている。奈良時代中期と考えられる。製塩土器は、焼塩壺が1個体(754)出土している。

須恵器は、蓋(756)・杯(757~763・766)・皿(764・765)・壺(767)・椀(768~779)が出土している。蓋は、返りをもつタイプで、7世紀前半に位置付けられる。757の底部はヘラ切りにより切り離されている。7世紀前半に位置付けられる。皿は、形態・成形技法ともに杯Aと類似する。小型であることから皿としたもので、杯Aの可能性も否定できない。壺は、壺Qの口縁部片が出土している。

平安時代中期以降の土器は、須恵器・土師器・緑釉陶器・土鍾・瓦が出土している。

須恵器は、椀・皿・甕・壺が出土している。椀は、768と769~778の2タイプに分類できる。768は後椀に分類できるものである。後者は、10世紀以降の椀で、10世紀代(769~772)、11世紀代(773~775)、12世紀代(776~778)と、大きく3時期に分類できる。

皿は、779~781の3個体出土している。いずれも同タイプの皿で、底部は糸切りにより切り離した後、ナゲ調整により高台が貼付けられている。口縁部は回転ナゲ調整により仕上げられている。壺は、783の1個体である。底部は糸切りにより切り離され、体部は回転ナゲ調整により仕上げられている。肩部

に断面三角形の突帯が貼り付けられている。

土師器は、皿・椀・杯・羽釜が出土している。皿は、784～788の5個体出土している。いずれも軸輻成形によるもので、磨滅が顕著な784を除いては、底部は回転糸切りにより切り離されている。椀は、789～791の3個体が出土している。托に近いタイプ(789)と高台付椀(790・791)に分類できる。789の底部は回転糸切りにより切り離されている。790は、底部を糸切りにより切り離した後、高台が貼付けられている。杯は、792と793の2個体で、同タイプに分類されるものである。底部は回転糸切りにより切り離され、体部～口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。羽釜は797～799の3個体で、797と798は、口縁部外面に鈎が貼り付けられている。体部外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。799は、口縁部下に幅3.30cmの鈎が貼り付けられ、横ナデ調整により仕上げられている。口縁部内外面と体部内外面はナデ調整により仕上げられている。

緑軸陶器は794の1個体で、土師質の胎土を有する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

土鍾は、795と796の2個体が出土している。前者は須恵質で、全長5.7cm残存し、最大径4.05cm、穿孔径1.5cmを測る。後者は土師質で、全長2.35cm、最大径7.5mm、穿孔径3mmを測る。

瓦は平瓦の小片が2点(800・801)出土している。凹面には布目が認められ、凸面は叩き痕が認められる。801は須恵質に焼成されている。

第4章 自然科学分析

第1節 兵庫県大野遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、漆碗、曲物、下駄、下駄の歯、根太、柱根、木器などの木材 22 点と炭化材 1 点である。

3. 方法

試料のうち、木材はカミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柀目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40～1000 倍で観察した。炭化材については、試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柀目と同義）、接線断面（板

第1表 樹種同定結果一覧

No.	報告No.	出土地区	遺構	器種	結果 (学名/和名)	
1	W 5	A 地区	SE02	漆碗	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
2	W 6	A 地区	SE02	漆碗	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
3	W 3	A 地区	SE02	不明品	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
4		A 地区	SE02	曲物側板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
5	W 4	A 地区	SE02	曲物底板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
6		A 地区	柱穴	柱根	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
7	W 7	B 地区	SD10	漆碗	<i>Hovenia</i>	ケンボナシ属
8		C 地区	SE04		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
9		C 地区	SE04		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
10		C 地区	SE04		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
11		C 地区	SE04		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
12	W 8	C 地区	SE04		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
13		C 地区	SE04		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
14	W 2	C 地区	SE04	曲物側板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
15	W 9	C 地区	SE04	曲物底板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
16	W 1	C 地区	SE04	根太	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
17		F 地区	柱穴		<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
18	W11	H 地区	P47	柱根	<i>Ulmus</i>	ニレ属
19	W10	H 地区	P45	柱根	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
20	W12	J 地区	SD67	下駄	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
21		J 地区	SD67	下駄歯	<i>Magnolia</i>	モクレン属
22		J 地区	土坑	木器	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
					<i>Bambusoideae</i>	タケ亜科

目と同義)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

第1表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diptoxylon* マツ科 第132図

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：年輪幅が広く、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 第132図

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 第133図

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~10細胞高である。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱である。耐朽性、耐湿性ともに高い。とくに耐水湿材として用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 第133図

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

第4章 自然科学分析

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱で、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ニレ属 *Ulmus* ニレ科 第133図

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が1～3列配列する環孔材である。孔圍部外の小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～5細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オシヨウ、アキニレがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 第134図

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圍部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

モクレン属 *Magnolia* モクレン科 第134図

横断面：小型の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して多数散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、導管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。放射組織は上下端のみ直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～2細胞幅である。

以上の形質よりモクレン属に同定される。モクレン属にはホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する、常緑または落葉の高木ないし低木である。

ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメドキ科 第134図

横断面：大型で厚壁の丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合して配列する環孔材である。晩材部では小型で厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合してまばらに散在する。道管の径は早材から晩材にかけて徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。軸方向柔細胞は周囲状を示す。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりケンボナシ属に同定される。ケンボナシ属には、ケンボナシ、ケケンボナシがあり、ケンボナシは北海道（奥尻島）、本州、四国、九州に分布する。ケケンボナシは本州（西部に多い）、四国に分布する。どちらも落葉高木である。材は建築、家具、楽器、器具など広く用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 第135図

横断面：小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は22～45本ぐらいである。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列のものが多く、2列幅のものも見られる。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靱かつ堅硬で、建築、器具などに用いられる。

タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科 第135図

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と節部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。タケ亜科にはマダケ属、メダケ属、ササ属などがある。

5. 所見

同定の結果、大野遺跡の木材は、マツ属複維管束亜属3点、スギ11点、コウヤマキ1点、ヒノキ1点、ニレ属1点、ケヤキ2点、モクレン属1点、ケンボナシ属1点、サカキ1点であった。

マツ属複維管束亜属は柱根などに使用されている。木材は水湿に良く耐える材である。スギは曲物の側板、底板など最も多く使用されている。木材は加工仕事が容易な上、大きな材がとれる良材である。コウヤマキは木器に使用されている。木材は耐湿性に特に優れ、針葉樹の中では最も加工のしやすい材である。ヒノキは下駄に使用されている。木材は木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。ニレ属は柱根に使用されている。ニレ属のうちハルニレは重硬、オヒョウは強さ中庸、アキニレはあまり強い材とは言えない。ケヤキとケンボナシ属は、漆樹に使用されている。ケヤキは強靱で、従曲性に富み、耐朽性、保存性は高く水湿にもよく耐え、切削、加工は比較的容易な材である。ケンボナシ属は強さ中庸で切削、加工は容易な材である。モクレン属は下駄の歯に使用されている。軽軟で緻密、耐朽性、保存性は低いが、切削、加工が極めて容易な材である。サカキはまくら木に使用されている。強靱、堅硬な材である。

マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、ヒノキは温帯に広く分布する常緑針葉樹である。マツ属複維管束亜属には土壌条件の悪い岩山に生育し二次林を形成するアカマツと、砂地の海岸林を形成するクロマツとがある。スギは土壌深く地味肥沃な谷筋や緩傾斜地を最も好み、積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する。ヒノキはやや傾斜のある適潤地を好み、急傾斜地、尾根筋、岩盤上にも生育する。ニレ属、ケヤキ、ケンボナシ属は温帯に広く分布する落葉広葉樹である。ニレ属のうち、ハルニレとオヒョウは

第4章 自然科学分析

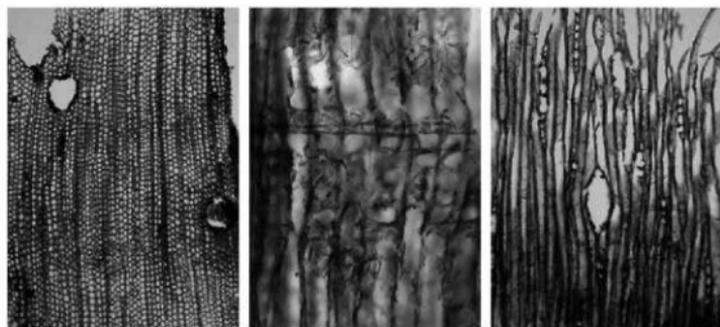
山地に、アキニレは水辺等に生育する。ケヤキは谷沿いなどの適潤な肥沃地に、ケンボナシ属は山野に生育する。モクレン属は温帯に広く分布する落葉ないし常緑の広葉樹であり、谷合いまたはこれに続く斜面等に分布する。サカキは温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の構成要素である。

炭化材はタケ亜科であった。タケ亜科は温暖な地域を好んで生育する。

以上から大野遺跡の木材はスギが多く、当時遺跡周辺地域の植生を反映したものとみられる。他に樹種も周辺か周辺地域に生育し、近隣地域からの流通の範囲でもたらす事の出来る木材である。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 49-100.
- 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p. 296
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p. 242



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm

1. 資料No.6 柱根 マツ属複維管束亜属



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm

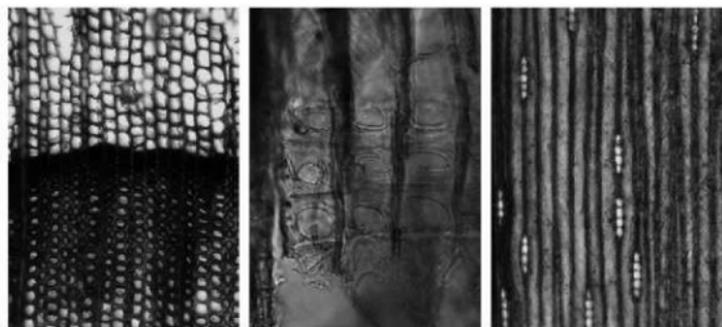
2. 資料No.4 曲物側板 スギ



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm

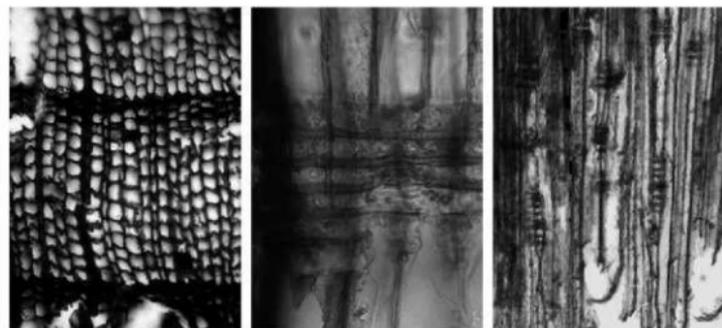
3. 資料No.5 曲物底板 スギ

第132図 大野遺跡の木材及び炭化材 I



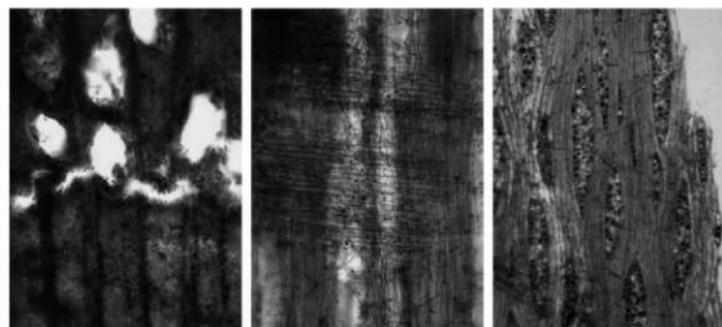
横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm

4. 試料No.22 木器 コウヤマキ



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm

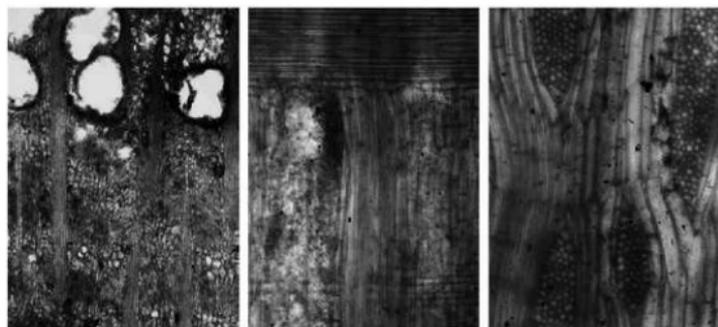
5. 資料No.20 下駄本体 シノキ



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm

6. 資料No.18 柱根 ニレ属

第133図 大野遺跡の木材及び炭化材Ⅱ

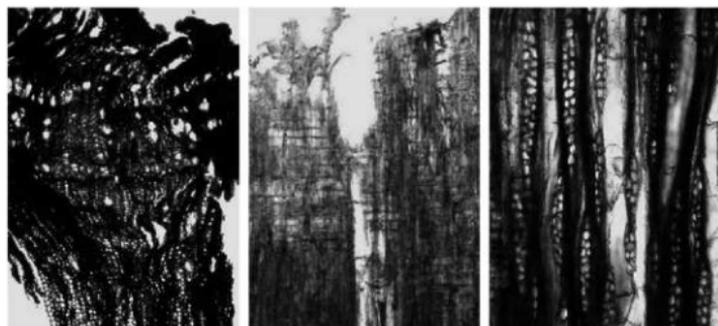


横断面 : 0.5mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

7. 資料No.2 漆碗 ケヤキ

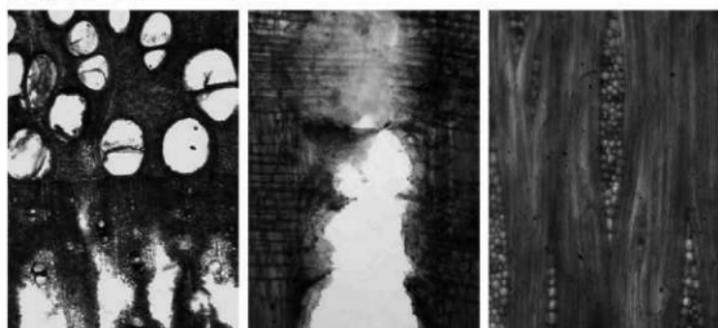


横断面 : 0.5mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

8. 資料No.21 下駄箱 モクレン属



横断面 : 0.5mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

9. 資料No.7 漆碗 ケンボナシ属

第134図 大野遺跡の木材及び炭化材Ⅲ



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm
10. 資料No.16 北面 まくら木 サカキ



横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
11. 資料No.1 炭化材 タケ壺科

第135図 大野遺跡の木材及び炭化材Ⅳ

第2節 大野遺跡における花粉分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

大野遺跡は、加古川市加古川町大野の加古川左岸の支流に所在する。ここでは、大野遺跡における農耕および植生を検討する目的で花粉分析を行った。

2. 試料

分析試料は、C地区西側崖下南部の中州上の水田から採取された試料No.1（淡茶色シルト）、C地区SD17から採取された試料No.2（淡灰茶色シルト）の計2点である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm²を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で糞などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマンシ液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4. 結果

- 1) C地区西側崖下南部、中州の上、水田（試料No.1）

花粉密度が極めて低く、検出されない。

- 2) C地区SD17（試料No.2）

花粉密度が極めて低く、検出されない。

第4章 自然科学分析

5. 考察

大野遺跡のC地区西側崖下南部、中州の上の水田（試料№1）、C地区晶1（試料№2）では、いずれの試料も花粉密度が極めて低く、植生を復元するに至らなかった。花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積時間が速かったことなどが考えられる。試料№1水田においては、乾湿を繰り返す乾田ないし田畑輪換の形態であった可能性が示唆される。またC地区SD17（試料№2）では、雨水などが流れる程度で、常時乾燥していた可能性が考えられる。

参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p. 248-262。
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
- 中村純（1967）花粉分析。古今書院、p. 82-110。
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究、13, p. 187-193。
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p. 21-30。
- 中村純（1980）日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。

第3節 大野遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

大野遺跡は、兵庫県加古川市加古川町大野（北緯 34° 46′ 29″、東経 134° 51′ 14″）に所在する。測定対象試料は、SX10 出土の木炭 (01: IAAA-83009)、SK42 出土の木炭 (09: IAAA-83010)、SK19 出土の木炭 (03: IAAA-83011)、SD13 出土の木炭 (04: IAAA-83012)、P23 出土の木炭 (05: IAAA-83013)、SD22 出土の木炭 (06: IAAA-83014)、SX31 出土の木炭 (07: IAAA-83015)、SX27 出土の木炭 (08: IAAA-83016)、合計 8 点である。

2 測定の意義

遺構の時期を特定する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA: Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1N の水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が 1N 未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polash 1977)。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{14}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C 年代と誤差は、1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、

第4章 自然科学分析

試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv4.0 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

¹⁴C年代は、SX10 出土の木炭 (01) が $630 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK34 出土の木炭 (09) が $1260 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK19 出土の木炭 (03) が $640 \pm 30\text{yrBP}$ 、SD13 出土の木炭 (04) が $650 \pm 30\text{yrBP}$ 、P23 出土の木炭 (05) が $580 \pm 30\text{yrBP}$ 、SD22 出土の木炭 (06) が $980 \pm 30\text{yrBP}$ 、SX31 出土の木炭 (07) が $590 \pm 30\text{yrBP}$ 、SX27 出土の木炭 (08) が $1310 \pm 30\text{yrBP}$ である。

07 では木炭の最外年輪部から測定対象を採取した。その他は小片であり、樹木の樹皮や最外年輪を確認できなかった。試料の炭素含有率は、すべて60%以上であり、化学処理および測定内容に問題は認められない。

第2表

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
AAA-83009	01	SX10	木炭	AAA	-26.47 ± 0.39	630 ± 30	92.49 ± 0.36
AAA-83010	09	SK42	木炭	AAA	-26.18 ± 0.50	1,260 ± 30	85.48 ± 0.31
AAA-83011	03	SK19	木炭	AAA	-25.17 ± 0.44	640 ± 30	92.33 ± 0.32
AAA-83012	04	SD13	木炭	AAA	-24.19 ± 0.44	650 ± 30	92.23 ± 0.33
AAA-83013	05	P23	木炭	AAA	-25.45 ± 0.47	580 ± 30	93.09 ± 0.33
AAA-83014	06	SD22	木炭	AAA	-26.50 ± 0.34	980 ± 30	88.56 ± 0.31
AAA-83015	07	SX31	木炭	AAA	-26.90 ± 0.35	590 ± 30	92.93 ± 0.33
AAA-83016	08	SX27	木炭	AAA	-25.07 ± 0.37	1,310 ± 30	84.92 ± 0.30

[#2792]

第3節 大野遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

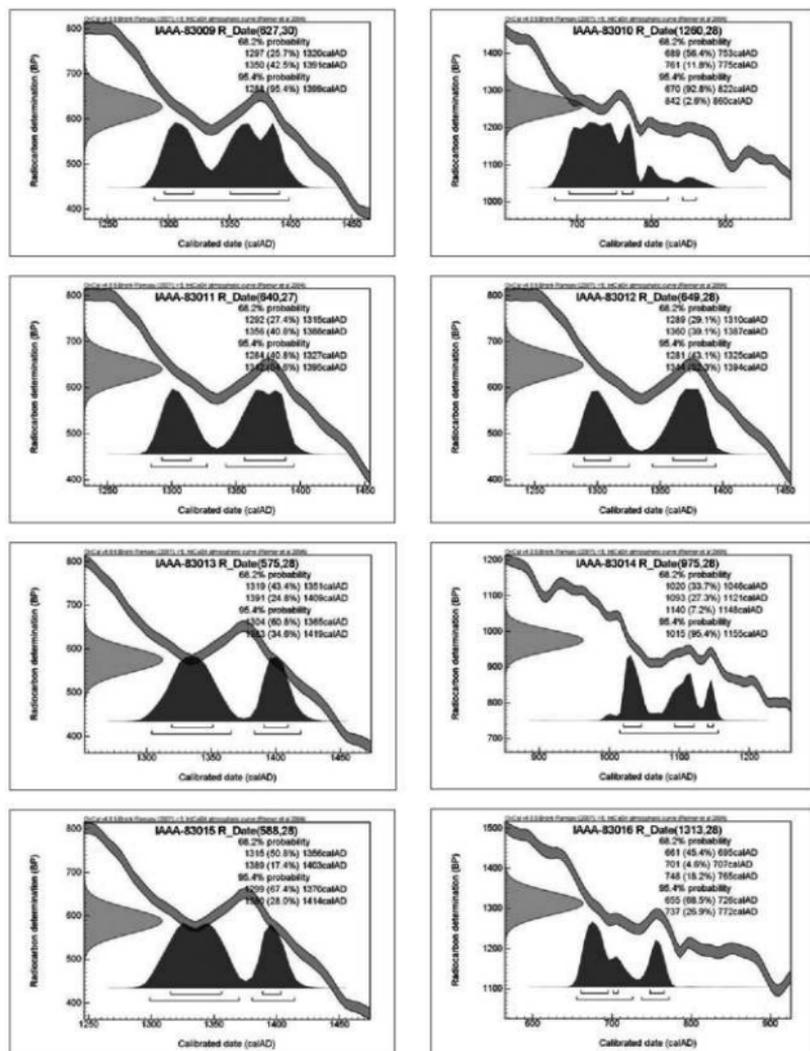
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-83009	650 ± 30	92.21 ± 0.35	627 ± 30	1297AD - 1320AD (25.7%) 1350AD - 1391AD (42.5%)	1288AD - 1399AD (95.4%)
IAAA-83010	1,280 ± 30	85.27 ± 0.29	1,260 ± 28	689AD - 753AD (56.4%) 761AD - 775AD (11.8%)	670AD - 822AD (92.8%) 842AD - 860AD (2.6%)
IAAA-83011	640 ± 30	92.30 ± 0.31	640 ± 27	1292AD - 1315AD (27.4%) 1356AD - 1388AD (40.8%)	1284AD - 1327AD (40.8%) 1342AD - 1395AD (54.6%)
IAAA-83012	640 ± 30	92.38 ± 0.32	649 ± 28	1289AD - 1310AD (29.1%) 1360AD - 1387AD (39.1%)	1281AD - 1325AD (43.1%) 1344AD - 1394AD (52.3%)
IAAA-83013	580 ± 30	93.00 ± 0.32	575 ± 28	1319AD - 1351AD (43.4%) 1391AD - 1409AD (24.8%)	1304AD - 1365AD (60.8%) 1383AD - 1419AD (34.6%)
IAAA-83014	1,000 ± 30	88.29 ± 0.31	975 ± 28	1020AD - 1046AD (33.7%) 1093AD - 1121AD (27.3%) 1140AD - 1148AD (7.2%)	1015AD - 1155AD (95.4%)
IAAA-83015	620 ± 30	92.57 ± 0.33	588 ± 28	1315AD - 1356AD (50.8%) 1389AD - 1403AD (17.4%)	1299AD - 1370AD (67.4%) 1380AD - 1414AD (28.0%)
IAAA-83016	1,310 ± 30	84.90 ± 0.29	1,313 ± 28	661AD - 695AD (45.4%) 701AD - 707AD (4.6%) 748AD - 765AD (18.2%)	655AD - 726AD (68.5%) 737AD - 772AD (26.9%)

[参考値]

第4章 自然科学分析

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第136図 [参考] 暦年較正年代グラフ

第4節 大野遺跡出土須恵器、中世陶器の蛍光X線分析

大阪大谷大学 三辻利一

1) はじめに

古墳時代には和泉陶邑（大阪府堺市）に100基を越える須恵器窯跡が発見されているが、地方では限られた地域に数基程度の少数の窯跡が発見されているに過ぎない。この現状から、地方窯周辺の消費地遺跡出土須恵器の産地問題の研究には、（陶邑製品）／（地元製品）間の2群判別法が適用された。その結果、陶邑産と推定される須恵器が大量に、各地の消費地遺跡で検出されている。他方、地方窯の製品は窯周辺の遺跡から検出されるものの、遠く畿内の遺跡へ供給されたというデータは皆無である。陶邑製品が一方的に地方の消費地遺跡へ供給されていた訳である。

一方、平安時代になると、須恵器生産は地方へ拡散し、各地に多数の須恵器窯跡が発見されている。しかも、国庁周辺には数10基以上の窯跡が集中する大規模窯群も発見されている。ここで生産された須恵器は「調」として、国庁関連の消費地遺跡へ供給されたものと推察される。現在、これらの大規模な須恵器生産地の製品が地方の国庁関連の消費地遺跡へどのようにして供給されていたのかが検討されている。他方、地方にある数基〜10基程度の小規模窯群の製品は何処へ供給されたのかも研究課題の一つである。平安時代の須恵器の生産と供給の関係を再現するためには、古代の各領国内の窯跡出土須恵器の化学特性を整理しておくことは必要である。このような観点から、古代最大の須恵器生産地とみられる兵庫県内の窯跡出土須恵器の蛍光X線分析が進められている。本報告では蛍光X線分析法によって、加古川市内に在る大野遺跡から出土した須恵器、中世陶器の産地推定を試みた。

2) 分析法とデータ解析法

蛍光X線分析による定量分析では試料を粉末し、一定形状の測定用試料を調製することは鉄則である。須恵器、中世陶器片は表面を研磨してのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で、100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を測定用試料として調製した。使用した装置は理学電機製RIX2100（波長分散型）である。この装置はTAP、Ge、LiFの3枚の分光結晶と、ガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの二つの検出器を装備しており、これらはコンピュータによって自動制御されている。さらに、試料の交換、データの打ち出しを含めて自動化された完全自動式の蛍光X線分析装置である。使用X線管球はRh管球（出力3.0kW）であり、使用条件は50kV、50mAである。この条件で土器胎土中の微量元素RbとSrを分析することができる。

岩石標準試料、JG-1を定量分析の標準試料として使用した。あらかじめ、日本地質調査所から配布されている数種類の岩石標準試料を使って検量線を作成して、直線性があることを確認したが、通常、検量線は毎日作成するものではなく、数ヶ月か1年に一度程度作成するものである。筆者は毎日のように土器試料の分析をするので、装置自身の恒常性を点検することを考慮にいれ、簡易法として、JG-1による標準化法を採用した。この方法ではJG-1の分析値と原点を通る直線を検量線に代替させている訳である。同じ日に測定されたJG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で分析値を表示した。このほうがデータ処理が簡単であるばかりではなく、K-Ca、Rb-Srの両分布図を作成したり、統計計算する上には便利である。なにしろ、土器の生産と供給の過去を再現する研究では従来の常識を破る大量の土

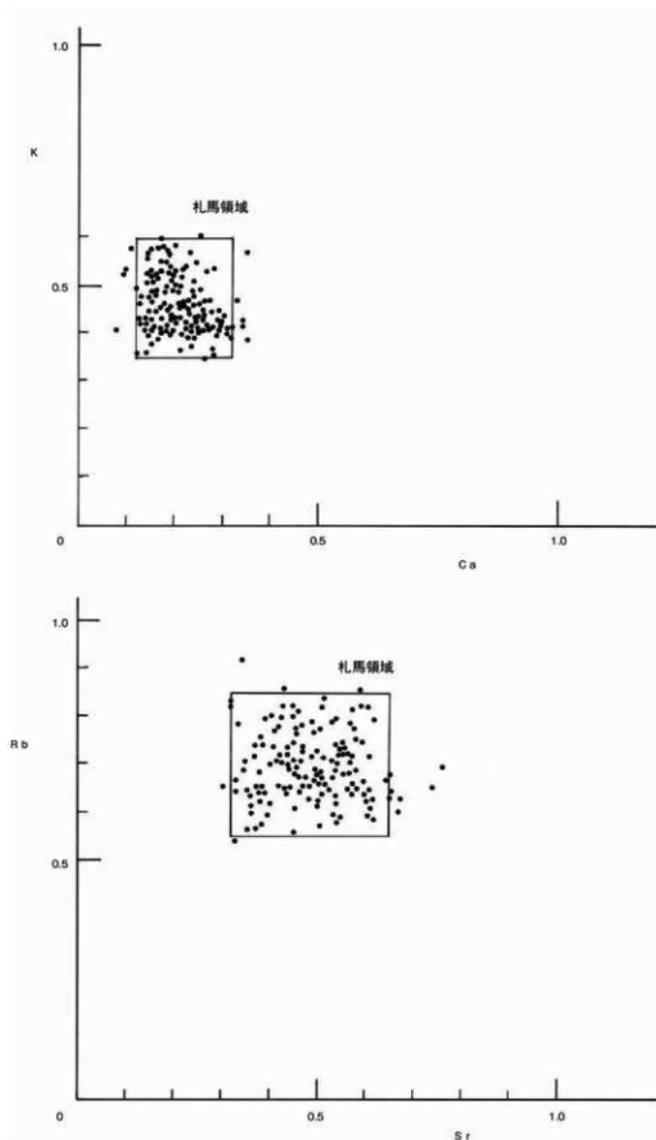
器試料の分析が必要であり、データ処理が簡便であることは不可欠であるからである。

データ解析にはまず、生データを使ってK-Ca、Rb-Srの両分布図を作成し、この結果を見た上で、2群間判別分析の母集団となる二つの母集団を選択した。2群間判別分析における母集団の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値の計算にはK、Ca、Rb、Srの分析値(JG-1による標準化値)を使用した。その結果に基づいて2群間判別図を作成した。

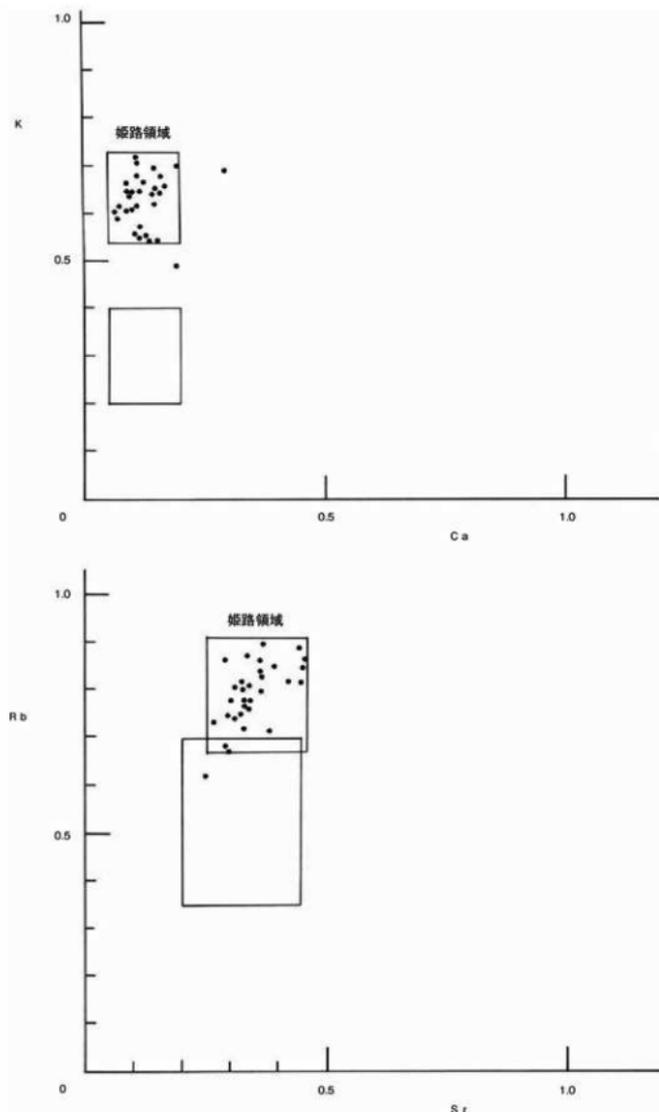
3) 分析結果

分析結果は第3表にまとめられている。

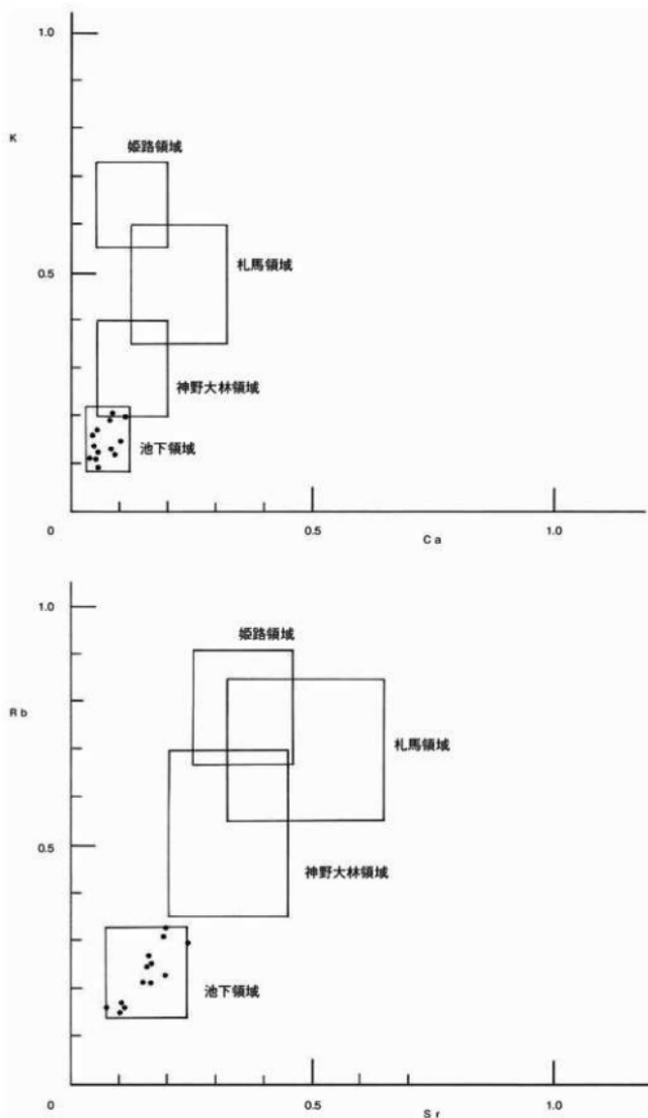
はじめに、母集団となる地元の須恵器窯群の化学特性を比較した。第137図には、加古川市の札馬窯群の須恵器の両分布図を示す。札馬1、2、5、7、22、23、30、36、41、44、45、47、48、49、50号窯跡から出土した須恵器片が分析された。これらの試料の大部分を包含するようにして札馬領域を長方形で描いてある。この領域は定性的な意味しかもたないが、他の窯群の須恵器の化学特性と比較する上では有効であり、便利でもある。第138図には姫路市周辺の窯群(青山4号窯、桜崎1号窯、青山いなり神社窯)の須恵器の両分布図を示してある。札馬窯群の場合と同様、窯群としてまとまって分布することが分かる。このことはそれぞれの窯群の須恵器は一定の化学特性をもつことを示す。ただ、同じ地域内でも自然界の不均質性のため、粘土の化学特性にはばらつきがあり、その結果、窯群としてもある程度の広がりをもつことになったと考えられる。恐らく、粘土の採取場所にずれがあるものと推察される。自然界におけるこの不均質性がある限り、如何に測定精度の高い高価な装置を使って分析しても意味はない。むしろ、ばらつきの広がりを把握する上に多数の試料の分析が必須である。これが完全自動式の装置を使用する一つの理由であり、筆者が使っている分析装置で分析精度は十分であることが確認されている。このことは意外に知られていない事実である。分析精度さえ上げれば、産地推定ができるかと勘違されては困る。胎土分析による土器の生産と供給の再現に関する研究では自然界に実在する粘土の不均質性を理解しなければならない。第138図では比較のために、操業年代は異なるが、加古川左岸に在る神野大林窯群の須恵器の分布領域と比較してある。大野遺跡にとっては加古川左岸に在る窯跡の製品が地元製品と推察される。明らかに、姫路群の須恵器にはK、Rbが高く、神野大林群の須恵器とは化学特性が異なることが分かる。第139図には神出窯群池下支群の須恵器の両分布図を示す。神出窯群池下支群の須恵器にはK、Rbは少なく、周辺の他の窯群の須恵器からは容易に識別できることが分かる。この図には比較のために、各窯群の多数の窯跡から出土した須恵器片の分析データに基づいて、各窯群の領域を描いてある。加古川市周辺の窯群出土須恵器はCa、Srよりもむしろ、K、Rbの含有量に差違があり、姫路群が最も多く、次いで、札馬群、そして、神野大林群、神出池下支群の順にK、Rb量は減少することが分かる。また、Ca、Sr量は札馬群の須恵器が最も多く、神出池下支群の須恵器が最も少ない。姫路群、神野大林群の須恵器はその中間であることが第139図から分かる。一般に、須恵器(粘土)にみられる地域差は岩石の地域差ほど大きくはないので、このように、生データを分布図上にプロットしてはじめて、地域差が目に見える形で理解できる。土器の胎土研究には両分布図を作成することはきわめて重要であり、元素分析による胎土研究の第一歩である。このプロセスを経ないと胎土研究を推進することは困難であると筆者は考えている。第139図から、加古川市周辺の消費地遺跡から出土する須恵器の生産地は周辺の生産地(窯群)に結びつけることが十分可能であることが分かる。



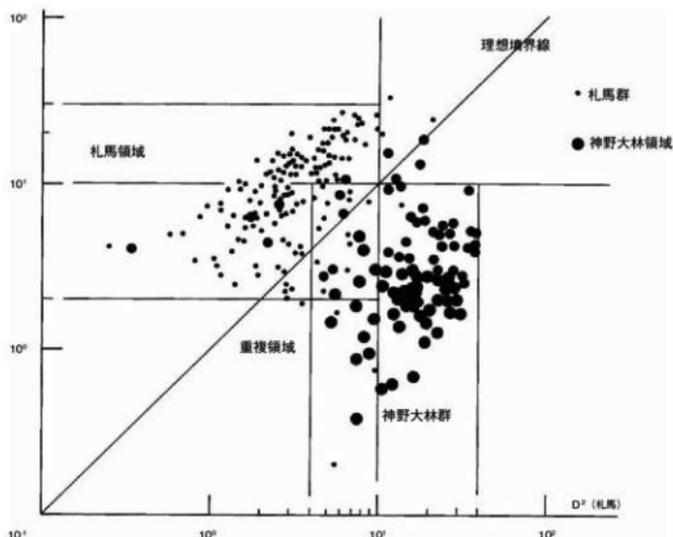
第137図 札馬黨群の須恵器の両分布図



第138図 姫路家群の須恵器の両分布図



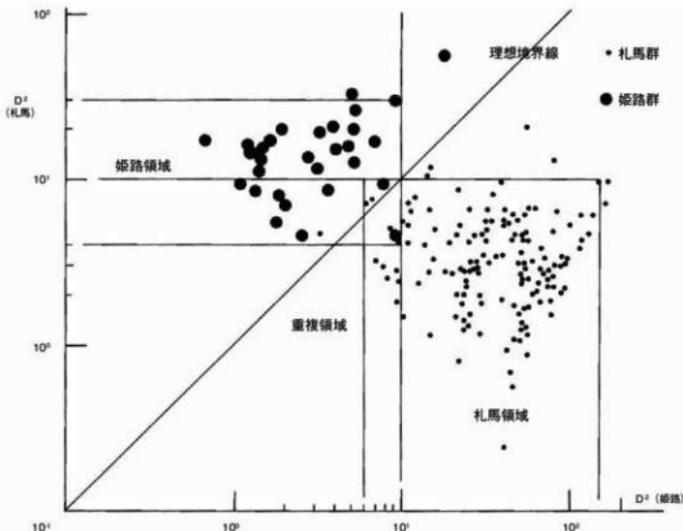
第139図 神出窯群（池下支群）の須恵器の両分布図



第140図 神野大林群と札馬群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr)

二分分布図は定性的な領域しか表さないが、窯群間の化学特性を比較する上では大変便利である。しかし、定量的に窯群間の相互識別をしようとすると、統計学的手法の導入が必要である。このことは各母集団は各元素の平均値だけで化学特性を表すのではなく、平均値と標準偏差をつけた形ではじめて把握できることを意味する。母集団は点で表示できるものではなく、ボート広がった星雲状の存在なのである。このような母集団の相互識別には統計学的手法の導入が必要である。筆者は通常、2群間判別分析法を使用している。

第140図には札馬群と神野大林群間の2群間判別図を示す。2群間判別図の両軸は両母集団の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値である。(X)母集団の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を通常、 $D^2(X)$ と表示する。2群間判別図を作成するため、両母集団のすべての試料について両群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値をK, Ca, Rb, Srの分析値を使って計算する。札馬群と神野大林群の全試料について D^2 (札馬)、 D^2 (神野大林)を計算し、その結果をプロットしたのが第140図である。中央に引かれた斜線は理想境界線であり、両群の重心からの等距離にある点の軌跡と定義されている。したがって、理想境界線を挟んで、両群の試料集団は分かれて分布するはずである。ただ、両群の化学特性が類似してくると、両群の試料集団は次第に接近して分布し、重複領域が生じる場合がある。その極端な例が両群の化学特性が同じであると、両群の試料集団は理想境界線に沿って混在して分布することになる。この場合は両者の相互識別は不可能である。陶色の初期須恵器の窯跡である大庭寺1号窯と2号窯の場合がそれに相当する。しかし、一般には、両群の試料集団は理想境界線を挟んで、分かれて分布するのが普通である。第140図をみると、両群の試料の大部分は理想境界線を挟んで分かれて分布しているが、重複領域「 $2 < D^2$ (神野) < 3.0 、 $4 < D^2$ (札馬) < 4.0 」もあることがわかる。



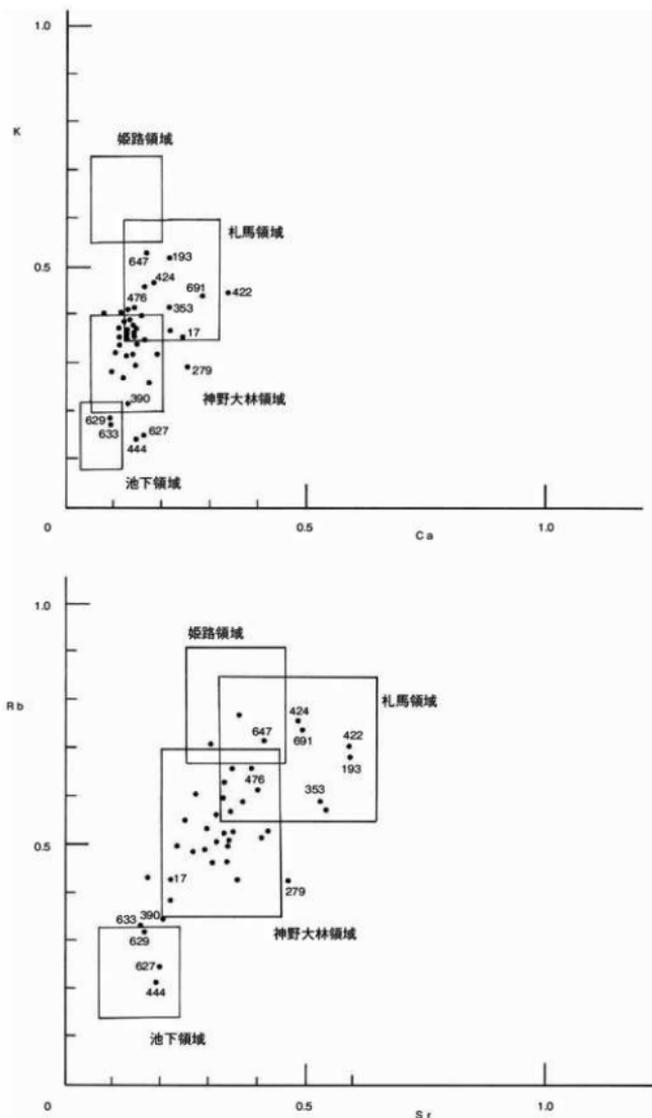
第141図 姫路支群と札幌群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr)

この領域に分布すると、どちらの母集団に帰属するのか判断ができない。第140図をみると、互いに相手群の試料と誤判別する確率はある程度あることが分かる。しかし、両群の大部分の試料はそれぞれ、札幌領域、神野領域に分かれて分布しており、相互識別は十分可能であることを示している。

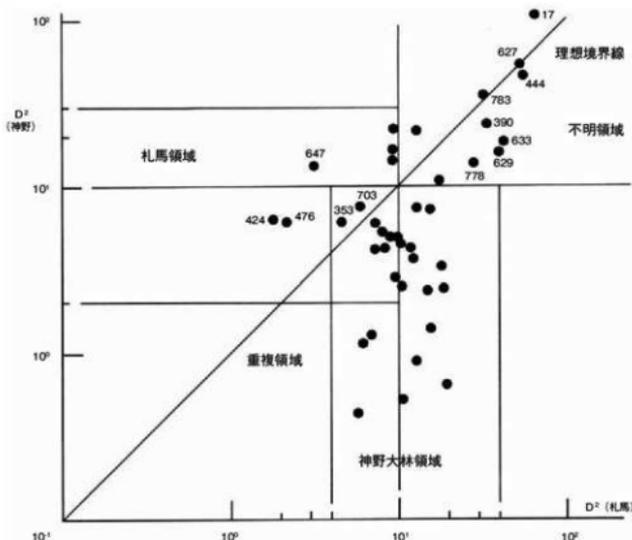
第141図には札幌群と姫路群間の2群間判別図を示してある。この場合には重複領域は第140図に比べて小さく、姫路群と札幌群の相互識別は札幌群と神野大林群の相互識別よりもより容易であることを示している。今回は神出群との相互識別はしていないが、第139図のK-Ca、Rb-Srの両分布図における各母集団の分布領域からみて、神出群との相互識別はさらに容易に相互識別が出来ることが予想できる。このように、基礎データとして、平素から、母集団の試料の分析データを集積しておくことは胎土研究にとって不可欠である。このような基礎データの集積の上に須恵器の生産と供給問題の再現の作業が進められる。

次に、大野遺跡出土須恵器の産地問題の説明に入る。第142図には大野遺跡出土須恵器の両分布図を示す。比較のために、上述した姫路領域、札幌領域、神野大林領域、神出池下領域を描いてある。とくに、Rb-Sr分布図から、大部分の試料は神野大林領域に対応していることがわかる。また、少数の試料は札幌領域に分布しており、札幌窯群の製品も含まれていることを示している。両分布図で神出池下領域に分布する試料はほとんどないが、その周辺に分布する試料も数点 (No. 627, 629, 633, 444) あることも分かる。

定性的な推察は2群間判別図でさらに、定量的に確認される。第143図には大野遺跡出土須恵器の分析結果を札幌群と神野大林群間の判別図上にプロットしたものである。多くの試料は神野大林領域に分布していることが分かる。ただ、神野大林窯群は奈良時代の窯跡であり、大野遺跡出土の平安時代の須恵

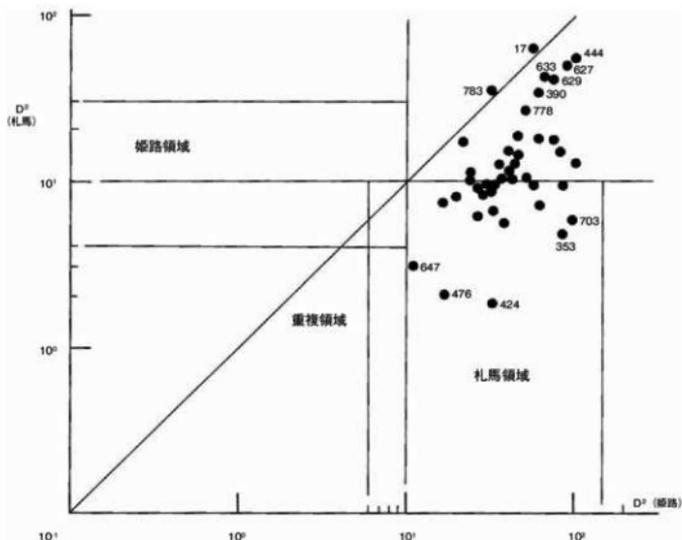


第142図 大野遺跡出土須恵器の両分布図



第143図 大野遺跡出土須恵器の産地推定(1) (K, C a, R b, S r)

器の産地が神野大林窯群の製品とする訳にはいかない。神野大林窯群と同じ、加古川左岸にある平安時代の地元窯の製品と考えられる。操業時期が異なっても、同じ地域内に在る窯の製品は在地産の粘土を素材としているので、類似した化学特性をもつものと考えられるからである。他方、札馬領域に分布するのは第142図からも予想されるように、No. 193、353、422、424、476、647の6点である。両分布図で姫路領域に分布した南畝町遺跡のNo. 375は札馬領域にも神野大林領域にも対応せず、不明領域に分布していることが分かる。不明領域に分布する試料は他にもあることが分かる。第144図をみると、大野遺跡出土須恵器の中には姫路領域に分布する須恵器は1点もないことが確認される。このことは姫路窯群から大野遺跡へは須恵器は供給されていなかったことを意味する。また、No. 353、424、476、647、703の5点の須恵器は札馬領域に分布しており、札馬窯群の製品と推定される。札馬窯群から少数ではあるが、大野遺跡へ須恵器が供給されていたことが分かる。他方、札馬領域内の端に分布する試料は数点あるが、これらの試料は果たして札馬製品かどうかは疑わしい。むしろ、これらの試料は札馬領域から不明領域にかけて分布する多くの試料群とともに一つの群れをなして分布しているとの解釈も成り立ち、これらは同じ産地（加古川左岸の窯）の製品である可能性もある。これらの試料集団とは離れて不明領域に分布するNo. 17、390、444、627、629、633、778、783の8点の試料は加古川左岸地域の窯の製品や、札馬窯群、姫路窯群の製品でもない。別産地の製品と推定される。これらのうちNo. 390、444、627、629、633の5点の須恵器は第142図で神出池下領域の周辺に分布した須恵器であり、池下支群以外の神出窯群の製品である可能性がある。これらの須恵器の型式の再検討も必要である。No. 17、778、783の3点が産地不明の須恵器となる。以上の結果、 $D^2(X) < 1.0$ の条件を満たす生産地を産地として推定した結果が第3表の最右欄にまとめてある。ただし、神野大林群産としてあるのは神野大林窯群と同じ加古川左岸

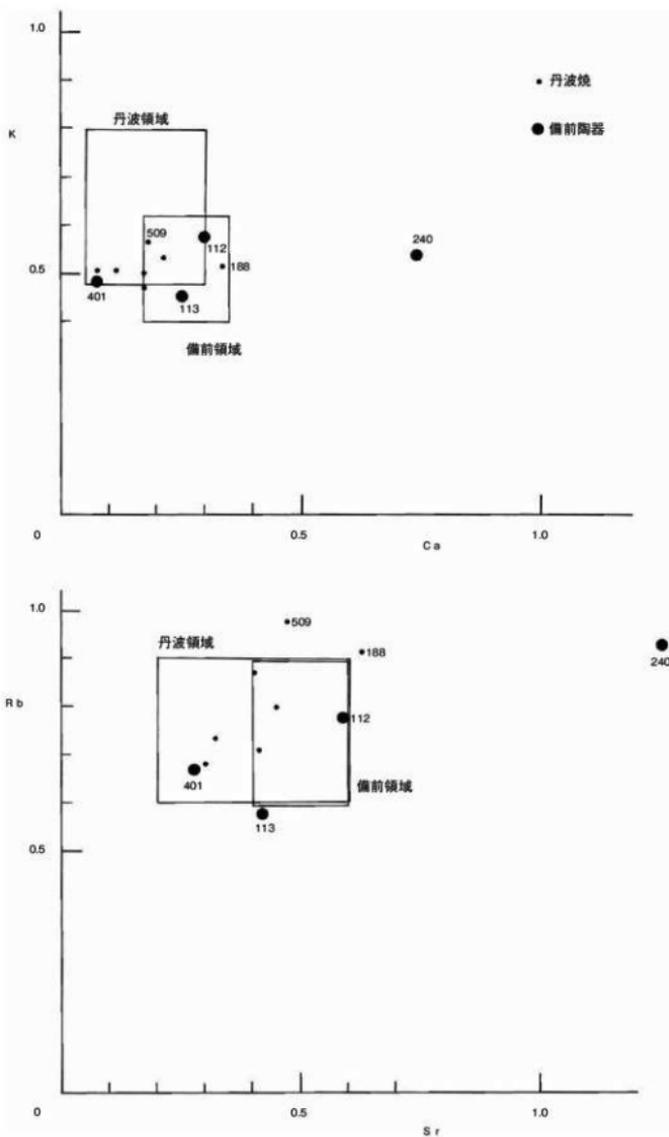


第144図 大野遺跡出土須恵器の産地推定(2) (K, Ca, Rb, Sr)

の地域に在る、同時代の須恵器窯の製品であるという意味であり、操業時期の異なる神野大林窯群の製品ではないことを断っておく。

このようにして、今後、兵庫県内の平安時代の消費地遺跡から出土する須恵器を蛍光X線分析して行くことによって、その生産と供給の関係を再現することは可能であろう。そのデータが集積されたとき、そのデータから背後の社会体制について論じることが出来るだろう。それが考古学者の役割となろう。

最後に大野遺跡から出土した中世陶器の分析結果について述べる。今回は分析した試料数が少ないので、また、中世陶器は多くの場合、土器型式から備前陶器とか丹波陶器と推定される場合が多いので判別分析は行わず、ここでは土器型式からの推定結果に基づき、両分布図上でそれぞれ、丹波領域、備前領域に対応させてみた。両分布図は第145図に示す。丹波焼きと推定されたものはほぼ、丹波領域に対応している。ただ、No. 188、509の2点はRb-Sr分布図で丹波焼き領域を少しずれる。一方、備前陶器と推定されたもののうち、No. 112、113の2点は両分布図ではほぼ備前領域に対応しており、胎土分析からも備前陶器と推定できる。No. 401はCa、Srが少なく、備前領域よりも、むしろ、丹波焼き領域に対応しており、備前陶器ではない。分布領域から丹波焼きの可能性もある。No. 240はCa、Srとも異常に多く、備前領域からも大きくずれる。備前陶器とは判断できない。ここでは産地不明の中世陶器としておく。中世陶器についても今後、須恵器と同様、胎土分析のデータを集積していくことは必要である。



第145図 大野遺跡出土丹波焼・備前焼の兩分布図

第4節 大野遺跡出土須恵器、中世陶器の蛍光X線分析

第3表 胎土分析資料一覧

試料番号	三辻研No.	種別	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	Bz (神野)	Bz (礼馬)	Bz (姫路)	推定産地
17	20-678	須恵器	碗	0.36	0.24	2.88	0.43	0.22	0.05	110.00	64.20	55.50	不明
73	20-679	須恵器	靉鉢	0.30	0.14	1.61	0.43	0.36	0.13	3.30	18.40	75.70	神野大林
90	20-680	須恵器	鉢	0.40	0.15	1.81	0.53	0.35	0.22	5.00	8.50	32.00	神野大林
109	20-681	須恵器	靉鉢	0.36	0.10	1.91	0.55	0.25	0.12	4.10	11.70	24.60	神野大林
110	20-682	須恵器	靉鉢	0.34	0.15	2.22	0.49	0.29	0.16	7.30	12.80	35.20	神野大林
111	20-683	丹波焼	甕	0.53	0.21	1.72	0.87	0.40	0.23				
112	20-684	備前焼	甕	0.57	0.30	1.59	0.78	0.59	0.27				
113	20-685	備前焼	甕	0.45	0.25	2.90	0.58	0.42	0.25				
129	20-686	須恵器	碗	0.33	0.14	2.18	0.60	0.33	0.09	6.53	10.20	37.90	神野大林
165	20-687	須恵器	靉鉢	0.32	0.13	1.95	0.47	0.31	0.19	2.30	14.50	47.30	神野大林
166	20-688	須恵器	靉鉢	0.35	0.16	1.88	0.57	0.31	0.12	5.30	8.40	29.10	神野大林
168	20-689	須恵器	靉鉢	0.29	0.09	2.10	0.49	0.27	0.16	6.65	18.90	46.60	神野大林
169	20-690	須恵器	靉鉢	0.39	0.12	1.59	0.53	0.33	0.20	2.80	9.60	34.10	神野大林
171	20-691	須恵器	靉鉢	0.40	0.12	1.65	0.61	0.27	0.16	6.00	7.40	16.50	神野大林
175	20-692	須恵器	靉鉢	0.36	0.14	1.58	0.50	0.34	0.19	2.60	10.40	42.30	神野大林
188	20-693	丹波焼	靉鉢	0.51	0.07	1.29	0.68	0.30	0.15				
186	20-694	丹波焼	甕	0.51	0.11	1.76	0.74	0.32	0.14				
187	20-695	丹波焼	靉鉢	0.47	0.17	1.65	0.71	0.41	0.21				
188	20-696	丹波焼	甕	0.52	0.33	1.43	0.92	0.63	0.22				
193	20-697	須恵器	甕	0.52	0.21	1.16	0.68	0.59	0.31	17.00	9.60	86.80	礼馬
201	20-698	須恵器	靉鉢	0.38	0.13	1.82	0.57	0.35	0.19	1.30	6.70	33.60	神野大林
240	20-699	備前焼	甕	0.54	0.74	1.85	0.93	1.25	0.31				
254	20-700	須恵器	甕	0.34	0.11	2.15	0.51	0.32	0.20	0.92	12.70	43.40	神野大林
279	20-701	須恵器	碗	0.29	0.25	2.95	0.43	0.47	0.14	22.20	12.90	101.00	不明
288	20-702	丹波焼	甕	0.50	0.17	1.50	0.80	0.45	0.20				
287	20-703	須恵器	靉鉢	0.37	0.14	2.00	0.54	0.30	0.19	5.00	9.20	27.60	神野大林
353	20-704	須恵器	碗	0.42	0.22	1.93	0.59	0.53	0.23	6.20	4.60	83.30	礼馬
354	20-705	須恵器	碗	0.41	0.08	2.21	0.50	0.33	0.11	11.00	17.20	22.70	不明
390	20-706	須恵器	靉鉢	0.22	0.13	2.41	0.35	0.20	0.04	24.30	34.10	60.90	不明
401	20-707	備前焼	甕	0.49	0.07	1.34	0.68	0.29	0.14				
422	20-708	須恵器	甕	0.45	0.34	1.78	0.71	0.59	0.25	22.10	9.50	58.80	礼馬
424	20-709	須恵器	甕	0.47	0.18	1.33	0.76	0.48	0.21	6.40	1.70	32.00	礼馬
444	20-710	須恵器	碗	0.14	0.14	2.76	0.22	0.20	0.06	47.00	54.10	99.10	不明
475	20-711	須恵器	碗	0.37	0.14	1.46	0.59	0.37	0.12	6.43	5.70	38.80	神野大林
476	20-712	須恵器	碗	0.47	0.17	2.16	0.66	0.39	0.17	6.30	2.10	17.00	礼馬
488	20-713	須恵器	靉鉢	0.33	0.10	2.19	0.47	0.34	0.26	2.40	18.60	62.20	神野大林
491	20-714	須恵器	靉鉢	0.39	0.12	2.05	0.51	0.34	0.23	3.70	11.90	40.70	神野大林
509	20-715	丹波焼	甕	0.57	0.18	1.30	0.98	0.47	0.19				
627	20-716	須恵器	碗	0.14	0.16	2.03	0.25	0.20	0.03	53.20	51.20	92.20	不明
629	20-717	須恵器	碗	0.19	0.09	2.16	0.32	0.17	0.02	16.50	40.80	70.70	不明
633	20-718	須恵器	碗	0.18	0.09	2.44	0.32	0.16	0.02	18.60	42.10	68.80	不明
635	20-719	須恵器	碗	0.41	0.12	1.62	0.71	0.30	0.13	4.20	8.10	19.60	神野大林
647	20-720	須恵器	碗	0.53	0.17	1.29	0.72	0.41	0.17	13.50	3.10	11.10	礼馬
691	20-721	須恵器	甕	0.44	0.28	1.46	0.74	0.49	0.23	14.10	9.50	31.80	礼馬
693	20-722	須恵器	碗	0.36	0.13	1.30	0.62	0.40	0.12	4.50	10.40	51.90	神野大林
703	20-723	須恵器	靉鉢	0.37	0.22	1.62	0.58	0.54	0.20	7.70	5.80	99.20	礼馬
705	20-724	須恵器	碗	0.32	0.19	1.89	0.53	0.42	0.13	4.10	7.00	63.50	神野大林
762	20-725	須恵器	杯A	0.42	0.14	1.61	0.77	0.36	0.16	4.60	10.10	24.50	神野大林
772	20-726	須恵器	碗	0.38	0.13	1.32	0.66	0.35	0.14	1.20	6.10	27.10	神野大林
778	20-727	須恵器	碗	0.27	0.12	2.59	0.38	0.22	0.09	14.00	28.00	51.40	不明
780	20-728	須恵器	皿	0.26	0.18	1.38	0.52	0.41	0.12	7.20	15.00	80.60	神野大林
781	20-729	須恵器	皿	0.31	0.14	1.57	0.64	0.33	0.10	1.40	15.70	42.60	神野大林
783	20-730	須恵器	甕	0.38	0.11	3.17	0.44	0.17	0.10	35.40	33.80	30.60	不明

第5章 まとめ

第1節 遺物

1. はじめに

本書で本報告する遺物としては、土器・石器・金属製品・木製品が出土している。ここでは、土器を中心にまとめていくことにする。土器は、主に、弥生時代・古墳時代・奈良時代～平安時代前半・平安時代後半～室町時代に分けることができる。以下、この区分に従い、まとめていくことにする。

2. 弥生時代

前期と中期の土器が出土している。全体的に出土量は少ない。また、出土地点は、南地区に限られる。

前期の土器は、P41 から壺が出土している。頸部に3条のヘラ描沈線が施され、前期でも新しい時期に位置付けられるものと考えられる。ただし、この土器は柱穴の時期そのものを示すものではないものと考えている。

中期の土器は、SD61 から長頸壺(605)が、SK52 から広口壺(677)と体部片(683)が、SK53 から壺の肩部片(684)が、SK59 から甕(694)が、M地区基盤層中から直口壺(802)と甕(803)が出土している。684と802は、その文様構成から、中期前半に位置付けられるものと考えられる。694についても、その形態から、中期前半に位置付けられる。

以上から、大野遺跡出土の弥生土器、とりわけ中期の土器については、中期前半に位置付けられるものと考えられる。特に、802は、M地区一帯の基盤層が中期前半に形成されたことを示す資料と考えられる。

3. 古墳時代

SD34 出土資料に限られる。須恵器と土師器が出土している。須恵器は、杯H・杯B・杯A・高杯・はそうが出土している。杯Bと杯Hの特徴から、7世紀初頭に位置付けられる。はそうについても、体部が小型であることから、当該期に位置付けられるものである。

土師器では、甕・高杯・鉢・碗・瓶が出土している。須恵器の示す時期の良好な資料と考えられる。

4. 奈良時代

須恵器と土師器が出土しているが、土師器はわずかである。

須恵器は、杯A・杯B・杯B蓋・碗B・皿・壺・甕の各器種が出土している。杯A・杯B・杯B蓋の特徴から、奈良時代(8世紀代)の範疇で理解できるものと考えられる。

土師器としては、皿と甕が出土している。皿は、ての字口縁を有するもので、内面に1段の斜行の暗文が施されている。他に、わずかではあるが、焼塩壺の小片が出土している。

また、当該期の遺物として注目されるのが、619の土馬である。完存しないものの、鞍が比較的ていねいに表現されており、律令祭祀普及の一端を示す資料と考えられる。

5. 平安～室町時代

当該期の土器が最も多く出土している。当遺跡の性格・機能を検討するうえでも、重要な位置を占めている。以下、器種分類を経て、時期の検討を中心に行なっていく。当該期の土器としては、土師器・須恵器・丹波焼・備前焼・瀬戸美濃焼・青磁・白磁・その他と、多種に及ぶ。以下、主な種別ごとに分類を行い、その年代観を明らかにしていくことにする。

(1) 土器の分類

① 土師器

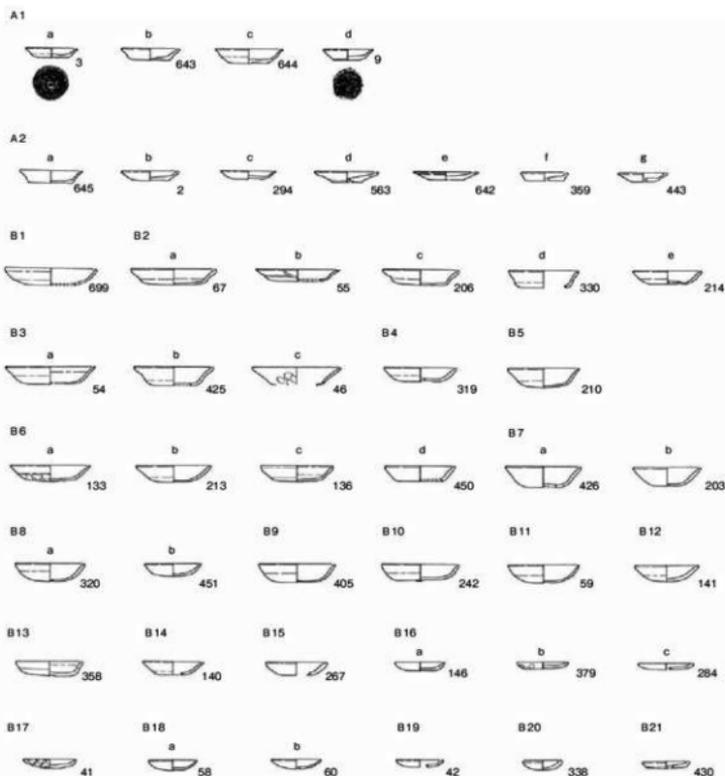
量的に最も多く出土している。器種としては、皿・杯・碗・甕・埴甕・他が出土している。

I：皿 大きく、軸轆成形によるもの(皿A)と手づくね成形によるもの(皿B)に分類できる(第146図)。

皿Aは、底部の切り離しがへら切りによるタイプ(A1)と糸切りによるタイプ(A2)に細分できる。

A1については、4タイプに細分できる。

A1a：口径に対して器高の浅いタイプ。3。



第146図 土師器 皿の分類

第5章 まとめ

- A 1 b: 口径に対して深いタイプ。643。
- A 1 c: 口径・器高が大きいタイプ。644。
- A 1 d: A 1 aより小型で浅いタイプ。9。
- A 2については、7タイプに細分できる。
- A 2 a: Aタイプの中では口径・器高ともに大型のタイプ。645。
- A 2 b: A 2 aに対して器高の低いタイプ。端部は丸味を帯びる。2・10。
- A 2 c: 口縁端部を薄く仕上げ、外反させるタイプ。形態はA 2 bと同じ。294。
- A 2 d: 底部が平高台状をなし、口径に対して底径が小さいタイプ。563。
- A 2 e: A 2 cと形態的に類似するが、底部が平高台状をなさないタイプ。642。
- A 2 f: 底部に対して口縁部がわずかに立ち上がるタイプ。口径が7.4 cmと大変小型である。359。
- A 2 g: 口径に対して底径がわずかで、口径が7.6 cmと大変小型のもの。443。
- 皿Bについては、量的に最も多く出土しておりバリエーションに富む。以下、21タイプに細分できる。
- B 1: 体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部が2段の横ナゲ調整により仕上げられる。699の1個体のみ。
- B 2: 大きく内湾する体部に対して口縁部がわずかに内湾傾向にあるタイプで、外面にその変化点
が明瞭なもの。法量により、さらに細分できる。
- B 2 a: 口径に対して器高が低いもの。56・67。
- B 2 b: B 2 aよりさらに器高が低いもの。55。
- B 2 c: B 2 aより口径が小さなもの。径高指数はB 2 aより高い。206・381。
- B 2 d: 口径がB 2 b以下で、B 2 bより深いタイプ。330。
- B 2 e: B 2 dに対して器高が低いもの。214。
- B 3: B 2と形態的には類似するが、口縁部が高く、大きく外反し、端部まで薄く仕上げられる。
体部と口縁部の境は不明瞭である。法量・形態から3タイプに細分できる。
- B 3 a: 口縁部の外反が明瞭なもの。54。
- B 3 b: B 3 aに対して口径が小さく、径高指数が大きなもの。425。
- B 3 c: 前2タイプに対して、口縁部の外反が顕著でないもの。46。
- B 4: 体部から口縁部にかけてほぼ直線的にのびるもの。底部はへそ皿状をなす。209・247・319・
325。
- B 5: 形態的特徴は皿B 3に類似するが、皿B 3より口径が小さく、器高が高いもの。210・427。
- B 6: 体部から口縁部にかけてほぼ直線的にのび、底部は明確な平底をなすもの。法量等により、
4タイプに細分できる。
- B 6 a: 口縁部は強い横ナゲにより仕上げられ、外面体部との境に段が見られる。口縁端部は薄
く仕上げられ、わずかに外反気味。77・133。
- B 6 b: 形態的にはB 6 aと同様であるが、口縁部が薄く仕上げられない。口縁部は内湾傾向。
213。
- B 6 c: 口縁部がB 6 bよりさらに肥厚傾向にあるもの。B 6 aより口径が小さい。136。
- B 6 d: 口縁部が直線的で、立ち上がりがわずか。450。
- B 7: 口径に対して器高が高いもの。口径に対して底径が小さい。杯形態に近いもの。皿B 5と形

態的には類似するが、法量的特徴が異なる。形態的特徴により、2タイプに細分できる。

- B 7a: 口縁部と体部の境が比較的明瞭なもの。内湾傾向の体部に対して口縁部は直線的。426。
- B 7b: 口縁部と体部の境が不明瞭なもの。203・333。
- B 8: 形態的には皿B 6に類似するが、皿B 6より口径が小さい。相対的に皿B 6より径高指数が大きい。法量的に大型の皿B 8a (101・320・336)と小型の皿B 8b (451)に細分できる。
- B 9: 皿B 8に対して底径が大きなもの。264・405・212。
- B 10: 口縁部が強い横ナゲ調整により体部と口縁部境外面が段をなす。242・447。
- B 11: 底部から口縁部にかけて大きく内湾して立ち上がるもの。口縁部は薄く仕上げられる。59。
- B 12: 底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるもの。底部は平底をなさず、丸底に近い。141・360。
- B 13: 口縁部を横ナゲにより折り返すもの。358。
- B 14: 形態的に皿6に類似するが、皿6より小型で、口径に対して底径が小さいもの。また、口縁部を外反気味に薄く仕上げる。140。
- B 15: 法量的には皿B 14と類似するが、体部から口縁部が厚く仕上げられるもの。267。
- B 16: 底部に対して口縁部がわずかに立ち上がる小型の皿。形態・法量から、3タイプに細分できる。
- B 16a: 口縁部の立ち上がりが明瞭なもの。41・146・307・308・393。
- B 16b: 口縁部の立ち上がりがわずかなもの。53・243・379・407。
- B 16c: 口縁部の立ち上がりがほとんど認められないもの。199・284・331・380・409。
- B 17: 皿B 16と同様口縁部の立ち上がりがわずかであるが、皿B 16より口径が大きく、深い傾向にあるもの。底部は平坦ではない。337・361・429。
- B 18: 小型の皿で、深いタイプ。口縁部を薄く仕上げる。形態的特徴から以下の2タイプに細分できる。
- B 18a: 底部が比較的明瞭なタイプ。58・89・334・382。
- B 18b: 底部から口縁部にかけて変化点がなく立ち上がるタイプ。60。
- B 19: 皿B 16より小型の皿。42・64・408。
- B 20: 口径は皿B 19と同じであるが、やや深いタイプ。器壁が厚く仕上げられている。338。
- B 21: 明確な平底に対して、口縁部がわずかに断ちあがる小型の皿。430。

II: 杯

出土点数は少ないが、いずれも轆轤成形によっている。法量から、口径に対して浅いタイプ(杯A: 1)・深いタイプ(杯B: 132・741)・杯A・Bに対して底径の大きなもの(杯C: 29)に細分できる(第147図)。杯Bの方が、口縁部の内湾傾向がより顕著である。

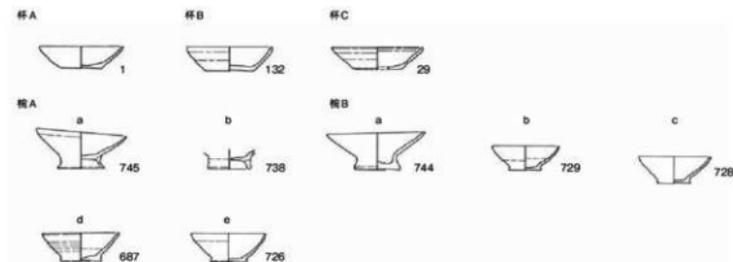
III: 椀

底部の形態から、大きく2タイプに分類できる(第147図)。

椀A: 底部が輪高台をなすもの。底径により2タイプに細分可能である。

Aa: 底径が大きく、高台高の高いもの。745。

第5章 まとめ



第147図 土器器杯・椀の分類

Ab: 底径が小さいもの。738・739。

椀B: 底部が平高台をなすもの。基本的に須恵器椀の写しと考えられる。底部の形態から5タイプに細分できる。

Ba: 底部内面が大きく落ち込むもの。椀Bの中では最も大型である。744。

Bb: 底部内外面が落ち込むもの。椀Baより小型で、落ち込みも小さい。729～731。

Bc: Bbと比較して、底部内面の落ち込みが顕著でないもの。728・732。

Bd: 外面は平高台をなすが、内面の落ち込みが認められないもの。687。

Be: 平高台が退化傾向にあるもの。726・727。

IV: 埴・甕

ここでは、埴と甕の区別が困難な器種も存在するため、煮沸具として一括して分類する。大野遺跡出土の煮沸具は、大きく7タイプに分類することができる(第148図)。

埴甕A: 口縁部がく字形をなし、体部が砲弾形をなすタイプ。体部外面は叩き成形による。749～752。

埴甕B: 埴甕A同様、口縁部がく字形をなし、体部外面は叩き成形によるが、体部はより球形に近いタイプ。口縁部の形態から、5タイプに細分できる。

Ba: 口縁部がく字形をなすもの。5・746。

Bb: 口縁部がく字形をなし、端部を上方につまみあげるの。747。

Bc: 口縁部がく字形をなし、端部を内方につまみだすもの。377。

Bd: 口縁部が受口状をなすの。体部は、叩き成形後、ハケ調整が加えられている。157。

Be: 口縁部がく字形に屈曲し、体部は半球形に近い。埴甕Bと埴甕Cの中間的なタイプ。45。

埴甕C: 形態的には埴甕Beに近いタイプ。体部外面は叩き痕が認められず、ハケ調整により仕上げられる。内面もハケ調整が認められる。口縁部の形態から、2タイプに細分できる。

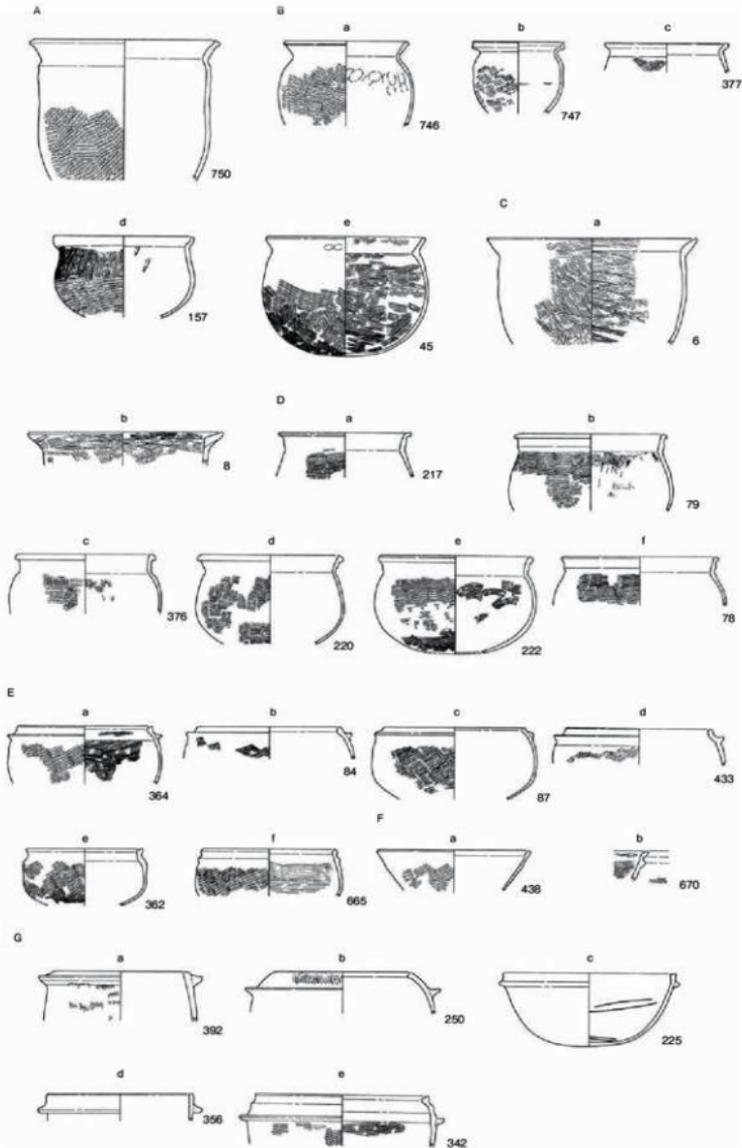
Ca: 口縁部が明確なく字形をなすもの。6・351・352。

Cb: 口縁部が短く、立ち上がりがわずかなもの。8。

埴甕D: 「播丹型埴」と称されるタイプ。体部外面平行叩き、く字形口縁部を特徴とする。口縁端部の形態から、6タイプに細分できる。

Da: 口縁端部を外方につまみだすもの。80・217・218・413・457。

Db: 口縁端部の外方へのつまみ出しがわずかに認められるもの。79・216。



第148図 土師器 埴甕の分類

第5章 まとめ

De: 口縁部端部のつまみ出しが認められず、端部をおさえ、外傾する端面を有する。口縁部は肥厚する。151・376・455。

Dd: 口縁端部を上下からつまむように仕上げ、端部断面が三角形を呈するもの。また、体部最大径が下半にある。74・220・317・458。

De: 口縁端部の上側からの押さえが弱く、端部が玉縁状を呈するもの。体部最大径が上半にくる。222・223・224・311。

Df: 口縁端部の肥厚がほとんど認められないもの。78・453。

場変E: 「羽釜型場」と称されるタイプ。口縁部下外面に鐔状の突帯が付く、あるいはその痕跡が認められるもの。口縁部から突帯部にかけての形態から、5タイプに細分できる。

Ea: 口縁部下に断面三角形の突帯が貼り付けられ、突帯に対応する内面が顕著に窪むもの。明瞭な端面を持つ。154・343・364・366。

Eb: 突帯の特徴は場変Eaと同様であるが、内面のくぼみがほとんど認められないもの。84・153・434。

Ec: 場変Ebに対して、口縁部下の突帯が退化したもの。内面のくぼみも認められない。83・85・86・87・365・463・666。

Ed: 端面が明瞭なもの。433・435。

Ee: 口縁部下の突帯が消滅し、その痕跡が肩部のふくらみとして外面に残るもの。156・340・341・362・437。

Ef: Edに認められた突帯の痕跡がほとんど認められないもの。内面のラインがくぼまず、直線的。344・665。

場変F: 「鉄兜型場」と称されるタイプ。全体的に鉢形をなし、体部外面は平行叩きにより仕上げられている。口縁部内面が肥厚するタイプ (Fa: 378・438) と、外面が突帯状をなし、口縁端部が外反するタイプ (Fb: 670) に、細分できる。

場変G: 一般に羽釜と称されるタイプ。口縁部から鐔にかけての特徴から、5タイプに細分できる。

Ga: 口縁上端部に断面台形もしくは長方形の鐔が貼付けられるもの。鐔上面と口縁端部上端面がほぼ一致する。体部外面は縦方向のハケ調整により仕上げられる。胎土中に砂粒を多く含む。391・392・565・678・565。

Gb: 体部は半球形をなし、口縁部の下側に、断面三角形の鐔が貼り付けられるもの。口縁部が大きく内傾するもの (250・532) と直立気味のもの (342・533) が認められる。

Gc: 鉢形をなす体部の口縁部下に突帯状の鐔を貼り付けるもの。鐔の断面が方形をなすタイプ (152・460) と、鐔の断面が三角形をなすもの (225) が認められる。

Gd: Gaより下側に鐔を付けるもの。356。

Ge: 体部外面が叩き成形により仕上げられるもの。342。

V: その他

托(743)が出土している。

②須恵器

椀・皿・捏鉢・壺・他が出土している。

I：椀

大きく、底部が平高台もしくはその系統にあるもの(椀A)と、輪高台が貼り付けられるもの(椀B)に分類できる。

椀A：形態・法量等から、15タイプに細分できる(第149図)。

Aa：底径から口縁部がほぼ直線的にのびるもの。全体的に小型で、口径に対して底径が小さい。647・769・772・773。

Ab：基本的な形態はAaと同じであるが、内面見込みの落ち込みがより顕著なもの。693・770。

Ac：体部から口縁部にかけて内湾し、見込みは大きく落ち込む。体部外面に沈線が施される。椀Aの中では大型の椀。277・628・714・717・718。

Ad：Acと形態は同じであるが、体部に沈線が施されないもの。632・716・719。

Ae：Adより深く小型の椀。口縁部がよりより直線的である。389。

Af：椀Aの中では最も小型の椀。体部が大きく内湾し、口縁部を外反させる。272。

Ag：口径に対して底径が小さいもの。見込みは落ち込む。器壁が比較的厚く仕上げられる。353。

Ah：椀Ac・Adと基本的な形態は同じであるが、全体的に器壁が薄く仕上げられている。口縁部は外反傾向にある。475。

Al：椀Ahと基本的な特徴は同じであるが、口径に対して器高が低い。口縁部は外反しない。633。

Aj：平高台の退化が顕著なもの。底径が広い。38。

Ak：椀Ajより高台の退化が顕著なもの。椀Ajより見込みの落ち込みが顕著。557・561。

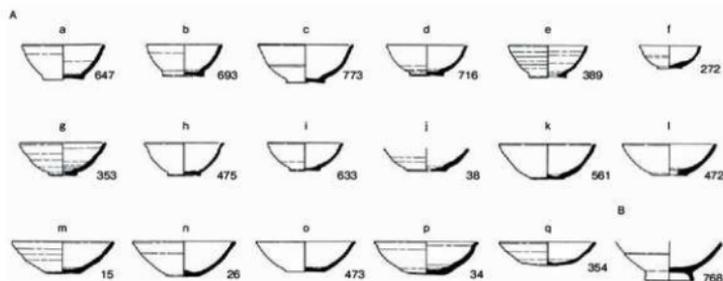
Al：椀Akと同様に高台の退化が顕著で、見込みの落ち込みもほとんど認められない。16・300・472。

Am：底部は高台が消滅し、平底形態をなす。口縁部が内湾し、口径に対して器高が高い。15・17・23。

An：椀Amより底径が小さく、深いタイプ。26。

Ao：椀Amより口径が大きく、浅い。473。

Ap：椀Anと類似するが、口縁端部を外反させる。34。



第149図 須恵器 椀の分類

第5章 まとめ

Aq: 碗Anよりさらに浅いタイプ。底部は平坦ではない。354・701。

碗B: 底部のみの残存で、口縁部まで残存するものは認められない。量的にも少ないことから、すべて同タイプとして扱う。

II: 皿

大きく、底部が平高台もしくはその系統にあるもの(皿A)と、輪高台が貼り付けられるもの(皿B)に分類できる。

皿A: 形態・法量等から、3タイプに細分できる。

Aa: 底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部を外反させるタイプ。口径に対して器高が高い。722。

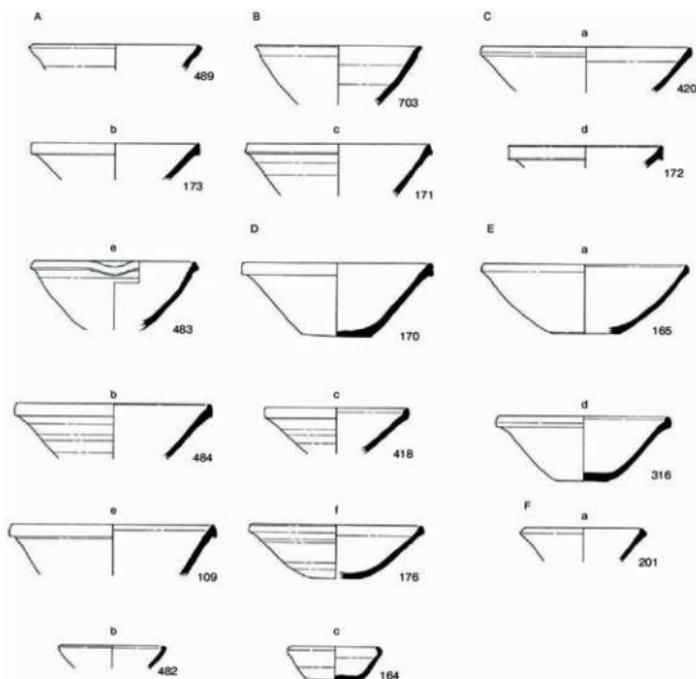
Ab: 底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるタイプ。297・480。

Ac: 口径に対して底径が大きく、浅いタイプ。559。

皿B: 全て同タイプである。478・479。

III: 捏鉢

出土点数は多いが、完形に復元できたものは数点に過ぎない。このため、口縁部の形態を中心に分類する。大きく6タイプに分類できる(第150図)。



第150図 須恵器 捏鉢の分類

捏鉢A：口縁端部が方形をなすもの。489・494。

捏鉢B：口縁部外端部をつまむようなナデにより、水平な端面を有するもの。703。

捏鉢C：口縁部外端面が直線的なもの。調整方法・形態等から、5タイプに細分できる。

Ca：口縁部内端部をつまむようにナデ調整を加えるもの。357・420。

Cb：口縁部外端部をつまむようにナデ調整を加え、わずかに下方に拡張させるもの。173・251・315・416。

Cc：捏鉢Cbと同様の仕上げ方であるが、斜め下方に拡張させるもの。171・287・491。

Cd：口縁端部を上下方向に拡張させるもの。172。

Ce：口縁外端部を強く抑えた後、内端部を上方に拡張させるもの。483。

捏鉢D：口縁端部を肥厚させ、上下方向に拡張させるもの。端面は直線的ではなく、凹線状をなす。170・298。

捏鉢E：口縁端部が弧状をなすもの。調整方法・形態等から、6タイプに細分できる。

Ea：口縁端部を上方へわずかに拡張させるもの。165・175・417。

Eb：口縁端部を下方にわずかに拡張させるもの。484。

Ec：口縁端部を上方に大きく拡張させるもの。内面が明確に屈曲する。415・418・490。

Ed：口縁部内側を椀子にやや内側に折り返すようにし、内側上方に拡張させるもの。内面が大きくくぼむ。73・168・169・177・235・316。

Ee：口縁端部を下方に拡張させるもの。109・486。

Ef：口縁端部が肥厚するもの。24・176。

捏鉢F：口縁部内端部を内側へ折り曲げるもの。他の捏鉢と比較して、全体的に小型である。端部の形態から、2タイプに細分できる。

Fa：口縁部外端面が直線的なもの。90・201。

Fb：口縁部外端面が弧状をなすもの。164。

Fc：端面が水平に近いもの。482。

IV：甕

出土点数が少ない上に体部以下まで残存するものは認められない。このため、口縁部の形態を中心に分類する。大きく3タイプに分類できる。

甕A：口縁部断面が方形をなすもの。237・422・423。

甕B：口縁部内端部を上方につまみあげるもの。314・424・639。

甕C：口縁端部を上下方に拡張させるもの。638。

IV：壺

出土点数が少ない上に、それぞれがタイプを異にする。口縁部の形態から、短頸壺(312)、口が大きく開くタイプ(692)、長頸壺(691)に分類できる。この他、肩部に突帯が貼付けられた壺片(399)も出土している。



第151図 丹波焼の分類

③丹波焼

壺・甕・鉢の各器種が出土している(第151図)。

I：壺

346の小型片口壺1点が出土している。川除・藤ノ木遺跡(兵庫県三田市)に出土例が認められる。

II：甕

口縁部の形態を中心に、3タイプに分類する。

甕A：口縁部がいわゆる「N字状」をなすもの。186・504。

甕B：「N字状」口縁が崩れ、口縁端部が上方へたちあがるもの。内面に「N字状」の痕跡として沈線が認められる。114。

甕C：口縁端部が斜め上方へたちあがるとともに、わずかに下方への拡張も認められるもの。286。

III：鉢

出土点数に限られる上に、完形に復元されるものはない。これらの資料の中で、卸し目は全く認められない。そこで、本報告では捏鉢として報告する。大型の鉢(A：185・187・440)と小型の鉢(B：502)に分類することができる。

④備前焼

壺・甕・擂鉢が出土している(第152図)。

I：壺

401の1点のみである。端部を上方に拡張させている。

II：甕

口縁部の形態を中心に、2タイプに分類する。

甕A：口縁部が玉縁状をなし、口縁部が外反するもの。240・402。

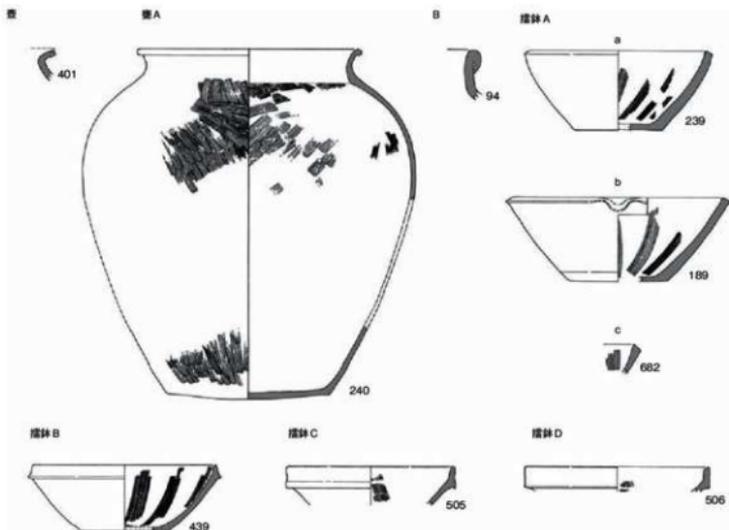
甕B：口縁部が玉縁状をなし、口縁部が直立するもの。玉縁がより楕円形に近い。94・112・113。

III：擂鉢

口縁部の形態をもとに、3タイプに分類する。

擂鉢A：口縁部断面が方形を呈するもの。端部の仕上げ方により3タイプに細分する。

Aa：口縁端部外端を中心とした横ナデにより仕上げたもの。239。



第152図 備前焼の分類

Ab : Aa と基本的に同じであるが、外方に拡張させるもの。189・507。

Ac : 口縁端部外端と内端を横ナゲ調整により仕上げるもの。682。

挿鉢B : 口縁端部を斜上方に拡張させると同時に、下方へも拡張させるもの。439。

挿鉢C : 下方へもわずかに拡張させるもの。505。

挿鉢D : 上方へのみ拡張させるもの。506。

⑤瀬戸美濃焼

量的には少なく、全体が復元できるものもわずかである。これらのなかで特徴的な器種について説明する。

I : 天目茶碗

115 が代表的である。

II : 皿

折縁小皿 (388) が出土している。14 世紀中葉に位置付けられる。

⑥その他

瓦質土器・黒色土器・青磁・白磁出土している。

I : 瓦質土器

羽釜と火鉢が出土している。羽釜は、鐔の断面が三角形をなすもの (155) と、方形をなすもの (227・356・500) が認められる。火鉢は口縁部片 (190) と底部片 (499) が出土している。

第5章 まとめ

II：黒色土器

碗が2点(534・685)出土している。いずれもA類に分類されるものである。

III：青磁

碗を中心に少なからず出土している。同安窯系と龍泉窯系が出土している。97の碗と367の盤が15世紀代に位置付けられる以外は、14世紀代に位置付けられるものである。

IV：白磁

碗を中心に出土している。そのほとんどがIV類碗である。

(2)年代軸の設定

年代を検討していくうえで、まず検討基準となる時間軸を設定したい。ここで、軸となるのは、これまでの研究成果から、編年観・年代観がほぼ確定されている器種である。具体的には、須恵器の碗と捏鉢、そして備前焼播鉢である。以下、各器種の編年観を概略する。また、遺構に伴う土器を中心に検討を加えていくことにする。

①須恵器碗

碗Aa(10世紀中葉～後半)・碗Ac(11世紀前半)・碗Ak(11世紀後半)・碗Am(12世紀前半)・碗Ag(13世紀後半)を基準とする。

②須恵器捏鉢

捏鉢B(11世紀後半)・捏鉢A(12世紀前半)・捏鉢Ea(13世紀後半)・捏鉢Ed(14世紀前半)・捏鉢Fa(15世紀前半)を基準とする。

③備前焼播鉢

播鉢Aa(14世紀前半)・播鉢Ab(14世紀中頃)・播鉢Ac(14世紀後半)・播鉢B(15世紀中頃)・播鉢C(15世紀後半)を基準とする。

以上から、第1段階(10世紀中葉～後半)・第2段階(11世紀前半)・第3段階(11世紀後半)・第4段階(12世紀前半)・第5段階(13世紀後半)・第6段階(14世紀前半)・第7段階(14世紀中頃)・第8段階(14世紀後半)・第9段階(15世紀前半)・第10段階(15世紀中頃)・第11段階(15世紀後半)に設定することができる。これは、あくまでも仮の段階設定である。これをまとめたのが第153図である。

以下、上記の年代軸をもとに、主要な遺構出土資料について、年代観を中心に検討を加えていくことにする。併せて、前項で分類した各型式の年代観についても明らかにしていきたい。

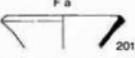
(3)年代の検討

①第1段階

須恵器碗Aaが出土した遺構は、SD72に限られる。ここでは、土師器の皿A1bが共伴しており、皿A1bも当該期に位置付けたい。

②第2段階

須恵器碗Acが出土した遺構は、SD29・SD71・SX40が該当する。SD29では土師器皿B15・須恵器碗A fが、SD71では須恵器碗Ai・同Adが、SX40では須恵器碗Ad・土師器碗Aa・同碗Ab・

		遺物群	備前地
10c	第1段階	<p>碗</p> 	
11c	第2段階		
	第3段階	  <p>窪鉢</p>	
12c	第4段階	 	
13c	第5段階	 	
14c	第6段階		
	第7段階		
	第8段階		
15c	第9段階		
	第10段階		
	第11段階		

第153図 時間軸の設定

第5章 まとめ

同椀Ba・同椀Bb・同椀Be・同椀Bc・同場甕A・同場甕Ba・同場甕Bb・同場甕Gaが、それぞれ共存している。

③第3段階

捏鉢Bが、SK62から出土している。SK62では、他に須恵器椀Akが共存している。SD31では、須恵器椀Akと共に、須恵器皿Ae・土師器皿A2d・同場甕Ga・白磁碗IV類が共存している。

④第4段階

須恵器椀AmがSB03から出土している。SB03を構成する柱穴内からは、土師器皿A1d・同場甕Caが出土している。良好な共存関係を認めることはできないが、それに準じた資料と考えたい。

⑤第5段階

須恵器椀AgがSX05から出土している。SX05では、捏鉢Ca・土師器場甕Gdと共存している。また捏鉢EaはSD10とSX27から出土している。SX27では、皿B9・皿B16b・皿B16c・皿B19・場甕Da・捏鉢Ee・捏鉢Ca・捏鉢Cb・須恵器甕A・同甕Bと共存している。SD10については共存資料に時期差が認められ、良好な共存資料としてとらえることは困難である。また、SD17では捏鉢Cbと土師器皿B16b・同B10が共存している。

⑥第6段階

捏鉢Edが、SD06・SD10・SD14・SK19から出土している。SD06では土師器皿B6a・場甕Ddと、SD14では場甕Dd・場甕De・場甕Ge・皿B7b・皿B6b・皿B5・皿B2c・皿B2e・須恵器捏鉢Ed・備前焼播鉢Aa・甕Aと、SK19で皿B8a・皿B4と、それぞれ共存している。なお、SD10については、先述したように良好な共存関係として捉えることはできない。

備前焼播鉢Aaについては、SD14で捏鉢Edと共存している。

⑦第7段階

備前焼播鉢AbがSD10から出土しているが、良好な共存関係として捉えることは困難である。

⑧第8段階

備前焼播鉢AcがSK49から出土しているが、共存資料に時期差が認められる。

⑨第9段階

須恵器捏鉢FaがSD05上層から出土している。SD05上層からは、土師器場甕Da・同場甕Db・同場甕Df・同場甕Eb・同場甕Ec・土師器皿B8a・同皿B18a・備前焼甕Bが共存している。また、SD05下層についても、上層と明確に時期を分けることは困難で、備前焼甕Bが両者から出土していることから、ほぼ同様の時期に位置付けられるものと考えられる。このため、SD05下層出土の瀬戸美濃系天目茶碗および青磁碗(97)についても当該期に位置付けられる。

⑩第10段階

備前焼播鉢BがSX31から出土している。SX31では、土師器場甕Ed・同場甕Ee・同場甕Faと共存している。

⑪第11段階

備前焼播鉢Cは包含層からの出土であるため、良好な共存関係を捉えることは困難である。

以上から、第1段階・第2段階・第4段階・第5段階・第6段階・第9段階・第10段階については、遺構の対応が認められた。以上から、上記の7段階については、それぞれひとつの時期として扱うことにする。

この他、第3段階については、次の第4段階と大きな時期差はないものと考えられることから、第4段階と合せて一つの段階に位置付けたい。また第7段階については第6段階と、第8段階については第9段階と合せて、ひとつの段階とする。

以上から、第1段階を第Ⅰ期、第2段階を第Ⅱ期、第3段階と第4段階を第Ⅲ期、第5段階を第Ⅳ期、第6段階と第7段階を第Ⅴ期、第8段階と第9段階を第Ⅵ期、第10段階を第Ⅶ期と時期区分することにする。

また、上記時期区分に対応する各型式は以下の通りである。

I：第Ⅰ期（10世紀中葉～後半）

上記分析の結果、須恵器椀Aaと土師器の皿A1bが位置付けられる。また、須恵器椀Abについても当該期に位置付けられる。この他、相野古窯跡群の福年から、須恵器椀B・同皿Bについても当該期に位置付けられるものと考えられる。

II：第Ⅱ期（11世紀後半）

上記分析の結果、須恵器椀Ac・同椀Ad・土師器皿B15・須恵器椀Af・同椀Ai・土師器椀Aa・同椀Ab・同椀Ba・同椀Bb・同椀Bc・同Ad・同椀Be・同埴甕A・同埴甕Ba・同埴甕Bb・同埴甕Gaが位置付けられる。

この他、須恵器椀Ae・同椀Ag・同椀Ahについても当該期に位置付けられるものと考えられる。このなかで、椀AgはSX04で土師器埴甕Caと共存している。

この他、SK57についても、当該期と考えられ、黒色土器A類・須恵器壺・土師器椀Bdが当該期に位置付けられる。

III：第Ⅲ期（11世紀末～12世紀前半）

上記分析の結果、須恵器椀A・同椀B・須恵器椀Ak・須恵器椀Am・土師器皿A1d・同埴甕Ca・須恵器皿Ac・土師器皿A2d・同埴甕Ga・白磁碗IV類が当該期に位置付けられる。

この他、須恵器椀Aj・同椀Al・同An・同Aoも当該期に位置付けられる。

IV：第Ⅳ期（13世紀後半）

上記の分析結果、須恵器椀Ag・須恵器椀Ca・須恵器椀Ea・同椀Ec・同椀Cb・土師器埴甕Da・同埴甕Gd・土師器皿B9・同B10・同皿B16b・同皿B16c・同皿B19・須恵器甕A・同甕Bが当該期に位置付けられる。

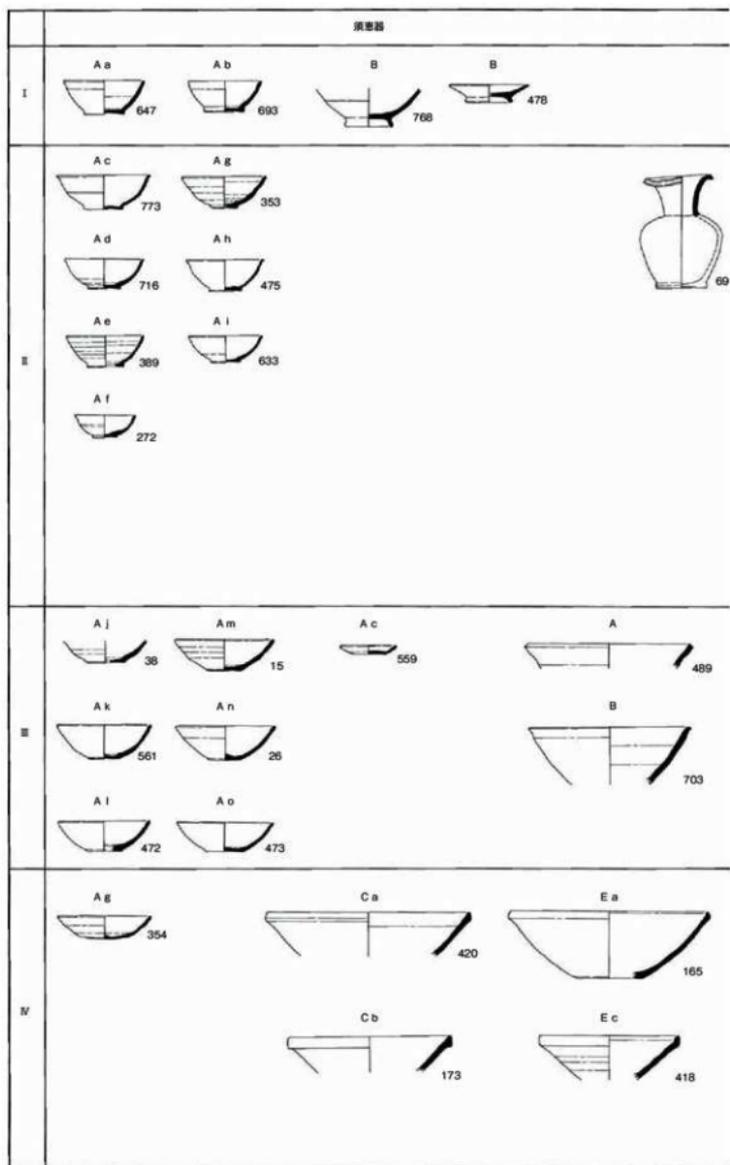
V：第Ⅴ期（14世紀前半～中頃）

上記の分析結果、須恵器椀Ed・土師器皿B6a・同埴甕Dd・同埴甕De・同埴甕Gc・同皿B7b・同皿B6b・同皿B5・同皿B2c・同皿B2e・同皿B8a・同皿B4・備前焼播鉢Aa・同播鉢Ab・同甕Aが、当該期に位置付けられる。

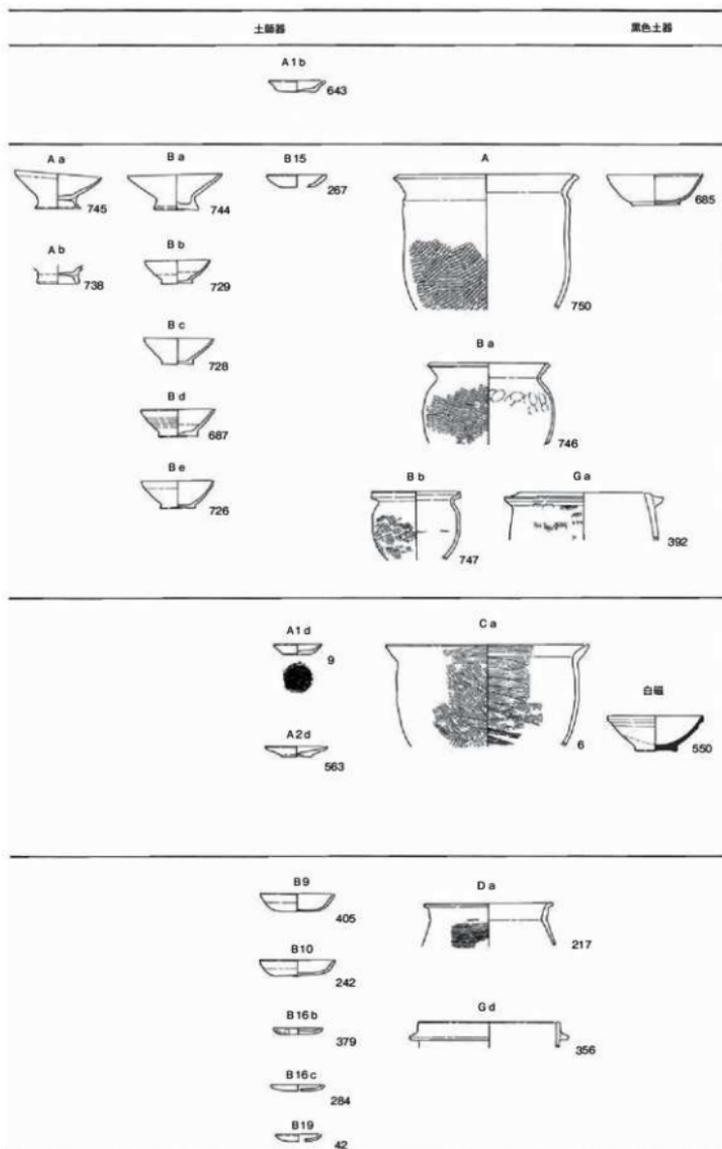
この他、丹波焼甕Aについても、当該期に位置付けられる。さらに、土師器埴甕Ef・丹波焼壺についても、SX02において土師器皿B2eと共存していることから、当該期に位置付けられるものと考えられる。さらに、瀬戸折縁小皿（388）についても当該期に位置付けられるものと考えられる。

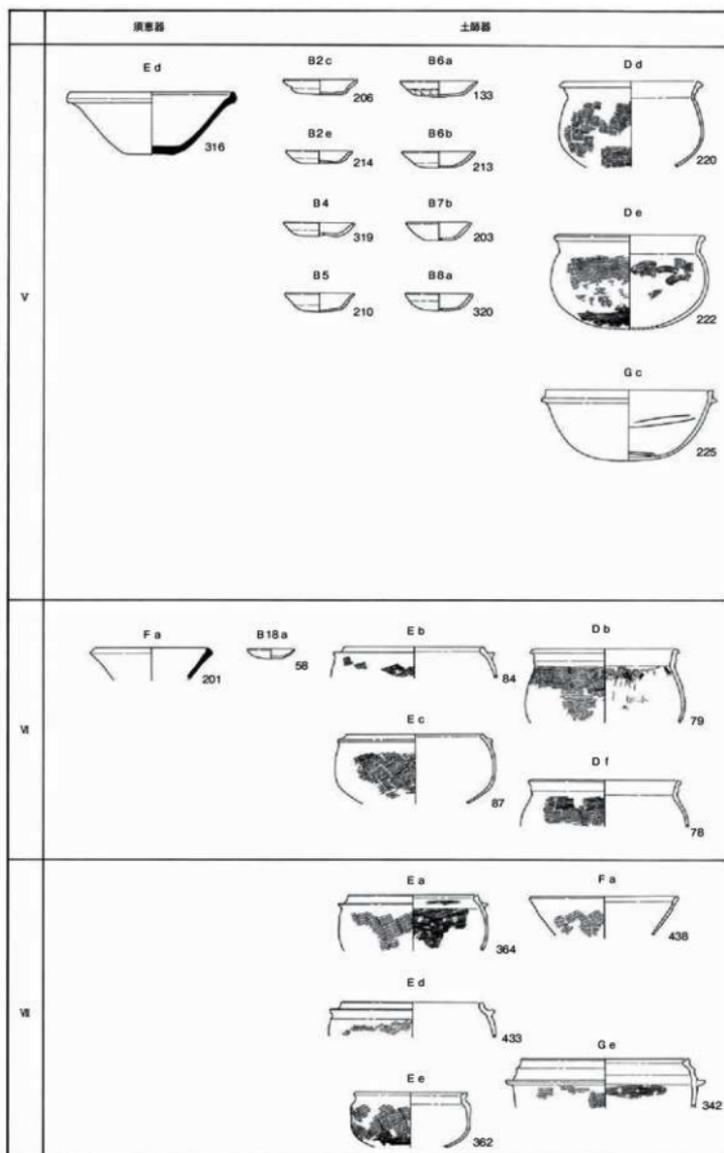
VI：第Ⅵ期（14世紀後半～15世紀前半）

上記の分析結果、須恵器椀Fa・土師器埴甕Db・同埴甕Df・同埴甕Eb・同埴甕Ec・土師器皿B18a・備前焼播鉢Ac・備前焼甕Bが、当期に位置付けられる。この他、丹波焼甕B・同甕Cについても、SD05下層における備前焼甕Bとの共存関係から、当期に位置付けられるものと考えられる。

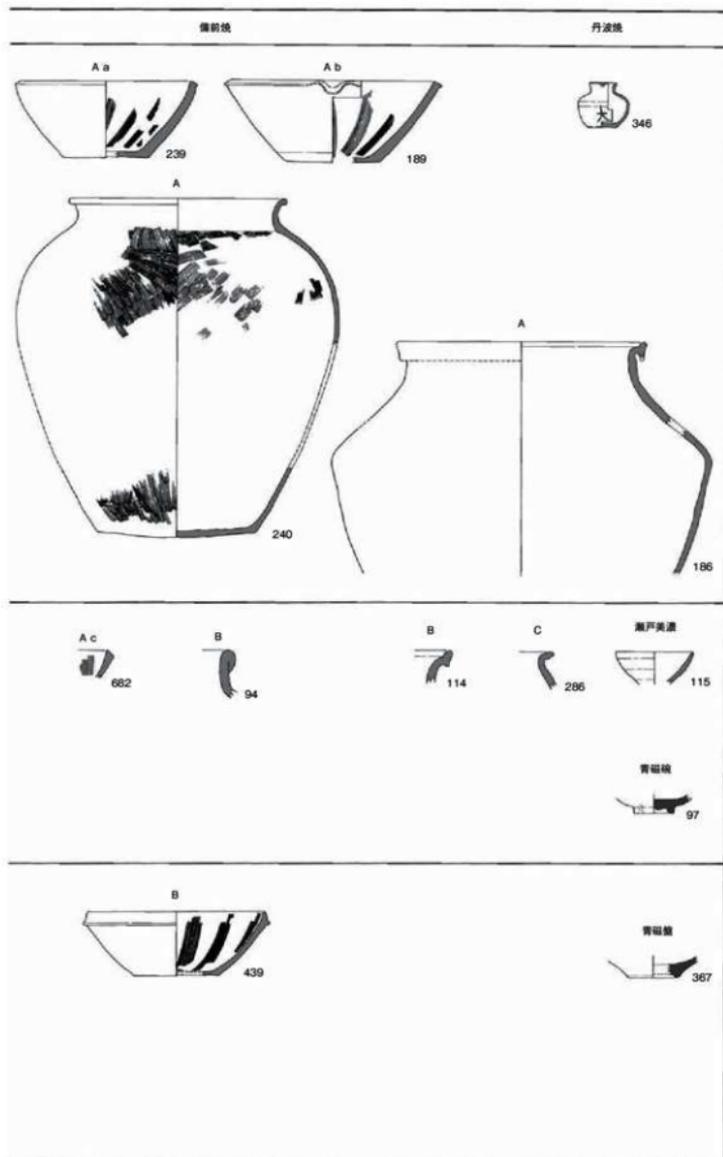


第154図 中世土器の変遷 (1)





第155図 中世土器の変遷(2)



第5章 まとめ

Ⅶ：第Ⅶ期（15世紀中頃～15世紀後半）

上記の分析結果、備前焼播鉢B・土師器埴甕Ed・同埴甕Ee・同埴甕Fa・同埴甕Geが、当該期に位置付けられる。また、SX01においては、土師器埴甕Eeと同Ea・同Gfが共伴していることから、同Ea・同Gfについても当該期に位置付けられる。さらに、SX06出土の青磁盤(367)についても当該期に位置付けられる。

(4) 小結

以上をまとめたのが第154図と第155図である。これによると、第Ⅱ期と第Ⅲ期、第Ⅴ期と第Ⅵ期の、大きく2時期に、当該期の中心を認めることができる。以下、時期ごとにその特徴をまとめていく。

第Ⅰ期 器種としては、須恵器と土師器からなる。須恵器は碗に限られる。ただし、遺構には伴わないが、皿Bについても当期に位置付けられるものと考えられる。土師器は皿が出土しているが、轆轤成形によるものである。

第Ⅱ期 須恵器と土師器が中心で、わずかに黒色土器が出土している。この他、第154図には掲載しなかったが、緑釉陶器についても、当期に位置付けられるものと考えられる。須恵器は、東播磨跡群産の碗が中心をなす。他に、壺が出土している。碗は、バリエーションにとみ時期差が認められるが、SD71での共伴例から当期に一括した。

土師器は、碗・皿・埴甕が中心をなし、碗と皿はいずれも轆轤成形によるものである。特に、碗については、須恵器碗の写しと考えられ、形態的特徴が顕著に類似する。埴甕については、体部整形が叩き成形を基本とし、どちらかといえば甕に分類されるものである。埴甕A・Bに分類したものが当期に位置付けられるが、個体差が顕著なのが特徴である。

第4表 土器から見た主要遺構の時期

	北地区					
	建物	柱穴	井戸	溝	土坑	その他
第Ⅰ期				SD30		
第Ⅱ期	SB01		SE02	SD03 SD04 SD08 SD09 SD29		SX04 SX23 SX24 皿1
第Ⅲ期	SB03 SB09	P02 P03 P07 P11 P12 P13 P16 P17		SD11 SD31	SK01 SK02 SK05 SK07 SK08 SK11 SK12 SK13 SK24	SX19 SX21
第Ⅳ期				SD07 SD17	SK04 SK09	SX05 SX26 SX27 窯
第Ⅴ期		P19 P20 P22 P25 P27 P31		SD06 SD14 SD20	SK18 SK19 SK23	SX02 SX09 SX10 SX14 SX22 SX25 SX28 SX29 SX30
第Ⅵ期			SE03	SD05 SD10 SD12 SD21		SX03 SX32
第Ⅶ期						SX01 SX06 SX07 SX13 SX31

この他、遺構に伴う資料は認められないが、杯類についても当期に位置付けられるものと考えられる。

第Ⅲ期 当該期も須恵器と土師器が中心で、当該期から白磁が出現する。須恵器は椀が中心であるが、当該期から埴鉢が登場する。また、小皿も出土している。

土師器については、椀は認められず、皿と埴鉢からなる。皿は、当期も軸轆成形により仕上げられている。埴鉢は、外面がハケ調整により仕上げられ、埴に移行する。

第Ⅳ期 須恵器と土師器からなる。須恵器は椀がA gに限られ、埴鉢が主体をなす。埴鉢は口縁部の形態にバリエーションが認められる。

土師器は、皿と埴鉢からなる。皿は、第Ⅲ期とは異なり、軸轆成形は認められず、全て手づくね成形によるものである。また、埴鉢についても、当期からいわゆる播丹型埴（埴甕Da）が出現する。口縁部の特徴から、当タイプのなかでも古く位置付けられるものである。

第Ⅴ期 当期の器種構成は、須恵器・土師器・備前焼・丹波焼とバリエーションに富む。ただし、須恵器は埴鉢に限られる。また、前期まで認められた白磁は認められない。

土師器は皿と埴鉢からなる。皿については、皿B 2cタイプが当期を代表するものと考えられる。このようなタイプの皿は南北朝期（14世紀中頃）に位置付けられる吉田住吉山遺跡（三木市）でも認められ、時期判断のメルクマールとなるものと考えられる。埴鉢は、前期に引き続き、播丹型埴（埴甕D）が主体をなす。

当期を特徴付けるのが、備前焼と丹波焼の存在である。福年観がほぼ確立された備前焼埴鉢・甕と丹波焼甕の本遺跡における良好な共伴例と位置付けられる。相互の年代観に大きな齟齬は認められずそれぞれの年代観を補強する資料となりえるものと考えられる。

第Ⅵ期 器種としては、第Ⅴ期とほぼ同じであるが、瀬戸美濃焼の天目茶碗や青磁碗も認められる。須恵器に関しては、埴鉢に限られる。

南地区						
建物	柱穴	井戸	溝	土坑	その他	
			SD72	S K 58		第Ⅰ期
S B 23			SD 34 SD 71	S K 57	S X 40	第Ⅱ期
	P 40 P 41 P 43		SD 31	S K 29 S K 30 S K 62		第Ⅲ期
						第Ⅳ期
					S X 36 S X 37	第Ⅴ期
		S E 06		S K 49		第Ⅵ期
	P 35			S K 37 S K 38		第Ⅶ期

第5章 まとめ

土師器は、皿と埴甕からなる。皿については、第155図に掲載されたのは皿B18aに限られるが、より多くのタイプが位置付けられるものと考えられる。埴甕については、前期からの播丹型埴に加えて、羽釜型埴（埴E）が出現する。

備前焼と丹波焼についても、当期でも共存する。ただし、互いに小片での出土で、良好な資料は認められない。青磁碗については、高台皿付部分にも軸がかけられたままで、当該期の特徴を示している。

第Ⅶ期 器種としては、須恵器が認められなくなり、土師器と備前焼・青磁からなる。

土師器で当期に特定できるのは埴甕に限られる。埴甕については、埴甕Eが引き続き認められる一方、前期まで認められた播丹型埴（埴D）が認められなくなる。逆に、新たに埴甕Fが出現する。埴甕Eについても、その退化形態と考えられる埴甕Eeが認められる。

備前焼については、描鉢が出土しており、当期の年代観を示す資料と考えられる。青磁の盤についても、皿付部分に軸がつけられたままで、共存資料との関係から、当期に位置付けられる。

第Ⅷ期 中世のなかで、上記の第Ⅶ期より新しく位置付けられる遺物がわずかではあるが出土している。そこで、本節では詳細な検討は行なわなかったが、第Ⅷ期とする。具体的な遺構としては、SK39・SK40が、当該期に位置付けられる。

以上から、器種構成等において、第Ⅲ期と第Ⅳ期の間に大きな差が認められる。これは、この間一世紀半以上の空白に起因するものと考えられる。第Ⅲ期以前を中世前期、第Ⅳ期以降を中世後期とすれば、中世後期の方が、器種構成においてバリエーションに富む。特に、第Ⅴ期がその代表といえよう。備前焼・丹波焼・瀬戸美濃焼・青磁等、当時の流通によるものが顕著である。

[註]

岡崎正雄『相野古窯跡群—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（XⅦ）—』兵庫県教育委員会 1992

長谷川 眞「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入」『中近世土器の基礎研究』XⅦ 日本中世土器研究会 2003

岡田章一「時期設定と土器・陶磁器組成の変遷」『兵庫津遺跡Ⅱ（浜崎・七宮地区の調査）—一般国道2号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 2004

重根弘和「中世備前焼に関する考察—形態と変遷と年代について—」『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会 2003

藤澤良祐「瀬戸」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』在団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 1996

第2節 遺構—大野遺跡北地区の遺構について—

大野遺跡は加古川市加古川町大野に位置する。現在の大野集落は日岡神社の門前から南へ延びる参道沿いに展開しており、地形的には標高7.5～8.5mの完新世段丘Ⅰ面にあたる。一方、今回調査を実施した範囲のうちの北地区（A～C地区）は、現大野集落から旧河道をはさんだ西側の微高地で、JR加古川線の東に沿った南北に細長いエリアである。地形的には標高7～8mの完新世段丘Ⅱ面にあたり、現存集落とは約0.5mの比高差をもつ。完新世段丘Ⅱ面は古代末から中世初頭に段丘化したとされ、この北地区（A～C地区）でも10～15世紀の遺構群が見つかっている。ここでは検出した遺構のまとまりや変遷、性格などについて、若干の考察を行う。

なお調査区周辺の加古川町大野地区から尾上町方面にかけては、現代の開発以前は、条里型水田の地割が市域で最も良好に遺存していた地域で、その方位は概ねN44～43°Eの傾きをもっていたことが知られる^[1]。ただし調査区の地点は、段丘化以前の氾濫原の影響が強いため、条里型地割りは残っていない。ただし北地区で見つかる中世の遺構群は、条里型地割りの軸線からずれているとはいえ、正方位北から一定角度東へ振った方向性が基本となっており、それが調査区の軸線とも合致している。そこで以下の記述における方位は、特に断りのない限り、調査区の上流側（A地区の北東端）を北、下流側（C地区の南西端）を南として話を進める。

1 「中世前期」と「中世後期」について

大野遺跡の出土土器については、前節における検討で、おおよそ10世紀～15世紀にかけての期間を、第Ⅰ期～第Ⅷ期の7つの時期に分けている。その時期区分をもとに、伴出土器から遺構の所属時期を判別したものが前節の第4表である。

それらの遺構群はA～C地区の南北方向に延びる微高地上に立地し、その東縁に沿った旧河道もしくはそれを開削した水路が、調査区内で検出されている。それら微高地上の遺構群と、旧河道・水路との関係に注目しつつ、上記の遺構の変遷を平面図上でたどると、大きく第Ⅰ期～第Ⅲ期と第Ⅳ期～第Ⅷ期の2つの時期に分けるのが適当と考えられる。以下、両者を「中世前期」と「中世後期」の時期区分で表し、それぞれに含まれる遺構群の概要を述べる。

2 中世前期（第Ⅰ期～第Ⅲ期）の遺構群

この時期の遺構はA地区からB地区の北端にほとんどが集中しており、独立柱建物・井戸・溝・土坑・木棺墓などが存在する。独立柱建物の南北方向の柱列の方位はN30°E前後で、第4表のSB01・SB03・SB09以外に、軸線を同じくするSB02・SB05～SB07・SB10も一連の建物群として捉えられる。北寄りのSB01～SB03にはSK01・SK02・SK05・SK06・SX04、南寄りのSB05～SB07・SB09・SB10にはSK11～SK13・SX23・SX24などの土坑や落ち込みが伴い、両者の間の広場的な空間に井戸SE02が設けられている。総柱のSB01・SB03・SB05が主屋的な色合いが濃い。なおSX19～SX22は屋敷地内の木棺墓群とみられるが、SB05と一部重複している。東西方向の溝SD08は屋敷地を横断しているが、全体の中での位置関係は不明である。

B・C地区では遺構は稀薄となるが、南北方向の水路SD29と、水路際の掘り込みSD11・SD30から中世前期の遺物が出土している。SD11はSD10に切られて取り残されたようになっているが、本来



第156図 中世前期の遺構

溝の際に立地する遺構もあり、土手を設けた痕跡は認められない。

埋没した時期は一律ではなく、SD05・SD14は溝幅が広く、埋土には掘り直された痕跡があり、出土遺物の量や時期幅も大きいので、長期間開口していた状況が窺え、最終的に埋没したのは第Ⅶ期である。SD16、SD18、SD19～22は出土土器に乏しく時期が抑えがたいが、SD16は第Ⅴ期の遺構に、SD18・SD19～22は第Ⅵ期の遺構にそれぞれ切られている。

はSD30と同様に水路から数m突き出すように掘り込まれたもので、舟着きのような利用が想定できる。SD10が中世後期に開削し直されたために、B地区での水路のつながりが判らなくなっているが、SD11が残存していることにより、B地区からC地区の東壁に沿ったSD10とSD29は、もともと段丘崖下の旧河道であったところを活用した一連の水路であったことが判る。SD30より南側は畠地となっており、畠の方向はE25°Sを向いている。

3 中世後期（第Ⅳ期～第Ⅶ期）の遺構群

中世後期の遺構は、A地区からB地区の微高地に全域に広がる。その遺構群は、東西方向の直線的な4本の溝（SD05・SD14・SD16・SD18）と、L字形に平行する2本の溝SD19（SD21）とSD20（SD22）によって、5つに区画されている。それによって、微高地の東縁を南北に貫流する水路に面して、5つの方形区画が南北に並ぶ景観を呈する。ただしSD16はいち早い段階に埋没して、SD14からSD18までの空間を1つの敷地として利用ようになる。そこでこの区画については枝番をつけて、北から順に、区画Ⅰ、区画Ⅱ、区画Ⅲ-1、区画Ⅲ-2、区画Ⅳと呼称する。区画する溝の座標軸は、南北軸の方位に直すと概ねN35～40°Eの範囲に収まっている。従って、これと軸線と同じく掘立柱建物SB04、SB08、SB11、SB12も、中世後期の所産と判断する。

区画を構成する溝は、幅1.5～3.5m、深さ33cm～1.5mほどの規模をもち、底面の勾配は小さく、滞水状態であったとみられる。東西方向の溝SD05、SD14、SD16、SD18、SD21・22の、溝と溝との中心間の距離をみると、およそ48m、12m、12m、24mとなっており、約12mを単位に区画されている。

なおC地区の北東隅でSD10が東へ屈曲しており、これより南側では単発的な遺構のみで、屋敷地としての土地利用はなされていない。SD29もこの段階には埋没しており、水路はより東側にずれていた。

方形区画以前

上記の方形区画が完成する以前の第IV期に、東西方向の溝SD07とSD17が開削されている。両者には、平坦な溝底、東端がSD10まで貫通しない、北側に接して区画の溝が後に開削される、という共通点があり、ここに方形区画を設ける以前の先行地業とも評価できる。何らかの生産を行った窯や、糠の詰まったSX27のような特徴的な遺構がみられるのもこの段階の特徴である。

区画Ⅰ

A地区のSD05以北を区画Ⅰとする。南辺の区画以外は不明だが、敷地の南北長は43m以上、東西長は29.5m以上あり、面積は1,200㎡を超える。

区画Ⅰ内の主な遺構には、掘立柱建物、木棺墓と不定形で規模の大きな土坑がある。掘立柱建物SB04は、図化できた遺物はないものの建物の軸線が区画の方位と揃うこの時期に属すると考えられる。また区画の北東側には木棺墓SX03が存在する。その他、区画内に散在する土坑のうち、SK04・SX05は第IV期の可能性があり、SX01・SX06・SX07といった規模の大きい不定形土坑は第VII期に属する。

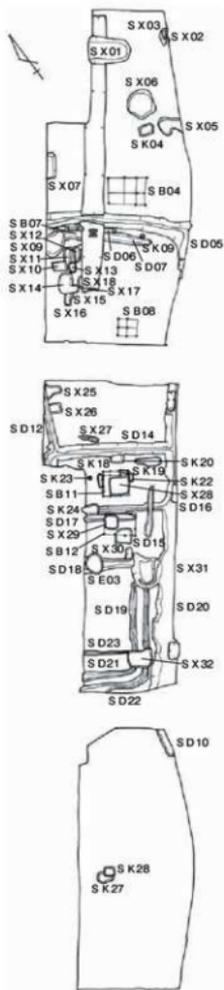
区画Ⅱ

A地区のSD05を北辺、B地区のSD14を南辺、SD10を東辺、SD12を西辺とし、敷地の平面形は台形を呈する。敷地の南北の最大長は約45m、東西長の南端は約22mである。東西長の北端については、30～32mほどに復原できる。面積は1,200㎡近くになる。

区画Ⅱ内の主な遺構には、掘立柱建物、土坑などがある。掘立柱建物SB08は、SB04と同様、図化できた遺物はないものの、建物の軸線が区画の方位と揃うこの時期に属すると考えられる。区画の北西側に位置する長方形の土坑群SX10～SX18は第VII期に属する。墓壇状の掘り方を呈するが、棺の痕跡は確認できず、性格は不明である。

区画Ⅲ（区画Ⅲ-1・Ⅲ-2）

SD14を北辺、SD18を南辺、SD10を東辺とし、西辺はSD14西端のコーナーで抑えられる。敷地



第157図 中世後期の遺構

第5章 まとめ

の平面形は正方形に近く、南北の最大長は約21m、東西長の北端は約22mで、面積は約460㎡である。

なおこの区画はSD16によって南北2つに区切られており、その北側を区画Ⅲ-1、南側を区画Ⅲ-2とする。Ⅲ-1区の南北長は約10mで面積約220㎡、Ⅲ-2区は9～9.5mで面積約200㎡である。

SD16が第V期までに埋まって区画Ⅲに一体化してから、方形土坑SX29を伴うSB12が建てられている。SB11もSK20、SK22と方形土坑SX28を伴っており、同時期とみられる。

区画Ⅳ

SD18を北辺とし、東辺から南辺にかけては2本の浅い溝SD19（SD21）とSD20（SD22）が逆L字形にめぐっている。2本の溝の間隔は1.5～1.8mほどで、築地塀の側溝を思わせるが、詳細は不明である。北東隅には大型の落ち込みSX31を設け、取り付いた溝の水溜めとなっている。敷地の平面形は方形で、南北の最大長は約21m、東西の検出長は9～10mで、検出範囲の面積は200㎡弱である。

区画Ⅳ内の南寄りに、敷地を区切るような溝SD23があるが、他に目立った遺構は見つからず、敷地内の利用状況は不明である。またSD18とSD19～22が埋没した後、第Ⅵ期にSE03とSX32をその区画ラインの跡地に掘り込んでおり、意識的な行為と感じられる。

4 小結

中世前期の遺構群の存続時期は、10世紀代から12世紀前半にかけての期間で、特に11世紀後半から12世紀前半がその中心となる。その時期は中世的な流通や条里地割りが成立し、経済・産業など社会のあらゆる分野で再構築が進む段階である。このタイミングに新たな集落が成立する例は数多く、大野遺跡の北地区も同じ脈絡で捉えられる。立地的には加古川デルタの1流路に面して、舟も利用していたとみられるが、出土遺物には外来的な要素はまだ少ない。

中世後期は13世紀代から15世紀代にかけての期間で、特に14世紀代から15世紀前半がその中心となる。その時期の集落は面目を一新し、深い堀による方形区画を伴う屋敷地が、直線的に開削された水路に面して並び、舟運を積極的に活用しようとする姿勢が窺える。出土遺物の面でも、貿易陶磁・備前焼といった瀬戸内系の商品のみならず、丹波焼や、三木市久留美毛谷33号窯跡地区出土品に類似した須恵器甕体部の鶴丸文・格子文印きなど、加古川を経由した産品が目立つのが特徴である。中世の加古川舟運の実態を示す事例として、貴重な調査となった。同時期の類例としては、小野市浄谷遺跡のC地区で検出した、道路遺構に面した方形区画をもつ集落⁽²⁾があり、大部荘・浄土寺と密接な関係をもって営まれたといわれる。また同遺跡で検出した炉址は、溝状掘り方や製品が不明な点など、大野遺跡A地区の窯址と共通点がある。

なお中世前期と中世後期の間には、12世紀後半という約半世紀の空白期間がある。この時期は東播磨では最も遺跡が濃密で、経済活動が活発であったと考えられるが、大野遺跡では出土遺物も稀薄である。文献史学によれば、当時全盛であった平清盛が1169年に稲美野を大功田として押領し、既存の荘園領まで押領した結果、稲美野台地全体を領有することとなった（註3）。大野遺跡の空白期間がちょうどその時期に合致するのは偶然ではなく、平家一門の影響下で衰えた勢力が、一門の滅亡とともに復活した社会状況を反映したものと理解すれば、遺構の検出状況と符合すると考えられる。

- (1) 服部昌之1989「第3章、第2節、3 条里制と遺構」『加古川市史 第1巻』加古川市
- (2) 兵庫県教育委員会1993『浄谷遺跡・南山古墳群・玉津田中道路南大山地点』兵庫県文化財報告第121冊
- (3) 高橋昌明2007『平清盛 福原の夢』講談社選書メチエ

第3節 総括

本節では、これまでの成果報告を簡単にまとめ、本報告のまとめとしたい。

1. 調査成果について

大野遺跡は、完新世段丘Ⅱ面に立地する遺跡である。完新世段丘Ⅰ面形成後、当地は氾濫原面となり、弥生時代中期以降、加古川の氾濫による堆積に伴い、徐々に氾濫原が埋没してきた。その過程を示すが、M地区で認められたポイントバーである。そして、本遺跡で最初に生活の痕跡を残したのが、弥生時代中期になってからである。ただし、当該期の遺構はわずかで、南地区に限られる。

次に生活の痕跡が認められるようになるのが、古墳時代終末期、7世紀初頭になってからである。これも南地区に限られ、溝状遺構と、集落の縁辺部の様相を呈している。土器の出土もわずかである。

次の奈良時代になると、一部掘立柱建物跡が建てられ、漸く生活の痕跡が多く認められるようになる。しかし、当該期についても南地区に限られる。これらの建物群の機能については、今後の検討課題である。

平安時代になると、掘立柱建物を含め、多くの遺構が認められるようになる。最も古く位置付けられるのが10世紀（第Ⅰ期）で、南地区で当該期の遺構が認められる。北地区では、次の第Ⅱ期になって、漸く遺構が認められるようになる。以後、室町時代まで遺構が認められるが、12世紀中頃から13世紀後半までの約1世紀半、遺構・遺物がほとんど認められなくなる。北地区・南地区の両地区においてである。以上から、大野遺跡の中世は、前半（第Ⅰ期～第Ⅲ期）と後半（第Ⅳ期～第Ⅶ期）の大きく2時期に分けることができる。

2. 中世の大野遺跡

大野遺跡の時期的な中心は、中世である。先述したように、前期と後期の2時期からなり、それぞれ3期と4期の小期からなる。

前期については、掘立柱建物跡と溝・土坑を中心に検出されている。この中で注目されるのが、土坑墓(S K 57)である。当地における先原的な屋敷墓と考えられる。完形の須恵器壺の副葬は他にあまり類例を見ないものである。当地に、掘立柱建物からなる屋敷地が形成されていたものと考えられる。ただし、その中心はより西側に求められるものと考えられる。北地区においては、顕著な遺構が認められなかったことから、前期においては南地区が中心であったものと考えられる。つまり、北地区に先んじて南地区の開発が進んだ結果と考えられる。これは、地形環境の変化に対応するものといえよう。

なお、屋敷墓については、東側に隣接する美乃利遺跡で、11世紀後半の墓が見つかっているが、これよりさらに遡るものである。美乃利遺跡・大野遺跡のなかで最も古く位置付けられるものである。

後期については、遺構・遺物が特に多く認められ、本遺跡の中心をなすものと考えられる。とりわけ、北地区にその傾向が顕著に認められる。深い堀による方形区画を伴う屋敷地を4区画確認することができた（第5章第2節）。区画内は掘立柱建物・土坑等から構成されるものである。北地区は、当時の地形環境からみて、旧加古川に近接していたものと考えられる。また、当該期の出土遺物を見ると、在地の土師器・須恵器をはじめとして、丹波焼・備前焼・瀬戸美濃焼・青磁・白磁と、各地からもたらされた商品が比較的顕著に認められる。以上から、さきにもた加古川に近接した立地および堀状の遺構等と

第5章 まとめ

合せて、加古川舟運を利用した機能を考えることができるのではないかと考えられる。

3. 地形環境の変化と大野遺跡

先述したように、大野遺跡は当初、完新世段丘I面形成に伴う氾濫原面であった。その後、加古川からの土砂の供給により、氾濫原面が徐々に埋没していく。その埋没過程は一樣ではなく、出土遺物及び遺構の形成状況から、南地区が最も早く微高地化していったものと考えられる。特に、東側から西側へとその微高地は拡大していったものと考えられる。これは、M地区で認められたポイントバーから読み取ることが可能である。

ところで、南地区と北地区は連続するものではなく、両地区の間には微凹地が存在するものと考えられる。つまり、北地区に微高地が形成されるのは、南地区からの連続したものではなく、微高地形成時期に大きな差が認められる。出土遺物から判断して、南地区の弥生時代中期に対して、北地区は奈良時代以降と考えられる。

つまり、加古川の流ねが西側へ変遷していく過程、北地区の微高地が形成された段階（第V期）は、加古川と微高地が近接していたものと考えられる。この地理的条件が、舟運を積極的に活用しようとした結果となったものと考えられる。この結果が、先にみた出土土器の多様性に反映されているものと考えられる。特に、当時、流通範囲の限られていた丹波焼が少なからず認められる点は、この加古川の水運によるものといえよう。

出土土器觀察表

出土土器観察表 1

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
1	A地区	S B01	土師器	杯	13.50		7.00	3.55	口縁部1/2強・底部ほぼ完存		灰白
2	A地区	S B01	土師器	皿	9.10		5.80	1.55	完存		橙～淡橙
3	A地区	S B01	土師器	皿	8.25		5.85	1.45	完存		にぶい黄橙～にぶい橙
4	A地区	S B01	土師器	皿	7.75		5.90	1.40	口縁部2/3・底部完存		浅黄橙～灰白
5	A地区	S B01	土師器	甕	19.80			10.40	口縁部1/3強		灰白～にぶい黄褐
6	A地区	S B01	土師器	埴	33.60	30.60		17.30	口縁部1/6弱		灰褐～にぶい橙
7	A地区	S B01	土師器	埴	32.80			9.95	口縁部1/12		明赤褐～にぶい黄褐
8	A地区	S B01	土師器	埴	31.10			5.40	口縁部1/4弱		にぶい橙～褐灰
9	A地区	S B03	土師器	皿	6.00		5.30	1.80	口縁部1/2弱・底部1/4		浅黄橙～橙
10	A地区	S B03	土師器	皿	7.90		5.70	1.35	口縁部1/2弱・底部ほぼ完存		にぶい黄橙～にぶい橙
11	A地区	S B03	土師器	皿	6.80			1.35	口縁部1/4弱		にぶい黄橙
12	A地区	S B03	土師器	埴	34.60			5.95	口縁部1/4弱		にぶい褐～にぶい橙
13	A地区	S B03	土師器	埴	33.10			3.95	口縁部1/12		灰褐～橙
14	A地区	S B03	土師器	甕	29.00			7.70	口縁部1/12		灰褐～灰黄褐
15	A地区	S B03	須恵器	碗	16.20		6.00	5.20	口縁部1/5強・底部1/2弱	普通	灰白
16	A地区	S B03	須恵器	碗	15.70		5.10	4.25	口縁部1/4弱・底部1/7	普通	灰白
17	A地区	S B03	須恵器	碗	15.00		5.60	4.90	口縁部1/5・底部1/3強	普通	灰白～黄灰
18	A地区	S B03	須恵器	碗	16.40			3.10	口縁部1/6	良好	灰
19	A地区	S B03	須恵器	碗	15.10			3.60	口縁部1/8弱	普通	灰白～灰
20	A地区	S B03	須恵器	碗			5.50	3.40	底部1/3	不良	灰白～にぶい黄橙
21	A地区	S B03	須恵器	碗				3.10	口縁部わずか	やや不良	灰白～灰
22	A地区	S B03	須恵器	碗				2.50	口縁部わずか	不良	灰黄～灰
23	A地区	S B03	須恵器	碗	14.70		5.35	4.70	口縁部1/5弱・底部1/3弱	やや不良	灰白～灰
24	A地区	P06	須恵器	捏鉢	27.50			3.60	口縁部1/7	やや良好	灰
25	A地区	P06	土師器	羽釜		30.20		3.40	胴部1/8		にぶい黄橙～褐灰
26	B地区	S B09	須恵器	碗	16.10		5.60	5.70	完存	普通	灰

胎土	調整	備考	図版	写真図版
3.5mm以下の長石・チャート・クサリレキ含む	内面：底部～口縁部指オサエ→横ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部～口縁部指オサエ→横ナデ。	底部回転系切り	1	15
6mm以下の長石・チャート・石英・クサリレキや多く含む	内面：底部～口縁部横ナデ→底部仕上げナデ。 外面：口縁部横ナデ。	底部回転系切り	1	15
1.5mm以下の長石・クサリレキ含む	内面：底部～口縁部横ナデ→底部仕上げナデ。 外面：口縁部横ナデ。	底部回転ヘラ切り	1	15
2mm以下の石英・チャート・クサリレキ含む	内面：底部～口縁部横ナデ→底部仕上げナデ。 外面：口縁部横ナデ。	底部回転ヘラ切り	1	15
4mm以下の長石・石英・チャート多く含む	内面：体部ナデ→口縁部指オサエ→横ナデ。 外面：体部印金型形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	1	16
3mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ多く含む	内面：体部～口縁部ハケ。 外面：体部～口縁部ハケ→口縁部横ナデ。	頭径30.20cm	1	16
7mm以下の長石・雲母・角閃石・石英・チャート・クサリレキ多く含む	内面：体部ナデ→口縁部ハケ。 外面：体部指オサエ→ハケ→口縁部指オサエ。		1	
5mm以下の長石・チャート・石英多く含む	内面：体部～口縁部ハケ。 外面：体部～口縁部ハケ→口縁部横ナデ。		1	16
7mm以下のチャート・クサリレキ含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部横ナデ。	底部回転ヘラ切り	1	16
2mm以下のチャート・石英含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。	底部回転系切り	1	
1mm以下のチャート・石英・クサリレキ含む	内面：底部～口縁部ナデ。 外面：底部～口縁部指オサエ。		1	
1mm～1cm大の石英・長石・チャート・雲母含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部指オサエ→ナデ→口縁部横ナデ。		1	
2.5mm以下の石英・長石・チャート多く含む	内面：口縁部指オサエ→ナデ。 外面：口縁部指オサエ→ナデ。		1	
5mm以下の長石・雲母・石英・チャート多く含む	内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ→横ナデ。 外面：体部～頭部指オサエ→ナデ→口縁部横ナデ。	頭径23.60cm	1	
5mm以下の長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転系切り	1	
7mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部系切り	1	
5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部系切り	1	
2.5mm以下の長石・石英含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		1	
0.1mm大の砂粒わずかに含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		1	
2mm以下の砂粒含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部系切り	1	
1.5mm以下の石英・チャート含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		1	
6mm以下の石英・長石・チャート含む	内面：回転ナデ。 外面：回転ナデ。		1	
0.5mm以下の砂粒わずかに含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部系切り	1	
3mm以下の砂粒含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		1	
3mm以下の砂粒含む	内面：体部横ナデ。 外面：胴部ハケ→ヘラナデ→横ナデ。	胴下面煤付着	1	
8mm以下のチャートや多く含む。2mm以下の長石・石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転系切り	1	16

出土土器観察表 2

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
27	A地区	P02	須恵器	碗	15.70			3.90	口縁部1/8	良好	灰～灰白
28	A地区	P02	須恵器	碗	15.10			4.20	口縁部2/5	普通	明青灰～灰白
29	A地区	P01	土師器	杯	14・60		8.00	3.60	口縁部2/3・底部1/3強		灰褐～灰黄褐
30	B地区	S B11	土師器	皿	9.20			2.00	口縁部1/7		灰白
31	A地区	P05	土師器	皿	8.80		7.40	1.40	口縁部1/5弱・底部1/4弱		にぶい橙
32	A地区	P04	白磁	碗				4.70	口縁部わずか		灰白
33	A地区	P01	土師器	把手				4.70			にぶい黄橙～浅黄橙
34	A地区	P08	須恵器	碗	16.55		6.10	5.30	口縁部3/4・底部完存	不良	灰白～灰
35	A地区	P07	須恵器	碗			6.00	2.80	底部1/5強	良好	明青灰
36	A地区	P17	須恵器	碗			5.60	2.90	底部1/4	良好	灰
37	A地区	P03	須恵器	碗			5.90	4.50	底部完存	不良	明黄褐～灰白
38	A地区	P11	須恵器	碗			6.70	4.80	底部1/3弱		灰
39	A地区	P16	須恵器	碗				2.80	口縁部わずか	良好	灰～灰白
40	A地区	P15	須恵器	捏鉢				2.50	口縁部わずか	普通	灰
41	A地区	P14	土師器	皿	8.40			1.50	口縁部2/3弱		にぶい橙～にぶい黄橙
42	A地区	P10	土師器	皿	6.50			1.20	口縁部1/4弱		にぶい橙
43	A地区	P09	土師器	埴				4.10	口縁部わずか		灰褐～にぶい褐
44	A地区	P13	白磁	碗	15.70			3.50	口縁部1/7		灰オリーブ
45	A地区	P12	土師器	埴	25.20	27.10		19.50	口縁部1/4・体部1/3		にぶい橙～浅黄橙
46	B地区	P20	土師器	皿	14.50			2.80	口縁部1/10		灰白
47	B地区	P20	土師器	皿	13.70			2.30	口縁部わずか		灰白
48	B地区	P20	土師器	皿	12.80			2.85	口縁部わずか		灰白
49	B地区	P20	土師器	皿	7.00			1.60	口縁部1/6		灰白
50	B地区	P20	須恵器	捏鉢			9.00	3.30	底部1/8	普通	灰
51	B地区	P18	須恵器	杯B	23.20		18.00	4.20	1/6	やや不良	灰白～にぶい黄褐
52	B地区	P23	土師器	皿	8.50			1.80	ほぼ完存		灰白

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
2mm以下の長石・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		1	
7mm以下の長石・石英・クサリレキや多く含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		1	
3mm以下の長石・チャート含む	内面：底部→口縁部指オサエ→横ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部→口縁部指オサエ→横ナデ。	底部回転糸切り	1	16
2mm以下のチャート・クサリレキ・石英含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		1	
1mm以下の長石含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ→口縁部横ナデ。		1	
	内面：麻軸。 外面：体部回転ナデ→麻軸。		1	
5mm以下のチャート・石英・クサリレキ含む	指オサエ・ナデ。			16
5mm以下のチャート・石英含む	内面：底部→口縁部回転ナデ→底部ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	2	17
4mm以下のチャート・石英多く含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	2	
3mm以下の砂粒含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	2	
5mm以下のチャート・長石・石英多く含む	内面：磨滅のため不明。 外面：磨滅のため不明。		2	
8mm以下の長石・チャート・石英含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	2	
0.5mm以下の砂粒含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		2	
1mm以下の砂粒含む	内面：回転ナデ。 外面：回転ナデ。		2	
0.1mm大の砂粒含む	内面：底部→口縁部指オサエ・ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ→口縁部ナデ。		2	17
3mm以下の砂粒含む	内面：底部→口縁部ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ。		2	
6mm以下の石英・チャート・長石多く含む	内面：体部ナデ→口縁部ナデ。 外面：体部→口縁部指オサエ→ナデ。		2	
	内面：体部→口縁部麻軸。 外面：体部回転ナデ→口縁部麻軸。		2	
5mm以下のチャート・長石・石英多く含む	内面：体部→口縁部ハク。 外面：体部叩き整形→口縁部指オサエ→横ナデ。	直径24.00cm。体部 外面煤付着。	2	17
繊細な石英・チャート含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		2	
繊細な砂粒含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		2	
繊細なチャート・石英・長石含む	内面：底部→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部ナデ→指オサエ→口縁部横ナデ。		2	
繊細なクサリレキ・石英含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		2	
繊細なチャート含む	内面：体部ナデ。 外面：底部ナデ・体部横ナデ。	内面使用痕あり	2	
繊細な砂粒含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：底部・体部→削り→高台ナデ→口縁部回転ナデ。		2	
繊細な石英・クサリレキ含む	内面：底部→口縁部ナデ。 外面：底部→体部ナデ・指オサエ。	内面化粧土塗布	2	17

出土土器観察表3

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
53	B地区	P21	土師器	皿	7.80			1.00	口縁部1/6		灰白
54	B地区	P19	土師器	皿	14.40			2.80	口縁部1/4弱		灰白
55	B地区	P22	土師器	皿	13.60			1.90	口縁部わずか・底部わずか		灰白
56	B地区	P27	土師器	皿	13.15			2.50	口縁部1/4		黄灰～灰白
57	B地区	P25	土師器	皿	11.60			2.50	口縁部1/6		灰白
58	B地区	P25	土師器	皿	7.80			1.70	2/3		明褐灰～褐灰
59	B地区	P28	土師器	碗	11.40			2.90	口縁部1/2弱・底部1/2		灰白～明褐灰
60	B地区	P28	土師器	皿	8.00			1.60	1/2		褐灰～黄灰
61	B地区	P29	土師器	埴				2.10	口縁部わずか		にぶい黄褐～灰黄褐
62	B地区	P29	須恵器	捏鉢				2.40	口縁部わずか	普通	灰～暗灰
63	B地区	P24	土師器	土埴					ほぼ完存		灰～灰白
64	B地区	P32	土師器	皿	7.20			1.00	1/4弱		灰白
65	B地区	P26	須恵器	壺		7.30		5.50	底部～体部1/4	普通	灰～暗灰
66	B地区	P30	須恵器	碗	15.40			3.60	口縁部1/6	普通	灰
67	B地区	P31	土師器	皿	13.65			2.60	1/4強		灰白
68	C地区	P33	瓦	平瓦					小片	やや不良	灰
69	A地区	S D03	須恵器	碗			5.70	1.50	底部1/4	普通	灰白～灰
70	A地区	S D03	須恵器	碗			6.20	1.90	底部1/2弱	不良	褐灰～灰黄褐
71	A地区	S D04	須恵器	碗			3.90	1.90	底部わずか	普通	灰
72	A地区	S D06	白磁	碗			5.20	2.40	底部3/4		灰白
73	A地区	S D06	須恵器	捏鉢	28.50			6.00	口縁部1/8	普通	灰白～暗灰
74	A地区	S D06	土師器	埴	20.60	25.00		10.10	口縁部1/6		浅黄橙～灰白
75	A地区	S D06	土師器	埴				11.70	口縁部わずか		浅黄橙～にぶい黄橙
76	A地区	S D06	土師器	杯	12.10			2.90	口縁部1/2強		黄灰～灰白
77	A地区	S D06	土師器	杯	12.50			2.60	口縁部1/6		にぶい橙
78	A地区	S D05	土師器	埴	24.40	28.10		7.90	口縁部1/6		灰褐～灰黄褐

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
微細なチャート・クサリレキ含む	内面：底部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。		2	
微細なクサリレキ・石英含む	内面：底部～体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部～体部ナデー→口縁部横ナデ。		2	
微細なクサリレキ含む	内面：体部～口縁部横ナデ。 外面：体部指オサエ→口縁部横ナデ。		2	
微細なチャート・石英含む	内面：体部ナデー→口縁部指オサエ→横ナデ。 外面：底部～体部ナデー→口縁部指オサエ→横ナデ。		2	
微細な長石・石英含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデー→口縁部横ナデ。		2	
微細なクサリレキ・長石含む	内面：底部→口縁部ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ・ナデ。		2	
2mm以下のクサリレキ・石英・チャート含む	内面：底部磨減、口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。		2	
5mm以下のチャート・微細なクサリレキ・チャート含む	内面：底部→口縁部ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ・ナデ。		2	17
微細な石英・長石・チャート含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		2	
微細な長石・石英含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		2	
微細なチャート含む			2	17
微細なチャート・石英含む	内面：磨減。 外面：磨減。		2	
微細な石英・長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：底部回転→ウ割り→体部回転ナデ。		2	18
4mm以下のチャート、微細な長石含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		2	
2mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：底部ナデー→体部～口縁部横ナデ→指オサエ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ→指オサエ。		2	18
1mm大のチャート含む	凹面：板ナデ。 凸面：ナデ。		2	
5mm大・1mm以下のチャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	2	
1mm大の長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	2	
	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	2	
	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ→底部～高右回転→ウ割り。		2	
3mm大のチャート含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		2	
	内面：体部ハケ→ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部印壘整形→口縁部横ナデ。	頸径21.00cm・外面煤付着	2	
1mm以下のクサリレキ・チャート含む	内面：体部ヘラ→ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部印壘整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	2	
比較的精良	内面：底部～口縁部横ナデ。 外面：底部～体部ナデー→口縁部横ナデ。		2	18
1mm以下の石英含む	内面：体部ナデー→口縁部指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ・指オサエ→口縁部指オサエ→横ナデ。		2	
1mm以下の長石・石英、2mm大のチャート含む	内面：体部ヨコナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部印壘整形→口縁部横ナデ。	頸径24.30cm	3	18

出土土器観察表 4

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
79	A地区	S D05	土師器	埴	23.20	26.80		12.50	口縁部1/4		灰白～灰黄褐
80	A地区	S D05	土師器	埴	22.50			5.10	口縁部1/10		にぶい橙～褐灰
81	A地区	S D05	土師器	埴				6.30	口縁部わずか		浅黄橙
82	A地区	S D05	土師器	埴				7.30	口縁部わずか		にぶい褐
83	A地区	S D05	土師器	埴	18.80			5.70	口縁部1/6		灰黄褐
84	A地区	S D05	土師器	埴	23.00			5.20	口縁部1/6		にぶい橙～にぶい黄褐
85	A地区	S D05	土師器	埴	23.20	26.90		8.30	口縁部1/6		黄灰～にぶい橙
86	A地区	S D05	土師器	埴	22.00	26.00		9.50	口縁部1/4		にぶい橙～にぶい赤褐
87	A地区	S D05	土師器	埴	22.90	27.00		11.80	1/4弱		にぶい赤褐～灰黄褐
88	A地区	S D05	土師器	埴				4.30	口縁部わずか		灰黄褐
89	A地区	S D05	土師器	皿	8.80			1.80	口縁部1/4・底部1/2弱		浅黄橙～にぶい黄褐
90	A地区	S D05	須恵器	鉢	20.10			3.30	口縁部1/8	普通	灰
91	A地区	S D05	須恵器	捏鉢			9.50	3.50	底部3/4	不良	灰白
92	A地区	S D05	須恵器	捏鉢				4.20	口縁部わずか	やや不良	灰白
93	A地区	S D05	陶器	天目碗			4.00	1.50	底部1/2弱	良好	暗オリーブ灰～灰白
94	A地区	S D05	備前焼	甕				8.00	口縁部わずか	普通	灰褐～褐灰
95	A地区	S D05	丹波焼	底部			14.00	7.70	底部1/8	普通	灰褐
96	A地区	S D05	青磁	碗			6.60	3.20	底部充存		明オリーブ灰
97	A地区	S D05	青磁	碗			6.50	3.20	底部1/3		オリーブ灰～灰白
98	A地区	S D05	丹波焼	甕					体部わずか	普通	灰褐
99	A地区	S D05	丹波焼	甕					体部わずか	普通	灰褐
100	A地区	S D05	丹波焼	甕					体部わずか	普通	灰褐
101	A地区	S D05	土師器	杯	10.30			2.90	1/4		灰白
102	A地区	S D05	土師器	碗			9.20	2.00	底部1/4弱		にぶい橙～灰白
103	A地区	S D05	土師器	埴				6.70	口縁部わずか		にぶい橙
104	A地区	S D05	土師器	埴				4.70	口縁部わずか		にぶい橙～にぶい褐

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
4mm大のチャート、2mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：体部ハケーナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着・頭径23.30cm	3	18
5mm大のチャート、2mm以下のチャート・長石・クサリレキ含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径21.60cm	3	
2mm以下の石英・チャート・クサリレキ含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	3	18
1mm以下のクサリレキ・石英・長石含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	3	18
0.5mm以下の長石・雲母・石英・チャート含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	3	18
細粒のクサリレキ・石英・チャート含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	3	18
1mm以下の長石、0.5mm以下のチャート・石英含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		3	18
1mm以下の石英・チャート含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	3	19
2mm大のチャート、0.5mm以下の長石・チャート含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	3	19
	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	3	18
1mm以下のチャート・クサリレキ含む	内面：不明。 外面：不明。	内外面とも磨減顕著	3	
細粒のチャート・長石含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。	胎土分析	3	
4mm大のチャート・細粒の長石含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転系切り	3	
1mm大の長石含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		3	
精良	内面：胎軸。 外面：底部回転ヘラ削り。		3	
3mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：口頸部横ナデ。 外面：口頸部横ナデ。		3	19
2mm大のチャート・石英含む	内面：底部→体部横ナデ。 外面：底部ナデ。体部横ナデ。		3	
	内面：胎軸。 外面：底部ヘラ削り・体部胎軸。		3	
	内面：胎軸。 外面：底部ヘラ削り・体部胎軸。		3	
	内面：体部横ナデ。 外面：体部横ナデ。			19
	内面：体部横ナデ。 外面：体部横ナデ。			19
	内面：体部横ナデ。 外面：体部横ナデ。			19
3mm以下のクサリレキ、0.5mm以下の石英含む	内面：底部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部ナデ・指オサエ→口縁部横ナデ。		3	19
	内面：底部回転ナデ。 外面：底部指オサエ→ナデー高台回転ナデ。	高台高1.40cm	3	
細粒のチャート・石英・長石・クサリレキや多く含む	内面：体部→口縁部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		3	
1mm以下の石英・クサリレキ・雲母含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き→口縁部横ナデ。		3	

出土土器観察表 5

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
105	A地区	SD05	土師器	埴	15.80			4.80	口縁部1/4		にぶい橙
106	A地区	SD05	須恵器	碗	16.50			2.70	口縁部1/10	普通	灰
107	A地区	SD05	須恵器	碗			4.20	1.80	底部1/2強	普通	灰白
108	A地区	SD05	須恵器	埴鉢				4.00	口縁部わずか	普通	灰
109	A地区	SD05	須恵器	埴鉢	32.40			8.30	口縁部1/10	普通	灰～オリーブ灰
110	A地区	SD05	須恵器	埴鉢				5.60	口縁部わずか	良好	灰
111	A地区	SD05	丹波焼	甕			17.20	4.15	底部1/4弱	普通	灰黄褐～灰赤
112	A地区	SD05	備前焼	甕				8.40	口縁部わずか	普通	灰褐～黒褐
113	A地区	SD05	備前焼	甕				6.40	口縁部わずか	普通	灰
114	A地区	SD05	丹波焼?	甕				5.60	口縁部わずか	良好	黒褐
115	A地区	SD05	美濃or瀬戸	天目碗	12.90			5.50	体部1/4弱・口縁部わずか		黒褐～灰白
116	A地区	SD05	白磁	碗				4.10	口縁部わずか		灰白
117	A地区	SD05	白磁	碗				3.30	口縁部わずか		灰白
118	A地区	SD05	白磁	碗			6.90	2.20	底部1/3強		灰白
119	A地区	SD05	白磁	碗			6.70	2.50	底部1/2強		灰～灰白
120	A地区	SD05	白磁	碗			4.60	1.60	底部1/4		灰白
121	A地区	SD05	青磁	碗				3.40	体部わずか		明緑灰
122	A地区	SD05	青磁	碗				2.40	体部わずか		明緑灰
123	A地区	SD05	青磁	碗			5.30	3.30	底部1/3		褐灰～明緑灰
124	A地区	SD05	丹波焼	甕					体部わずか	普通	灰褐
125	A地区	SD05	丹波焼	甕					体部わずか	普通	灰褐
126	A地区	SD05	丹波焼	甕					体部わずか	普通	灰褐
127	A地区	SD08	須恵器	碗			6.70	2.30	底部1/4	普通	灰
128	A地区	SD08	須恵器	碗			5.00	2.00	底部1/2強	普通	灰
129	A地区	SD08	須恵器	碗			4.40	2.90	底部1/2	普通	灰～灰白
130	A地区	SD08	土師器	皿	10.60			1.30	口縁部1/6		浅黄橙～明褐灰

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
1mm以下の石英・雲母・長石含む	内面：体部へ口縁部横ナデ。 外面：体部印き整形へ口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	3	18
細粒のチャート・長石含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		3	
1mm大のチャート含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	3	
細粒のチャート・長石含む	内面：体部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。		3	
細粒のチャート・長石・石英、1mm大のチャート含む	内面：体部ナデへ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。		3	
細粒の石英・長石含む	内面：体部ナデへ口縁部横ナデ。 外面：体部ナデへ口縁部横ナデ。		3	
	内面：体部へ体部横ナデ。 外面：底部ナデ・体部横ナデ。		3	
5mm大のチャート含む	内面：口頸部横ナデ。 外面：口頸部横ナデ。		3	19
5mm大のチャート、1mm大の長石含む	内面：口頸部横ナデ。 外面：口頸部横ナデ。	須恵質	3	20
細粒のチャート含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		3	20
3mm大の砂粒含む	内面：体部へ口縁部施軸。 外面：体部回転ナデ・体部へ口縁部施軸。		4	
	内面：施軸。 外面：体部へテ削り・口縁部施軸。		4	20
	内面：施軸。 外面：施軸。		4	20
精良	内面：施軸。 外面：底部回転へテ削りへ体部施軸。		4	
	内面：底部へ体部回転ナデへ施軸。 外面：底部へ体部回転へテ削り。		4	
	内面：施軸。 外面：高台部回転へテ削り。		4	
	内面：施軸。 外面：回転ナデへ施軸。		4	20
	内面：施軸。 外面：施軸。		4	20
精良	内面：体部施軸。 外面：底部へテ削りへ高台へ体部施軸。		4	
	内面：体部横ナデ。 外面：体部横ナデ。			19
	内面：体部横ナデ。 外面：体部横ナデ。			19
	内面：体部横ナデ。 外面：体部横ナデ。			19
8mm大のチャート含む	内面：底部へ体部回転ナデへ底部仕上げナデ。 外面：底部へ体部回転ナデ。	高台高8mm	4	
	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	4	
1mm以下のチャート・石英含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	4	
	内面：口縁部横ナデ。 外面：横ナデ・ヘラナデ。		4	

出土土器観察表 6

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
131	A地区	SD09	須恵器	碗			6.20	2.35	底部1/3		灰白
132	B地区	SD10	土師器	杯	13.60		7.40	4.90	口縁部1/4弱		灰白～明黄褐色
133	B地区	SD10	土師器	皿	12.90			2.70	口縁1/2弱・底部3/5		灰白～にぶい黄褐色
134	B地区	SD10	土師器	皿	12.80			2.00	口縁部1/3弱		灰白～にぶい橙
135	B地区	SD10	土師器	皿	12.30			2.60	口縁部1/4弱		にぶい黄褐色～灰白
136	B地区	SD10	土師器	皿	11.40			3.55	口縁部1/3弱		灰白～にぶい黄褐色
137	B地区	SD10	土師器	皿	11.40			2.45	口縁部1/4弱		にぶい橙～灰白
138	B地区	SD10	土師器	皿	11.50			2.35	口縁部1/6		灰白～浅黄褐色
139	B地区	SD10	土師器	皿	11.50			2.50	口縁部1/7		灰白～にぶい橙
140	B地区	SD10	土師器	皿	9.85			2.20	口縁部1/6弱		にぶい黄褐色～にぶい橙
141	B地区	SD10	土師器	皿	10.00			2.60	口縁部1/4		灰白
142	B地区	SD10	土師器	皿	12.30			2.35	口縁部1/4		灰白
143	B地区	SD10	土師器	皿	11.40			2.20	口縁部1/5		灰白
144	B地区	SD10	土師器	皿	13.80			2.50	口縁部1/4弱		にぶい黄褐色
145	B地区	SD10	土師器	皿				2.70	口縁部わずか		淡赤褐色～橙
146	B地区	SD10	土師器	皿	7.85			1.45	口縁部3/4		黄灰～にぶい黄褐色
147	B地区	SD10	土師器	碗			10.50	3.10	底部1/4		黄灰
148	B地区	SD10	土師器	埴	29.50			6.20	口縁部1/6		にぶい黄褐色～灰黄褐色
149	B地区	SD10	土師器	埴	22.30			8.20	口縁部1/9強		にぶい黄褐色～浅黄褐色
150	B地区	SD10	土師器	埴	20.40	23.20		12.00	口縁部1/4		にぶい橙～にぶい黄褐色
151	B地区	SD10	土師器	埴	18.80			6.70	口縁部1/2弱		浅黄褐色～黄褐色
152	B地区	SD10	土師器	埴	25.90			5.80	口縁部1/8		橙～浅黄褐色
153	B地区	SD10	土師器	埴	24.70			4.50	口縁部1/4		にぶい橙～灰白
154	B地区	SD10	土師器	埴	22.00			6.00	口縁部1/7		にぶい黄褐色～黄灰
155	B地区	SD10	瓦質土器	埴	15.40	18.00		6.50	口縁部わずか		灰～褐灰
156	B地区	SD10	土師器	埴	16.20	16.40		6.90	口縁部1/6		にぶい橙～灰黄褐色

胎土	調整	備考	図版	写真図版
6mm大のチャート・微細な砂粒多く含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部へラ切り	4	20
2mm以下の長石・チャート含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	4	20
2mm以下のチャート・クサリレキ・長石含む	内面：体部指オサエ→底部へ体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部へ体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。		4	20
1.5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部ナデー体部指押さえ・ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部ナデー口縁部横ナデ。		4	
1.5mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：底部ナデー体部指オサエ・ナデー口縁部指オサエ横ナデ。 外面：底部へ体部ナデー口縁部指オサエ。		4	
1mm以下の長石・チャート含む	内面：底部ナデー体部ナデ・指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。		4	21
1mm以下の長石・チャート含む	内面：底部ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部へ体部指オサエ→口縁部横ナデ。		4	
1mm以下のチャート・クサリレキ含む	内面：体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部ナデー口縁部横ナデ。		4	
0.3mm以下のクサリレキ・チャートわずかに含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部ナデー口縁部横ナデ。		4	
0.5mm以下の長石・クサリレキ含む	内面：底部ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部ナデー体部へ口縁部横ナデ。		4	
微細なチャート・石英多く含む	内面：底部ナデー体部へ口縁部横ナデ。 外面：底部へ体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。		4	
1mm以下のチャート・長石含む	内面：体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。		4	
0.3mm以下の長石・チャート含む	内面：体部へ口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部横ナデ。		4	
0.5mm以下のチャート・長石含む	内面：体部へ口縁部指オサエ・ナデ。 外面：体部へ口縁部指オサエ・ナデ。		4	
0.5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部ナデー口縁部指オサエ→ナデ。 外面：底部へ体部指オサエ・ナデー口縁部指オサエ→ナデ。		4	
2.5mm以下の長石わずかに含む	内面：底部ナデー体部へ口縁部指オサエ・ナデ。 外面：底部へ口縁部指オサエ・ナデ。		4	21
2mm以下のチャート・長石多く含む	内面：底部へ体部横ナデ。 外面：高台へ体部横ナデ。		4	
1cm以下のチャート、微細な長石・石英含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部ハケー指オサエ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	4	
6mm以下の長石・チャート含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径21.90cm	4	28
微細な長石含む	内面：体部板ナデー→ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径19.3cm	4	21
2mm以下の長石・チャート含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径18.60cm	4	
3.5mm以下の長石・クサリレキ・チャート含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部横ナデ。	踵以下外面煤付着	4	28
1mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：体部ハケーナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	踵以下外面煤付着	4	
6mm大のチャート、微細な長石・石英・クサリレキ含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		4	
1mm以下の長石・チャート含む	内面：体部板ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部指オサエ→口縁部横ナデ。	踵以下外面煤付着	4	
3mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径15.60cm	4	

出土土器観察表7

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
157	B地区	SD10	土師器	埴	22.30	22.80		13.30	口縁部～体部3/4		にぶい黄橙～褐灰
158	B地区	SD10	須恵器	碗			7.00	2.40	底部わずか	普通	灰
159	B地区	SD10	須恵器	碗			6.70	1.65	底部1/4	普通	灰
160	B地区	SD10	須恵器	碗	14.80			3.50	口縁部1/6	やや不良	灰白
161	B地区	SD10	須恵器	碗			5.20	2.00	底部完存	やや不良	灰白～灰黄褐
162	B地区	SD10	須恵器	碗			9.00	2.30	底部わずか	普通	灰
163	B地区	SD10	須恵器	円面 碗				3.10	わずか	普通	灰～灰白
164	B地区	SD10	須恵器	鉢	13.30		8.50	5.50	口縁部1/6・底部 2/3	普通	黄灰～灰
165	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	32.80		10.80	11.20	口縁部1/8・底部 1/7	普通	灰
166	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	30.80			7.20	口縁部若干	普通	灰
167	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	31.40			4.20	口縁部1/8	普通	灰
168	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	28.60			7.10	口縁部1/6	良好	灰
169	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	28.60			5.40	口縁部1/8	普通	灰
170	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	30.00		11.30	12.00	口縁部1/4・底部完 存	普通	灰白～にぶい黄橙
171	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	29.10			8.50	口縁部2/3	普通	灰～灰白
172	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	24.60			3.60	口縁部1/12	普通	灰
173	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	26.50			5.90	口縁部1/8	普通	灰
174	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	26.10			6.40	口縁部1/4弱	良好	灰
175	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	25.40			7.90	口縁部わずか	やや不良	灰
176	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	27.10		8.40	8.70	口縁部1/9・底部 1/2弱	普通	灰
177	B地区	SD10	須恵器	捏鉢	22.40			4.00	口縁部1/10	普通	灰
178	B地区	SD10	瀬戸・美濃系陶器	鉢?			12.20	1.95	底部1/5	良好	浅黄～灰白
179	B地区	SD10	瀬戸焼	皿?			5.20	2.30	底部1/5	普通	灰白
180	B地区	SD10	瀬戸焼	小壺		9.60	5.50	5.60	底部1/2弱	普通	灰白～橙
181	B地区	SD10	青磁	碗				3.60	口縁部わずか		浅黄
182	B地区	SD10	青磁	碗			4.60	2.80	底部1/2弱		浅黄橙～灰白

胎土	調整	備考	図 版	写真 図版
3mm以下のチャート、微細な石英多く含む	内面：体部ナデー→口縁部ハケー横ナデ。 外面：体部印き整形→体部上半→頭部ハケー→口縁部横ナデ。	外面煤付着	4	21
微細な長石含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	4	
微細なチャート・石英含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	4	
3mm以下のチャート、微細な石英含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		5	
2mm以下のチャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	5	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：底部→体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：高台横ナデ→体部回転ナデ。		5	
0.2mm以下のチャート含む	内面：回転ナデ。 外面：回転ナデ。		5	
2mm以下のチャート、微細な長石含む	内面：底部→口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	5	21
5mm以下の長石・チャート・石英含む	内面：体部→口縁部ナデー横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ・指オサエ。	底部末	5	
1.5mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		5	
3mm以下の長石・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		5	
3mm以下の長石・チャート多く含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		5	
3mm以下の長石・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		5	
6mm以下のチャート含む	内面：底部→体部ナデー→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	5	21
3mm以下のチャート・長石含む	内面：体部横ナデー→ナデー→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		5	
3mm以下の長石含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		5	
7mm以下のチャート、微細な長石含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		5	
1.1cm以下のチャート含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。	外面煤付着	5	
5mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ→ナデ。	胎土分析	5	
3mm以下の長石・チャートやや多く含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	5	
3.5mm以下の長石・チャート含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		5	
1.5mm以下の石英・長石・チャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転ヘラ削り	5	
	内面：底部旋軸。 外面：底部→体部回転ヘラ削り。		5	
	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：底部板ナデ。体部回転ナデ。		5	
精良	内面：旋軸。 外面：連弁→旋軸。		5	20
1mm以下のチャート含む	内面：底部→体部旋軸。 外面：底部回転ヘラ削り→体部旋軸。		5	

出土土器観察表B

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
183	B地区	SD10	白磁	碗			6.55	2.35	底部6/7		灰白
184	B地区	SD10	白磁	碗			5.90	2.35	底部5/6		灰白
185	B地区	SD10	丹波焼?	捏鉢			15.60	10.65	底部1/8	普通	灰～黄灰
186	B地区	SD10	丹波焼	甕	41.50	64.20		38.50	口縁部～体部わずか	やや不良	灰黄褐～灰褐
187	B地区	SD10	丹波焼	捏鉢	30.60			10.00	1/3	良好	にぶい赤褐
188	B地区	SD10	丹波焼	甕				9.80	底部わずか	やや不良	にぶい黄褐～暗灰黄
189	B地区	SD10	備前焼	すり鉢	34.10		16.30	13.75	口縁部1/4・底部わずか	普通	灰黄～灰黄褐
190	B地区	SD10	瓦質土器	風が	24.00			5.35	口縁部1/12		暗灰
191	B地区	SD10	瓦	平瓦					わずか	普通	灰
192	B地区	SD10	瓦	平瓦					わずか	やや不良	灰
193	B地区	SD10	須恵器	甕						普通	灰
194	B地区	SD10	瀬戸焼	卸皿						普通	黄灰
195	B地区	SD11	須恵器	碗			5.40	3.70	底部1/3	良好	灰
196	B地区	SD11	須恵器	碗			8.50	2.60	底部1/4弱	やや不良	灰
197	B地区	SD11	須恵器	碗			6.50	1.30	底部1/4	やや不良	灰白
198	B地区	SD12	土師器	皿	11.20			2.10	口縁部1/4弱		灰白
199	B地区	SD12	土師器	皿	7.20			1.10	1/2		灰白
200	B地区	SD12	須恵器	碗			5.90	2.10	底部ほぼ完存	やや不良	灰白
201	B地区	SD12	須恵器	捏鉢	18.60			5.50	口縁部1/6	普通	灰～黄灰
202	B地区	SD14	土師器	皿	9.40		6.40	1.20	口縁部1/4		灰白
203	B地区	SD14	土師器	皿	10.70			3.00	口縁部1/10		灰白
204	B地区	SD14	土師器	皿	13.10			3.10	口縁部1/6		褐灰～灰白
205	B地区	SD14	土師器	皿	12.00			3.00	ほぼ完存		灰白
206	B地区	SD14	土師器	皿	12.10			2.60	口縁部3/4		灰白～黄灰
207	B地区	SD14	土師器	皿	12.30			2.60	1/3		灰白
208	B地区	SD14	土師器	皿	13.00			2.10	口縁部1/8		灰白

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
	内面：底部施釉。 外面：底部～体部回転ヘラ削り。		5	
	内面：底部施釉。 外面：底部～体部回転ヘラ削り。		5	
6mm以下の長石・チャート含む	内面：体部ハケ。 外面：底部末、体部下端指オサエ→体部ヘラナデ。		5	
5mm以下のチャート含む	内面：体部下半ヘラ削り・体部上半ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部下半ヘラナデ・体部上半ナデ→口縁部横ナデ。		6	21
3mm以下のチャート・長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		6	21
2mm以下の長石・チャート含む	内面：底部ナデ→体部板ナデ。 外面：底部板ナデ。体部横ナデ→ナデ。板ナデ。		6	
3mm以下のチャート・石英・クサリレキ含む	内面：底部ナデ→体部～口縁部回転ナデ→おろし目。 外面：底部ナデ→体部～口縁部回転ナデ。		6	22
3mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む	内面：体部ナデ→頭部ヘラ削り→口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部横ナデ。	頭径24.40cm	6	22
5mm以下の長石・チャート含む	凹面：布目。 凸面：叩き→ヘラナデ。	須志賀	6	
1.5mm以下の長石・チャート含む	凹面：布目。 凸面：ヘラナデ。		6	
	内面：当具痕。 外面：叩き。	外面に鶴丸文		22
	内面：押し目。 外面：回転糸切り。			22
繊細なチャート・長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	6	
1mm以下の長石・チャート含む	内面：底部回転ナデ。 外面：底部～体部回転ナデ。	高台高1.30cm	6	
1mm以下のチャート含む	内面：底部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	6	
繊細なチャート含む	内面：体部～口縁部磨紙。 外面：体部～口縁部磨紙。		6	
繊細なチャート・長石含む	内面：底部～口縁部指オサエ・ナデ。 外面：底部～口縁部指オサエ・ナデ。		6	
2mm以下のチャート・石英多く含む	内面：底部～体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	6	
繊細な石英・長石含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		7	
1mm以下のチャート含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部ナデ→口縁部横ナデ。		7	
繊細なチャート含む	内面：底部ナデ→体部～口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		7	
繊細な砂粒含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部指オサエ→口縁部横ナデ。		7	
1mm大のチャート・長石含む	内面：底部～体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		7	22
1mm以下のチャート・石英含む	内面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		7	22
繊細なクサリレキ・石英含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		7	22
繊細な砂粒含む	内面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		7	

出土土器観察表 9

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
209	B地区	SD14	土師器	皿	11.80			2.70	口縁部1/5		にぶい橙～灰白
210	B地区	SD14	土師器	皿	11.40			3.20	ほぼ完存		灰白～明褐灰
211	B地区	SD14	土師器	皿	11.10			2.45	口縁部1/7		灰白～にぶい橙
212	B地区	SD14	土師器	皿	11.70			2.70	口縁部2/3		明褐灰～褐灰
213	B地区	SD14	土師器	皿	12.00			2.70	口縁部1/2・底部ほぼ完存		灰白
214	B地区	SD14	土師器	皿	10.90			2.10	1/4		灰白
215	B地区	SD14	土師器	皿	7.90			1.60	ほぼ完存		灰白～明褐灰
216	B地区	SD14	土師器	埴	22.80			5.00	口縁部1/3		灰白
217	B地区	SD14	土師器	埴	20.50			7.30	口縁部1/6		浅黄橙～灰白
218	B地区	SD14	土師器	埴	19.50			6.30	口縁部1/6		にぶい黄橙
219	B地区	SD14	土師器	埴	19.70	23.10		12.45	口縁部1/10・体部わずか		灰白～浅黄橙
220	B地区	SD14	土師器	埴	23.30	24.30		14.50	口縁部1/4強		灰白～にぶい黄橙
221	B地区	SD14	土師器	埴	20.20			6.80	口縁部1/3		にぶい黄橙～灰白
222	B地区	SD14	土師器	埴	24.00	26.40		15.70	口縁部1/3		橙～淡赤橙
223	B地区	SD14	土師器	埴	21.10	27.30		10.40	口縁部1/8		灰白
224	B地区	SD14	土師器	埴	20.70	26.80		12.90	口縁部1/4		灰白～にぶい黄橙
225	B地区	SD14	土師器	埴	27.70			12.00	口縁部5/6		橙～にぶい橙
226	B地区	SD14	陶器	壺			9.60	4.60	底部1/3弱	やや不良	灰白～灰褐
227	B地区	SD14	瓦質土器	羽釜				3.60	口縁部わずか		灰白～灰
228	B地区	SD14	須恵器	碗	15.50			2.80	口縁部1/8弱	良好	灰
229	B地区	SD14	須恵器	碗			5.80	2.20	底部1/3	やや不良	灰白
230	B地区	SD14	須恵器	碗			6.00	2.20	底部1/4	普通	灰白
231	B地区	SD14	須恵器	捏鉢				3.20	口縁部わずか	普通	灰
232	B地区	SD14	須恵器	捏鉢				3.50	口縁部わずか	普通	灰～暗灰
233	B地区	SD14	須恵器	捏鉢				3.30	口縁部わずか	普通	灰
234	B地区	SD14	須恵器	捏鉢			10.20	4.70	底部1/2弱	普通	灰

胎土	調整	備考	図版	写真図版
繊細なチャート含む	内面：底部ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。		7	
2mm以下のチャート・石英・長石・クサリレキ含む	内面：底部～体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。		7	22
繊細なチャート・石英含む	内面：底部ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ→口縁部横ナデ。		7	
2mm以下のチャート・石英含む	内面：底部ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部ナデー口縁部横ナデ。		7	23
繊細なチャート・石英含む	内面：底部～体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。		7	23
繊細なチャート・石英含む	内面：底部ナデー～体部～口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデー口縁部横ナデ。		7	
繊細なチャート・クサリレキ含む	内面：底部～口縁部指オサエ・ナデ。 外面：底部～口縁部指オサエ・ナデ。		7	23
1mm以下のチャート・クサリレキ含む	内面：体部ハケー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径22.30cm	7	
繊細なチャート・石英・クサリレキ含む	内面：体部ハケーナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径19.50cm	7	
2mm以下のチャート・長石・石英・クサリレキ含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径19.10cm	7	
3mm以下のクサリレキ・長石・石英・チャート含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径20.00cm	7	23
2mm以下のチャート・クサリレキ・長石含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤多量に付着・頭径21.20cm	7	23
2mm以下のチャート・石英・長石含む	内面：体部ナデ・ヘナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径21.10cm	7	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～体部ハケー口縁部横ナデ。 外面：底部～体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤多量に付着・頭径23.40cm	7	23
2mm以下の長石・石英・クサリレキ含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径21.70cm	7	
4mm以下のチャート・石英・2mm以下のクサリレキ含む	内面：体部ハケーナデー口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤多量に付着・頭径21.80cm	7	23
6mm以下のチャート・繊細な長石・石英含む	内面：底部～体部板ナデー口縁部横ナデ。 外面：底部～体部ナデー口縁部横ナデ。	鏝以下外面煤付着	7	24
1mm以下のチャート・石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	7	
精良	内面：口縁部横ナデ。 外面：鏝→口縁部横ナデ。		7	
繊細な長石含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		8	
繊細な石英・長石・チャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	8	
精良	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	8	
繊細なチャート・長石含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		8	
2mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		8	
繊細なチャート含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		8	
1mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～体部ナデ。 外面：体部ナデ。	底部回転糸切り	8	

出土土器観察表10

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
235	B地区	SD14	須恵器	埴鉢	28.20		8.60	10.90	口縁部1/4弱・底部完存	普通	灰～暗灰
236	B地区	SD14	須恵器	甕				4.60	口縁部わずか	不良	灰白～灰
237	B地区	SD14	須恵器	甕	36.80			2.80	口縁部1/8	やや不良	灰
238	B地区	SD14	瓦	丸瓦					わずか	普通	灰
239	B地区	SD14	備前焼	埴鉢	28.40		14.50	12.90	口縁部1/6・底部1/8	やや不良	灰白
240	B地区	SD14	備前焼	甕	52.70	80.00	39.50	36.6+18.4	口縁部1/3・底部1/2弱・体部わずか	普通～やや不良	灰
241	B地区	SD17	土師器	皿	12.70			2.40	口縁部1/4		明褐灰
242	B地区	SD17	土師器	皿	12.50			2.80	口縁部1/3・底部1/2強		褐灰
243	B地区	SD17	土師器	皿	8.40			1.20	1/3		灰黄褐～褐灰
244	B地区	SD17	須恵器	埴鉢				4.40	口縁部わずか	普通	灰
245	B地区	SD20	土師器	皿	12.10			2.30	口縁部1/4		にぶい橙
246	B地区	SD20	土師器	皿	12.30			2.80	ほぼ完存		灰白～にぶい黄橙
247	B地区	SD20	土師器	皿	13.10			2.10	口縁部1/10		灰白～にぶい橙
248	B地区	SD20	土師器	皿	11.30			2.60	口縁部1/8		にぶい黄橙～灰白
249	B地区	SD20	土師器	皿	10.70			1.40	口縁部1/6		灰白
250	B地区	SD20	土師器	羽釜	21.80			6.80	口縁部1/6		にぶい褐～橙
251	B地区	SD20	須恵器	埴鉢	31.90			4.65	口縁部1/8	普通	灰
252	B地区	SD20	須恵器	埴鉢	29.30			6.10	口縁部1/10	普通	灰
253	B地区	SD20	須恵器	埴鉢				5.15	口縁部わずか	普通	灰
254	B地区	SD20	須恵器	壺			9.40	7.30	体部わずか・底部ほぼ完存	普通	灰
255	B地区	SD20	青磁	碗			5.10	2.00	底部ほぼ完存		灰
256	B地区	SD20	瓦	平瓦					わずか	普通	灰白
257	B地区	SD20	瓦	平瓦					1/3	普通	灰
258	B地区	SD20	瓦	平瓦					わずか	不良	灰白
259	B地区	SD20	瓦	平瓦					1/4	不良	灰白
260	B地区	SD20	瓦	平瓦					わずか	普通	灰

胎土	調整	備考	図 版	写真 図版
2mm以下のチャート・長石含む	内面：底部へ体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。	底部回転系切り	8	24
微細な長石・チャート含む	内面：口頸部横ナデ。 外面：口頸部横ナデ。		8	
5mm以下のチャート含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		8	
4mm以下のチャート・長石含む	凹面：ヘラナデ。 凸面：ヘラナデ。		8	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：底部ナデ→体部→口縁部横ナデ→おろし目。 外面：底部ナデ。体部→口縁部横ナデ。		8	24
	内面：底部へ体部ヘラナデ→体部ナデ。体部上半ハケ→口頸部横ナデ。 外面：底部ハケ・ナデ。体部下半ハケ・体部上半ハケ→口頸部横ナデ。		8	25
微細なチャート・石英含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部へ体部ナデ→口縁部横ナデ。		9	
微細な砂粒含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		9	24
微細なチャート・石英含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		9	
微細なチャート・長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		9	
微細なクサリレキ・長石・石英含む	内面：底部へ体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部へ体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		9	
微細なチャート・石英・クサリレキ含む	内面：底部へ体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部へ体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		9	24
微細なクサリレキ含む	内面：底部へ体部ナデ→口縁部横ナデ→底部仕上げナデ。 外面：底部へ体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		9	
石英含む	内面：底部へ体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部へ体部ナデ→口縁部横ナデ。		9	
微細なチャート・石英含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		9	
微細なチャート・長石・クサリレキ含む	内面：体部板ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部ハケ→口縁部横ナデ。		9	
3mm以下のチャート、微細な長石・石英含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		9	
3mm以下のチャート含む	内面：体部→口縁部ナデ→横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		9	
微細なチャート・長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		9	
4mm以下のチャート含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転系切り	9	25
	内面：旋軸。 外面：底部へラ削り。		9	24
微細なチャート・長石・石英含む	凹面：布目。 凸面：ヘラナデ。	須恵質	9	
5mm以下のチャート・長石含む	凹面：布目。 凸面：ヘラナデ。	須恵質	9	26
2mm以下のチャート、微細な長石・石英含む	凹面：布目。 凸面：ヘラナデ。	須恵質	9	
1mm以下のチャート含む	凹面：布目。 凸面：ヘラナデ。	須恵質	9	26
7mm以下のチャート、微細な長石含む	凹面：布目。 凸面：ヘラ削り。	須恵質	9	26

出土土器観察表11

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
261	B地区	SD20	須恵器	甕						やや不良	灰白
262	B地区	SD20	石製品	石塼							
263	B地区	SD22	青磁	碗				1.70	口縁部わずか		オリーブ灰
264	B地区	SD21	土師器	皿	11.30			3.00	ほぼ完存		褐灰～灰黄褐
265	B地区	SD21	須恵器	捏鉢	26.50			2.50	口縁部1/14弱	普通	灰
266	B地区	SD21	土師器	埴	21.50	25.40		13.60	口縁部1/5		浅黄橙～褐灰
267	C地区	SD29	土師器	皿	9.70			2.10	口縁部1/3弱		灰白～黄灰
268	C地区	SD29	土師器	皿	8.30		4.60	1.85	口縁部1/4弱・底部1/3		にぶい黄橙～にぶい橙
269	C地区	SD29	須恵器	碗				4.00	口縁部わずか	普通	灰
270	C地区	SD29	須恵器	碗				2.85	口縁部わずか	普通	灰
271	C地区	SD29	須恵器	碗	13.20			3.50	口縁部1/8	普通	灰～灰白
272	C地区	SD29	須恵器	碗	9.70		4.00	3.90	口縁部5/6・底部完存	良好	灰～灰白
273	C地区	SD29	須恵器	碗			5.90	2.25	底部1/3弱	やや不良	灰～灰白
274	C地区	SD29	須恵器	碗			6.40	1.55	底部1/4弱	普通	灰～灰白
275	C地区	SD29	須恵器	碗			5.40	1.65	底部1/2弱	不良	灰白
276	C地区	SD29	須恵器	碗	15.60			3.60	口縁部1/7	良好	灰
277	C地区	SD29	須恵器	碗	14.25		5.60	5.10	口縁部2/3・底部3/4	普通	灰
278	C地区	SD29	須恵器	碗			5.75	5.10	底部1/2弱	普通	灰白
279	C地区	SD29	須恵器	碗			2.95	3.00	底部1/2弱	良好	灰
280	C地区	SD30	須恵器	碗	13.25		5.70	4.85	口縁部5/8・底部完存	普通	灰
281	A地区	SE02	須恵器	碗	14.70			3.50	口縁部1/6	普通	灰白～灰
282	A地区	SE02	須恵器	碗			5.50	1.50	底部1/3	普通	灰
283	A地区	SE02	丹波焼	甕						普通	褐灰
284	B地区	SE03	土師器	皿	8.80			1.00	口縁部1/6		灰白
285	B地区	SE03	須恵器	碗			7.00	1.50	底部1/4強	普通	暗灰～灰白
286	B地区	SE03	丹波焼	甕				6.30	口縁部わずか	不良	にぶい赤褐

胎土	調整	備考	図版	写真図版
	内面：ナデ。 外面：叩き整形。			25
				25
精良	内面：口縁部旋軸。 外面：口縁部旋軸。		9	
微細なチャート・長石・クサリレキ・石英含む	内面：底部ナデー一体部→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。		9	27
微細なチャート・長石含む	内面：口縁部横ナデーナデ。 外面：口縁部横ナデ。		9	
3mm以下のチャート、微細なクサリレキ・長石・石英や多く含む	内面：底部ナデー一体部→口縁部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部叩き整形→口縁部横ナデ。	跨以下外面・口縁部内面煤付着	10	27
1mm以下のチャート・長石含む	内面：体部→口縁部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。		10	
1.5mm以下の石英・長石・チャート含む	内面：底部→体部ナデ→指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。	底部ヘラ切り	10	
2mm以下の長石・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
0.1mm次の長石含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
1mm以下の長石・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
1.5mm以下のチャート含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	27
0.3mm以下の長石含む	内面：底部→体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	
2mm以下の長石・チャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	
1mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	
2.5mm以下の長石・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		10	
9mm以下の長石・チャート多く含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	27
精良	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	10	
2mm以下の長石・チャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部ヘラ切り	10	29
5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	27
2mm以下のチャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
	内面：底部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	
	内面：体部ナデ。 外面：体部ナデ。			27
微細な砂粒含む	内面：底部→口縁部指オサエ・ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ。		10	
微細なチャート・長石わずかに含む	内面：底部回転ナデ→仕上げナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	10	
3mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		10	

出土土器観察表12

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
287	A地区	竈	須恵器	埴鉢	27.60			9.90	口縁部1/6強	普通	灰
288	A地区	竈	須恵器	埴鉢				3.10	口縁部わずか	やや不良	黄灰～オリーブ灰
289	A地区	竈	須恵器	碗			7.00	1.80	底部1/4	普通	灰白
290	A地区	竈	須恵器	碗			5.80	2.60	底部1/3	やや不良	灰白
291	A地区	竈	土師器	皿	12.80			2.10	口縁部1/8		灰白
292	A地区	竈	白磁	碗	14.80			2.20	口縁部1/10		灰白
293	A地区	S K01	須恵器	碗			6.00	1.30	底部1/3	良好	灰
294	A地区	S K02	土師器	皿	9.00		5.00	1.30	ほぼ完存		灰白～にぶい橙
295	A地区	S K02	須恵器	碗	16.10			3.30	口縁部1/5	普通	灰
296	A地区	S K05	土師器	皿	9.20		6.10	1.70	口縁部3/4		明赤褐～浅黄橙
297	A地区	S K06	須恵器	皿	8.30		4.00	2.10	1/8	普通	灰
298	A地区	S K09	須恵器	埴鉢	25.80			6.60	口縁部1/4強	不良	にぶい黄橙～灰
299	A地区	S K08	須恵器	碗	15.40			3.90	口縁部1/6	普通	灰白～灰
300	A地区	S K11	須恵器	碗			6.60	2.60	底部1/6	普通	灰
301	A地区	S K12	須恵器	碗	16.50			4.70	口縁部1/8	普通	灰白～灰
302	A地区	S K13	須恵器	碗			6.40	1.55	底部1/3	普通	灰
303	A地区	S K13	須恵器	碗	16.40			4.00	口縁部1/8	普通	灰白
304	A地区	S K13	須恵器	碗			6.00	3.20	底部3/4	不良	灰白
305	A地区	S K13	須恵器	碗			5.50	1.60	底部わずか	やや不良	灰白
306	A地区	S K14	須恵器	碗	13.80			2.20	口縁部1/8	やや不良	灰白
307	B地区	S K18	土師器	皿	8.00			1.30	完存		灰白
308	B地区	S K18	土師器	皿	7.60			1.20	口縁部3/4・底部完存		灰白
309	B地区	S K18	土師器	皿	7.00			1.40	2/3		灰白
310	B地区	S K18	土師器	皿	7.60			1.05	口縁部1/3		灰黄
311	B地区	S K18	土師器	埴	16.50	20.90		11.90	口縁部1/4強		橙～浅黄橙
312	B地区	S K18	須恵器	壺	10.20			6.65	口縁部わずか・肩部1/4	不良	灰～灰白

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
7mm以下のチャート含む	内面：体部ナデ→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
細粒の長石・チャート多く含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		10	
精良	内面：底部→体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	10	
細粒のチャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。		10	28
13ば精良	内面：底部→体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		10	28
精良	内面：旋軸。 外面：旋軸。		10	
	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	
2mm以下のクサリレキ・石英含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部糸切り	10	28
2mm大のチャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
2mm大の砂粒多く含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	28
	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部糸切り	10	
1mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：体部ナデ→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
4mm大のチャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	
1mm以下の石英・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
2mm以下のチャート・石英含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	10	
5mm大のチャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	
2mm以下のチャート多く含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	10	
	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部ヘラ切り	10	
細粒のチャート・石英含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		10	
3mm以下のチャート含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		10	28
2mm以下のチャート含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		10	29
2mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		10	
微細な石英・長石含む	内面：底部→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		10	
微細なチャート・石英含む	内面：体部下半ナデ・体部上半ヘラナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部田明き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着・頭径17.20cm	10	29
微細な砂粒含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		10	29

出土土器観察表13

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
313	B地区	S K18	須恵器	碗			8.00	1.70	底部1/2弱	不良	灰白
314	B地区	S K18	須恵器	甕	43.00			12.80	口縁部～体部わずか	普通	灰
315	B地区	S K18	須恵器	埴鉢				9.85	口縁部～体部わずか	やや不良	灰
316	B地区	S K19	須恵器	埴鉢	27.20		8.80	10.50	口縁部1/4弱・底部完存	普通	灰
317	B地区	S K19	土師器	埴	25.00			6.90	口縁部1/10		浅黄橙～明褐灰
318	B地区	S K19	土師器	埴				6.20	口縁部わずか		灰白～褐灰
319	B地区	S K19	土師器	皿	11.70			2.30	1/4強		灰～黄灰
320	B地区	S K19	土師器	皿	11.20			2.90	1/4		灰白
321	B地区	S K19	土師器	皿	12.90			2.80	口縁部1/8		にぶい橙～にぶい黄橙
322	B地区	S K19	土師器	皿	14.20			2.30	口縁部1/16		灰白
323	B地区	S K19	土師器	皿	14.20			2.60	口縁部1/8		灰黄褐～明褐灰
324	B地区	S K19	須恵器	埴鉢						不良	白灰
325	B地区	S K20	土師器	皿	11.70			2.30	口縁部1/6		灰白～にぶい黄橙
326	B地区	S K22	土師器	皿	11.60			2.10	口縁部1/8		灰白
327	B地区	S K23	土師器	皿	13.30			2.30	口縁部1/4		灰白
328	B地区	S K23	土師器	皿	11.40			2.10	口縁部1/4		灰白～灰
329	B地区	S K23	土師器	皿	11.60			2.40	口縁部わずか・体部～底部1/4		灰白
330	B地区	S K23	土師器	皿	11.20			2.80	口縁部1/4		灰白
331	B地区	S K25	土師器	皿	8.60			0.90	口縁部1/6		にぶい橙
332	C地区	S K26	瓦器	碗				2.65	口縁部わずか		灰～灰白
333	C地区	S K27	土師器	杯?	11.10			3.40	ほぼ完存		灰白
334	C地区	S K27	土師器	皿	8.25			1.55	口縁部1/2弱・底部1/2弱		灰白
335	C地区	S K27	須恵器	埴				3.40	口縁部わずか	良好	黒褐～灰白
336	C地区	S K28	土師器	皿	10.80			2.90	口縁部わずか		灰白～浅黄橙
337	C地区	S K28	土師器	皿	8.40			1.45	口縁部1/2強		灰白～橙
338	C地区	S K28	土師器	皿	5.90			1.50	口縁部1/3弱	不良	灰白～橙

胎土	調整	備考	図版	写真図版
2mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：底部～体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転系切り	10	
2mm以下の長石、微細なチャート含む	内面：体部ナデーハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		11	29
4mm以下の長石・チャート含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		11	
2mm以下のクサリレキ・長石・チャート含む	内面：底部→口縁部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデー→口縁部横ナデ。	底部回転系切り	11	29
微細なチャート・長石・石英含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	11	
4mm以下のチャート・石英含む	内面：体部ハケ→ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	11	
微細なチャート・長石含む	内面：底部ナデー→体部→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ→ナデー→口縁部横ナデ。		11	29
微細なクサリレキ含む	内面：底部ナデー→体部→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ→ナデー→口縁部横ナデ。		11	29
7mm大の長石、微細なチャート・石英含む	内面：底部→体部指オサエ→ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ→ナデー→口縁部横ナデ。		11	
微細なチャート・石英含む	内面：底部→体部指オサエ→口縁部指オサエ→横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ→ナデー→口縁部指オサエ→横ナデ。		11	
2mm以下のクサリレキ・長石含む	内面：体部→口縁部指オサエ→横ナデ。 外面：体部指オサエ→ナデー→口縁部指オサエ→横ナデ。		11	
	内面：体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ調整ナデ。			29
微細なクサリレキ含む	内面：底部→体部指オサエ→ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部ナデー→口縁部横ナデ。		11	
1mm大のクサリレキ含む	内面：底部→体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部ナデー→口縁部横ナデ。		11	
微細なチャート・長石含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデー→口縁部横ナデ。		11	
微細な砂粒含む	内面：底部ナデー→体部指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ→口縁部横ナデ。		11	
微細なチャート・長石含む	内面：底部ナデー→体部→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部ナデー→口縁部横ナデ。		11	
微細なチャート・長石含む	内面：底部→体部指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ→口縁部横ナデ。		11	
クサリレキ・長石含む	内面：底部→口縁部指オサエ→ナデ。 外面：底部→体部指オサエ→ナデ。	被熱	11	
微細な長石含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		11	
2.5mm以下のチャート・クサリレキ・長石含む	内面：底部→体部指オサエ→ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ→ナデー→口縁部横ナデ。		11	30
1.5mm以下のチャート・長石含む	内面：底部→口縁部指オサエ→ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ→ナデ。		11	
2mm以下の長石含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		11	
0.5mm以下のチャート・長石含む	内面：底部→口縁部指オサエ→横ナデ。 外面：底部ナデー→体部→口縁部指オサエ→横ナデ。		11	
0.5mm以下の長石・クサリレキ含む	内面：底部→口縁部指オサエ→ナデー→底部仕上げナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ→ナデ。		11	30
0.5mm以下のチャート含む	内面：底部→口縁部指オサエ→ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ→ナデ。		11	

出土土器観察表14

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
339	C地区	S K28	須恵器	碗			5.30	1.45	底部1/3	普通	灰白
340	A地区	S X01	土師器	埴	18.60			4.50	口縁部1/8		橙
341	A地区	S X01	土師器	埴	19.40			4.40	口縁部1/9		にぶい黄橙
342	A地区	S X01	土師器	埴	27.90			8.20	口縁部1/6弱		橙
343	A地区	S X01	土師器	埴	22.80			6.30	口縁部1/8弱		にぶい橙～にぶい褐
344	A地区	S X02	土師器	埴	18.60	20.30		6.20	口縁部4/5		にぶい褐～灰褐
345	A地区	S X02	備前焼	播鉢				5.50	底部若干	普通	にぶい赤褐～灰白
346	A地区	S X02	丹波焼	小壺	4.20	8.55	4.70	7.65	完存	普通	黄灰～明赤褐
347	A地区	S X02	土師器	皿	9.60			2.20	口縁部1/7	不良	浅黄橙～褐灰
348	A地区	S X03	土師器	皿	9.90			2.15	口縁部1/4強		褐灰～にぶい褐
349	A地区	S X03	土師器	埴				4.60	口縁部わずか		灰白～褐灰
350	A地区	S X03	須恵器	碗	15.40			5.15	口縁部1/4弱	普通	灰～灰白
351	A地区	S X04	土師器	埴	37.00			12.80	口縁部1/5		にぶい橙～褐灰
352	A地区	S X04	土師器	埴	32.00	29.00		10.70	口縁部1/6		にぶい褐～灰黄褐
353	A地区	S X04	須恵器	碗	13.70		4.60	5.30	口縁部1/9弱・底部1/4強	やや不良	灰～灰白
354	A地区	S X05	須恵器	碗	15.30		6.20	4.85	口縁部1/4弱・底部1/2弱	やや不良	灰
355	A地区	S X05	須恵器	碗				2.80	口縁部わずか	やや不良	灰～灰白
356	A地区	S X05	瓦質土器	羽釜	23.50	26.80		4.40	口縁部1/7		灰～褐灰
357	A地区	S X05	須恵器	掬鉢	27.00			6.85	口縁部1/8	普通	灰
358	A地区	S X06	土師器	皿	10.65			2.50	口縁部4/5・底部ほぼ完存		橙
359	A地区	S X06	土師器	皿	7.40		6.10	1.40	口縁部1/3弱・底部1/3弱		灰褐～にぶい褐
360	A地区	S X06	土師器	皿	9.95			2.50	口縁部1/2強		浅黄橙～にぶい黄橙
361	A地区	S X06	土師器	皿	8.30			1.25	口縁部1/4弱		にぶい橙～にぶい黄橙
362	A地区	S X06	土師器	埴	18.40	20.20		9.30	口縁部5/6		にぶい赤褐～橙
363	A地区	S X06	土師器	埴	20.90	26.20		9.50	口縁部1/3強		橙～にぶい橙
364	A地区	S X06	土師器	埴	21.70	25.00		9.60	口縁部1/5		にぶい赤褐～にぶい橙

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
5mm以下の石英・長石・チャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転系切り	11	
1mm以下の長石・石英・クサリレキ多く含む	内面：体部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径17.80cm・頭部 煤付着	11	
3mm以下の長石・チャート・石英多く含む	内面：体部板ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径19.20cm	11	
5mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ多く含む	内面：体部ハケーナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		11	
4mm以下の長石・石英・チャート多く含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	跨以下外面煤付着	11	30
4mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキやや多く含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	11	30
1.5mm以下のチャート含む	内面：底部～体部ナデーおろし目。 外面：底部ナデ。体部横ナデ。		11	30
1mm以下の長石・チャート・雲母含む	内面：口縁部自然軸付着。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転系切り	11	31
0.5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部ナデー→体部→口縁部横ナデ。 外面：底部～体部指オサエ・ナデー→体部→口縁部横ナデ。		11	
	内面：体部→口縁部ナデ。 外面：体部指オサエ→口縁部横ナデ。		11	
1mm以下のクサリレキ・石英・チャート含む	内面：体部ハケーナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		11	
2mm以下の長石・チャートやや多く含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		11	
6mm以下の石英・雲母・長石・クサリレキ多く含む	内面：体部ナデー→口縁部ハケ。 外面：体部ハケー→口縁部ナデー→口縁部横ナデ。	体部→頭部外面煤付着 ・頭径33.40cm	12	32
6mm以下の長石・チャート・雲母・石英多く含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデー→ハケ。 外面：体部→頭部ハケー→口縁部横ナデ。	頭径28.50cm	12	32
2mm以下の長石・チャート含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部系切り	12	
1mm以下の長石・チャート含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転系切り	12	
0.3mm以下の長石・チャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		12	
1mm以下の長石わずかに含む	内面：体部→口縁部板ナデ。 外面：体部ナデー→口縁部指オサエ→横ナデ。		12	32
4mm以下の石英・長石含む	内面：体部ナデー→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		12	
1mm以下の長石・クサリレキ含む	内面：底部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。		12	32
4mm以下の長石・チャート・石英多く含む	内面：底部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。	底部回転系切り	12	
3mm以下の石英・チャート・クサリレキやや多く含む	内面：底部→口縁部ナデ。 外面：底部～体部指オサエ→口縁部横ナデ。		12	32
2.5mm以下の石英・長石含む	内面：底部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部ナデー→口縁部横ナデ。		12	
3mm以下のクサリレキ・長石・石英・チャート含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	12	32
4mm以下の石英・長石・チャート・クサリレキ多く含む	内面：体部板ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部中位外面煤付着	12	32
2mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキ多く含む	内面：体部→口縁部ハケー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	12	33

出土土器観察表15

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
365	A地区	S X 06	土師器	埴	19.90	24.40		12.90	口縁部1/4		にぶい橙～にぶい赤褐
366	A地区	S X 06	土師器	埴	21.60	25.90		8.80	口縁部1/8		にぶい橙～にぶい褐
367	A地区	S X 06	青磁	盤			7.70	3.70	底部1/7		灰白～オリーブ灰
368	A地区	S X 06	白磁	碗				3.70	体部若干		灰黄～明オリーブ灰
369	A地区	S X 06	施釉陶器	天目 碗			4.00	1.80	底部完存	普通	暗褐
370	A地区	S X 07	土師器	埴				3.40	口縁部わずか		橙～褐灰
371	A地区	S X 09	土師器	埴	23.30			4.70	口縁部1/8		灰白～浅黄橙
372	A地区	S X 10	須恵器	埴鉢				3.25	口縁部わずか	普通	灰～暗灰
373	A地区	S X 10	土師器	皿	11.90			2.50	口縁部1/4		灰白～浅黄橙
374	A地区	S X 10	土師器	皿	12.20			2.60	口縁部1/4		にぶい橙～灰白
375	A地区	S X 10	土師器	皿	8.10			1.50	完存		灰白
376	A地区	S X 10	土師器	埴	21.30	24.40		9.70	口縁部1/6		灰白
377	A地区	S X 13	土師器	埴	18.80			4.80	口縁部1/4弱		にぶい褐～褐灰
378	A地区	S X 13	土師器	埴				4.80	口縁部わずか		にぶい褐～褐灰
379	A地区	S X 14	土師器	皿	8.00			1.10	ほぼ完存		灰白～明褐灰
380	A地区	S X 14	土師器	皿	7.70			1.30	3/4		灰白
381	A地区	S X 14	土師器	皿	10.70			2.50	1/4弱		灰白
382	A地区	S X 15	土師器	皿	8.00			1.30	ほぼ完存		灰白
383	A地区	S X 17	土師器	杯				2.20	口縁部わずか		灰白～にぶい橙
384	A地区	S X 18	土師器	皿				1.90	口縁部1/8		灰白～明褐灰
385	A地区	S X 19	須恵器	碗	14.70			5.20	口縁部1/10	やや不良	灰白～灰
386	A地区	S X 19	須恵器	碗	14.20			4.50	口縁部1/8	不良	灰～灰白
387	A地区	S X 19	須恵器	碗			5.70	1.50	底部1/4強	不良	灰白
388	A地区	S X 22	瀬戸	皿	7.80		4.00	1.75	口縁部1/4弱・底部 1/4	良好	オリーブ灰(軸) 灰白 (胎土)
389	A地区	S X 23	須恵器	碗	12.65		6.20	5.20	1/4弱	普通	灰
390	A地区	S X 23	須恵器	埴鉢			12.40	5.50	底部1/2強		灰

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
5mm以下の長石・チャート・雲母・石英多く含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部叩き整形→底部ヘラナデ→口縁部横ナデ。	底部煤付着	12	33
2.5mm以下の石英・長石・クサリレキ・チャート含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	12	33
0.2mm以下の長石含む	内面：旋軸。 外面：底部ヘラ削り→体部旋軸。		12	
	内面：回転ナデ→旋軸。 外面：回転ヘラ削り・上半回転ナデ→旋軸。		12	
	内面：底部→体部旋軸。 外面：底部ヘラ削り→ナデ→体部回転ナデ。	目痕あり	12	
繊細なチャート・石英・長石・クサリレキ含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き→口縁部横ナデ。		12	
1mm以下のクサリレキ含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径23.00cm、外面煤付着。	12	
1～3mm大のチャート含む	内面：体部ナデ→口縁部回転ナデ。 外面：回転ナデ。		12	
1mm以下の石英・クサリレキ含む	内面：体部指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：体部指オサエ→口縁部横ナデ。		12	
精良	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		12	
1mm以下のチャート・石英含む	内面：底部→口縁部ヘラナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ・ナデ。	口縁端部煤付着	12	33
1mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着・頭径21.70cm	12	33
1mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		12	
細粒の石英・チャート・長石多く含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	12	
クサリレキ含む	内面：底部→口縁部指オサエ。 外面：底部→口縁部指オサエ。	全体的に歪み顕著	12	33
チャート・クサリレキ含む	内面：ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ・ナデ。		12	34
	内面：底部ナデ→体部→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部ナデ・指オサエ→口縁部横ナデ。		12	
1mm以下のチャート含む	内面：指オサエ・ナデ。 外面：指オサエ・ナデ。	全体的に歪み顕著	12	34
	内面：底部→口縁部横ナデ。 外面：底部→口縁部横ナデ。		12	
クサリレキ含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		12	
4.5mm以下のチャート・長石やや多く含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		13	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		13	
2.5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転系切り	13	
0.2mm以下のチャート含む	内面：底部→口縁部回転ナデ→旋軸。 外面：体部→口縁部回転ナデ→口縁部旋軸。	底部回転系切り	13	34
3mm大のチャート含む	内面：回転ナデ。 外面：回転ナデ。	底部系切り	13	34
3mm大のチャート含む	内面：底部→体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：回転ナデ。	底部回転系切り	13	

出土土器観察表16

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
391	A地区	S X 23	土師器	羽釜	22.70	29.30		6.40	口縁部1/4弱		橙～褐灰
392	A地区	S X 23	土師器	羽釜	20.60			8.00	口縁部1/4弱		灰白～にぶい黄橙
393	A地区	S X 24	土師器	皿	8.20			1.30	口縁部1/4		灰黄褐～にぶい黄橙
394	A地区	S X 24	土師器	羽釜				2.90	口縁部～脛わずか		にぶい黄橙～褐灰
395	A地区	S X 24	緑釉陶器	碗				1.90	口縁部わずか		オリーブ灰
396	A地区	S X 24	須恵器	碗				3.90	口縁部わずか		灰
397	A地区	S X 24	須恵器	埴鉢				3.70	口縁部わずか	普通	暗灰～灰
398	A地区	S X 24	須恵器	碗			5.40	1.50	底部1/4	やや不良	灰白
399	A地区	S X 24	須恵器	壺				5.90	脛部わずか	普通	灰
400	B地区	S X 25	土師器	埴				4.10	口縁部わずか		橙
401	B地区	S X 25	備前焼	甕				5.20	口縁部わずか	普通	黒褐～褐灰
402	B地区	S X 25	備前焼	甕				5.30	口縁部わずか	普通	灰～赤灰
403	B地区	S X 26	土師器	皿	12.00			2.50	口縁部9/10・底部わずか		灰白～にぶい橙
404	B地区	S X 27	土師器	皿	13.20			3.30	口縁部1/4		灰白
405	B地区	S X 27	土師器	皿	12.40			3.00	口縁部1/6・底部わずか		灰白
406	B地区	S X 27	土師器	皿	8.10			1.60	1/4		灰白
407	B地区	S X 27	土師器	皿	7.90			1.30	1/2弱		灰白
408	B地区	S X 27	土師器	皿	7.00			1.10	口縁部1/4		灰白～灰
409	B地区	S X 27	土師器	皿	7.70			1.20	完存		灰白
410	B地区	S X 27	土師器	皿	7.35		4.40	0.90	1/4		灰白～明赤灰
411	B地区	S X 27	土師器	皿	8.30		5.90	1.20	1/4		灰白～浅黄橙
412	B地区	S X 27	土師器	埴	23.40	24.40		8.50	口縁部1/6		浅黄橙～灰白
413	B地区	S X 27	土師器	埴	18.80			4.80	口縁部1/8		にぶい橙～にぶい黄橙
414	B地区	S X 27	須恵器	碗			6.80	2.45	底部完存	普通	灰
415	B地区	S X 27	須恵器	埴鉢				3.40	口縁部わずか	普通	灰～暗灰
416	B地区	S X 27	須恵器	埴鉢	27.50			6.20	口縁部1/10	良好	灰

胎土	調整	備考	図 版	写真 図版
4mm以下の長石・石英・チャート多く含む	内面：横方向のナデ。 外面：体部板ナデ→横ナデにより跨貼付け。	内面煤付着	13	34
1mm以下のチャート・石英・長石・炭母・角閃石多く含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部指オサエ→ハゲ→横ナデ→跨→口縁部横ナデ。		13	34
	内面：底部→体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		13	
微細なクサリレキ・チャート・炭母・石英含む	内面：横ナデ。 外面：横ナデ。	跨幅2.0cm	13	
粗思質	内面：回転ナデ。 外面：回転ナデ。	内外面施軸	13	
精良	内面：回転ナデ。 外面：回転ナデ→沈線。		13	34
6mm大のチャート含む	内面：回転ナデ。 外面：回転ナデ。		13	
1mm以下のチャート含む	内面：回転ナデ。 外面：回転ナデ。	底部糸切り	13	
5mm大のチャート・0.5mm以下の長石含む	内面：回転ナデ。 外面：回転→削り→横ナデにより凸部貼付け。		13	34
1mm以下のチャート・長石・石英・3mm以下のクサリレキ多く含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		13	
7mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		13	34
1mm以下のチャート・石英・長石含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		13	
1mm以下のチャート・石英含む	内面：底部ナデ→体部→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部ナデ→体部→口縁部横ナデ。		13	35
微細なチャート含む	内面：底部→体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部ナデ→口縁部横ナデ。		13	
微細なチャート含む	内面：底部→体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		13	
微細な石英含む	内面：底部→体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		13	
微細なチャート・長石含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		13	35
微細な長石・石英含む	内面：底部→口縁部横ナデ。 外面：底部ナデ→口縁部横ナデ。		13	
微細な長石・石英・チャート含む	内面：底部ナデ・指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデ→横ナデ。		13	35
微細な砂粒含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ→口縁部横ナデ。		13	
2mm以下のチャート・クサリレキ・長石・石英含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。	底部回転糸切り	13	
3mm以下のチャート・1mm以下のクサリレキ・石英含む	内面：体部板ナデ→ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部印き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径 21.70cm	13	35
2mm以下のクサリレキ、微細な長石・石英・チャート含む	内面：体部指ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部印き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径 18.50cm	13	
1mm以下の長石含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	13	
微細なチャート・長石含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		13	
5mm大のチャート・1mm以下の石英・長石含む	内面：体部ナデ→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		13	

出土土器観察表17

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
417	B地区	S X 27	須恵器	埴鉢	25.40			7.00	口縁部1/6	普通	灰
418	B地区	S X 27	須恵器	埴鉢	22.80			7.40	口縁部1/10	やや不良	灰白～灰
419	B地区	S X 27	須恵器	埴鉢			11.00	8.20	底部1/2弱	やや不良	灰
420	B地区	S X 27	須恵器	埴鉢	33.40			7.30	口縁部1/4弱	普通	灰
421	B地区	S X 27	須恵器	埴鉢			11.00	7.50	底部1/2弱	普通	灰
422	B地区	S X 27	須恵器	甕	34.00			7.10	口縁部1/4弱	普通	灰～灰白
423	B地区	S X 27	須恵器	甕	30.00			7.80	わずか	不良	灰白
424	B地区	S X 28	須恵器	甕	16.70			6.70	口縁部1/4弱	普通	灰
425	B地区	S X 29	土師器	皿	12.60			3.10	口縁部1/4弱		灰白
426	B地区	S X 29	土師器	皿	12.10			3.50	口縁部1/6		灰白
427	B地区	S X 29	土師器	皿	10.70			2.80	口縁部1/8		灰白
428	B地区	S X 29	土師器	皿	8.30			1.40	ほぼ完存		灰白
429	B地区	S X 30	土師器	皿	9.40			1.20	口縁部1/4		灰白～にぶい赤褐
430	B地区	S X 30	土師器	皿	7.20			1.10	口縁部1/6		灰白
431	B地区	S X 30	土師器	皿	11.70			2.00	口縁部1/6		灰白～にぶい黄橙
432	B地区	S X 31	土師器	皿	12.20			2.55	口縁部1/4		灰白～黄灰
433	B地区	S X 31	土師器	埴	23.30			5.90	口縁部1/4		にぶい橙
434	B地区	S X 31	土師器	埴	22.00			5.30	口縁部1/12		褐灰～にぶい橙
435	B地区	S X 31	土師器	埴	19.40			4.90	口縁部1/10		にぶい橙～にぶい赤褐
436	B地区	S X 31	土師器	埴	19.00	21.80		7.20	口縁部1/6		にぶい褐～灰褐
437	B地区	S X 31	土師器	埴	20.50			4.30	口縁部1/8		にぶい橙～浅黄橙
438	B地区	S X 31	土師器	埴	24.20			7.10	口縁部1/4強		黒
439	B地区	S X 31	備前焼	埴鉢	29.40		14.40	10.80	口縁部1/4・底部1/4	やや不良	灰褐～にぶい橙
440	B地区	S X 31	丹波焼	埴鉢?			17.90	6.80	底部1/6	普通	にぶい黄橙～灰白
441	B地区	S X 31	須恵器	甕					体部わずか	普通	灰～灰白
442	B地区	S X 31	瓦質土器	浅鉢			31.00	8.90	底部1/4		灰

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
2mm以下のチャート含む	内面：体部横ナデ→ナデ→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	421と同一個体の可能性あり	13	
1mm以下のチャート・石英含む	内面：体部横ナデ→ナデ→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		13	
6mm以下のチャート・長石含む	内面：体部ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部横ナデ。	底部糸切り	13	
3mm以下のチャート含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		14	
1cm以下のチャート、微細な長石含む	内面：底部→体部横ナデ→ナデ。 外面：体部ナデ。	底部糸切り・417と同一個体の可能性あり	14	
1cm以下のチャート含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径30.80cm	14	35
1mm以下の石英含む	内面：体部→頭部ハケ→体部ナデ・口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径27.90cm	14	35
2mm以下の長石・チャート含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径15.80cm	14	35
微細なチャート・石英・長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ→ナデ→口縁部横ナデ。		14	
微細なチャート含む	内面：底部→体部指オサエ→ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		14	
微細なクサリレキ・チャート・石英含む	内面：底部→体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		14	36
微細なチャート・長石・石英含む	内面：底部→口縁部ナデ。 外面：底部→口縁部指オサエ。		14	
微細なチャート・長石・石英含む	内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：底部ナデ→口縁部横ナデ。		14	
微細なクサリレキ・石英含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		14	
微細な石英含む	内面：体部指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		14	
1mm以下のクサリレキ・石英・長石・チャート含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		14	35
3mm以下のチャート、微細な長石・石英・クサリレキ含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	鏝以下外面煤付着	14	
2mm以下の長石・石英・クサリレキ含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	鏝以下外面煤多量に付着	14	
7mm以下のチャート、微細な石英含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	鏝以下外面煤付着	14	36
3mm以下のチャート、微細な長石・石英含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		14	36
2mm以下のチャート・長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。		14	36
6mm以下のチャート、微細な石英・長石含む	内面：体部→口縁部横ナデ→おろし目。 外面：体部→口縁部横ナデ→体部ナデ。		14	36
1mm以下のチャート・長石含む	内面：体部ナデ。 外面：底部ナデ、体部ナデ。		14	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：ナデ。 外面：叩き整形。		14	36
微細な石英・長石含む				

出土土器観察表18

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼 成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
443	B地区	S X32	土師器	皿	7.60		4.00	1.50	口縁部1/8		灰白
444	C地区	品1	須恵器	碗			3.80	3.40	底部1/3	普通	灰
445	C地区	品1	土製品	土罐					ほぼ完存		灰白～黄灰
446	B地区	包含層	土師器	皿	13.90		8.20	2.50	口縁部1/4		灰白～にぶい橙
447	A地区	包含層	土師器	皿	12.30		8.30	2.50	ほぼ完存		灰白
448	C地区	包含層	土師器	皿	12.20			2.75	口縁部1/6		灰白
449	B地区	包含層	土師器	杯	11.90			3.00	口縁部～体部1/3・ 底部わずか		灰白
450	C地区	包含層	土師器	皿	11.10			2.50	口縁部1/5弱		灰白～にぶい橙
451	A地区	包含層	土師器	皿	9.10		6.50	2.00	口縁部2/3		灰白～にぶい橙
452	B地区	包含層	土師器	皿	4.70			1.50	1/4		灰白
453	B地区	包含層	土師器	埴	21.70			7.80	口縁部1/8		浅黄橙～灰白
454	B地区	包含層	土師器	埴	22.30			8.30	口縁部1/3		浅黄橙～にぶい黄橙
455	A地区	包含層	土師器	埴	20.00			6.50	口縁部1/6		にぶい黄橙～浅黄橙
456	B地区	包含層	土師器	埴	20.50			4.55	口縁部1/4弱		灰白～灰黄褐
457	B地区	包含層	土師器	埴	19.30			4.90	口縁部1/6		灰白～にぶい黄橙
458	A地区	包含層	土師器	埴	18.00			3.80	口縁部1/6		灰白～灰黄褐
459	B地区	包含層	土師器	埴				4.30	口縁部わずか		オリーブ灰～黄灰
460	B地区	包含層	土師器	埴				4.90	口縁部わずか		にぶい橙
461	A地区	包含層	土師器	埴	25.00			4.10	口縁部1/8		にぶい橙～灰白
462	A地区	包含層	土師器	埴	21.00			3.30	口縁部1/7		にぶい褐～褐灰
463	B地区	包含層	土師器	埴	23.10	27.80		10.80	口縁部1/2弱		橙～褐灰
464	C地区	包含層	土師器	埴	20.60			4.20	口縁部1/7		にぶい橙～灰黄褐
465	C地区	包含層	土師器	埴	22.05			3.70	口縁部1/9		橙
466	A地区	包含層	土師器	埴	22.20			5.80	口縁部1/10		浅黄橙～にぶい橙
467	A地区	包含層	須恵器	碗	16.60			4.40	口縁部わずか	不良	灰～灰白
468	B地区	包含層	須恵器	碗	15.80			2.60	口縁部1/12	やや不良	灰白

胎土	調整	備考	図 版	写真 図版
クサリレキ含む	内面：底部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。	底部糸切り	14	
1.5mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	14	
1mm以下の長石・石英含む			14	36
微細なチャート・クサリレキ含む	内面：底部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部ナデ・指オサエ→口縁部横ナデ。		14	
細粒の長石・石英・クサリレキ含む	内面：底部→体部ナデ・指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。		14	37
1.5mm以下の石英・チャート・クサリレキ含む	内面：体部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部ナデー→体部→口縁部横ナデ。		15	
微細なチャート・石英含む	内面：底部→体部ナデー→口縁部指オサエ→横ナデ。 外面：底部→体部ナデー→口縁部指オサエ→横ナデ。		15	37
1.5mm以下のチャート・長石含む	内面：底部→体部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。		15	
1mm以下の石英・クサリレキ含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り・化粧土塗布	15	37
微細な砂粒含む	内面：底部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：底部→体部指オサエ・ナデー→口縁部横ナデ。		15	
微細な石英・チャート・クサリレキ含む	内面：体部横ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径	15	
1mm以下の長石・チャート、微細な石英・クサリレキ多く含む	内面：体部ナデ・板ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径 22.00cm	15	
2mm以下の砂粒含む	内面：体部ハケー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着・頭径 19.90cm	15	
1mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：体部ハケー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径 19.50cm	15	
2mm大のチャート含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径 18.60cm	15	
5mm大のチャート、細粒の石英・長石・チャート含む	内面：体部ハケー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	頭径16.90cm	15	
微細なチャート・長石含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデー→口縁部横ナデ。		15	
3mm以下の長石・チャート含む	内面：体部→口縁部ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	蹄以下外面煤付着	15	
2mm以下のチャート・長石・石英多く含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	蹄以下外面煤付着	15	
細粒の石英・長石・チャート含む	内面：体部ハケー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	15	
2mm以下のチャート、1mm以下の長石・石英・クサリレキ含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	蹄以下外面煤付着	15	37
2.5mm以下の石英・クサリレキ・長石含む	内面：体部ナデー→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	15	
1mm以下の長石・クサリレキ含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。	突帯以下外面煤付着	15	
2mm以下の石英・長石・チャート含む	内面：体部当具環→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	15	
4mm以下のチャート・石英や多く含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		15	
1mm大の長石含む	内面：体部→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		15	

出土土器観察表19

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
469	A地区	包含層	須恵器	碗	13.60			4.05	口縁部1/6	普通	灰～灰白
470	A地区	包含層	須恵器	碗			6.20	3.00	底部完存	やや不良	灰白
471	B地区	包含層	須恵器	碗	15.60			3.70	口縁部1/12	普通	灰
472	A地区	包含層	須恵器	碗	14.80		6.00	5.00	口縁部1/8・底部1/6	やや不良	灰
473	B地区	包含層	須恵器	碗	15.90		6.70	4.90	口縁部1/2弱・底部ほぼ完存	不良	灰白
474	B地区	包含層	須恵器	碗			6.60	2.30	底部1/4強	やや不良	灰白
475	A地区	包含層	須恵器	碗	12.50		5.10	5.30	口縁部1/8・底部ほぼ完存	やや不良	灰白
476	B地区	包含層	須恵器	碗			7.60	2.60	底部1/4	やや良好	灰白
477	C地区	包含層	須恵器	碗			6.00	3.80	底部1/3		灰
478	B地区	包含層	須恵器	皿	12.80		7.80	3.00	口縁部1/4弱・底部1/3	やや不良	灰白
479	B地区	包含層	須恵器	皿	11.60		7.00	2.50	口縁部1/6・底部1/3	普通	灰
480	A地区	包含層	須恵器	皿	9.40		5.50	2.20	1/4強	良好	灰
481	A地区	包含層	須恵器	杯B			7.50	1.70	底部1/2	やや不良	灰白
482	A地区	包含層	須恵器	鉢	16.00			3.70	口縁部1/12	普通	灰～灰白
483	B地区	包含層	須恵器	捏鉢	25.80			11.20	口縁部1/4弱	普通	灰
484	B地区	包含層	須恵器	捏鉢	30.90			9.00	口縁部1/8	普通	灰
485	B地区	包含層	須恵器	捏鉢	35.50			6.30	口縁部1/8	普通	灰
486	B地区	包含層	須恵器	捏鉢	30.20			4.40	口縁部1/10	普通	灰
487	B地区	包含層	須恵器	捏鉢	29.30			6.00	口縁部1/12	普通	灰～暗灰
488	B地区	包含層	須恵器	捏鉢	28.40			8.10	口縁部1/8	普通	灰
489	A地区	包含層	須恵器	捏鉢	26.70			4.10	口縁部1/8	普通	灰
490	B地区	包含層	須恵器	捏鉢	23.30			6.00	口縁部1/8	普通	灰
491	B地区	包含層	須恵器	捏鉢	22.60			6.40	口縁部1/4弱	普通	暗灰
492	B地区	包含層	須恵器	捏鉢				3.90	口縁部わずか	不良	灰白
493	A地区	包含層	須恵器	捏鉢				3.70	口縁部わずか	不良	灰褐～灰赤
494	A地区	包含層	須恵器	捏鉢				4.50	口縁部わずか	やや不良	灰～赤灰

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
7mm大のチャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		15	
5mm以下のチャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	15	
微細な石英・チャート・長石含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		15	
	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		15	
1cm以下のチャート・長石含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	15	37
2mm以下の長石わずかに含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	15	
1cm大のチャート、微細な石英・長石含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部糸切り	15	
1.5mm以下の長石含む	内面：底部ナデ→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部ヘラ切り	15	
1.2mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：底部→体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ→ナデ。	底部糸切り	15	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：高台横ナデ→口縁部回転ナデ。	底部糸切り・高台高1.10cm	15	37
微細な長石・チャート含む	内面：底部→口縁部回転ナデ。 外面：底部糸切り→高台ナデ→口縁部回転ナデ。	高台高1.0cm	15	37
5mm以下のチャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。	底部糸切り	15	
2mm大のチャート、微細な長石含む	内面：底部回転ナデ。 外面：底部ナデ→高台→体部横ナデ。		15	
微細な砂粒含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		15	
4mm以下のチャート・長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		15	
チャート・長石・石英含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		15	
5mm以下のチャート含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		16	
2mm以下の長石・チャート含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		16	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		16	
微細なチャート・長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		16	
6mm以下のチャート含む	内面：体部ナデ→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		16	
1cm以下のチャート・微細な長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		16	
7mm以下の長石含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		16	
3mm以下のチャート、微細な石英含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→口縁部横ナデ。		16	
細粒のチャート・石英・長石含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		16	
3mm以下のチャート含む	内面：体部→口縁部回転ナデ。 外面：体部→口縁部回転ナデ。		16	

出土土器観察表20

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
495	B地区	包含層	須恵器	甕						やや不良	
496	B地区	包含層	須恵器								
497	B地区	包含層	瀬戸	碗	15.80			3.05	口縁部1/16	普通	灰白～オリーブ灰
498	A地区	包含層	瀬戸	碗	15.80			4.70	口縁部1/12		灰黄
499	B地区	包含層	瓦質土器	鉢				8.60	底部～体部わずか		灰
500	C地区	包含層	瓦質土器	羽釜				3.40	胴1/10		灰
501	B地区	包含層	瓦質土器								
502	B地区	包含層	丹波焼	捩鉢				5.30	口縁部わずか	不良	にぶい橙
503	B地区	包含層	丹波焼	甕				3.80	口縁部わずか	やや不良	灰～灰白
504	B地区	包含層	丹波焼	甕				6.80	口縁部わずか	普通	灰～灰褐
505	C地区	包含層	備前焼	擂鉢	26.80			6.40	口縁部1/8	不良	橙～にぶい橙
506	C地区	包含層	備前焼	擂鉢	29.60			4.00	口縁部わずか	やや不良	黄灰～にぶい赤褐
507	A地区	包含層	備前焼	擂鉢				4.00	口縁部わずか	やや不良	黄灰～灰黄褐
508	C地区	包含層	備前焼	擂鉢			12.90	8.00	底部わずか	やや不良	褐灰～にぶい赤褐
509	B地区	包含層	丹波焼	甕			29.80	7.10	底部わずか	普通	灰～黒褐
510	B地区	包含層	丹波焼	擂鉢						良好	灰褐
511	B地区	包含層	青磁	碗	13.70			1.80	口縁部1/10		明オリーブ灰
512	B地区	包含層	青磁	碗	15.40			3.80	口縁部1/4		オリーブ灰
513	B地区	包含層	青磁	碗	13.90			4.20	口縁部1/8強		オリーブ灰
514	B地区	包含層	青磁	碗	15.10			3.20	口縁部1/16		明オリーブ灰
515	A地区	包含層	青磁	碗			5.40	2.10	底部1/3		灰白
516	A地区	包含層	青磁	碗				5.00	口縁部わずか		灰
517	A地区	包含層	青磁	碗				4.00	口縁部わずか		オリーブ灰
518	C地区	包含層	青磁	碗				3.40	体部わずか		灰白
519	A地区	包含層	青磁	碗				3.80	体部わずか		オリーブ灰
520	A地区	包含層	青磁	碗			5.50	2.10	底部1/2強		オリーブ灰

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
	内面：体部ナデ。 外面：体部叩き整形。			37
	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		16	
精良	内面：体部～口縁部施軸。 外面：体部～口縁部施軸。		16	38
1mm大の長石・石英・クサリレキ含む	内面：底部ヘラナデ→体部ナデ。 外面：底部～体部ヘラ削り→突帯貼付け→体部ナデ。		16	
1mm以下の長石含む	内面：体部横ナデ。 外面：蹄部指オサエ、横ナデ→口縁部ヘラミガキ。		16	
				38
繊細な長石・石英含む	内面：体部～口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部横ナデ。		16	
5mm以下のチャート・長石含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		16	
1mm以下のチャート・長石多く含む	内面：口頭部回転ナデ。 外面：口頭部回転ナデ。		16	
4mm以下の長石・チャート含む	内面：体部～口縁部横ナデ→体部卸目。 外面：体部～口縁部横ナデ。		16	
2mm以下の長石含む	内面：体部～口縁部横ナデ→体部卸目。 外面：体部～口縁部横ナデ。		16	
5mm大のチャート含む	内面：体部～口縁部横ナデ→体部卸目。 外面：体部～口縁部横ナデ。		16	
3mm以下の長石・クサリレキ含む	内面：底部～体部横ナデ→体部卸目。 外面：体部横ナデ。	底部ヘラ切り	16	
長石・チャート含む	内面：体部ナデ。 外面：底部ヘラナデ。体部ナデ。		16	
	内面：体部～口縁部横ナデ→体部卸目。 外面：体部～口縁部横ナデ。			38
精良	内面：体部～口縁部施軸。 外面：体部～口縁部施軸。		16	
精良	内面：体部～口縁部回転ナデ→施軸。 外面：体部～口縁部回転ナデ→施軸。		16	
精良	内面：体部～口縁部回転ナデ→施軸。 外面：体部～口縁部回転ナデ→施軸。		16	
精良	内面：口縁部回転ナデ→施軸。 外面：口縁部回転ナデ→施軸。		16	
細粒の長石含む	内面：底部～体部施軸。 外面：底部ヘラ削り・体部施軸。		16	
精良	内面：体部～口縁部施軸。 外面：体部～口縁部施軸。		16	
精良	内面：体部～口縁部施軸。 外面：体部～口縁部施軸。		16	
1mm以下のチャート・長石含む	内面：体部施軸。 外面：体部施軸。		16	
精良	内面：体部施軸。 外面：高台ヘラ削り・体部施軸。		16	
	内面：底部施軸。 外面：底部ヘラ削り・体部施軸。		16	

出土土器観察表21

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
521	C地区	包含層	青磁	碗			3.90	1.70	底部1/4	不良	にぶい橙
522	B地区	包含層	青磁								
523	B地区	包含層	青磁								
524	B地区	包含層	白磁	碗	17.90			3.00	口縁部1/14		灰白
525	A地区	包含層	白磁	碗	16.00			4.15	口縁部1/8		灰白
526	A地区	包含層	白磁	碗			7.80	4.60	底部1/8		灰白
527	B地区	包含層	白磁	碗				3.00	口縁部わずか		灰白
528	C地区	包含層	白磁	碗				1.70	口縁部わずか		灰白
529	A地区	包含層	白磁	碗				3.20	体部わずか		灰白～灰
530	B地区	包含層	白磁	碗							
531	B地区	包含層	白磁	碗							
532	B地区	包含層	土師器	羽釜	38.20			7.50	口縁部1/10		橙～にぶい橙
533	B地区	包含層	瓦質土器	羽釜				7.80	口縁部わずか		灰～黄灰
534	A地区	包含層	黒色土器	碗			6.00	1.60	底部1/3		灰～灰白
535	C地区	包含層	土製品	土鉢					ほぼ完存		にぶい黄橙～にぶい橙
536	B地区	包含層	土製品	土鉢					ほぼ完存		灰
537	A地区	包含層	須恵器	土鉢					完存		灰
538	C地区	包含層	瓦	軒丸瓦					瓦当わずか	不良	暗灰
539	B地区	包含層	瓦	平瓦					一部	不良	にぶい黄橙～灰白
540	B地区	包含層	瓦	平瓦					一部	やや不良	灰～灰白
541	B地区	包含層	瀬戸美濃	碗						普通	黄灰

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
	内面：底部施軸。 外面：底部・体部施軸。		16	
	内面：体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。			20
	内面：体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。			20
精良	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		16	
精良	内面：体部へ口縁部施軸。 外面：体部へ口縁部施軸。		16	
細粒の長石・石英含む	内面：底部へ体部施軸。 外面：底部へフ削り・体部施軸。		16	
精良	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		16	
精良	内面：口縁部施軸。 外面：口縁部施軸。		16	
	内面：施軸。 外面：ヘラ削り→上部施軸。		16	
	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。			20
	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。			20
微細なチャート・長石・石英や多く含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→跨へ口縁部横ナデ。		17	38
1.5mm以下のチャート・長石・石英多く含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部指オサエ→横ナデ→口縁部横ナデ。		17	
7mm大のチャート、1mm以下の石英含む	内面：磨滅。 外面：高台横ナデ。底部・体部磨滅。	高台高5mm・内黒	17	
1mm以下のチャート・長石含む			17	36
			17	38
			17	
2mm以下の長石・チャート・雲母含む			17	
6mm以下のチャート含む	凹面：ヘラナデ・離れ砂。 凸面：離れ砂。		17	
6mm大のチャート含む	凹面：布目。 凸面：ヘラナデ。	須志賀	17	
	内面：体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。			20

出土土器観察表22

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
542	E地区	S B17	須恵器	碗	10.00			3.50	口縁部1/6・底部1/3	普通	灰白
543	F地区	S B24	須恵器	杯	8.60			2.10	口縁部1/6	普通	灰
544	E地区	P34	須恵器	杯			5.40	3.20	底部1/2強	普通	灰
545	N地区	P37	須恵器	碗				2.55	口縁部わずか	普通	灰～灰白
546	F地区	P40	土師器	甕				7.60	口縁部わずか		褐灰～灰白
547	F地区	S B23	須恵器	碗	15.80			3.30	口縁部1/10	不良	灰白
548	N地区	P36	須恵器	杯蓋	17.15			1.90	口縁部わずか	普通	灰白
549	F地区	P42	土師器	杯	14.50			3.40	口縁部1/6強		灰褐～褐灰
550	F地区	P43	白磁	碗	15.90		7.00	6.00	ほぼ完存	普通	灰白
551	F地区	P44	須恵器	杯	14.60			3.50	口縁部1/10	普通	灰白～灰
552	E地区	P35	土師器	埴	19.50			2.90	口縁部1/6		にぶい橙～にぶい黄橙
553	F地区	P41	弥生	壺	14.10			11.50	口縁部1/3		灰白～にぶい黄橙
554	F地区	P39	土師器	甕	28.80	27.20		25.90	口縁部～体部1/6		にぶい赤橙～橙
555	H地区	P46	土師器	埴	15.20	17.10		6.80	口縁部1/3		橙～褐灰
556	D地区	S D31	須恵器	蓋	8.60			1.60	口縁部1/6	普通	灰～灰白
557	D地区	S D31	須恵器	碗	13.95		4.95	5.70	口縁部1/8・底部1/10	普通	灰
558	D地区	S D31	須恵器	碗	14.60			4.90	口縁部1/8	普通	灰白
559	D地区	S D31	須恵器	皿	9.05		5.35	1.45	口縁部5/6・底部完存	不良	灰～灰白
560	D地区	S D31	須恵器	碗	14.60			3.90	口縁部1/8	普通	灰
561	D地区	S D31	須恵器	碗	15.40		5.50	5.20	口縁部～底部2/3	普通	灰白
562	D地区	S D31	瓦質土器	碗?			7.40	2.20	底部3/4	不良	灰～灰白
563	D地区	S D31	土師器	皿	10.30		5.00	1.80	底部1/2	不良	浅黄橙～橙
564	D地区	S D31	瓦	平瓦						良好	灰
565	D地区	S D31	土師器	羽釜	23.20	28.20		5.30	口縁部1/12		にぶい黄橙～褐灰
566	D地区	S D31	土師器	羽釜				7.80	口縁部わずか		にぶい橙～灰白
567	D地区	S D31	白磁	碗	14.40			2.90	口縁部1/9	不良	灰白

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
微細な長石・石英・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：底部磨減、体部～口縁部回転ナデ。		20	
微細な長石・チャート含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		20	
2mm以下の長石・石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ→沈積。	底部ヘラ切り	20	
0.5mm以下のチャート含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		20	
微細なチャート・石英多く含む	内面：体部ナデ→口縁部ハケ。 外面：体部～口縁部ハケ→横ナデ。		20	
チャート・石英含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		20	
0.5mm以下のチャート含む	内面：天井部～口縁部回転ナデ→天井部仕上げナデ。 外面：天井部～口縁部回転ナデ。		20	
1mm以下のクサリレキ・チャート・長石・石英や多く含む	内面：体部～口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部横ナデ。		20	
微細なチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→地軸。 外面：底部～体部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ→地軸。		20	57
精良	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		20	
6mm以下のチャート、微細な長石・石英・クサリレキ含む	内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。	外面煤付着	20	
3mm以下の石英・チャート・長石多く含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		20	57
3mm以下のチャート・長石・石英非常に多く含む	内面：体部指オサエ→体部上半ハケ→口縁部ハケ。 外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		20	57
2mm以下の長石・クサリレキ・石英・チャート含む	内面：体部～口縁部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	20	
0.5mm以下の長石含む	内面：天井部～口縁部回転ナデ。 外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。		20	
8mm以下の長石・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転系切り	20	
3mm以下の長石・チャート含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		20	
2mm以下のチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転系切り	20	57
3mm以下の長石・チャート含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		20	
6mm以下の長石・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		20	58
1.5mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：底部回転系切り→高台貼付け→体部回転ナデ。		20	57
1.5mm以下のチャート・クサリレキ・長石含む	内面：底部～口縁部指オサエ・横ナデ。 外面：体部～口縁部指オサエ→横ナデ。	底部系切り	20	58
6mm以下の長石・チャート・石英多く含む	内面：布目→系切り。 外面：叩き。	須志質	20	
3mm以下の長石・石英・雲母・チャート多く含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部→跨部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		20	
4mm以下の長石・石英・チャート多く含む	内面：体部～口縁部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		20	
0.5mm以下のチャート含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		20	

出土土器観察表23

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
568	D地区	SD31	白磁	碗	14.70			4.60	口縁部1/10	やや不良	灰白
569	E地区	SD34	須恵器	杯	10.60		4.40	3.50	口縁部4/3ずか・底部1/2弱	普通	灰
570	E地区	SD34	須恵器	杯	9.70		5.60	3.50	口縁部1/4・底部1/2弱	普通	灰白
571	E地区	SD34	須恵器	杯身	11.00		6.80	2.50	口縁部3/4	普通	灰～灰白
572	E地区	SD34	須恵器	杯B	12.10		6.70	4.60	口縁部1/4弱・底部完存		灰
573	E地区	SD34	須恵器	はそう		7.40	4.20	5.00	頸部以下完存	普通	灰～灰白
574	E地区	SD34	須恵器	高坏			7.80	3.50	脚部完存	不良	灰白
575	E地区	SD34	土師器	鉢	22.00			5.30	口縁部1/6		にぶい黄橙
576	E地区	SD34	土師器	甕	14.80			5.40	口縁部1/6		にぶい橙～にぶい黄橙
577	E地区	SD34	土師器	瓶			21.80	20.10	底部1/3		浅黄橙～にぶい橙
578	E地区	SD34	土師器	甕	14.30	15.90		11.20	口縁部1/4		にぶい黄橙～黄灰
579	E地区	SD34	土師器	高坏	14.80			10.10	杯部2/3・脚柱部ほぼ完存		灰白
580	E地区	SD34	土師器	皿	8.20			2.20	1/3		灰白～橙
581	E地区	SD49	須恵器	杯	15.30		9.90	3.50	口縁部わずか・底部1/6	普通	明オリブ灰～灰
582	M地区	SD52	須恵器	甕	22.90			5.60	口縁部1/12	普通	灰
583	M地区	SD52	須恵器	甕				6.40	体部わずか	普通	灰白
584	M地区	SD52	瓦	平瓦					一部	不良	灰～褐灰
585	M地区	SD53	須恵器	杯A	12.90		9.00	4.50	口縁部2/3	不良	にぶい黄橙
586	M地区	SD53	須恵器	杯A			9.50	2.50	底部1/2弱	普通	灰～灰白
587	M地区	SD53	須恵器	杯B			11.70	1.70	底部3/4	普通	灰～灰白
588	M地区	SD55	須恵器	杯	13.10			4.10	1/3強	不良	灰白
589	M地区	SD55	須恵器	杯A			9.60	2.50	底部1/3強	やや不良	灰白
590	M地区	SD55	須恵器	杯B			12.10	3.20	口縁部1/3	普通	灰白～灰
591	M地区	SD56	須恵器	杯A	17.80		11.70	5.50	口縁部2/3	やや不良	灰～灰白
592	M地区	SD56	須恵器	杯A	14.20		11.50	3.00	ほぼ完存	やや不良	灰～灰白
593	M地区	SD56	須恵器	杯A	13.50		9.80	3.80	口縁部1/8	やや不良	灰白

胎土	調整	備考	図版	写真図版
0.5mm以下の長石・チャート含む	内面：体部へ口縁部回転ナデ→底軸。 外面：体部回転へラ削り→口縁部回転ナデ→底軸。		20	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部へラ切り	20	
1mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部下端へラ削り→体部へ口縁部回転ナデ。	底部へラ切り	20	58
1mm大のチャート・石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部へラ切り	20	58
1mm以下の長石・チャート・石英多く含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：底部回転へラナデ→体部へ口縁部回転ナデ。		20	58
4mm以下のチャート・長石含む	内面：観察不可。 外面：体部下端へラ削り→体部上半回転ナデ。		20	58
微細なチャート・長石・石英含む	内面：脚部磨減。 外面：脚部磨減。		20	58
1mm以下の長石・チャート・石英・クサリレキ含む	内面：体部へ口縁部磨減。 外面：体部へ口縁部磨減。		21	
微細なクサリレキ・チャート含む	内面：体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部磨減。口縁部横ナデ。		21	
クサリレキ・チャート・長石・石英含む	内面：体部指オサエ・ナデ→底部横ナデ。 外面：体部→底部ハケ→横ナデにより突帯貼り付け。		21	58
微細なチャート・長石・石英含む	内面：体部ナデ、指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：体部磨減。口縁部横ナデ。	頭径12.3cm	21	58
微細なチャート・長石・石英含む	内面：杯部へラミガキ。脚部ナデ。 外面：杯部へラミガキ→口縁部横ナデ。脚部ナデ。		21	59
1mm以下のチャート・長石含む	内面：底部へ口縁部ナデ。 外面：底部へ体部へラ削り→ナデ→口縁部ナデ。		21	59
チャート含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部へラ切り	21	
4mm以下のチャート・石英・微細な長石含む	内面：体部へ口縁部回転ナデ。 外面：口頭部回転ナデ。		21	
精良	内面：体部当具痕。 外面：体部印き整形。		21	
1mm以下のチャート・石英・クサリレキ含む	内面：磨減。 外面：凸面：罫目引き。		21	
微細なチャート多く含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部へラ切り	21	59
微細なチャート・長石・石英含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部へラ切り	21	
微細なチャート含む	内面：底部へ体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転へラ削り	21	
2mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：底部回転へラ削り→口縁部回転ナデ。		21	
微細な砂粒含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部へラ切り	21	
微細な長石含む	内面：底部へ体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：底部回転へラ削り→体部回転ナデ。		21	
2mm以下のチャート・微細な長石含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部へラ切り・高台高6mm	21	59
5mm以下の長石含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部へラ切り	21	59
精良	内面：底部へ口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部横ナデ。	底部へラ切り	21	

出土土器観察表24

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
594	M地区	SD56	須恵器	杯A	12.90		9.40	4.00	口縁部1/3・底部完存	不良	灰～灰白
595	M地区	SD56	須恵器	杯A	12.20		9.30	4.35	口縁部1/3・底部ほぼ完存	普通	灰白
596	M地区	SD56	須恵器	平瓶		20.50	14.00	11.00	体部～底部1/4	普通	灰～灰白
597	M地区	SD56	須恵器	壺			13.20	7.40	底部1/2	やや不良	灰～灰白
598	M地区	SD56	須恵器	鉢				6.30	底部1/2弱	やや不良	灰
599	M地区	SD56	須恵器	碗			5.50	1.40	底部1/4	普通	灰
600	M地区	SD56	須恵器	甕	53.00			6.10	口縁部1/10	普通	灰
601	M地区	SD56	土師器	皿	18.50		15.50	2.50	口縁部1/16		にぶい橙～灰白
602	M地区	SD56	土師器	碗			11.00	2.50	底部1/4		にぶい橙～灰白
603	M地区	SD56	土師器	甕	26.20			12.65	口縁部1/3		にぶい黄橙～浅黄橙
604	N地区	SD60	丹波焼?	播鉢	35.70			12.90	口縁部～体部1/10	普通	橙～褐灰
605	K地区	SD61	弥生	壺	9.10			17.00	口縁部1/7		にぶい黄橙
606	K地区	SD62	陶器	碗			4.55	3.35	底部2/3	良好	灰黄～淡黄
607	K地区	SD62	丹波焼	播鉢				3.55	口縁部わずか	やや不良	灰黄褐～浅黄
608	F地区	SD66	須恵器	杯A	12.80		9.60	3.30	口縁部1/10・底部1/3	普通	灰白
609	F地区	SD66	須恵器	杯A	11.40		8.50	3.80	口縁部1/4・底部わずか	普通	灰白～灰褐
610	F地区	SD66	須恵器	杯A	11.80		7.30	3.60	1/10	普通	灰～灰白
611	F地区	SD66	須恵器	碗	14.50		11.30	10.20	口縁部わずか・底部1/6	普通	灰～灰白
612	F地区	SD66	須恵器	蓋	17.70			1.55	口縁部1/4	普通	灰白
613	F地区	SD66	須恵器	杯B	17.40		12.70	4.70	口縁部わずか・底部1/3	やや不良	灰白
614	F地区	SD66	須恵器	杯B	17.50		12.00	4.00	口縁部1/6・底部1/4	普通	灰白～灰
615	F地区	SD66	須恵器	杯B	16.60		12.80	3.50	口縁部1/3・底部4/5	不良	灰白
616	F地区	SD66	須恵器	杯B	16.70		11.50	4.40	口縁部1/6・底部1/4	普通	灰白
617	F地区	SD66	須恵器	壺		17.10	9.80	7.70	体部1/4・底部3/4	普通	灰白～灰
618	F地区	SD66	土製品	土罐					ほぼ完存		にぶい赤褐～灰白
619	F地区	SD66	土製品	土馬					体部のみ		浅黄橙

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
3mm以下のチャート多く含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	21	59
微細なチャート・長石含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	21	59
2mm以下のチャート・長石含む	内面：体部回転ナデ。 外面：底部ヘラナデ→体部下端ヘラ削り→体部叩き→回転ナデ。		21	
微細なチャート・長石含む	内面：底部ナデ→体部回転ナデ。 外面：底部へ口縁部回転ナデ。		21	
微細なチャート・長石含む	内面：底部へ体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：底部ナデ、指オサエ→体部下半回転ヘラ削り→体部回転ナデ。		21	
7mm大のチャート含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	21	
6mm以下のチャート・長石含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		22	59
2mm以下のクサリレキ含む	内面：底部へ口縁部横ナデ→暗文。 外面：底部ヘラナデ→口縁部横ナデ。	化粧土塗布	22	
微細なチャート・長石・クサリレキ含む	内面：底部ナデ→体部横ナデ。 外面：底部指オサエ→体部横ナデ。		22	
微細なチャート・長石・クサリレキ・石英・藍母含む	内面：体部横ナデ、指オサエ→頭部ハケ→口縁部横ナデ。 外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	頭径22.80cm	22	59
3mm以下の石英・チャート・長石多く含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ、指ナデ→口縁部横ナデ。		22	
微細な砂粒多く含む	内面：体部ハケ→ナデ→口縁部ハケ→ナデ。 外面：体部ハケ→ヘラミガキ→口縁部ヘラミガキ。		22	
精良	内面：底部へ体部回転ナデ→暗文。 外面：底部へ体部回転ナデ→暗文。	京焼き風	22	
3mm以下の砂粒含む	内面：体部へ口縁部回転ナデ→おろし目。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。		22	
微細なチャート・長石・石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	22	
1mm以下のチャート・石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	22	
微細なチャート・長石含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	22	
微細なチャート・長石含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：底部回転ヘラ削り。体部へ口縁部回転ナデ。		22	
微細なチャート・長石・石英含む	内面：天井部へ口縁部回転ナデ→天井部仕上げナデ。 外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。		22	
チャート・石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	22	
5mm以下のチャート・長石・微細な石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ→ヘラ切り→ナデ。		22	
微細なチャート含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	22	60
チャート・長石・石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	22	
微細なチャート・長石含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部ヘラ切り	22	
2mm以下のチャート・長石・クサリレキ含む			22	
チャート・長石・石英多く含む			22	60

出土土器観察表25

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
620	O地区	SD70	土師器	杯			9.00	2.40	底部1/10		灰白～橙
621	J地区	SD67	土師器	埴	38.00			4.75	口縁部1/9		にぶい橙～灰褐
622	J地区	SD67	土師器	埴塔	34.70			5.10	口縁部1/9		にぶい橙～灰褐
623	P地区	SD71	須恵器	壺				10.30	頸部1/3	普通	灰～灰白
624	P地区	SD71	須恵器	壺			11.80	8.50	底部1/3	普通	灰～灰白
625	P地区	SD71	須恵器	杯B	15.50		11.10	4.80	口縁部1/4弱・底部1/2弱	やや不良	灰白
626	P地区	SD71	須恵器	碗	14.90		6.40	6.20	口縁部1/8・底部2/3	良好	灰
627	P地区	SD71	須恵器	碗	15.20		6.60	6.00	口縁部1/3	やや不良	灰～灰白
628	Q地区	SD71	須恵器	碗	14.70		6.90	6.00	口縁部1/2強	普通	灰
629	P地区	SD71	須恵器	碗	13.10		5.20	4.70	口縁部3/4	やや不良	灰白
630	P地区	SD71	須恵器	碗	14.50		5.40	6.60	ほぼ完存	やや不良	灰～灰白
631	P地区	SD71	須恵器	碗	14.40		6.50	5.95	口縁部1/6弱・底部1/4	普通	灰～灰白
632	P地区	SD71	須恵器	碗	14.30		6.00	9.85	口縁部4/5弱・底部1/4	良好	灰～灰白
633	Q地区	SD71	須恵器	碗	12.00		5.00	4.40	口縁部1/8・底部1/2強	普通	灰
634	P地区	SD71	須恵器	碗	13.20			4.40	口縁部1/4	良好	灰白
635	O地区	SD71	須恵器	碗	13.60		4.70	4.60	口縁部1/2強	不良	にぶい黄橙～灰
636	O地区	SD71	須恵器	碗			5.60	3.70	底部1/2弱	普通	灰～灰白
637	O地区	SD71	須恵器	碗			7.80	2.90	底部完存	普通	灰
638	O地区	SD71	須恵器	甕	48.20			5.30	口縁部1/12	普通	灰～灰白
639	O地区	SD71	須恵器	甕	31.20			6.20	口縁部1/8	普通	灰
640	O地区	SD71	瓦	平瓦					1/4以下	良好	灰～灰白
641	P地区	SD71	瓦	平瓦					一部	良好	灰～灰白
642	Q地区	SD71	土師器	皿	10.00		5.70	1.30	口縁部1/8・底部1/3		灰白
643	P地区	SD71	土師器	皿	9.20		6.20	1.95	ほぼ完存		浅黄橙～にぶい黄橙
644	O地区	SD71	土師器	皿	10.70		6.20	2.40	口縁部1/3・底部1/2弱		灰白～浅黄橙
645	O地区	SD72	土師器	皿	10.00		7.10	2.00	完存		にぶい橙～灰白

胎土	調整	備考	図版	写真図版
2mm以下のクサリレキ・チャート・長石含む	内面：底部～体部指オサエ・ナデ。 外面：体部横ナデ。	底部ヘラ切り	22	
精良	内面：体部～口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ～口縁部横ナデ。	外面煤付着	23	
長石・クサリレキ含む	内面：底部～口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ～口縁部横ナデ。	外面煤付着	23	
5mm以下の長石・チャート含む	内面：体部～頸部回転ナデ。 外面：体部～頸部回転ナデ。	頸径9.20cm	23	
3mm以下のチャート、微細な長石・石英含む	内面：底部ナデ・指オサエ～体部横ナデ。 外面：体部ヘラ切り。	底部ヘラナデ	23	
4mm以下の長石・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ～底部仕上げナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り→高台貼付け	23	
1mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部糸切り	23	
5mm以下のチャート、1mm以下の長石・石英含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部糸切り	23	
8mm以下のチャート、2mm以下の長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	23	
3mm以下の長石・チャート・石英含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り・胎土分析	23	60
微細なチャート・長石・石英含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	23	60
4mm以下の長石・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	23	
4mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部糸切り	23	
2mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	23	
2mm以下のチャート・長石、微細な石英や多く含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		23	
3mm以下の長石・チャート・石英含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	23	60
微細なチャート・長石・石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	23	
5mm以下のチャート、2mm以下の長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：底部ヘラナデ～体部回転ナデ。		23	
2mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：頸部ナデ～口縁部横ナデ。 外面：頸部叩き整形～口縁部横ナデ。		23	
2mm以下のチャート・長石多く含む	内面：頸部ヘラナデ～口縁部横ナデ。 外面：頸部叩き整形～口縁部横ナデ。		23	60
微細なチャート含む	内面：布目。 凸面：ナデ。	須志質	23	
5mm以下のチャート・長石含む	内面：布目。 凸面：ヘラナデ。	須志質	23	
3mm以下のクサリレキ・長石、微細なチャート・石英含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	23	
1.5mm以下の長石・クサリレキ・チャート多く含む	内面：底部ナデ～口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部横ナデ。	底部ヘラ切り	23	60
微細なチャート・石英・クサリレキ含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	23	60
1mm以下のチャート・石英・長石や多く含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	23	60

出土土器観察表26

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
646	O地区	SD72	土師器	碗			5.80	1.50	底部4/5		褐灰～灰白
647	O地区	SD72	須恵器	碗	13.20		6.60	3.70	口縁部1/2弱・底部1/2	不良	灰白
648	O地区	SD72	瓦	平瓦					わずか	普通	灰
649	P地区	SD75	土師器	皿	17.80		14.80	2.25	口縁部1/4・底部1/2		にぶい橙～灰白
650	P地区	SD75	土師器	皿	7.80			1.30	口縁部わずか・底部完存		灰白
651	Q地区	SD76	須恵器	壺	17.90			5.80	口縁部1/4	良好	灰～灰白
652	P地区	SD76	須恵器	壺	7.70			5.00	口縁部1/8	普通	灰白
653	Q地区	SD76	須恵器	杯A			10.50	2.10	底部1/3	不良	灰白
654	P地区	SD77	須恵器	甕				9.60	口縁部わずか	普通	灰
655	Q地区	SD77	須恵器	杯A			11.00	2.30	底部1/2強	不良	灰白～灰
656	P地区	SD77	弥生	甕			6.70	5.50	底部1/2弱		にぶい橙～にぶい赤褐
657	E地区	SE05	土師器	焙烙	36.00			5.10	口縁部1/10		灰褐～にぶい橙
658	E地区	SE05	唐津焼	碗			3.90	3.30	底部完存・体部わずか	良好	オリーブ黒
659	E地区	SE05	瀬戸焼?	碗			4.50	2.60	底部完存		浅黄
660	F地区	SE06	土師器	埴				3.80	口縁部わずか		橙～浅黄橙
661	F地区	SE06	土師器	埴	20.50	25.10		12.35	口縁部1/2弱・体部わずか		橙～褐灰
662	F地区	SE06	須恵器	埴鉢			8.20	5.60	底部1/2強	不良	灰白
663	D地区	SK29	須恵器	杯B			13.80	3.05	底部1/8	普通	灰白
664	E地区	SK34	土製品	土鍾					ほぼ完存		褐灰
665	E地区	SK37	土師器	埴	21.40	24.10		7.70	口縁部1/4		灰白～にぶい黄橙
666	E地区	SK38	土師器	埴	26.10	30.10		13.40	口縁部1/6		橙～にぶい黄橙
667	E地区	SK38	土師器	埴	24.50			5.20	口縁部1/10		灰黄褐～にぶい橙
668	E地区	SK38	土師器	香炉			18.00	7.90	底部1/4		灰白～淡赤褐
669	E地区	SK38	白磁	碗			5.60	2.00	底部1/3		灰白
670	E地区	SK39	土師器	埴				5.00	口縁部わずか		にぶい橙～にぶい褐
671	E地区	SK39	備前焼	播鉢	38.20			9.90	口縁部わずか	良好	暗赤灰～にぶい赤褐

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
繊細なチャート・長石・石英・クサリレキ含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り・内外面被熱	23	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	23	61
繊細な長石・チャート含む	内面：ヘラナデ。 凸面：叩き。		24	
	内面：底部摩滅。口縁部回転ナデ。 外面：底部増減。口縁部回転ナデ。		24	
1mm以下の長石・チャート・石英含む	内面：底部～口縁部横ナデ。 外面：底部摩滅。口縁部横ナデ。		24	
繊細なチャート・長石含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		24	
1mm以下のチャート含む	内面：口頸部回転ナデ。 外面：口頸部回転ナデ。		24	
3mm以下の長石、1mm以下のチャート・石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：底部回転ヘラ削り～体部回転ナデ。		24	
繊細なチャート・長石含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		24	61
3mm以下の石英・チャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：底部回転ヘラ削り～体部回転ナデ。		24	
5mm以下のチャート非常に多く含む	内面：底部～体部ナデ。 外面：体部ナデ。		24	
繊細なクサリレキ・チャート・石英多く含む	内面：体部～口縁部横ナデ。 外面：底部ナデ～体部ヘラ削り～口縁部横ナデ。	外面煤付着	24	
精良	内面：底部～体部塞軸。 外面：底部～体部塞軸。		24	
精良	内面：底部塞軸。 外面：底部～体部塞軸～高台量り付露胎。		24	
繊細な石英・チャート多く含む	内面：体部板ナデ～口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形～口縁部横ナデ。		24	
チャート・長石・クサリレキ・石英含む	内面：体部ハケ～口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形～口縁部横ナデ。	外面煤付着	24	61
チャート多く含む	内面：底部～体部横ナデ。 外面：体部横ナデ。	底部ヘラ切り	24	
1.5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：底部ヘラ切り～体部回転ナデ。		24	
繊細なクサリレキ・長石含む			24	61
1mm以下のクサリレキ・長石・石英・チャート含む	内面：体部ハケ～口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形～口縁部横ナデ。	外面煤付着	24	61
繊細なチャート・長石・石英・クサリレキや多く含む	内面：体部ナデ・板ナデ～口縁部横ナデ。 外面：底部～体部叩き整形～底部ナデ・口縁部横ナデ。	外面煤付着	24	
繊細なクサリレキ・チャート・長石・石英含む	内面：体部～口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部横ナデ。	内面煤付着	24	
繊細なチャート・長石・石英多く含む	内面：底部～体部ナデ。 外面：底部未。体部板ナデ。	全体的に被熱	24	61
精良	内面：底部塞軸。 外面：底部～高台回転ヘラ削り。		24	
繊細なチャート・長石・クサリレキ含む	内面：体部ハケ～口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形～口縁部横ナデ。	外面煤付着	24	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：体部～口縁部横ナデ～体部叩き。 外面：体部～口縁部横ナデ。		24	

出土土器観察表27

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
672	E地区	S K40	備前焼	播鉢	30.10			5.60	口縁部1/8	良好	赤灰
673	E地区	S K40	須恵器	甕				4.00	口縁部わずか	普通	灰～灰白
674	E地区	S K40	施釉陶器	碗			5.10	0.70	底部完存		灰白～灰黄
675	E地区	S K43	染付磁器	碗	9.20		3.60	5.10	口縁部1/10・底部1/5	良好	灰白
676	E地区	S K47	土師器	皿	9.30		4.40	2.30	口縁部1/8・底部1/2		灰白
677	E地区	S K41	弥生	壺	23.00			4.10	口縁部3/4		浅黄橙～灰白
678	L地区	S K49	土師器	羽釜	23.30			5.60	口縁部1/6		にぶい黄橙
679	L地区	S K49	須恵器	鉢	20.50			2.10	口縁部1/10	普通	灰
680	L地区	S K49	土師器	埴				4.00	口縁部わずか		橙～にぶい橙
681	L地区	S K49	須恵器	捏鉢				3.90	口縁部わずか	普通	灰
682	L地区	S K49	備前焼	播鉢				4.70	口縁部わずか	普通	灰
683	M地区	S K52	弥生	壺		22.35	6.10	12.80	底部ほぼ完存		黒褐～にぶい黄橙
684	M地区	S K53	弥生	壺				10.80	体部わずか		にぶい黄橙～灰白
685	G地区	S K57	黒色土器	碗	15.80		7.90	5.20	口縁部ほぼ完存・底部4/5		橙～明赤褐
686	G地区	S K57	土師器	碗	15.40			4.10	口縁部1/10強	不良	橙～にぶい黄橙
687	G地区	S K57	土師器	碗	12.20		6.60	4.65	ほぼ完存		橙～浅黄橙
688	G地区	S K57	須恵器	碗			6.80	1.80	底部1/8	普通	灰白
689	G地区	S K57	須恵器	碗	16.10			4.50	口縁部1/5	普通	灰白～灰
690	G地区	S K57	須恵器	碗	15.05		5.45	5.60	口縁部1/8・底部1/5	やや不良	灰
691	G地区	S K57	須恵器	壺	10.50	13.80	8.30	19.00	ほぼ完存	普通	灰白
692	N地区	S K58	須恵器	壺	19.20			2.70	口縁部わずか	普通	灰～灰白
693	N地区	S K58	須恵器	碗	12.05		6.70	5.20	口縁部2/3・底部完存	やや不良	灰白
694	K地区	S K59	弥生	甕	13.10	14.20	5.40	17.75	口縁部～体部4/7・底部完存		にぶい黄橙～浅黄橙
695	K地区	S K60	須恵器	甕				11.60	頸部1/4	良好	灰
696	K地区	S K60	須恵器	甕				7.40	肩部1/7	普通	灰白
697	K地区	S K60	土師器	皿	7.80			1.15	口縁部1/10		にぶい黄橙～にぶい橙

胎土	調整	備考	図版	写真図版
繊細なチャート・長石含む	内面：体部～口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部横ナデ。		24	
繊細な長石・チャート含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		24	
2mm大のチャート含む	内面：底部回転ナデ。 外面：底部回転ヘラ削り。	京焼系	24	61
	内面：底部～体部施釉。 外面：底部～口縁部施釉→高台端部施釉。		24	
繊細なチャート・石英含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	24	
繊細なチャート・石英多く含む	内面：頭部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 外面：頭部ハケ→口縁部横ナデ。		25	61
8mm以下のクサリレキ・長石多く含む	内面：体部～口縁部ナデ。 外面：体部ナデ→跨→口縁部横ナデ。		25	
繊細な長石・チャート含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		25	
5mm以下の石英・2mm以下のチャート・長石・クサリレキ含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	25	
繊細なチャート含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		25	
繊細な長石含む	内面：口縁部横ナデ一部しじみ。 外面：口縁部横ナデ。		25	
2.5mm以下の石英・チャート・長石多く含む	内面：底部～体部指オサエ・ナデ。 外面：底部ナデ・ヘラナデ。体部ヘラミガキ。	底部穿孔径1.00cm	25	
繊細なチャート・石英多く含む	内面：体部ナデ・指オサエ。 外面：体部施文。		25	
5mm以下の長石・雲母・クサリレキ・石英含む	内面：回転ナデ。 外面：磨減。底部ナデ。	内黒	25	62
1.5mm以下のクサリレキ・チャート・長石・石英含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		25	
4mm以下の長石・チャート・クサリレキ多く含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部指オサエ・ナデ→口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	25	62
0.5mm以下のチャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	25	
1mm以下の長石・チャート含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		25	
7mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	25	
長石・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～頭部回転ナデ→回転ヘラ削り→口頭部回転ナデ。	底部ヘラ切り	25	62
2.5mm以下の長石・石英含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：口縁部回転ナデ。		25	
2.5mm以下の長石・石英・チャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	25	62
2mm以下の石英・チャート含む	内面：底部～口縁部ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		25	63
精良	内面：体部当具痕→頭部回転ナデ。 外面：体部叩き整形→頭部回転ナデ。	頭径15.90cm	25	
3mm大のチャート含む	内面：体部回転ナデ→頭部回転ナデ→体部ナデ。 外面：体部叩き整形→頭部回転ナデ。	頭径17.90cm	25	
わずかに石英含む	内面：底部～口縁部横ナデ。 外面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		25	

出土土器観察表28

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
698	K地区	S K60	土師器	皿	7.80		4.80	1.40	口縁部1/7・底部完存		にぶい橙～浅黄橙
699	K地区	S K60	土師器	皿	14.80		7.40	2.80	口縁部1/9		灰白
700	K地区	S K60	須恵器	碗	15.60			3.55	口縁部1/7	普通	灰白～灰
701	K地区	S K61	須恵器	碗	16.60		6.30	4.20	口縁部1/9・体部～底部1/4	やや不良	灰白～灰
702	K地区	S K61	白磁	皿			3.40	1.15	底部5/9		灰白
703	F地区	S K62	須恵器	埴鉢	25.70			9.70	口縁部1/6	やや不良	灰～灰白
704	F地区	S K62	須恵器	碗	15.00			2.90	口縁部1/8	普通	灰
705	F地区	S K62	須恵器	碗			6.20	2.80	底部1/2弱	普通	灰～灰白
706	N地区	S X34	土師器	甕				4.20	口縁部わずか		にぶい黄橙～明黄褐
707	H地区	S X39	弥生	甕			5.60	4.35	底部1/4		にぶい黄橙～橙
708	H地区	S X39	須恵器	碗			5.00	1.90	底部わずか	やや不良	灰白
709	H地区	S X39	須恵器	碗			5.50	2.00	底部3/4	普通	灰
710	H地区	S X39	弥生	甕	20.60			11.60	口縁部1/5弱		浅黄橙～にぶい橙
711	H地区	S X39	須恵器	杯B			14.30	3.55	底部1/3弱	普通	灰白
712	H地区	S X39	須恵器	杯B	15.60		10.40	4.05	口縁部1/8・底部1/3	普通	灰
713	O地区	S X40	須恵器	碗	15.40			4.10	口縁部1/10	普通	灰
714	O地区	S X40	須恵器	碗	15.30		6.20	6.20	1/2弱	普通	灰
715	O地区	S X40	須恵器	碗	13.80			6.00	口縁部1/6	普通	灰
716	O地区	S X40	須恵器	碗	12.90		5.50	4.95	2/5	普通	灰白～黄灰
717	O地区	S X40	須恵器	碗	14.80		6.80	5.90	1/2弱	普通	灰～灰白
718	O地区	S X40	須恵器	碗	14.60		5.90	5.50	口縁部1/3・底部2/5	普通	灰～黄灰
719	O地区	S X40	須恵器	碗	12.30		5.10	4.70	口縁部1/6・底部完存	普通	灰
720	O地区	S X40	須恵器	碗	12.20			4.20	口縁部1/3	良好	灰～灰白
721	O地区	S X40	須恵器	碗			5.40	1.80	底部完存	普通	灰白
722	O地区	S X40	須恵器	杯	9.90		6.40	2.45	口縁部1/9・底部1/4弱	普通	灰
723	O地区	S X40	土師器	皿	10.10		6.60	2.20	口縁部1/4・底部完存		灰白～黄灰

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
精良	内面：底部～口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部横ナデ。	底部回転糸切り	25	62
精良	内面：底部ナデ～口縁部横ナデ。 外面：底部～体部ヘラ削り→ナデ～口縁部横ナデ。		25	
1mm以下の砂粒含む	内面：口縁部横ナデ。 外面：口縁部横ナデ。		25	
2.5mm以下のチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部回転ヘラ削り→ナデ～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	25	
	内面：底部～体部回転ナデ→磨滅。 外面：体部回転ナデ→磨滅。		25	
チャート・長石含む	内面：体部ナデ～口縁部横ナデ。 外面：体部～口縁部横ナデ。	胎土分析	26	
微細な砂粒含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		26	
微細な石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
6mm以下の長石・チャート・クサリレキ多く含む	内面：口頸部磨滅。 外面：口頸部磨滅。端部指オサエ・横ナデ。		26	
4mm以下のチャート・石英・長石非常に多く含む	内面：底部～体部ヘラナデ。 外面：底部ナデ。体部下端指オサエ・ナデ・体部ナデ。		26	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
1.5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
6mm以下の長石・チャート・石英非常に多く含む	内面：体部磨滅。口縁部指オサエ・ナデ。 外面：体部磨滅。口縁部指オサエ・ナデ。		26	63
2mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部ヘラ削り	26	
2mm以下の長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：底部ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。		26	63
2mm以下のチャート、微細な長石含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		26	
2mm以下のチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	63
3mm以下の石英・長石・チャート含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		26	
2mm大のチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	63
5mm以下のチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	63
0.5mm大のチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部下げナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	63
5mm以下のチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部糸切り	26	64
2.5mm以下のチャート・長石含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		26	
微細な長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
2mm大の長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部回転ヘラナデ～口縁部回転ナデ。	底部回転ヘラ切り	26	
1.5mm以下の石英・チャート・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り・外面被熱	26	

出土土器観察表29

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
724	○地区	S X 40	土師器	杯	9.70		6.80	2.20	口縁部3/4		灰白
725	○地区	S X 40	土師器	杯	10.40		6.80	2.20	口縁部1/10・底部 完存		灰白～にぶい黄橙
726	○地区	S X 40	土師器	碗	12.00		6.00	4.70	口縁部1/4弱・底部 完存		灰白～浅黄橙
727	○地区	S X 40	土師器	碗	11.65		5.50	4.30	口縁部1/6・底部 完存		灰白～にぶい橙
728	○地区	S X 40	土師器	碗	11.50		5.30	4.30	口縁部1/4・底部 完存		灰白～にぶい黄橙
729	○地区	S X 40	土師器	碗	10.80		5.30	4.00	口縁部わずか・底 部完存		灰白～橙
730	○地区	S X 40	土師器	碗	10.90		5.60	4.10	口縁部2/3・底部 完存		褐灰～浅黄橙
731	○地区	S X 40	土師器	碗	11.75		4.65	4.00	口縁部1/2強・底部 完存		灰黄褐～にぶい橙
732	○地区	S X 40	土師器	碗			5.00	3.50	底部完存・体部わ ずか		灰白～淡橙
733	○地区	S X 40	土師器	碗			5.70	3.00	底部完存・体部わ ずか		褐灰～にぶい橙
734	○地区	S X 40	土師器	碗			5.20	3.20	体部わずか・底部 完存		明褐灰～灰白
735	○地区	S X 40	土師器	碗			5.50	2.80	底部完存		にぶい黄橙～にぶい橙
736	○地区	S X 40	土師器	碗			5.65	1.75	底部完存	やや不良	にぶい黄橙～にぶい橙
737	○地区	S X 40	土師器	碗			5.50	1.50	底部完存		灰白～浅黄橙
738	○地区	S X 40	土師器	碗			6.30	3.20	底部1/3		灰白～黒
739	○地区	S X 40	土師器	碗			7.50	2.70	底部完存		灰白～明赤灰
740	○地区	S X 40	土師器	碗	13.90			4.00	口縁部1/5		黄灰～灰黄褐
741	○地区	S X 40	土師器	杯	12.80		6.70	3.90	口縁部1/4強・底部 2/3		褐灰～にぶい橙
742	○地区	S X 40	土師器	杯			6.30	1.90	底部完存・体部わ ずか		褐灰～灰黄褐
743	○地区	S X 40	土師器	托			4.70	2.40	底部ほぼ完存		橙
744	○地区	S X 40	土師器	托	15.70		7.50	6.20	口縁部1/3・底部 完存		灰白～にぶい橙
745	○地区	S X 40	土師器	碗	14.40		7.60	6.50	口縁部1/2強・底部 完存		灰白～褐灰
746	○地区	S X 40	土師器	甕	19.60	22.10		13.90	口縁部1/3弱		にぶい黄橙～灰黄褐
747	○地区	S X 40	土師器	甕	14.50	14.70		11.70	口縁部1/6		にぶい橙～橙
748	○地区	S X 40	土師器	羽釜	21.80			5.30	口縁部1/12		にぶい黄橙～灰黄褐
749	○地区	S X 40	土師器	甕	32.60	29.80		19.75	口縁部1/4弱		灰白～褐灰

胎土	調整	備考	図版	写真図版
3mm以下のチャート・石英含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	64
3mm以下のチャート、1mm以下の長石・石英多く含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
繊細なチャート・石英・長石・クサリレキや多く含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	64
2.5mm以下の石英・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	64
繊細なチャート・長石・石英・クサリレキ含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	64
繊細なチャート・長石・クサリレキ・石英含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	64
繊細なチャート・長石・石英・クサリレキや多く含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	64
1.5mm以下のチャート・長石・雲母含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	64
繊細なチャート・長石・石英・クサリレキ含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	26	
3mm以下のチャート、1mm以下の長石・石英・クサリレキ含む	内面：底部から体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
1mm以下のチャート・長石・石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
1.5mm以下のチャート・石英多く含む	内面：底部～体部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
1.5mm大のチャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部ナデ。	底部回転糸切り	26	
繊細なクサリレキ・チャート・石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り・化粧土塗布	26	
繊細なチャート・長石・クサリレキ含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：底部ナデ→高台～体部ナデ。		26	
3mm以下のチャート、1mm以下の長石・石英・クサリレキ含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：底部ナデ→高台～体部横ナデ。	高台高1.5cm	26	
繊細なチャート・長石・クサリレキ含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	高台高1.4cm	26	
1mm以下のチャート・石英・クサリレキ・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部下端へラ削り→体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	64
繊細なチャート・長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
1mm大のチャート・長石多く含む	内面：底部回転ナデ。 外面：底部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	
繊細なチャート・長石・石英・クサリレキ含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	26	65
繊細なチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：底部ナデ→口縁部回転ナデ。		26	65
2mm以下の石英・チャート・クサリレキ・長石や多く含む	内面：体部ナデ・指オサエ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	外面煤付着	26	65
3mm以下のチャート・長石多く含む	内面：体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ。	内外面被熱	26	65
3.5mm大のチャート・長石・クサリレキ多く含む	内面：体部へラ削りナデ。 外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		26	
4mm以下のチャート・長石・石英多く含む	内面：体部板ナデ・ナデ→体部上半～口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→ナデ→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径29.1cm	27	66

出土土器観察表30

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
750	O地区	SX40	土師器	甕	29.30	28.30		23.00	口縁部1/5		浅黄橙～灰褐
751	O地区	SX40	土師器	甕	30.90			11.30	口縁部1/4弱		灰白～灰黄褐
752	O地区	SX40	土師器	甕	36.10			6.50	口縁部1/10		灰黄褐～にぶい橙
753	M地区	包含層	弥生	壺	14.70			6.65	口縁部1/7		にぶい黄橙
754	E地区	包含層	製塩土器	埴壇壺				5.70	口縁部わずか		橙～淡橙
755	D地区	包含層	土師器	皿	18.50		13.00	3.40	口縁部1/3・底部1/3		橙～浅黄橙
756	M地区	包含層	須恵器	蓋	14.50			1.40	口縁部1/8	やや不良	灰
757	E地区	包含層	須恵器	杯	9.10		6.30	2.80	口縁部5/6	普通	灰
758	M地区	包含層	須恵器	杯	10.90			3.15	口縁部1/18	普通	灰
759	N地区	包含層	須恵器	杯A	12.40		10.00	3.50	口縁部わずか・底部1/4弱	普通	灰白
760	F地区	包含層	須恵器	杯A	11.00		7.20	3.00	口縁部～底部わずか	普通	灰～灰白
761	M地区	包含層	須恵器	杯A	12.00		9.20	3.70	1/2弱	やや不良	灰～灰白
762	O地区	包含層	須恵器	杯A	11.80		7.70	3.30	口縁部1/4・底部1/2	やや不良	灰白
763	G地区	包含層	須恵器	杯A	13.20		10.30	3.10	口縁部1/8・底部1/5弱	普通	灰～灰白
764	M地区	包含層	須恵器	皿	6.20		5.20	1.90	1/2弱	普通	灰
765	M地区	包含層	須恵器	皿	15.60		12.60	3.00	口縁部1/2・底部2/3	やや不良	灰～灰白
766	G地区	包含層	須恵器	杯A	13.10		10.20	3.00	口縁部1/7・底部1/5	普通	灰～灰白
767	I地区	包含層	須恵器	壺	22.80			6.80	口縁部わずか	普通	灰～灰白
768	M地区	包含層	須恵器	碗			7.50	6.40	底部完存	やや不良	灰白
769	N地区	包含層	須恵器	碗	11.70		5.90	4.80	口縁部1/5・底部わずか	やや不良	灰白～褐灰
770	I地区	包含層	須恵器	碗			5.40	3.40	底部1/2弱	普通	灰
771	N地区	包含層	須恵器	碗			7.20	2.40	底部1/2弱	普通	灰～灰白
772	N地区	包含層	須恵器	碗			8.50	4.50	底部1/3	やや不良	灰白
773	P地区	包含層	須恵器	碗	15.30		6.50	5.70	口縁部1/3・底部完存	普通	灰～灰白
774	G地区	包含層	須恵器	碗	15.85			4.30	口縁部1/6強	普通	灰～灰白
775	N地区	包含層	須恵器	碗	15.80			4.60	口縁部1/6	普通	灰

胎土	調整	備考	図版	写真 図版
3mm以下のチャート・長石・石英・クサリレキ非常に多く含む	内面：体部ヘラ削り→体部上半～口縁部横ナデ。 外面：体部叩き整形→体部上半～口縁部横ナデ。	外面煤付着	27	66
3mm以下のチャート・長石・石英多く含む	内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→板ナデ→口縁部横ナデ。	頭径27.00cm	27	65
3mm以下のチャート・石英・長石多く含む	内面：体部～口縁部横ナデ。 外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。	外面煤付着・頭径31.80cm	27	
3mm以下のクサリレキ・チャート多く含む	内面：頸部ヘラ削り→ナデ→口縁部横ナデ。 外面：頸部増減。口縁部横ナデ。		27	
3mm以下のクサリレキ、微細なチャート・長石・石英多く含む	内面：体部～口縁部指オサエ。 外面：体部～口縁部指オサエ。		27	
3mm以下のチャート・長石含む	内面：底部ナデ。体部～口縁部指オサエ→横ナデ。 外面：底部ヘラ削り→ナデ→体部～口縁部横ナデ。	内面暗文あり	27	
微細なチャート含む	内面：口縁部回転ナデ。 外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。		27	
チャート・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	27	66
1.5mm大のチャート含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		27	
微細な長石・石英含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	27	
微細な長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	27	
微細なチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	27	
1mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	27	
1.5mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り・内外面火摩痕あり	27	
微細な砂粒含む	内面：底部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	27	
2mm以下のチャート含む	内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転ヘラ切り	27	66
2mm以下の長石・チャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り・内外面火摩痕あり	27	
4mm以下の長石・チャート含む	内面：口頸部回転ナデ。 外面：口頸部回転ナデ。		27	
6mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：底部ヘラ切り→体部回転ナデ→高台貼り付け。	高台高1.5cm	27	
微細なチャート・石英含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部ナデ	27	
3.5mm以下のチャート・長石含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部下端指オサエ→ナデ→体部回転ナデ。	底部回転糸切り	27	
2mm以下の石英・チャート含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	27	67
微細なチャート・長石・石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部糸切り	27	67
8mm以下のチャート、3mm以下の長石、2mm以下の石英含む	内面：底部～体部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。	底部回転糸切り	27	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		27	
3mm以下のチャート・長石含む	内面：体部～口縁部回転ナデ。 外面：体部～口縁部回転ナデ。		27	

出土土器観察表31

No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
776	L地区	包含層	須恵器	碗			5.20	1.50	底部1/2弱	普通	灰白
777	D地区	包含層	須恵器	碗	15.50			4.15	口縁部1/6	普通	灰
778	K地区	包含層	須恵器	碗			6.55	2.60	底部完存	普通	灰
779	O地区	包含層	須恵器	皿			5.55	1.70	底部完存	普通	灰～灰白
780	M地区	包含層	須恵器	皿	12.00		6.40	3.10	口縁部1/10・底部1/2弱	普通	灰
781	M地区	包含層	須恵器	皿	12.40		7.20	2.90	1/2弱	普通	灰
782	M地区	包含層	須恵器	甕	22.50			6.60	口縁部1/8	普通	灰
783	D地区	包含層	須恵器	壺		19.00	11.20	24.70	底部5/6	普通	灰～灰白
784	O地区	包含層	土師器	皿	10.40		6.90	2.10	口縁部1/6・底部1/2強		灰白～浅黄橙
785	D地区	包含層	土師器	皿	9.00		6.95	2.15	口縁部1/3強・底部1/8		にぶい橙～褐灰
786	D地区	包含層	土師器	皿	7.60		4.45	1.35	口縁部1/4・底部完存		灰白～橙
787	D地区	包含層	土師器	皿	7.60		4.40	1.50	口縁部1/4弱・底部完存		浅黄橙～灰白
788	D地区	包含層	土師器	皿	7.60		5.10	1.55	口縁部1/4・底部2/3		にぶい黄橙
789	O地区	包含層	土師器	碗			5.80	3.10	底部完存		橙～灰白
790	P地区	包含層	土師器	碗			8.40	4.00	底部1/4		にぶい褐～褐灰
791	M地区	包含層	土師器	碗	16.80		9.70	6.40	口縁部1/4 底部3/4		橙～にぶい橙
792	D地区	包含層	土師器	杯	14.50		8.00	4.00	口縁部わずか・底部1/2弱		灰白
793	D地区	包含層	土師器	杯	14.80		7.40	3.95	口縁部1/4・底部ほぼ完存		橙～灰白
794	O地区	包含層	緑釉陶器	碗			6.20	1.70	底部わずか		にぶい黄
795	M地区	包含層	須恵器	土鍾					1/2弱	普通	暗灰
796	O地区	包含層	土製品	土鍾					ほぼ完存		灰黄
797	N地区	包含層	土師器	羽釜	23.60			6.60	口縁部1/6		黄灰～灰黄褐
798	N地区	包含層	土師器	羽釜	22.20			8.00	口縁部1/8		黄灰～にぶい黄橙
799	M地区	包含層	土師器	羽釜	32.00			9.60	口縁部1/10		灰白～褐灰
800	M地区	包含層	瓦	平瓦					わずか	不良	灰～灰黄褐
801	N地区	包含層	瓦	平瓦					わずか	普通	灰白～暗灰黄

胎土	調整	備考	図版	写真図版
1mm以下の長石含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	27	
1mm大の長石・チャート含む	内面：体部へ口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部横ナデ。		27	
6mm大のチャート含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部回転ナデ。	底部回転糸切り	27	
5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部回転ナデ。 外面：底部糸切り→高台貼付け		27	
微細なチャート・長石・石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ。 外面：底部ナデー口縁部回転ナデ。	高台高9.5mm	28	
2mm以下のチャート・石英含む	内面：底部へ口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。 外面：底部糸切り→高台貼り付け→体部へ口縁部回転ナデ。	高台高9mm	28	
2mm以下のチャート・長石含む	内面：体部当具痕→頭部へ口縁部回転ナデ。 外面：体部へ頭部叩き整形→口縁部回転ナデ。		28	
5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部ナデー体部へ頭部回転ナデ。 外面：体部下縁指オサエ・ナデー体部へ頭部回転ナデ。	底部糸切り	28	67
5mm以下の長石・チャート・石英・クサリレキ含む	内面：底部へ口縁部磨減。 外面：体部へ口縁部磨減。		28	
1mm以下の長石・クサリレキ・チャート含む	内面：底部へ口縁部横ナデ→底部仕上げナデ。 外面：体部へ口縁部横ナデ。	底部回転糸切り	28	
0.5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部横ナデ。	底部回転糸切り	28	
0.5mm以下の長石・チャート含む	内面：底部磨減。体部へ口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部横ナデ。	底部回転糸切り	28	
0.5mm以下のチャート・長石・クサリレキ含む	内面：底部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部横ナデ。	底部回転糸切り	28	
2.5mm以下の長石・石英・クサリレキ含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：体部指オサエ・ナデー回転ナデ。	底部回転糸切り	28	
4mm以下のチャート・微細な石英多く含む	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：底部糸切り→高台貼り付け→体部回転ナデ。		28	
3mm以下のチャート・1mm以下の長石・クサリレキ・石英含む	内面：体部へ口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部横ナデ。	高台高1.3cm	28	66
0.5mm以下のチャート・クサリレキ含む	内面：底部ナデー体部へ口縁部横ナデ。 外面：体部へ口縁部指オサエ・横ナデ。	底部回転糸切り	28	
2mm以下の長石・チャート含む	内面：底部磨減。体部へ口縁部指オサエ→横ナデ。 外面：体部へ口縁部指オサエ→横ナデ。	底部回転糸切り	28	
1.5mm以下のクサリレキ・長石含む・土師質	内面：底部へ体部回転ナデ。 外面：底部ナデー体部回転ナデ。		28	
微細なチャート・長石含む			28	
0.5mm以下の長石・チャート含む		1.6g	28	
微細なチャート・長石・石英・クサリレキ多く含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部ハケーナデー口縁部横ナデ。		28	
1mm大の長石・石英・クサリレキ多く含む	内面：体部ナデー口縁部横ナデ。 外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ。		28	
微細な長石・石英・チャート多く含む	内面：体部へ口縁部指オサエ→ナデ・ハケ。 外面：体部へ口縁部指オサエ・ナデ→磨貼付け。	鐔以下煤付着	28	
微細なチャート含む	凹面：布目→ハラナデ。 凸面：叩き整形。		28	
微細な砂粒含む	凹面：布目。 凸面：叩き。	須恵質	28	

出土土器観察表32

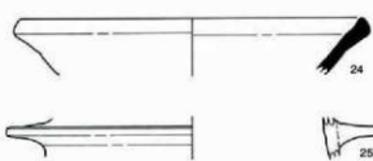
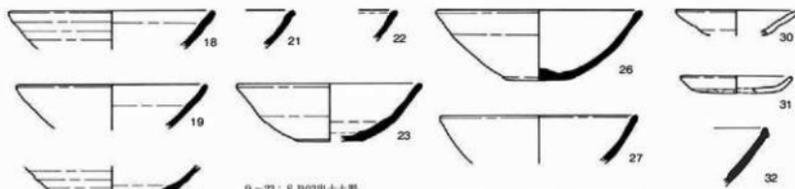
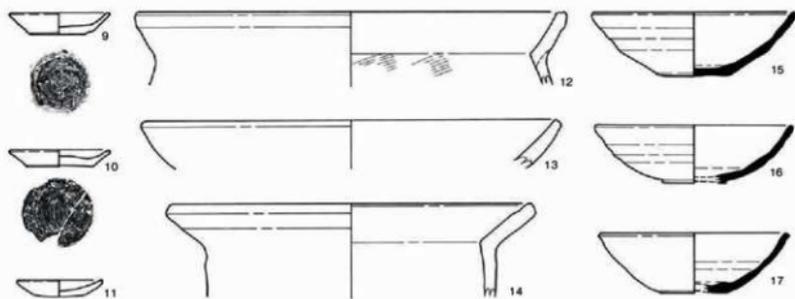
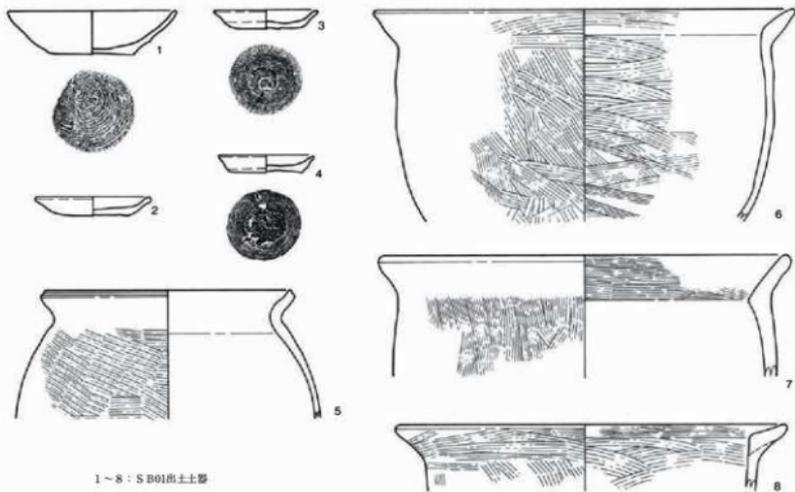
No.	地区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				残 存	焼成	色 調
					口径	最大径	底径	器高			
802	M地区	基盤層	弥生	甕	11.60	19.00	6.60	24.90	口縁部1/6・底部完 存		灰黄褐～浅黄橙
803	M地区	基盤層	弥生	甕	16.60	14.80	6.00	13.50	口縁部1/6・体部は ほぼ完存		にぶい黄橙

胎土	調整	備考	図 版	写真 図版
微細なチャート・長石・石英多く含む	内面：底部指オサエー体部ハケー→口縁部横ナデ。 外面：体部下半ヘラミガキ。口縁部横ナデ。		28	67
4mm以下のチャート、微細なクサリレキ・石英・長石含む	内面：底部ヘラナデ・指オサエー体部ハケー→口縁部横ナデ。 外面：体部ハケー→ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		28	67

報 告 書 抄 録

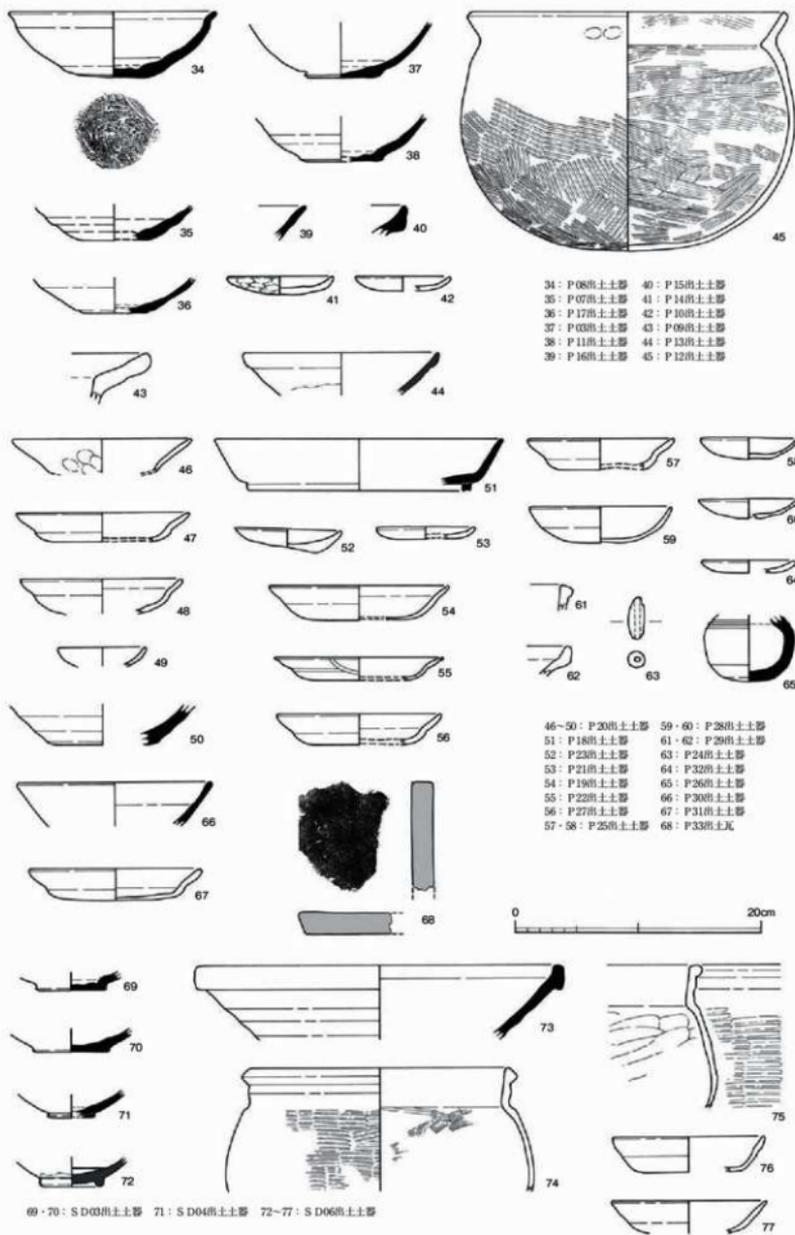
ふりがな								
書 名	大野遺跡発掘調査報告書							
副 書 名	(一) 別府川広域基幹河川改修事業に伴う発掘調査報告							
巻 次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第380冊							
編著者名	山田清朝・森内秀造・渡辺 昇・西口圭介・中川 渉・三辻利一・株式会社古環境研究所・株式会社加速器分析研究所							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所 在 地	加古郡播磨町大中1丁目1番1号							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所 在 地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 ℡078-362-3784							
発行年月日	2010年(平成22年)3月24日							
所収遺跡名 (県道跡番号)	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		調査番号	市町村					
大野遺跡 (110636)	加古郡播磨町 加古川 大野	28210	200021	34° 46' 19"	134° 51' 15"	平成12年9月18日～11月30日	998㎡	(一) 別府川広域河川改修事業
			2000337			平成13年2月5日～2月23日	96㎡	
			2001006	34° 46' 36"	134° 51' 21"	平成13年5月24日～10月18日	5653㎡	
			2001225			平成14年2月19日～3月1日	91㎡	
			2002082	34° 46' 19"	134° 51' 15"	平成14年5月13日～5月22日	232㎡	
			2002114			平成14年9月2日～10月18日	475㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
加古郡播磨町 大野遺跡	集落跡	弥生時代中期			弥生土器		ポイントバー	
		古墳時代後期	溝		須恵器・土師器			
		奈良時代	溝		須恵器・土師器		土馬	
		平安時代	溝・木棺墓		須恵器・土師器・黒色土器			
		鎌倉時代	溝・木棺墓		須恵器・土師器・白磁			
		室町時代	木棺墓・竈・溝・土坑・井戸		須恵器・土師器・備前焼・丹波焼・瀬戸美濃焼・青磁			
概要	完新世後段Ⅱ面上に立地する集落跡。主に、奈良時代から室町時代にかけての遺構を抽出。特に、平安時代後半以降の遺構が中心をなす。平安時代後期以降は、大きく前半(10世紀後半～12世紀前半)と後半(14世紀前半～15世紀)からなる。特に後半の遺構群については、舟運を利用した施設が考えられる。							

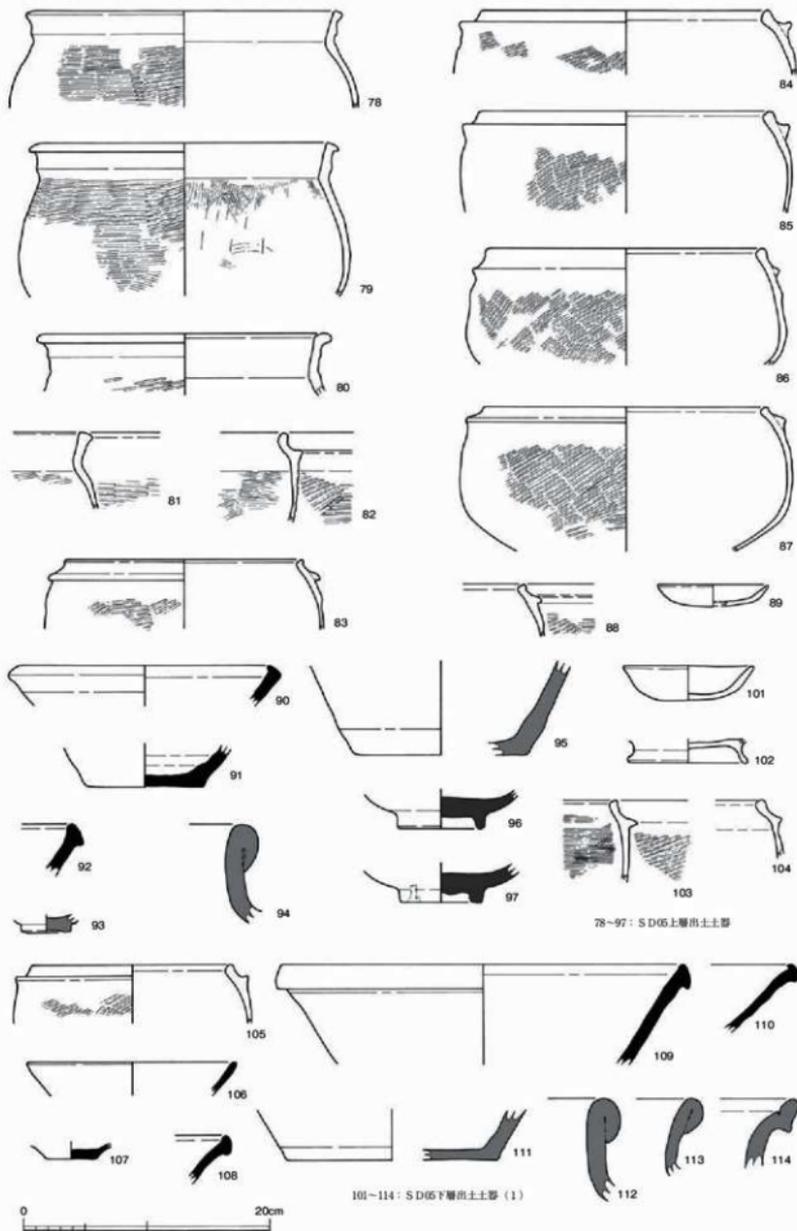
圖 版

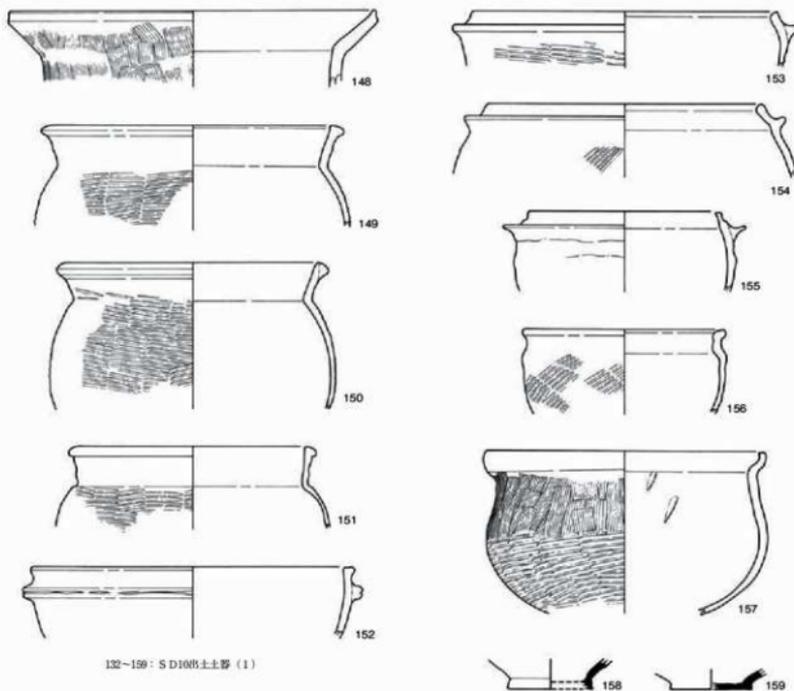
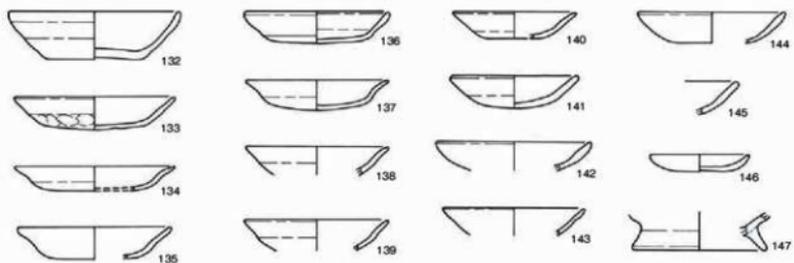
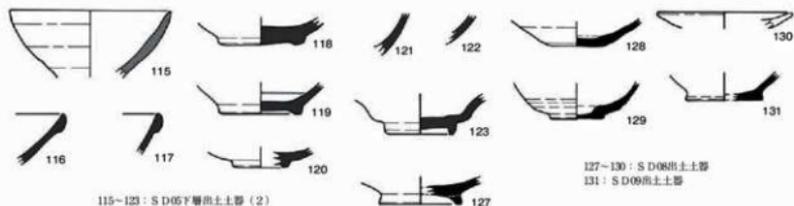


- 24 ~ 25 : P 06出土器
- 26 : S B09出土器
- 27 ~ 28 : P 02出土器
- 29 : P 04出土器
- 30 : S B11出土器
- 31 : P 05出土器
- 32 : P 04出土器

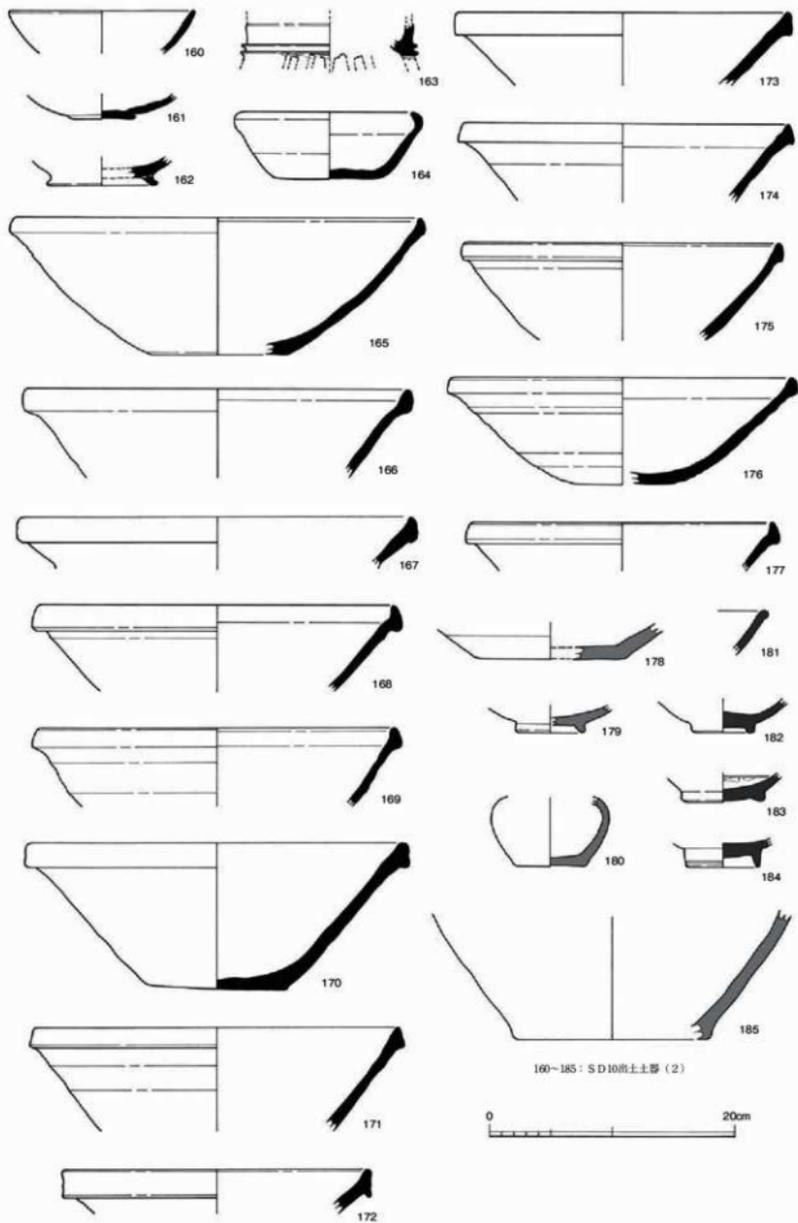


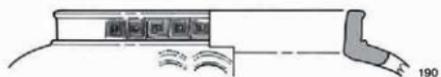
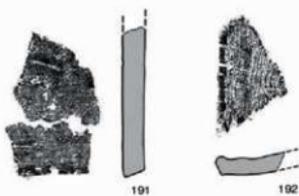
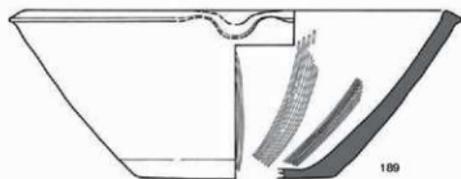
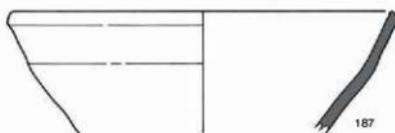
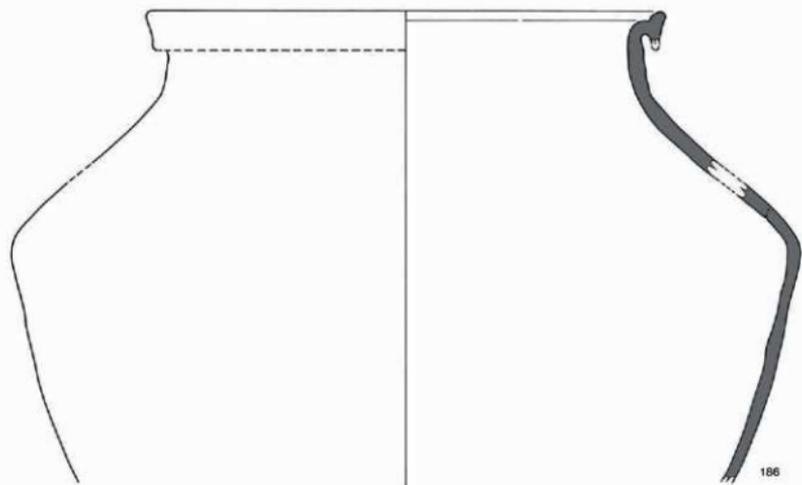






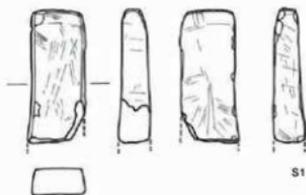
0 20cm



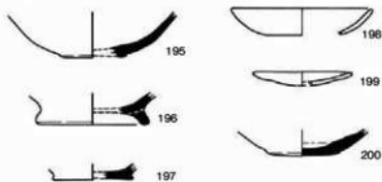


186~192 : S D10出土器 (3)
S 1 : S D10出土石制品

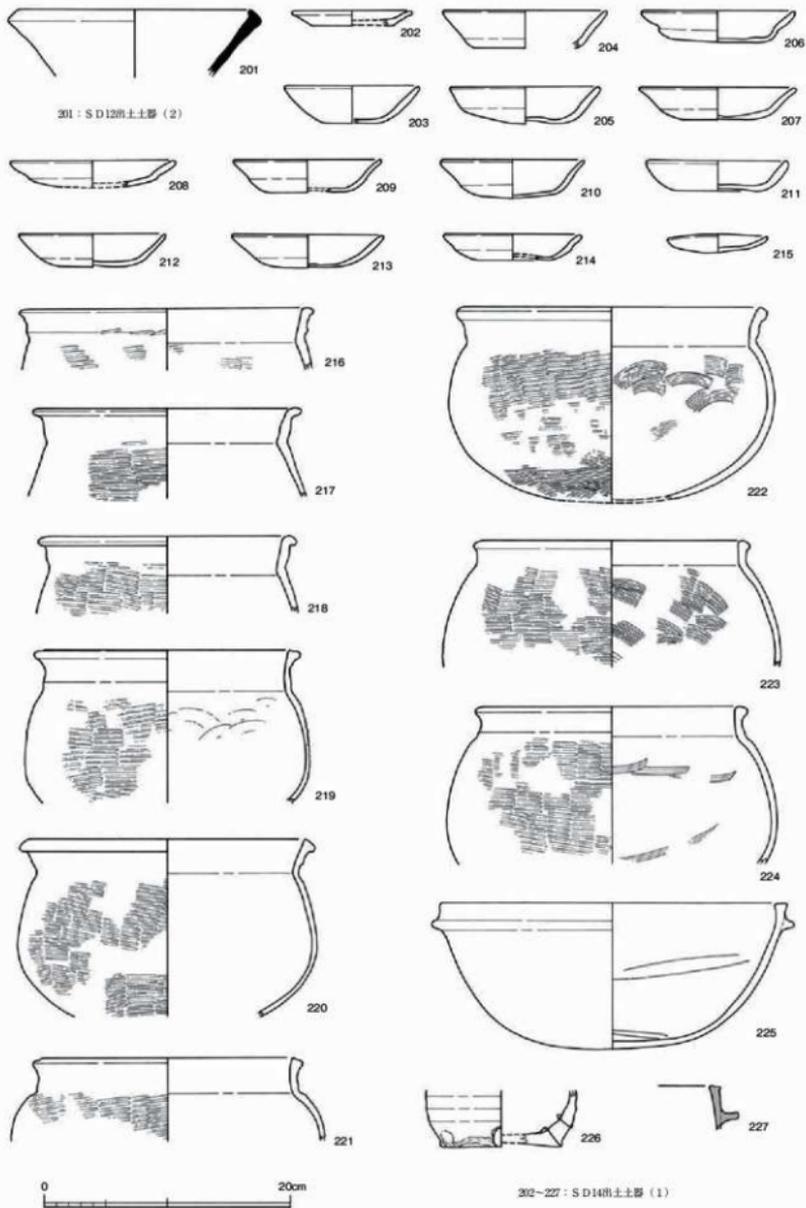
0 20cm

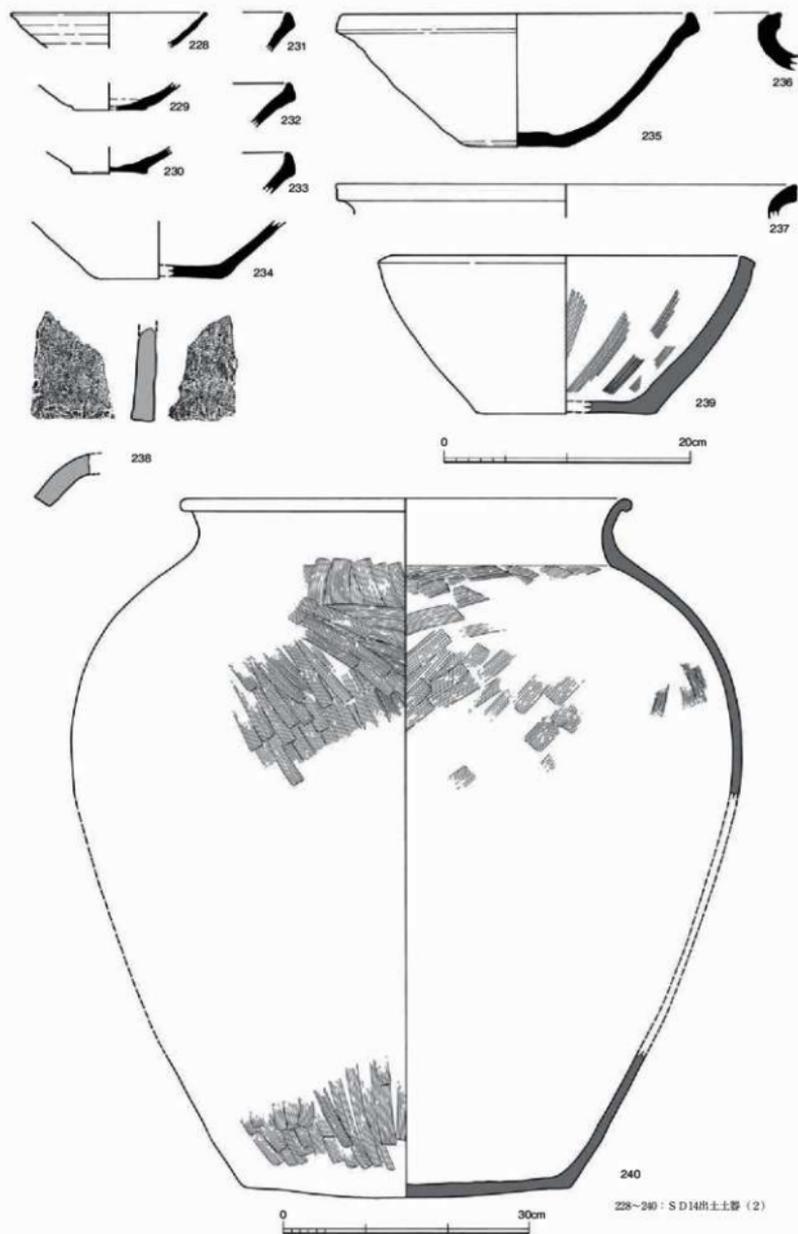


0 10cm

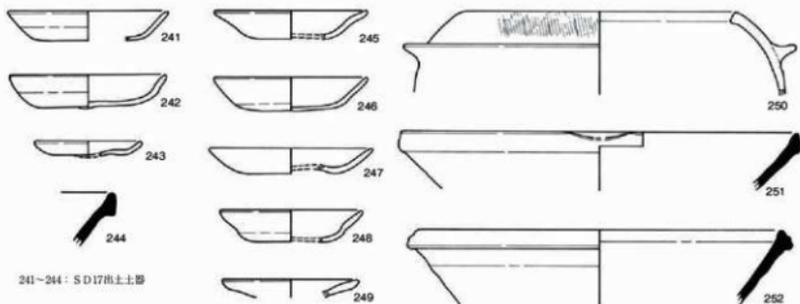


195~197 : S D11出土器 198~200 : S D12出土器 (1)

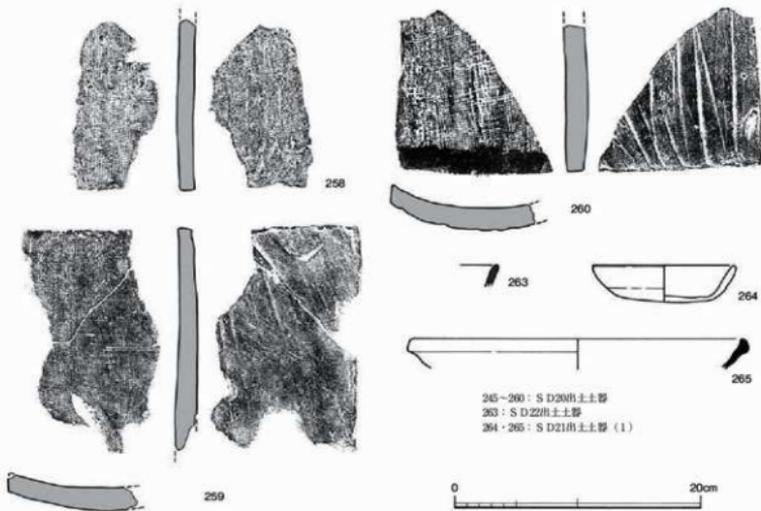
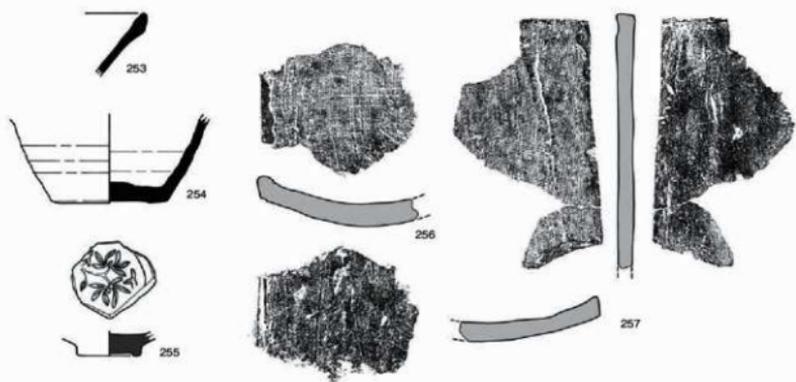




228~240: S D 14 出土土器 (2)

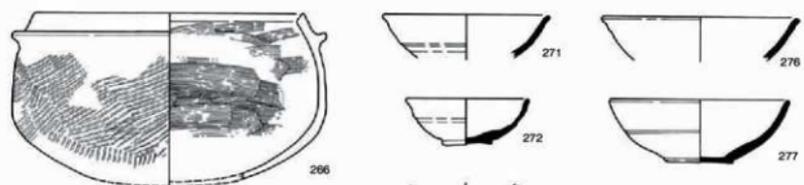


241~244 : S D17南土土器

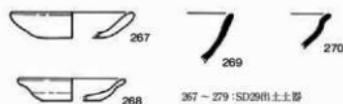


245~260 : S D20南土土器
263 : S D22南土土器
264・265 : S D21南土土器 (1)

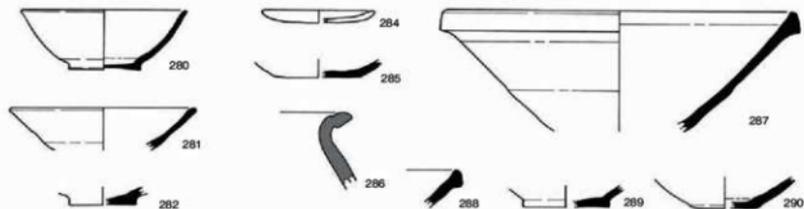
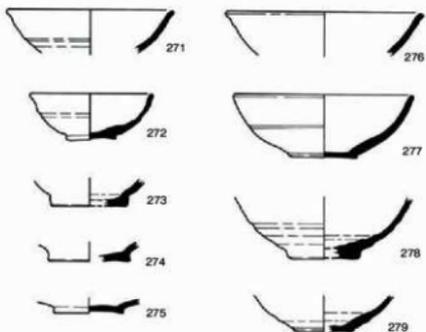
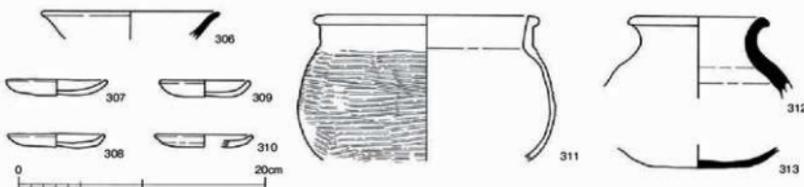
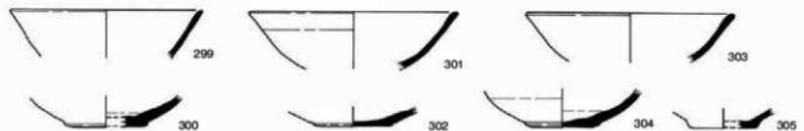
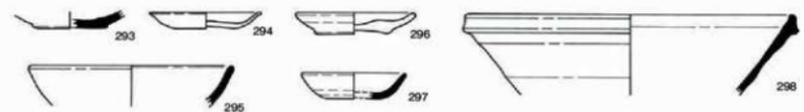
0 20cm

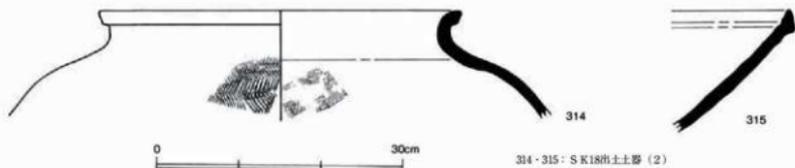


266: SD21出土器(2)

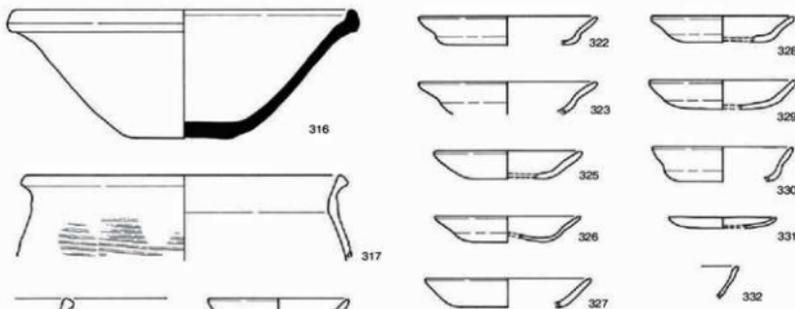


267-270: SD29出土器

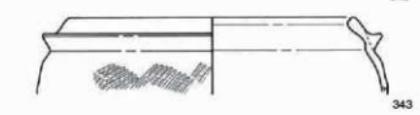
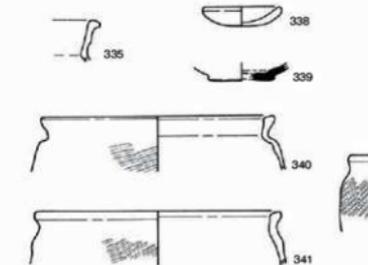
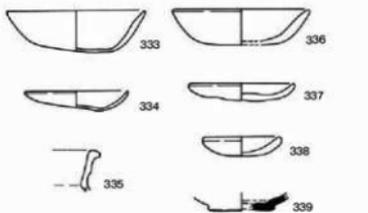
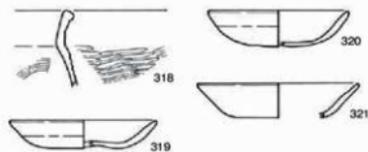
280: S D30出土器 281-282: S E02出土器
284-286: S E03出土器 287-292: 黄出土器293: S K01出土器 294-295: S K02出土器 296: S K05出土器 297: S K06出土器
298: S K09出土器 299: S K08出土器 300: S K11出土器 301: S K12出土器
302-305: S K13出土器 306: S K14出土器 307-313: S K18出土器(1)



314·315: S K18出土器(2)



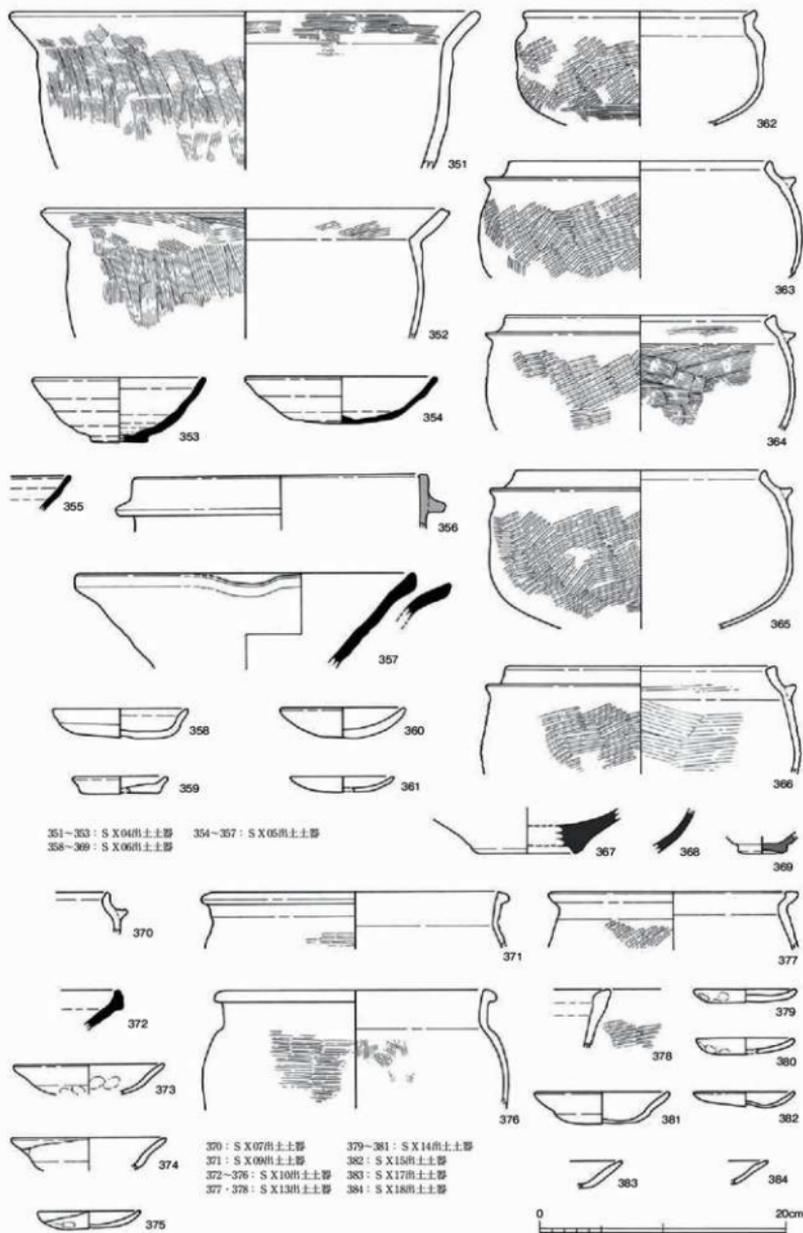
316~323: S K19出土器 327~330: S K23出土器
325: S K20出土器 331: S K25出土器
326: S K22出土器 332: S K26出土器

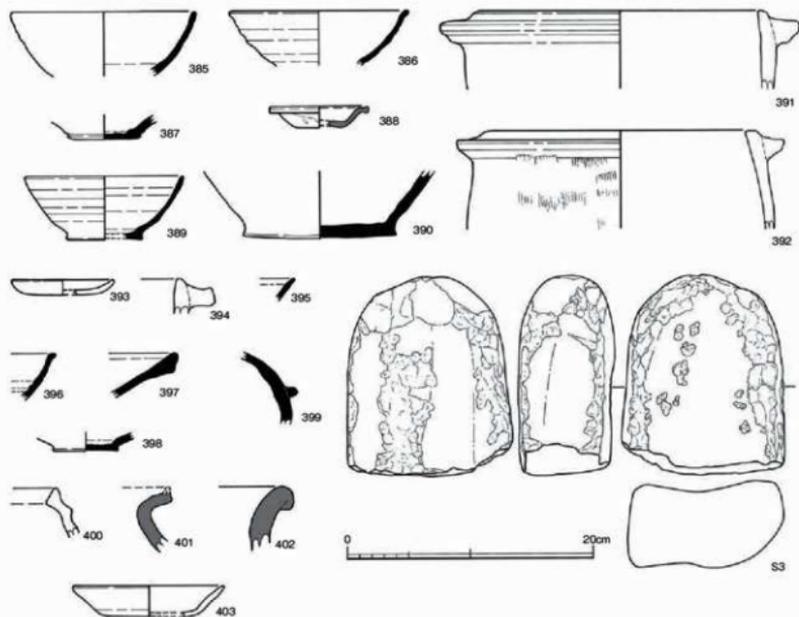


333~335: S K27出土器
336~339: S K28出土器
340~343: S X 01出土器
344~347: S X 02出土器
348~350: S X 03出土器

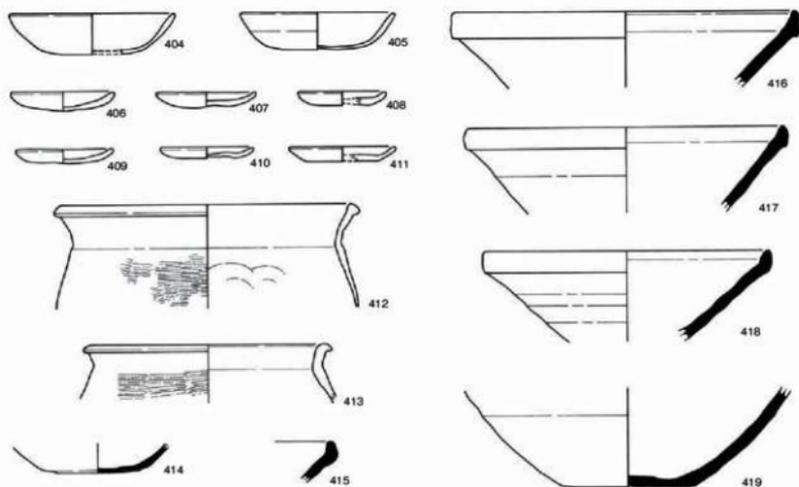


0 20cm

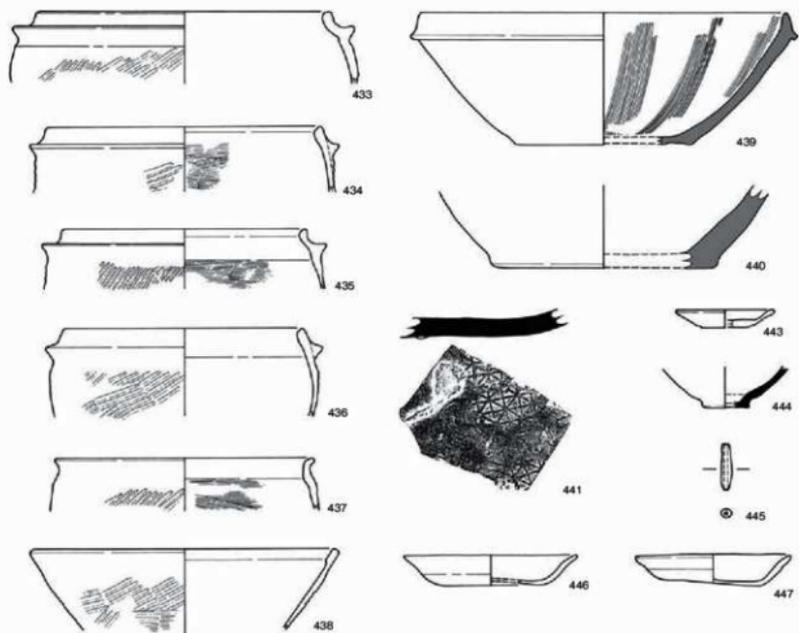
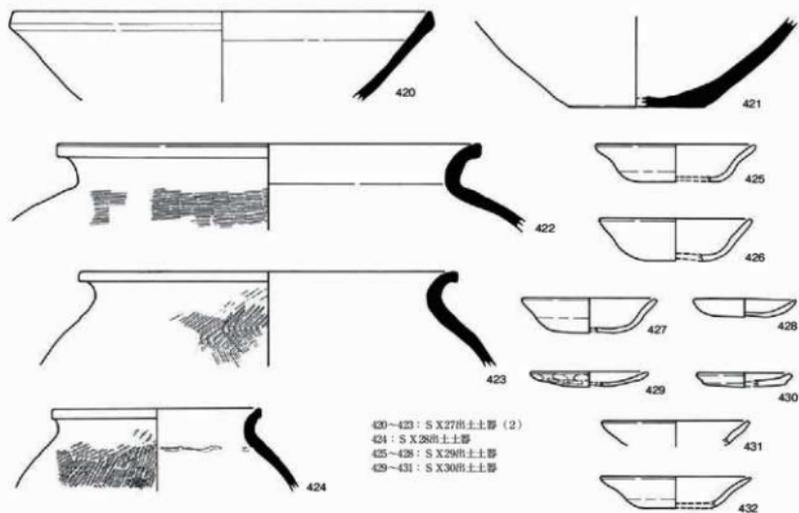




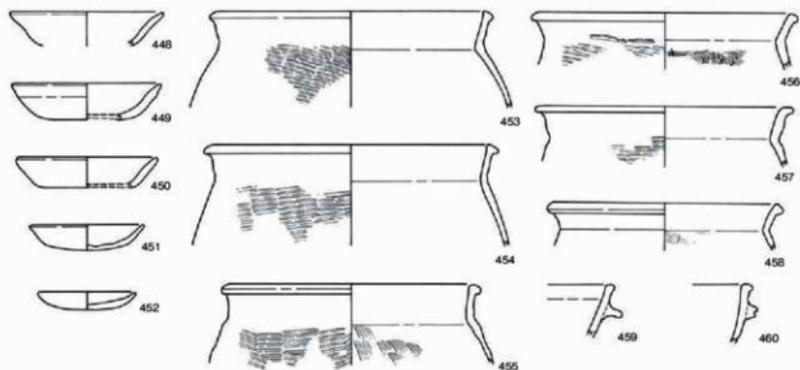
385~387: S X 19的土土器 388: S X 22的土土器 389~392: S X 23的土土器
393~399: S X 24的土土器 400~402: S X 25的土土器 403: S X 26的土土器 S 3: S X 27的土土器



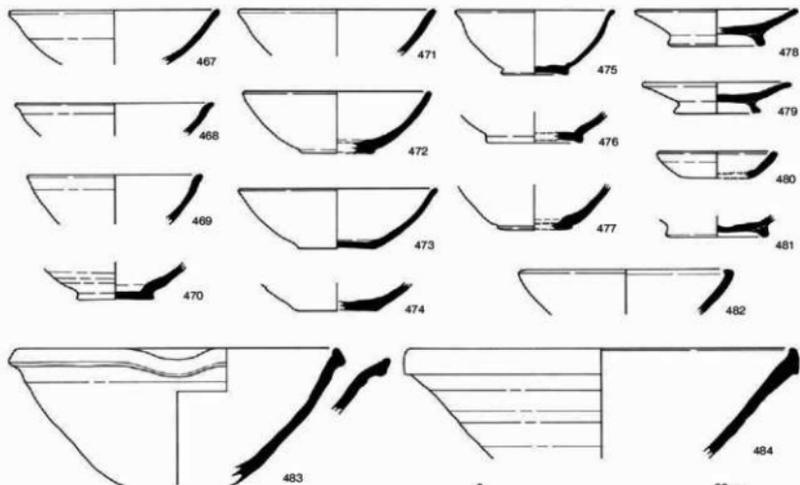
404~419: S X 27的土土器 (1)



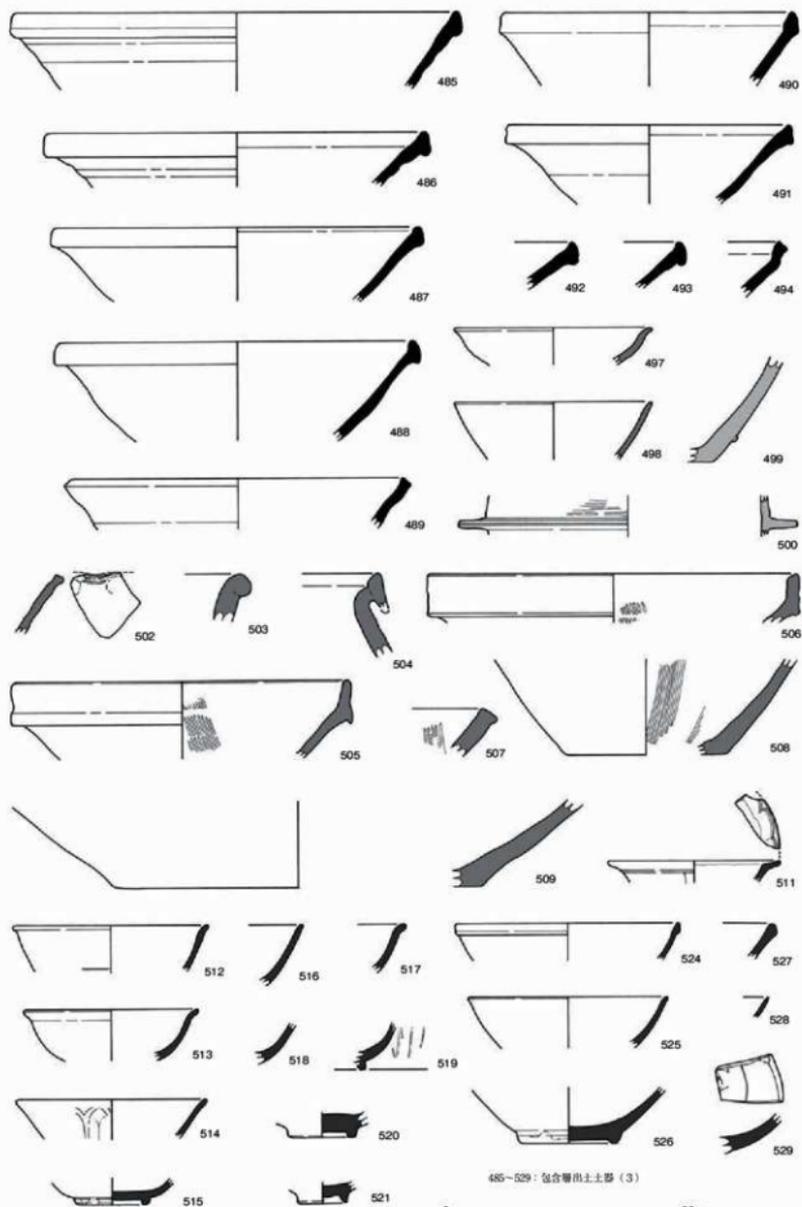
432-441: S X 31出土土器 443: S X 32出土土器
444-445: 高 1 出土土器 446-447: 包含器出土土器 (1)

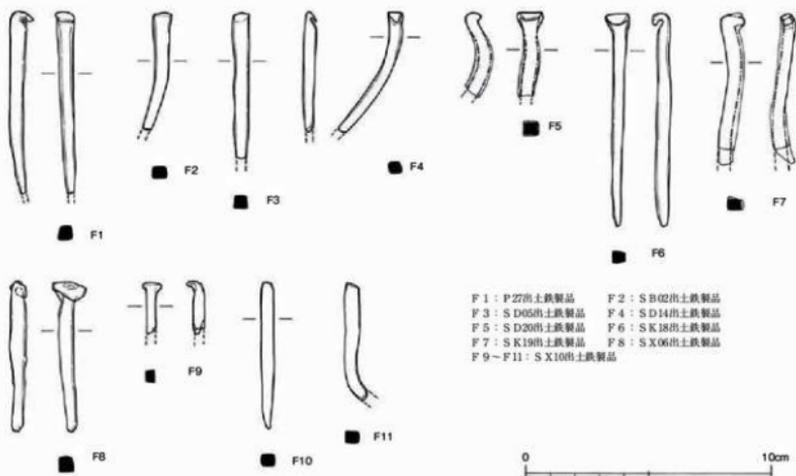
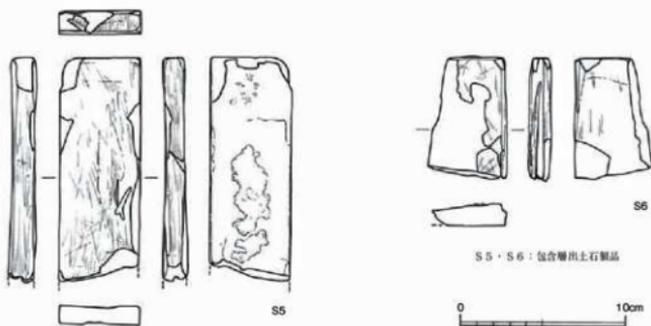
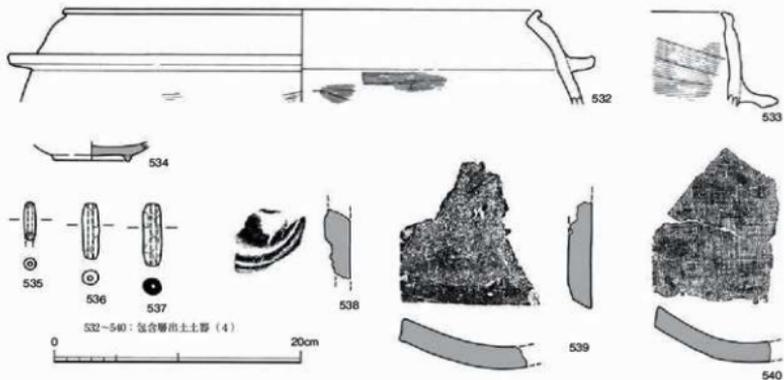


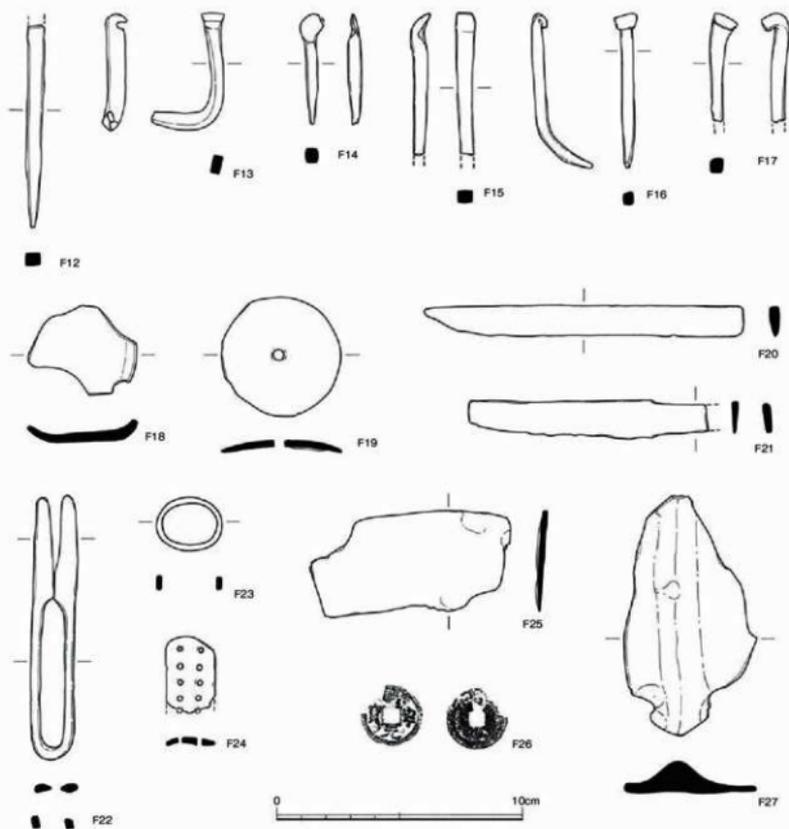
448—464：包含唇出土器（2）



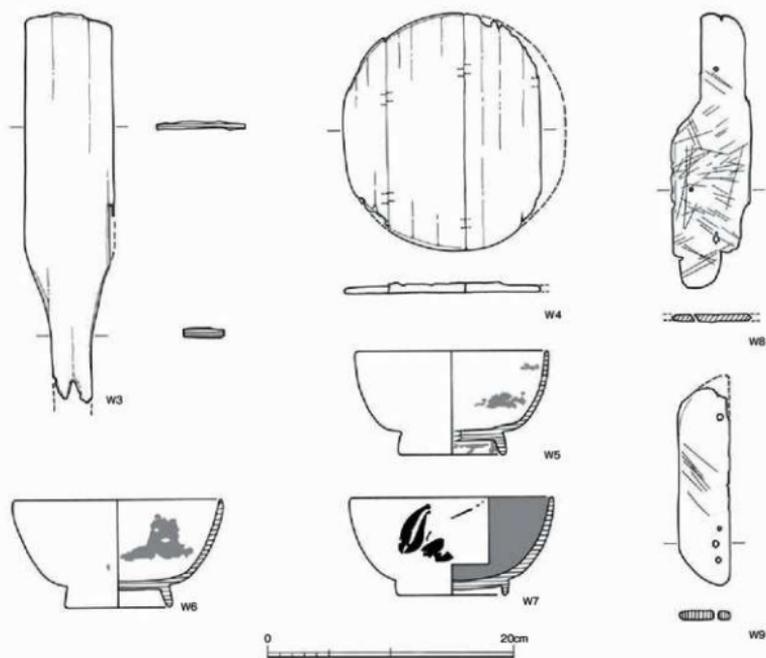
0 20cm



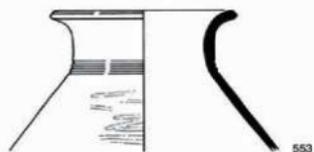
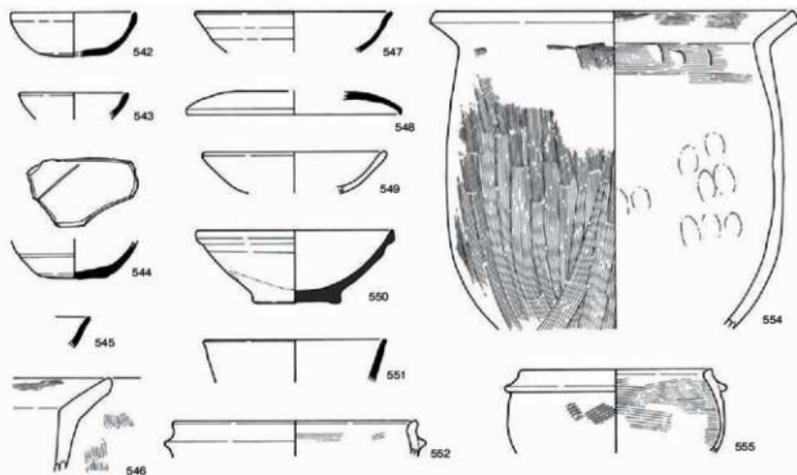




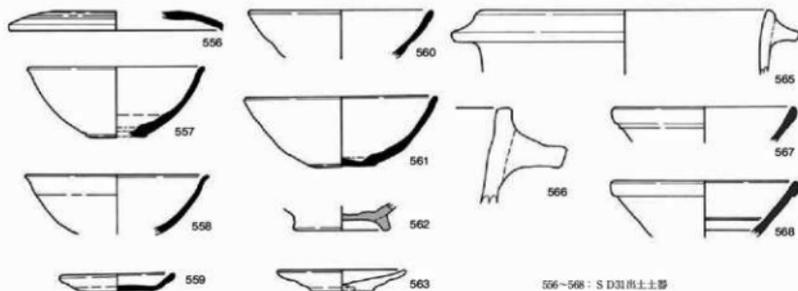
F12: S X 21出土铁制品 F13: S X 17出土铁制品 F14~F17、F20、F23、F24、F27: 包含锡出土铁制品
 F18: S D 20出土铁制品 F19: S K 24出土铁制品 F21: S X 24出土铁制品 F22、F25: S X 21出土铁制品
 F26: S K 19出土铜钱



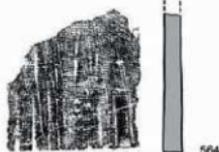
W3~W6 : S E02出土木製品 W7 : S D10出土木製品 W8・W9 : S E04出土木製品



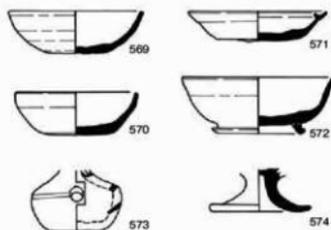
542: S B 17 出土器
544: P 34 出土器
546: P 40 出土器
548: P 36 出土器
550: P 43 出土器
552: P 35 出土器
554: P 39 出土器
543: S B 24 出土器
545: P 37 出土器
547: S B 23 出土器
549: P 42 出土器
551: P 44 出土器
553: P 41 出土器
555: P 46 出土器

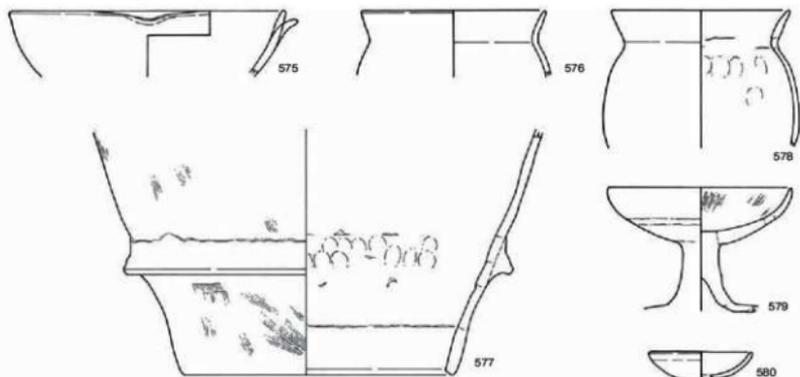


556~568: S D 31 出土器



569~574: S D 34 出土器 (1)

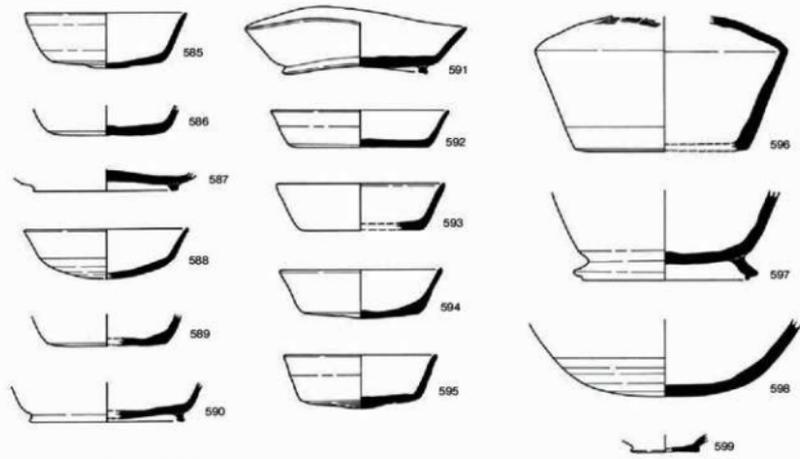
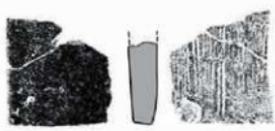




575-580 : S D34南土土器 (2)
581 : S D49南土土器

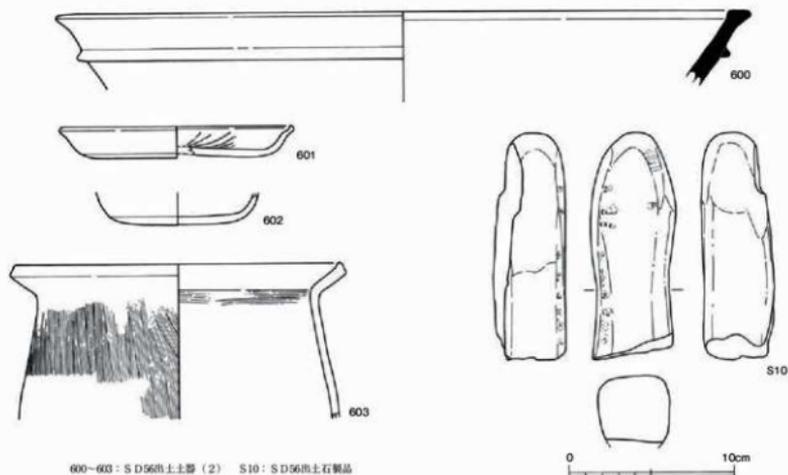


582-584 : S D52南土土器

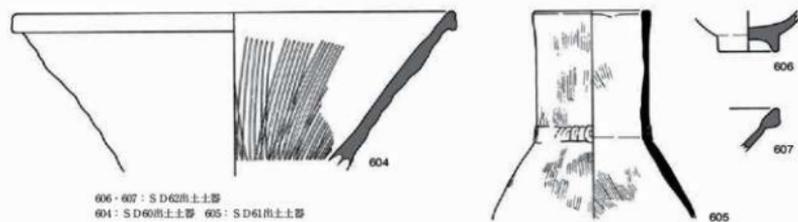
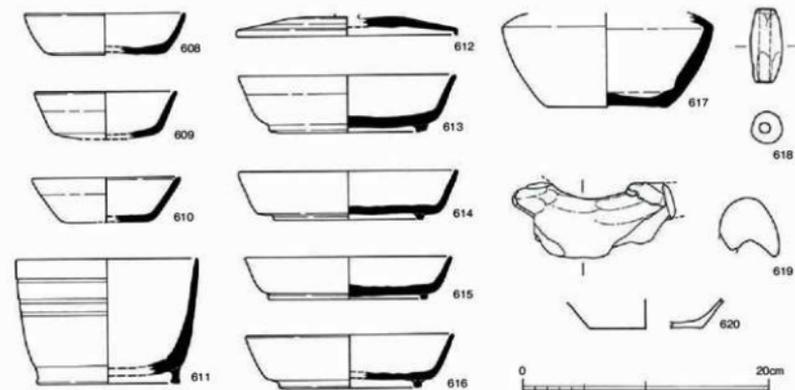


585-587 : S D53南土土器
588-590 : S D55南土土器 591-599 : S D56南土土器



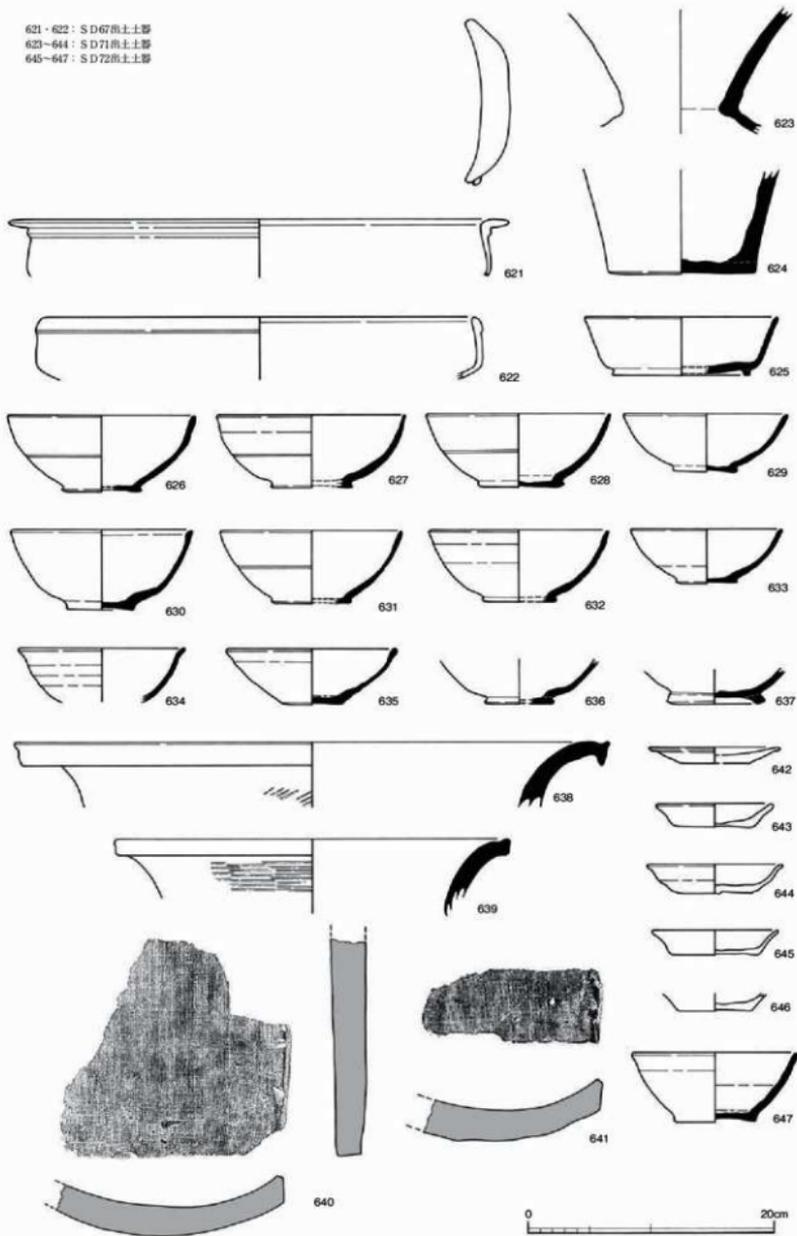


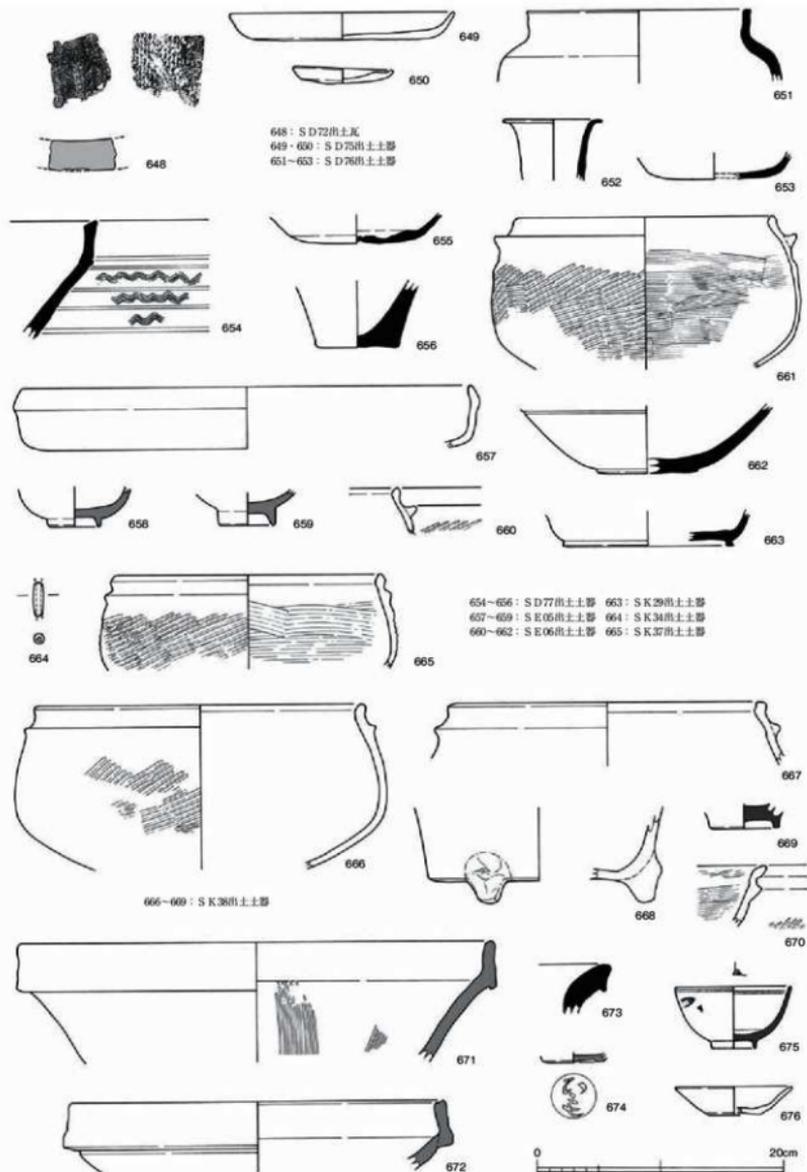
600-603: S D 56出土器(2) S10: S D 56出土石制品

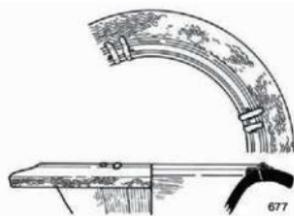
606-607: S D 62出土器
604: S D 60出土器 605: S D 61出土器

606-607: S D 62出土器 608-619: S D 66出土器 620: S D 70出土器

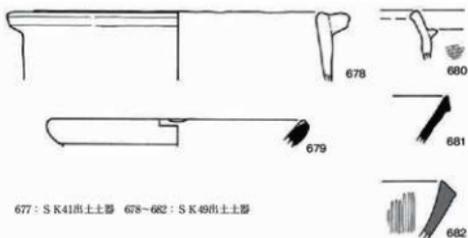
621·622：S D67出土土器
 623~644：S D71出土土器
 645~647：S D72出土土器





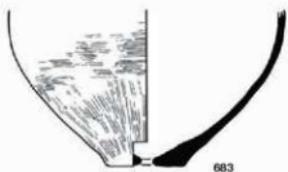


677



678 680
679 681
682

677 : S K 41出土土器 678~682 : S K 49出土土器



683



685



689



686



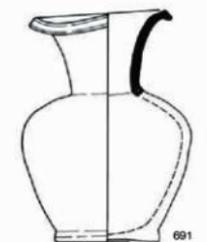
690



687

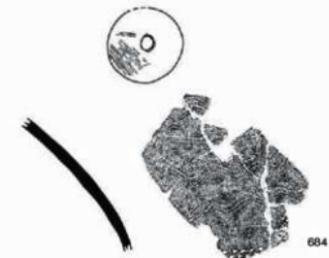


688



691

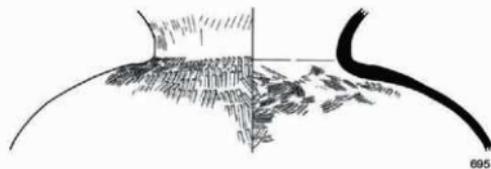
683 : S K 52出土土器
684 : S K 53出土土器
685~691 : S K 57出土土器



684



692



695



693



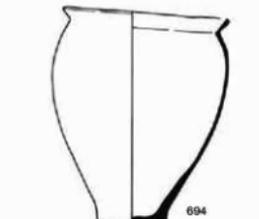
696



697



698



694



699



701

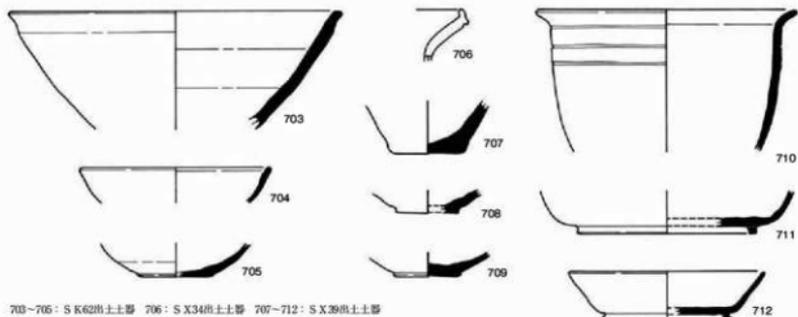


700

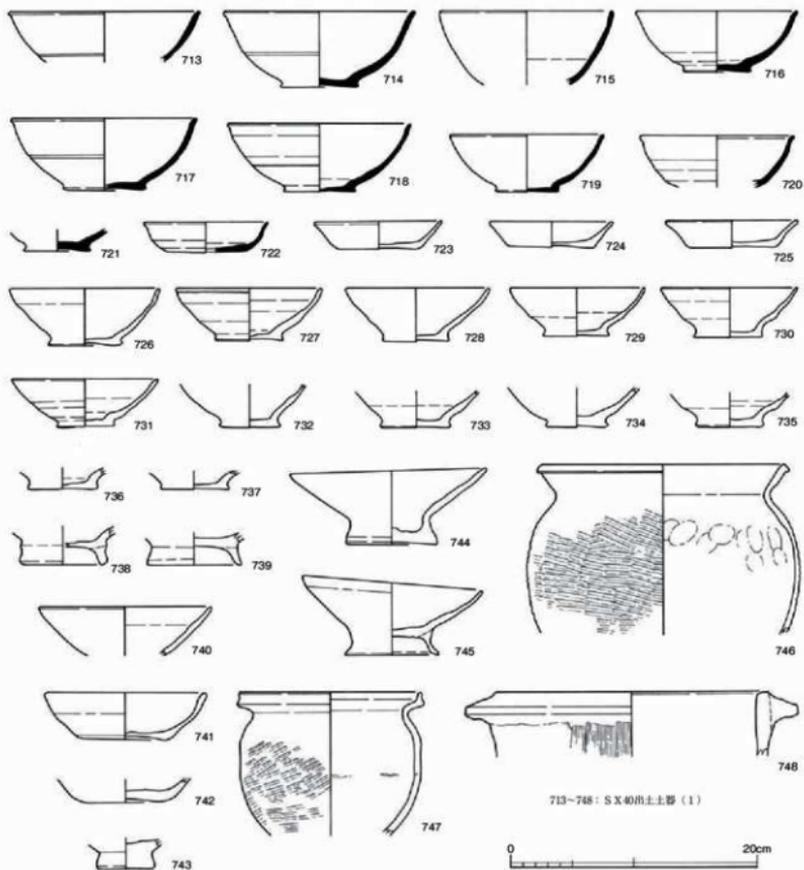


702

692·693 : S K 58出土土器 694 : S K 59出土土器 695~700 : S K 60出土土器 701·702 : S K 61出土土器

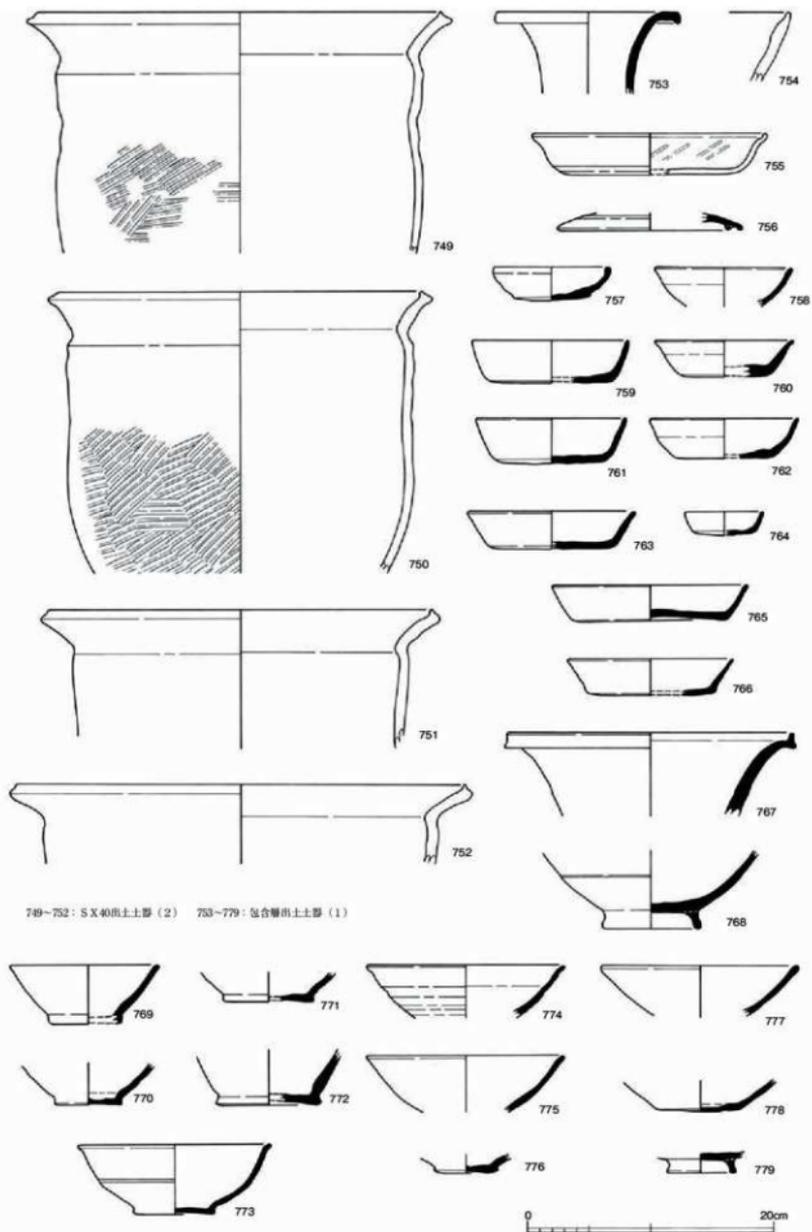


703~705: S K62出土器 706: S X34出土器 707~712: S X39出土器

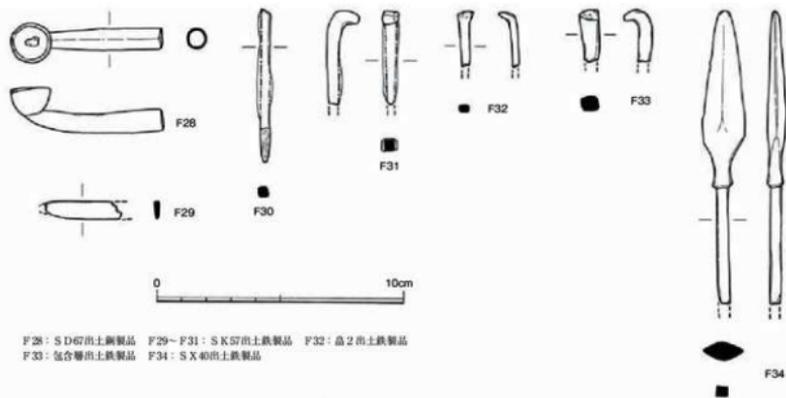


713~748: S X40出土器(1)

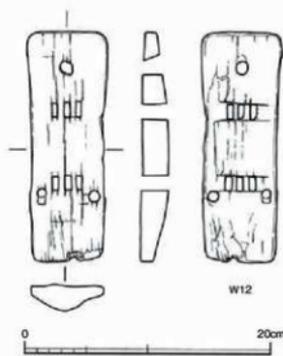
0 20cm



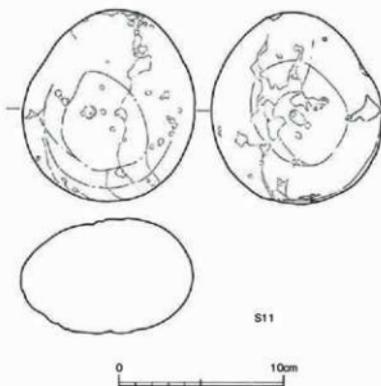
749~752: SX 40出土器(2) 753~779: 包含罐出土器(1)



F26：S D 67出土铜制品 F29～F31：S K 57出土铁制品 F32：盘2出土铁制品
F33：包含器出土铁制品 F34：S X 40出土铁制品



W12：S D 67出土木制品



S11：S X 40出土石制品

写真図版



A地区全景
南西上空から



A地区全景
西上空から



A地区全景
南から

B地区・C地区
全景
北上空から



B地区・C地区
全景
西上空から



B地区・C地区
全景
南上空から





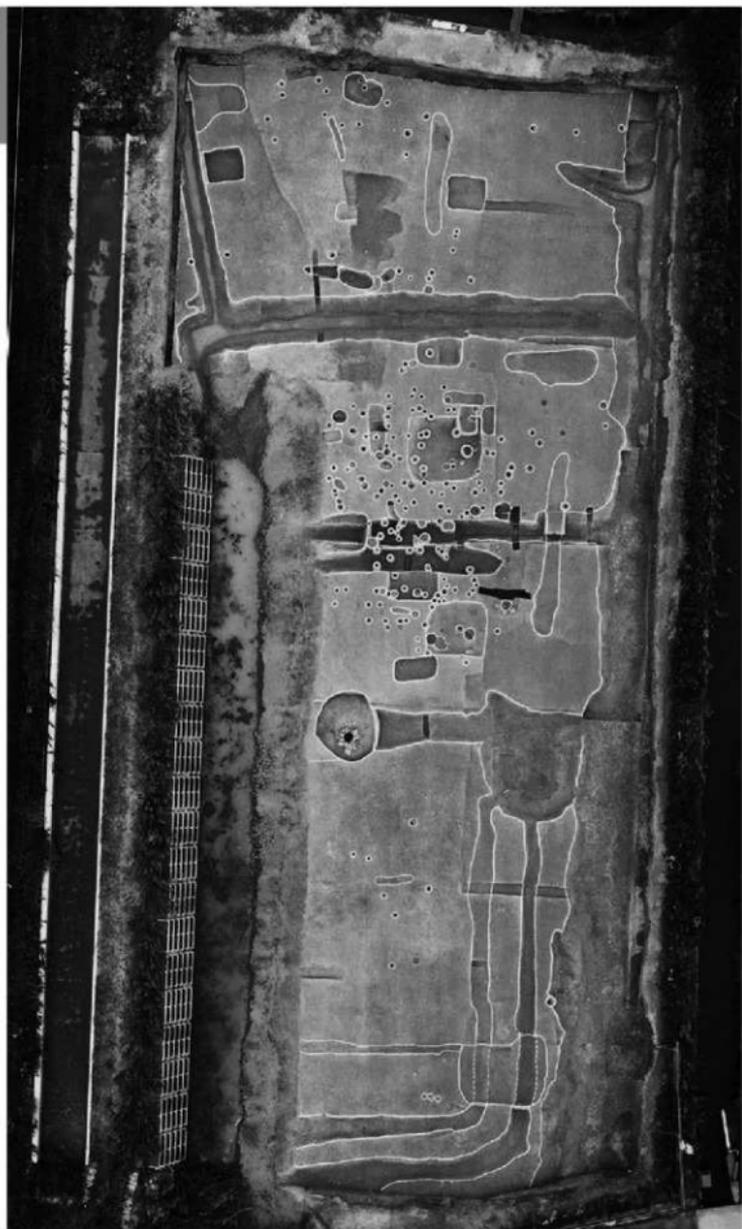
B地区全景
北から

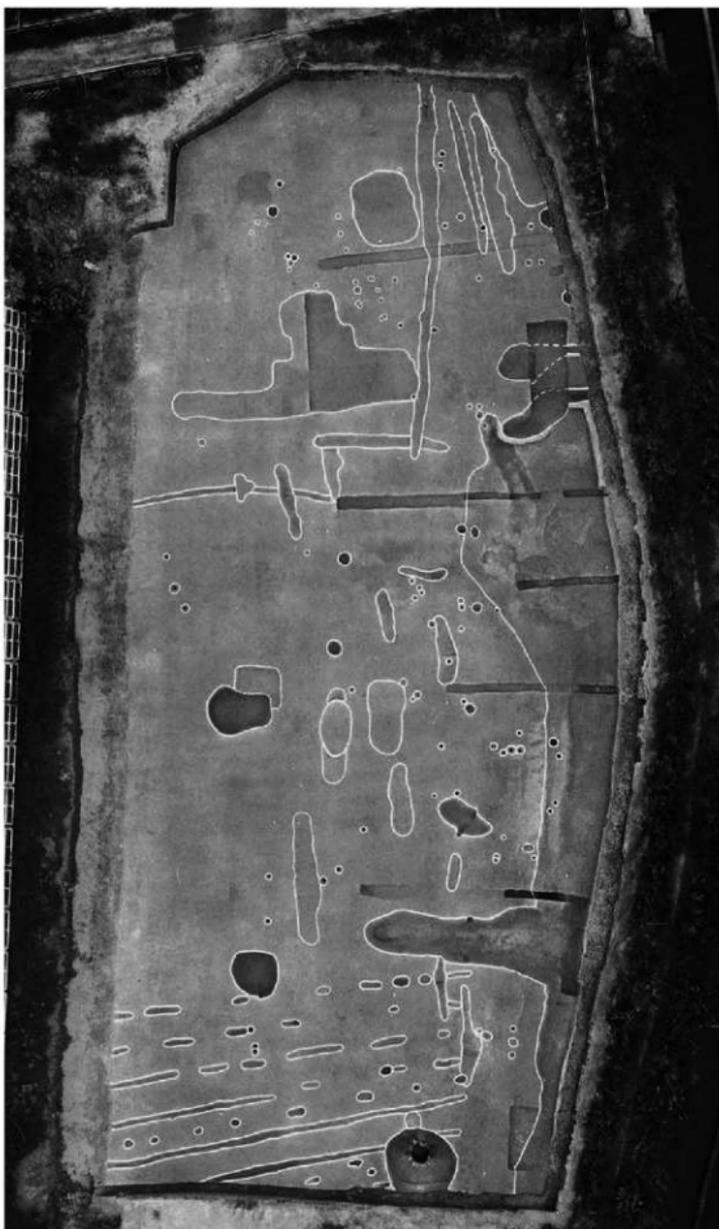


C地区全景
南から



A地区俯瞰

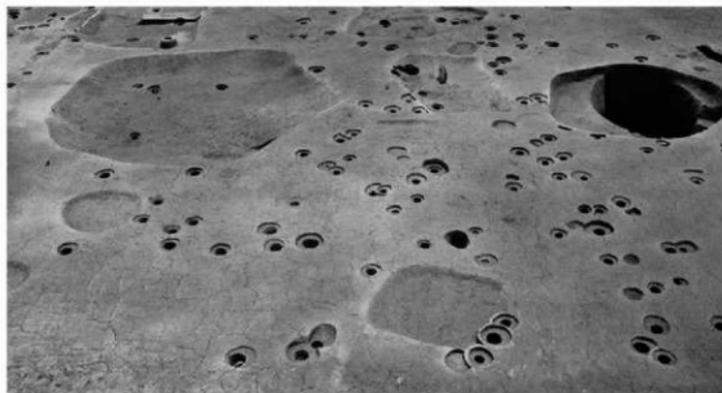




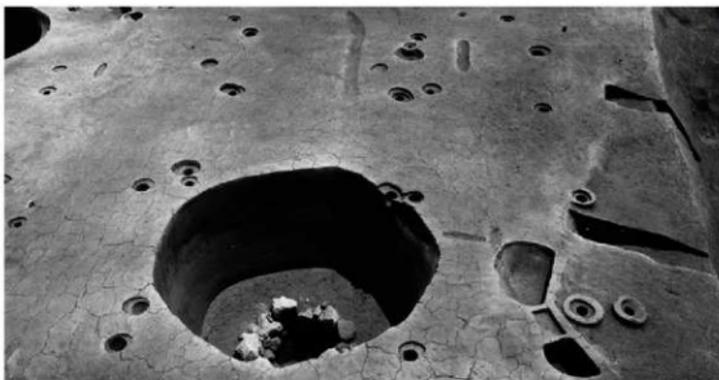
C地区俯瞰



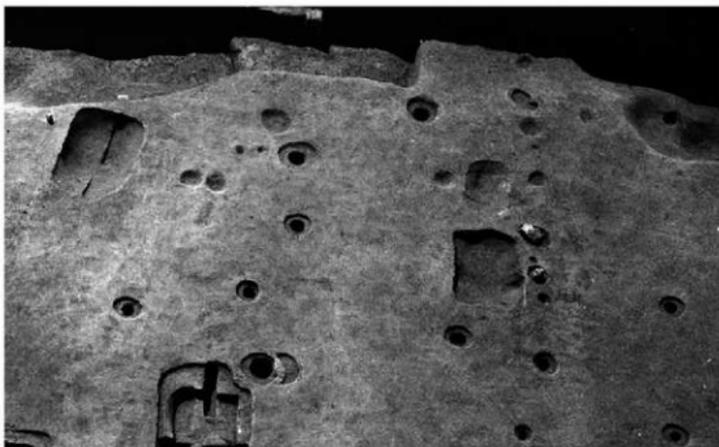
SB01・02
北東から



SB03 西から



SB04 西から



SB05 西から



SB06・07
南から



SD05断面
東から



SD10 南から



(左)
SD11 東から
(右)
SD14 東から



SD14断面
東から



SD19~SD22
南から



(左)
SE01 西から



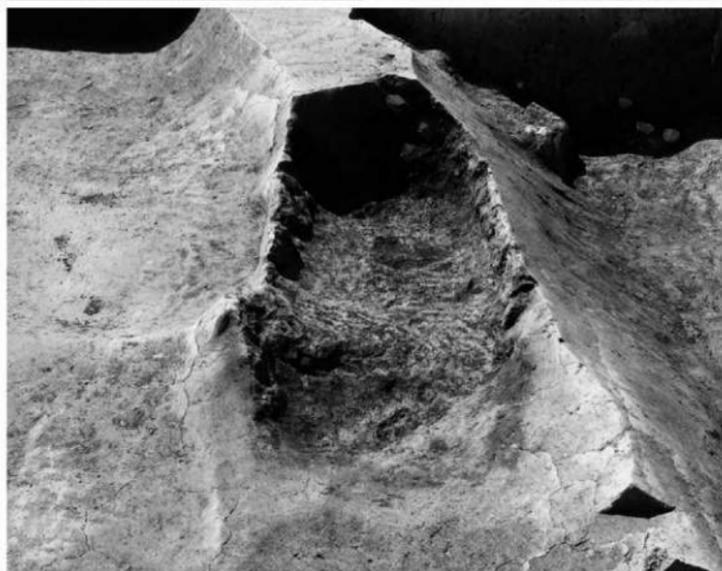
(右)
SE02 西から



(左)
SE03 南から



(右)
SE04 北から



SE05 東から



窠横断面

東から



窠横断面
(断割り後)

東から



窠 床面横断面

東から



SK05

北東から



南西部土抗群

南から



(左)

SK17 南から



(右)

SK18 東から



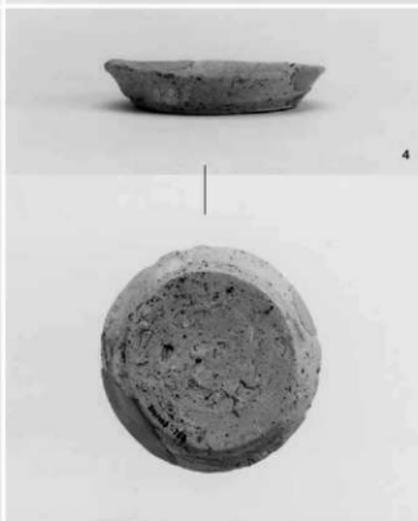
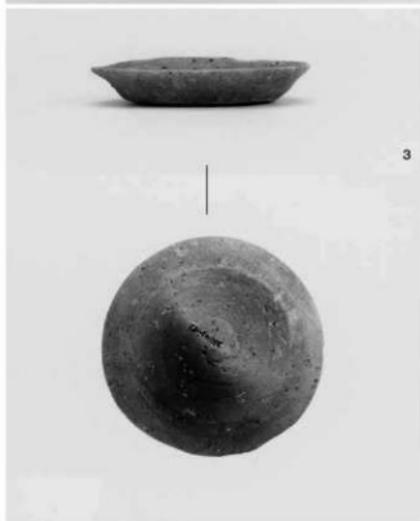
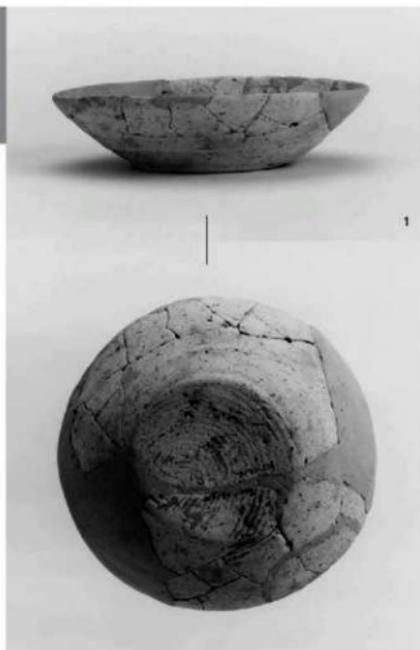
SX27上層
北から



SX27下層
遺物出土状況
北から



SX31
西から



1~4 : SB01出土土器



5



6



8



9



26



29



33

5・6・8：SB01出土土器 9：SB03出土土器 26：SB09出土土器 29・33：P01出土土器



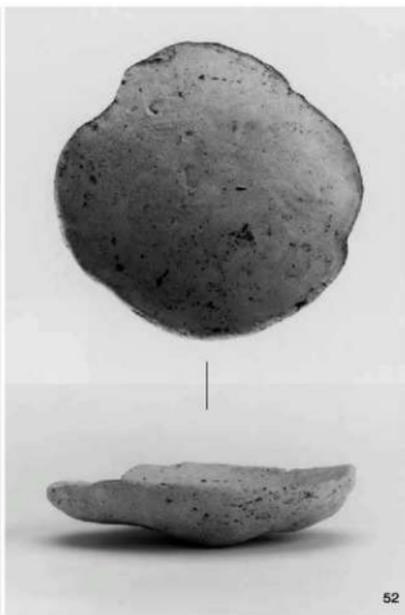
34



41



45



52

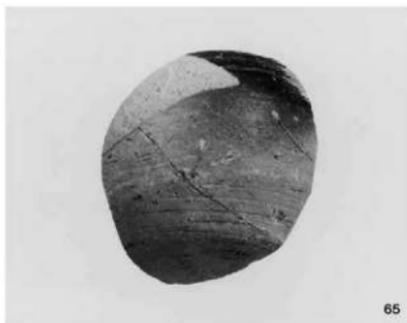


60



63

34 : P08出土土器 41 : P14出土土器 45 : P12出土土器 52 : P23出土土器
60 : P28出土土器 63 : P24出土土器



65



78



67



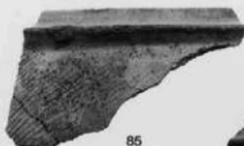
81



76



79



85



84



82



83



88



105



86



94



112



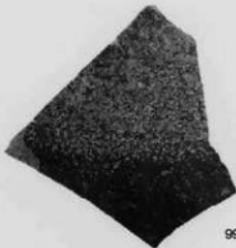
87



101



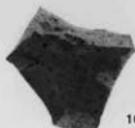
98



99



126



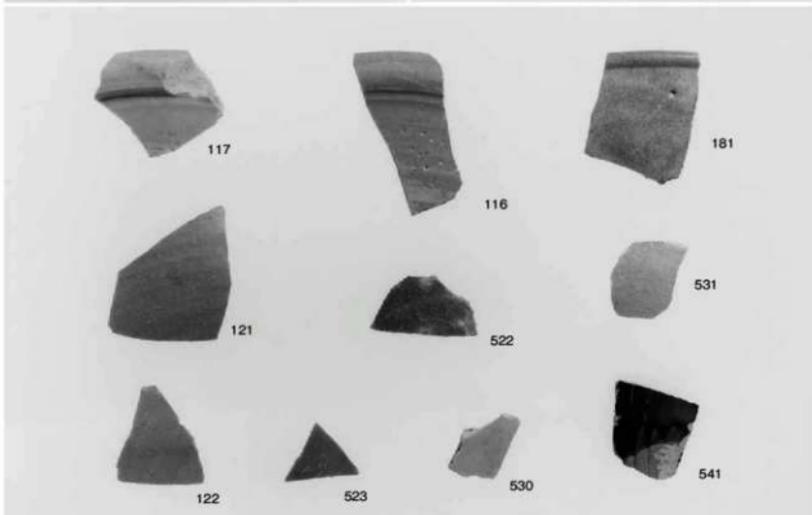
100



125



124



113 · 114 · 116 · 117 · 122 : SD05出土土器 131 : SD09出土土器

132 · 133 · 181 : SD10出土土器 522 · 523 · 530 · 531 · 541 : 包含層出土土器



136



146



164



170



150



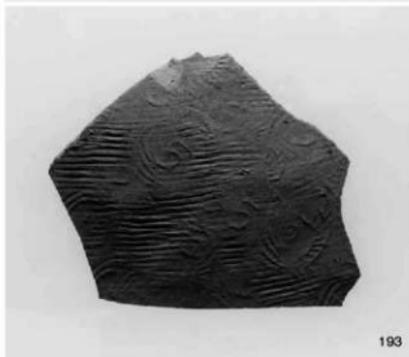
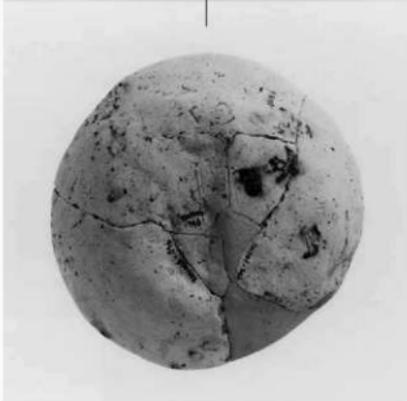
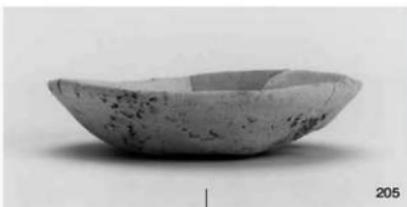
186



157

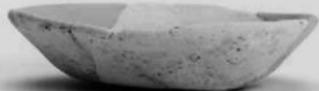


187





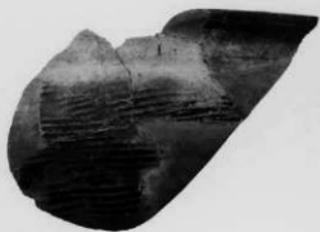
212



213



215



219



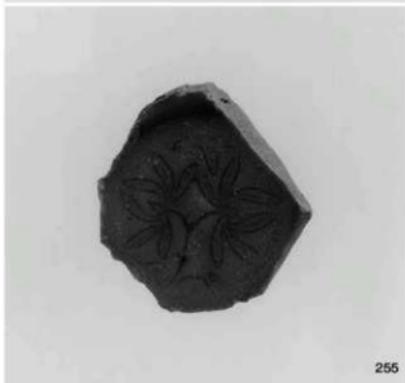
222



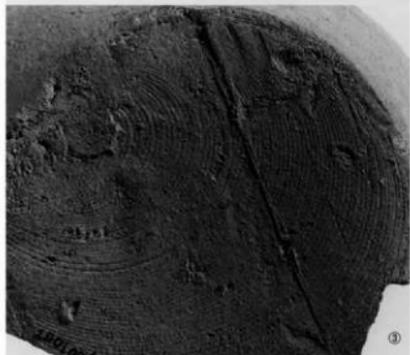
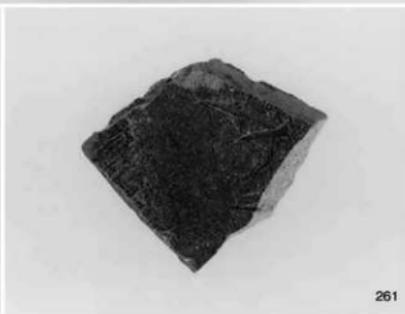
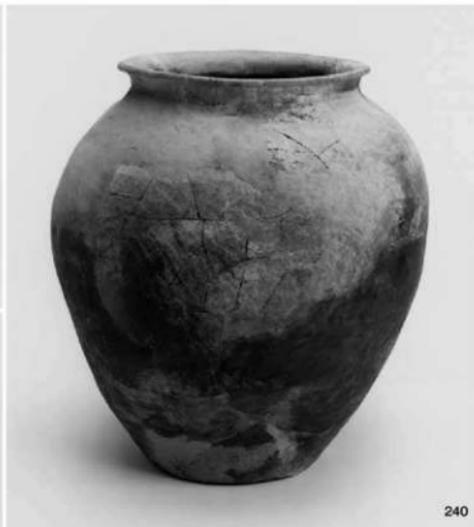
220



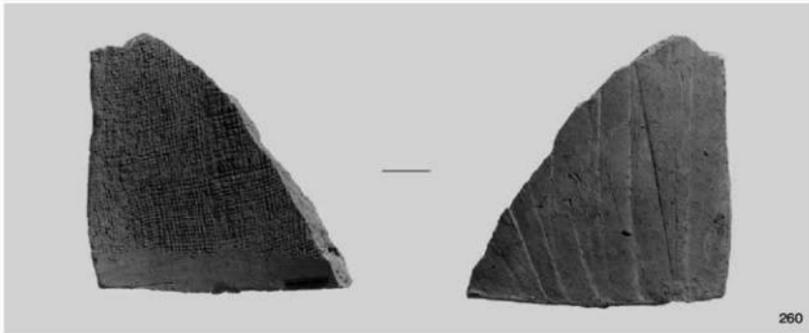
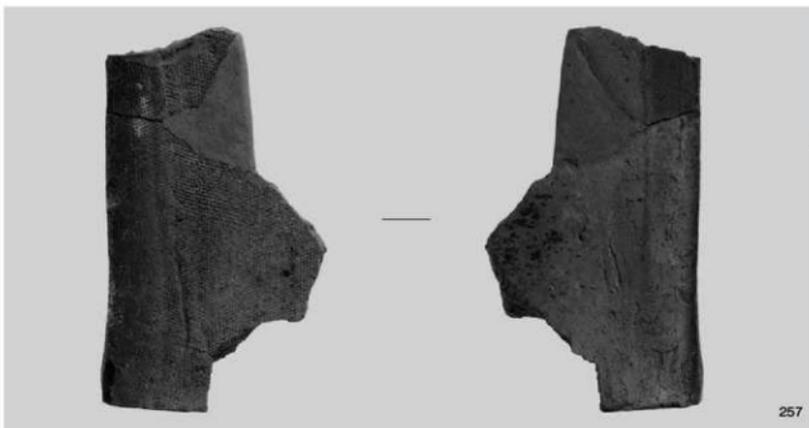
224

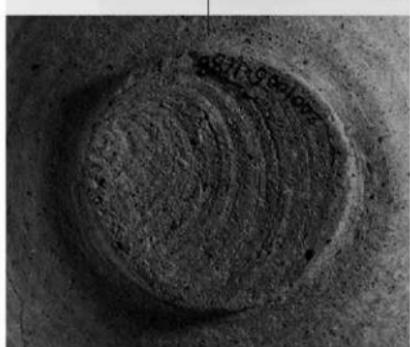


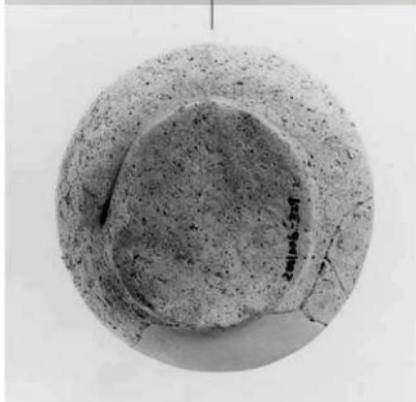
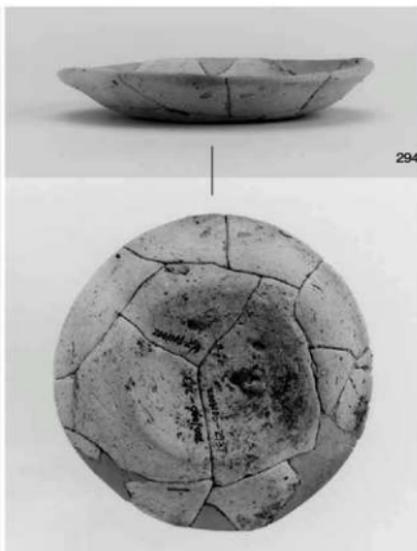
225・235・239：SD14出土土器 242：SD17出土土器 246・255：SD20出土土器



240：SD14出土土器 254・261・262：SD20出土土器 ①240口縁部断面 ②240底部 ③254底部







149・152：SD10出土土器 294：SK02出土土器 296：SK05出土土器 307：SK18出土土器



279



308



311



314



312



316



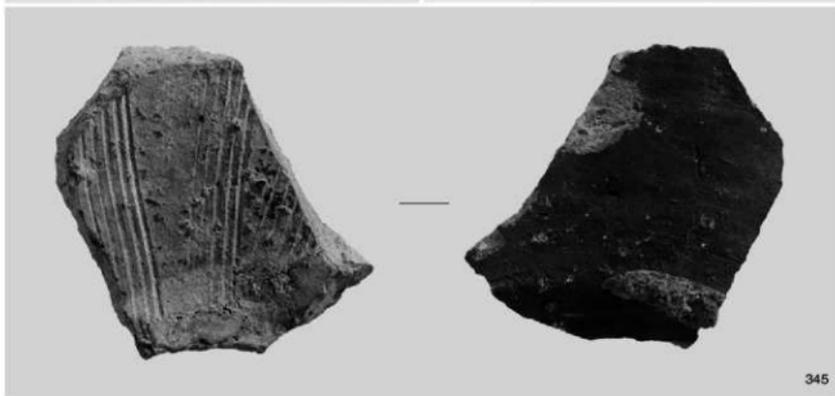
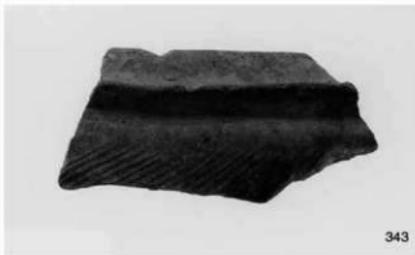
319



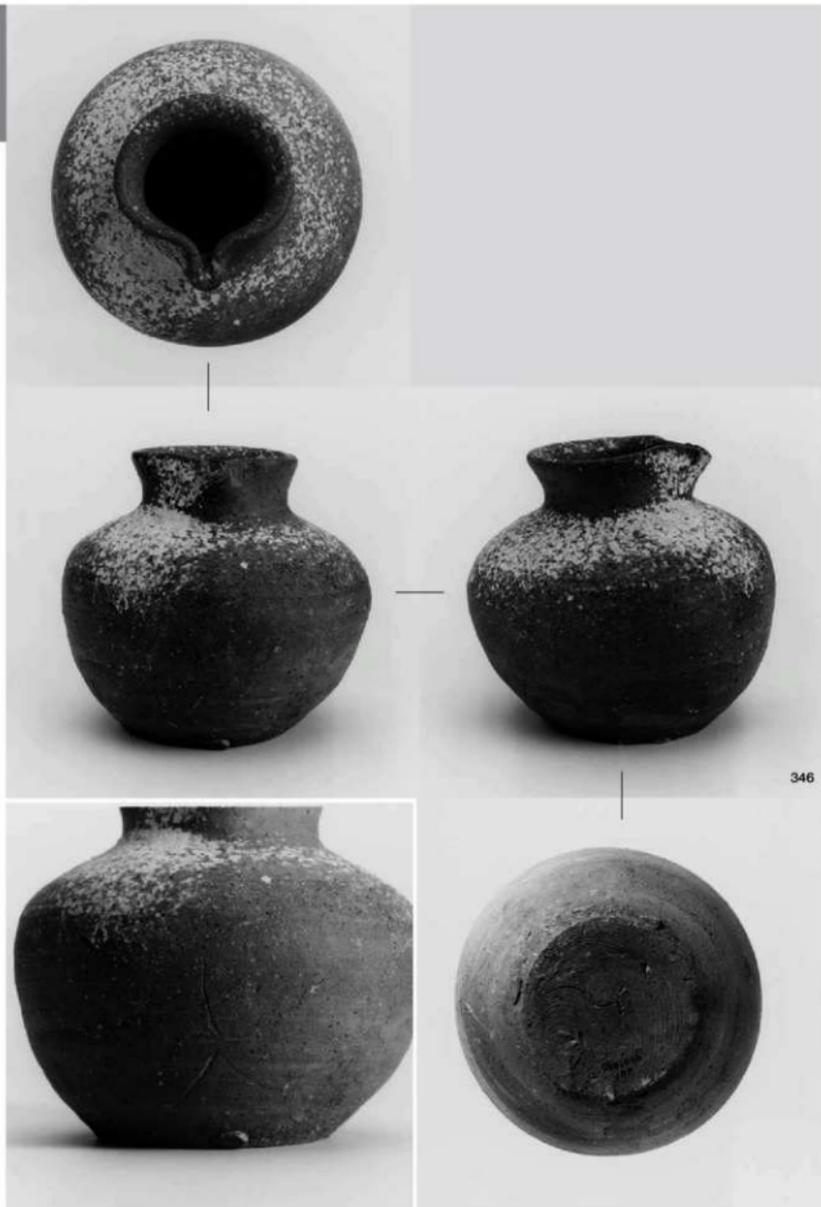
320



324

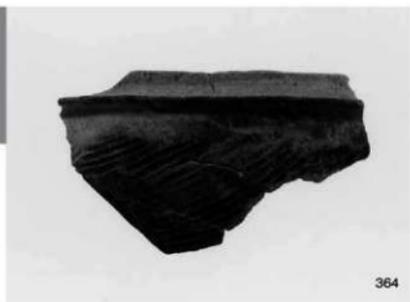


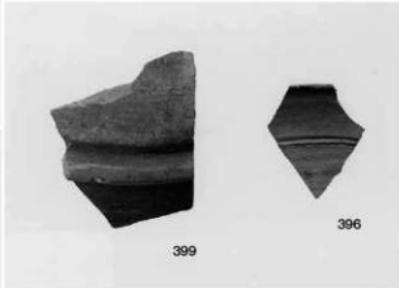
333 : SK27出土土器 337 : SK28出土土器 343 : SX01出土土器 344・345 : SX02出土土器



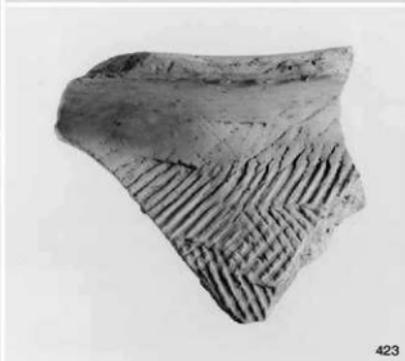
346 : SX02出土土器



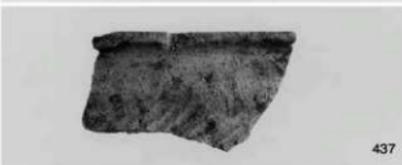
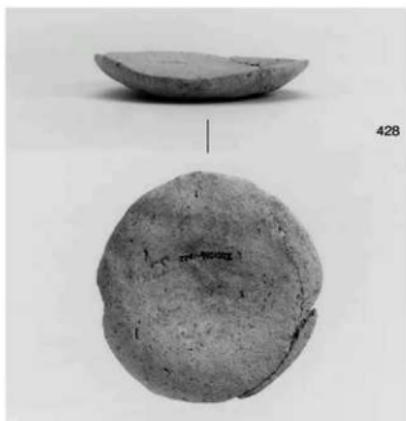




380 : SX14出土土器 382 : SX15出土土器 388 : SX22出土土器
389 · 391 · 392 · 396 · 399 : SX23出土土器 401 : SX25出土土器



403：SX26出土土器 407・409・412・422・423：SX27出土土器 424：SX28出土土器
433：SX31出土土器



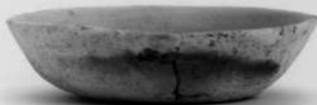
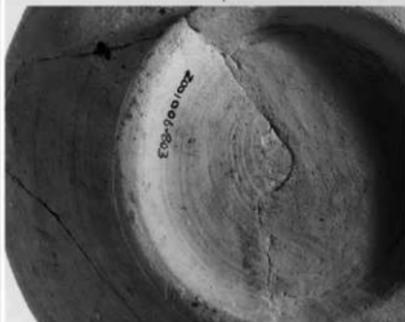
428 : SX29出土土器 436~439・441 : SX31出土土器 445 : 畠1出土土製品 535 : 包含層出土土製品



447



478



449



463



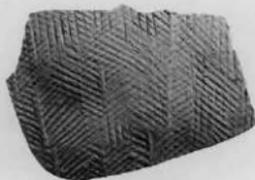
451



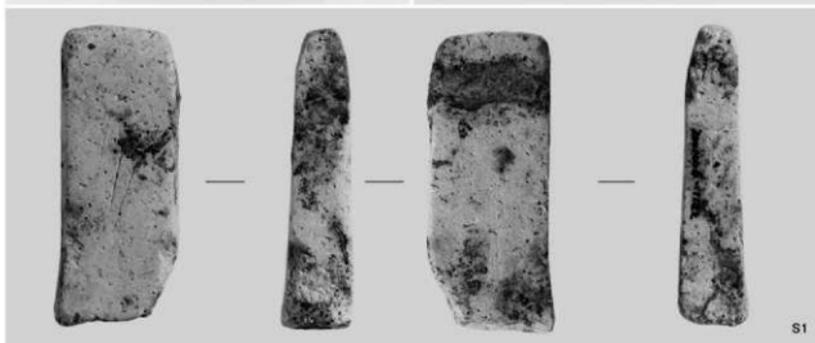
479



473



495



498・501・510・532・536：包含層出土土器 S1：SD10出土石製品



S2：SX21出土石製品 S3・S4：SX27出土石製品 S5：包含層出土石製品



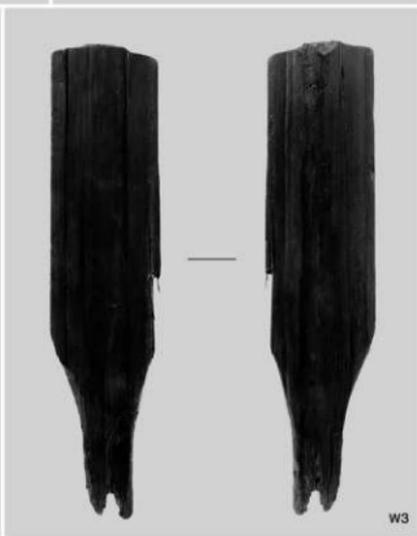
W2



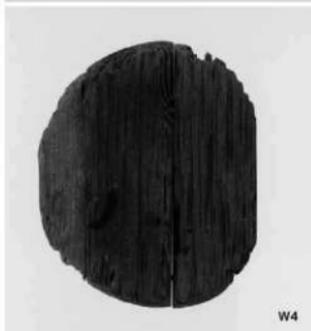
①



W1



W3



W4

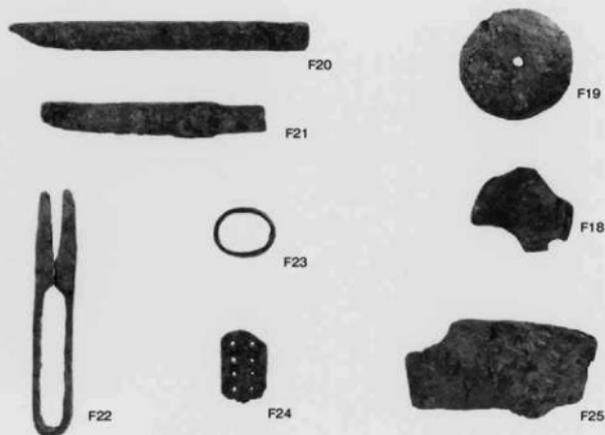
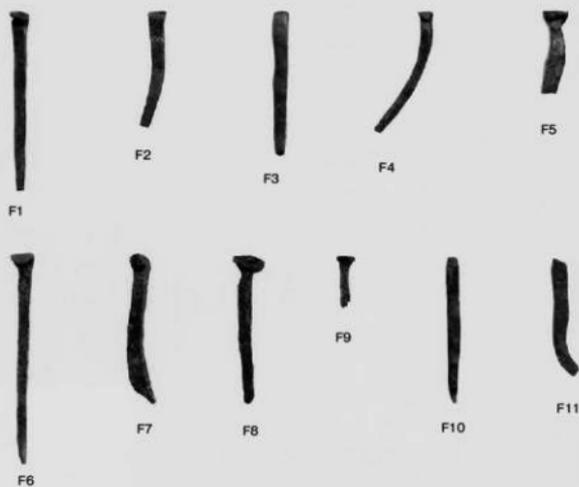


W8



W9

W1・W2・W8・W9：SE04出土木製品 W3・W4：SE02出土木製品



F1：P27出土鉄製品 F2：SB02出土鉄製品 F3：SD05出土鉄製品 F4：SD14出土鉄製品
F5：SD02出土鉄製品 F6：SK18出土鉄製品 F7：SK19出土鉄製品 F8：SX06出土鉄製品
F9～F11：SX10出土鉄製品 F18：SD20出土鉄製品 F19：SK24出土鉄製品
F20・F23・F24：包含層出土鉄製品 F21：SX24出土鉄製品 F22・F25：XS21出土鉄製品



南地区全景
北西上空から



D地区・E地区全景
東上空から



D地区・E地区全景
北東上空から



D・E地区俯瞰
北東上空から



D・E地区全景
北西から



D地区全景
南東から



E地区全景
南から



M地区・L地区
全景
東上空から



M地区・L地区
全景
南上空から



M地区第1面
全景 東から



M地区第2面
全景 東から



M地区第2面
全景 北から



F~H地区全景
西上空から



F~H地区全景
北上空から



(左)
F地区第1面
全景 西から



(右)
F地区第2面
全景 西から

(左) G地区全景
南東から
(右) H地区全景
北西から



(左) I地区全景
北西から
(右) O地区全景
北西から



J地区全景
北西から





N・O地区全景
北東上空から



N地区俯瞰
北東上空から



O地区俯瞰
北東上空から

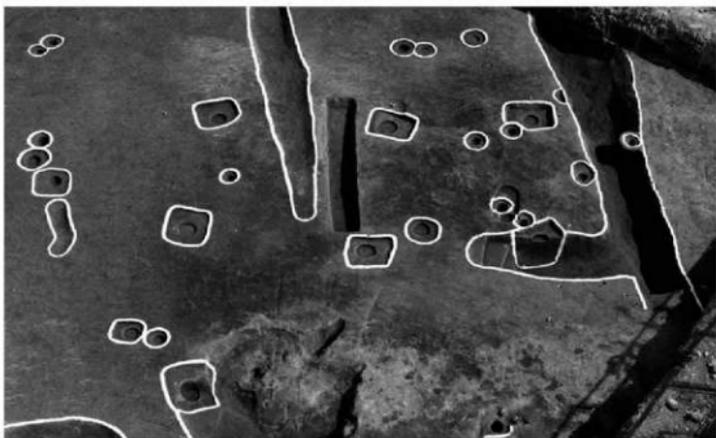


P地区全景
北西から

SB14・15・17
北西から



SB18 北東から



SB20 北東から





SD31断面
南東から



(左) SD32断面
南東から
(右) SD32全景
南東から



SD66断面
東から



SD52・53

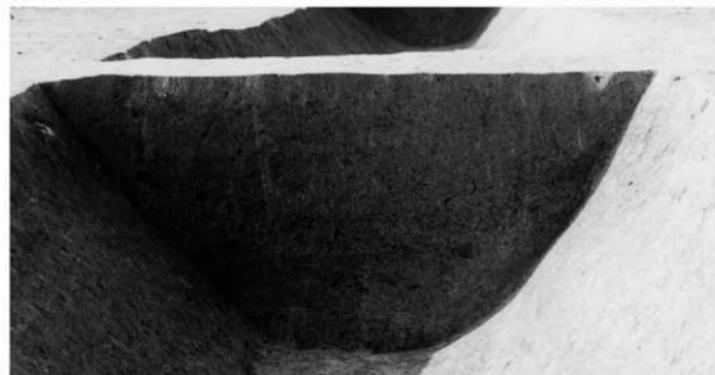
北から



(左上) SD53土器
出土状況 西から

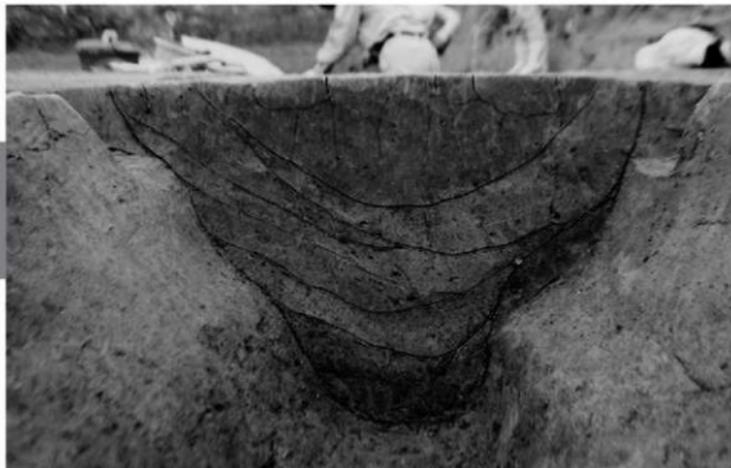
(左下) SD53断面
北から

(右) SD54全景
北から



SD54断面

北から



SD61断面
西から



SD62断面
南から



(左) SD71全景
西から
(右) SD71断面
西から

SD75断面
南から



SD76・77断面
北から

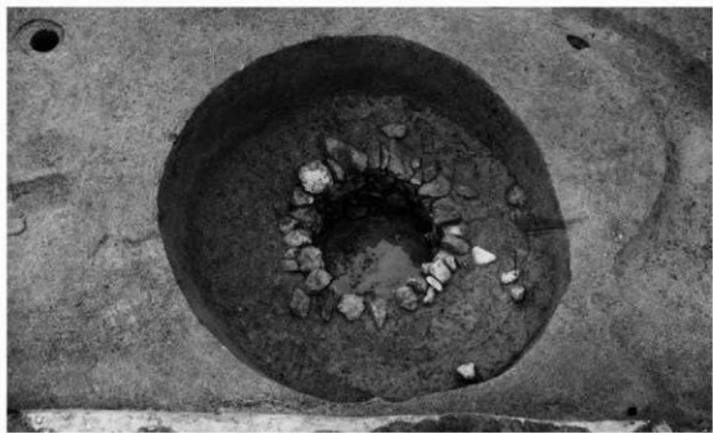


SD77 北西から





SE05全景
北西から



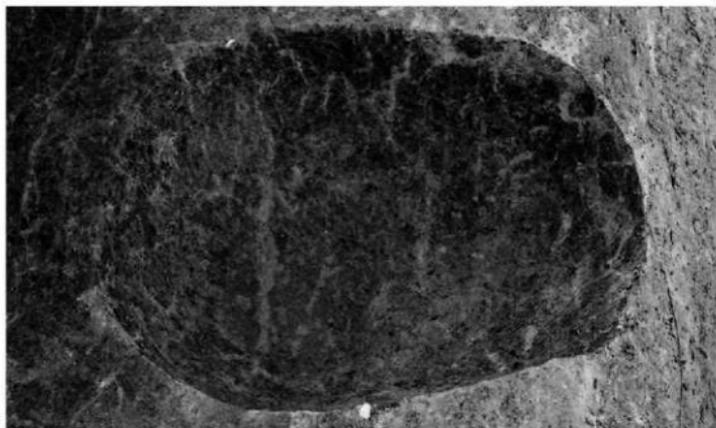
SE06全景
北西から



SE06石組
北西から



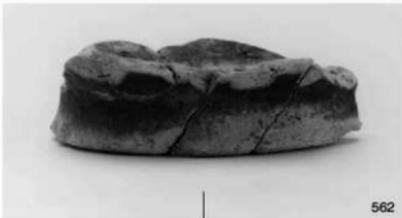
SK57 北から



SK60 北から

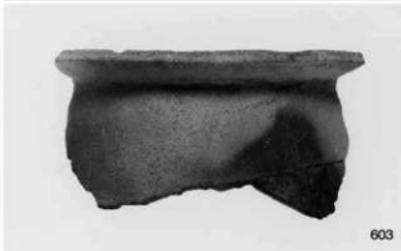


SK62 南から

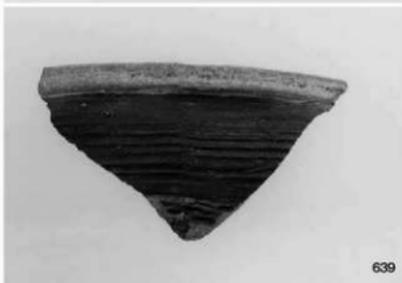




561・563：SD31出土土器 570～574・577・578：SD34出土土器



579·580：SD34出土土器 585：SD53出土土器 591·592·594·595·603：SD56出土土器
600：SD55出土土器



615・619：SD66出土土器 629・630・635・639・643・644：SD71出土土器 645：SD72出土土器



647



665



654



668



661



674



664

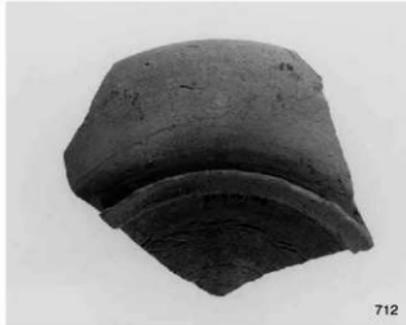


677

647 : SD72出土土器 654 : SD77出土土器 661 : SE06出土土器 664 : SK34出土土器
674 : SK40出土土器 665 : SK37出土土器 668 : SK38出土土器 677 : SK41出土土器



685・687・691：SK57出土土器 693：SK58出土土器 698：SK60出土土器



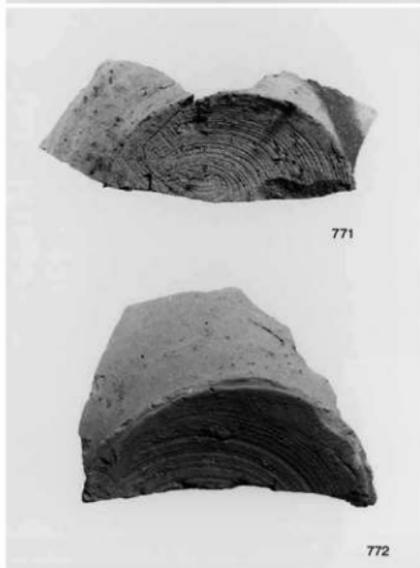


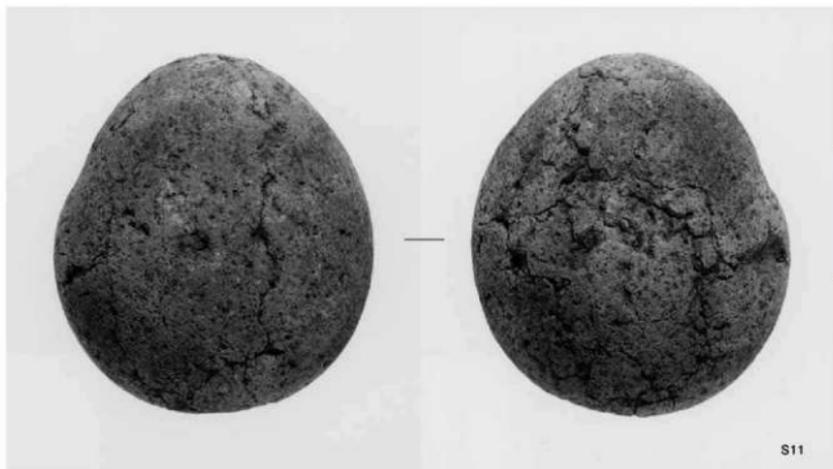


744~747・751：SX40出土土器

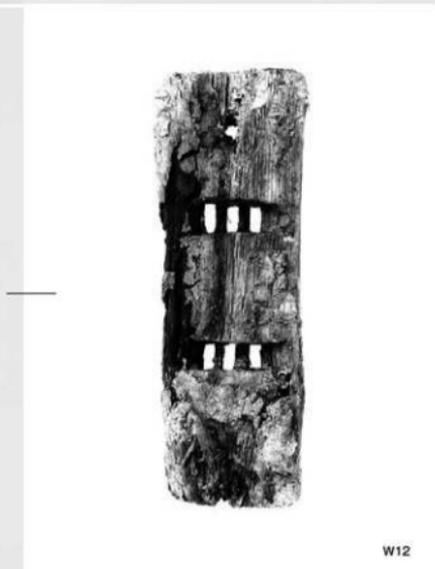
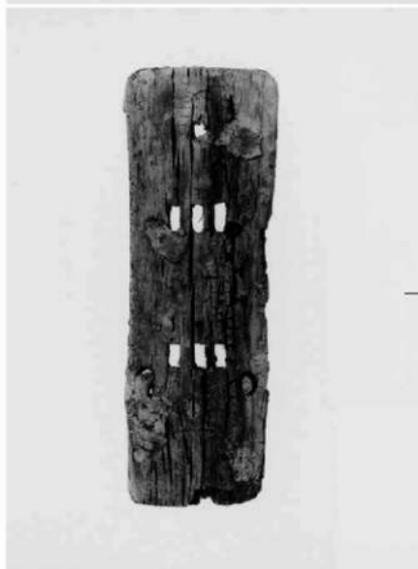


749・750：SX40出土土器 757・765・791：包含層出土土器



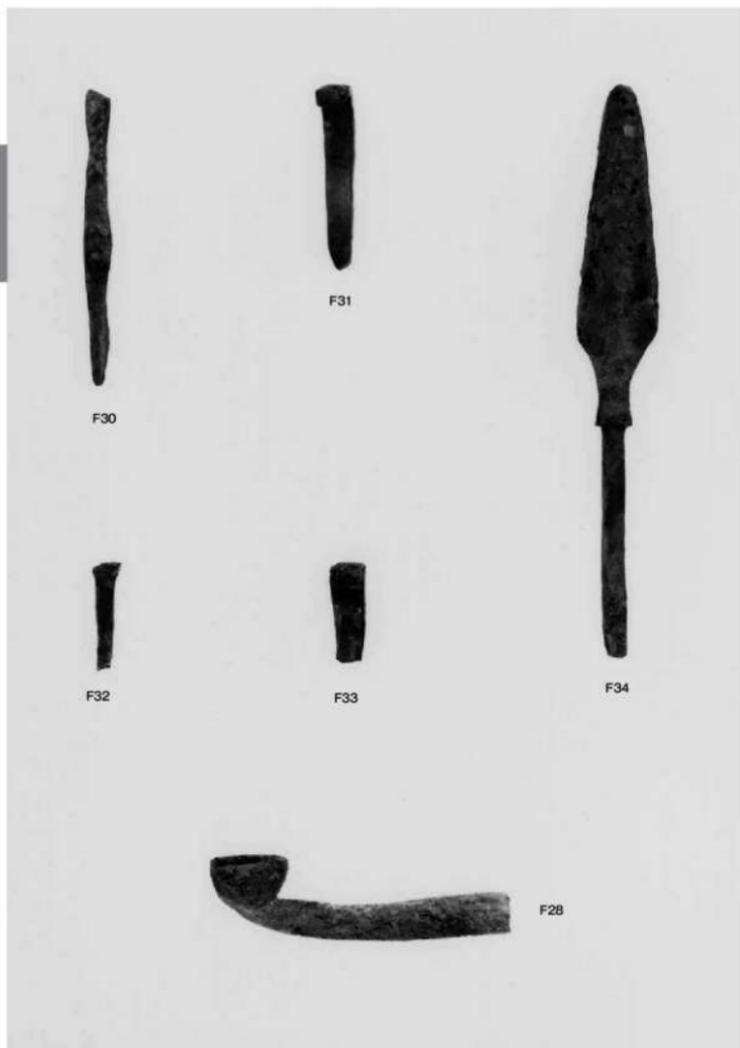


S11



W12

S11 : SX40出土石器 W12 : SD67出土木製品



F30・F31：SK57出土鉄製品 F32：畠2出土鉄製品 F33：包含層出土金属製品
F34：SX40出土鉄製品 F28：SD67出土銅製品

兵庫県文化財調査報告 第380冊

加古川市

大野遺跡

(一) 別府川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年3月24日 発行

- 編 集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号
- 発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央下山手通5丁目10-1
- 印 刷 株式会社 廣濟堂 神戸営業所
〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-5-7 3F
-